

# 目 次

献辞.....国際教養学部長 今 澤 浩 二 ( 1 )

## 論 文

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」  
——『グレート・ギャツビー』再読——  
.....小 野 良 子 ( 5 )

多読用教材 (Graded Readers) を使用した  
読みの指導が与える影響：  
非英語専攻の初級レベル学習者を対象とした場合  
.....釣 井 千 恵 ( 37 )

教職実践演習における「教師学」訓練の実践  
.....島 田 勝 正 ( 79 )

同一性の脱神話化をめぐって  
——ホーソーンの「牧師の黒いヴェール」——  
.....佐々木 英 哲 ( 93 )

先進文明による介入に関する一考察  
——米テレビ連続SFドラマ番組「スター・トレック」に  
おける「最優先指令」から考える——  
.....松 村 昌 廣 ( 123 )

ディケンズとジェンダー  
——家父長制神話の崩壊とディケンズの限定的理解——  
.....吉 田 一 穂 ( 139 )

Emotional Intelligence in Education  
.....Hershey WIER ( 161 )

同格節 that における that 省略について  
.....都 築 郷 実 ( 191 )

研究ノート

- Отрадное (オトラードノエ) 奇譚  
.....国 松 夏 紀 (241)
- モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料  
.....烏 仁 其其格 (253)

翻 訳

- ババッド・タナ・ジャウイ (9)  
第5部 ババッド・マタラム 3  
.....深 見 純 生 (299)

書 評

- 「菱田信彦『快読「赤毛のアン」』  
(彩流社, 2014年, 216頁)」  
.....軽 部 恵 子 (323)

献 譜

- FLÖRİLĒGUM MUSICUM  
.....Darío GONZÁLEZ (327)
- 原山煌教授略歴..... (345)
- 原山煌教授業績目録..... (347)
- Philip Billingsley 教授略歴 ..... (367)
- Philip Billingsley 教授著作など一覽 ..... (369)

# 「こうして彼はジェイ・ギャツビー なる人物を創造した」

——『グレート・ギャツビー』再読——

小 野 良 子

序

1章 ニックの〈語り〉

1. 〈語り〉の構成
2. 〈語り〉の信頼性

2章 回想されたギャツビー

1. ニックの観察
2. ニックの想像あるいは創造
3. ギャツビーの告白

結 論

参考文献

SYNOPSIS

序

スコット・フィッツジェラルドは1922年7月、ロング・アイランドのグレート・ネックに転居する以前、次作の小説の構想で、「新しいもの—ありきたりではなく、美しくて、すっきりとした、しかも凝ったパターンの

---

キーワード：一人称の語り，全能の作者，全能の語り手，記憶，想像力

ものを書きたい」(ターンブル, p. 162)と語った。『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby*, 1925年)はこのような「理想主義」(ターンブル, p. 162)から生まれた小説だった。『スクリブナーズ』(*Scribners*)の編集者マックスウェル・パーキンズに宛てた手紙の中でフィッツジェラルドは、「今度の新しい小説では全く創造的な仕事に真向から打ち込んでいるのです。短編の場合のようなちやちな想像力なんかではなく、正真正銘、しかも光り輝く世界のような想像力を維持しながら。(中略)この小説は完成すれば芸術性を意識した作品になるでしょう」(ターンブル, p. 163)と書いた。

1925年4月10日に『グレート・ギャツビー』は出版され、作家フィッツジェラルドは「若き奇才から一人前の芸術家」に変身した、と評された。「芸術性を意識した作品」、「実体感のある感覚的なイメージラリー」の背後には、ジョン・キーツが存在し、「沈思タイプの語り手という設定の背後」には、ジョゼフ・コンラッドが控えていた(ターンブル, p. 166)。

『グレート・ギャツビー』は、イエール大学出身で第一次大戦に従軍し、戦後、ニューヨークの証券会社で働き始めたニック・キャラウェイが、ギャツビーとの出会いと彼にまつわる出来事を回想するという手法で語られる。登場人物の一人が語るという手法は、たとえその語り手が〈全能の作者〉であるかのごとくに人物像や出来事を語っていたとしても、〈語られたもの〉はすべて、その語り手の視点、主観で捉えられ、解釈を加えられ、推測され、その結果、結論付けられた出来事、人物評であり、決して、〈全能の作者〉が語るような〈事実〉ではない。ニックの主観的判断だけで、ギャツビーに関わる出来事が推測され、判断され、提示される。ニックの記憶の再生なので各人物の心境、本音、言葉の真偽や発言の理由などは、

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

すべてニック本人の主観的記述になる。読者はニックのコメントと視点を通してのみギャツビーの出来事を知り、ギャツビーの〈告白〉に関しても、ニックが聞いた〈ギャツビーの告白〉をニックの解釈つきで聞くことになる。武藤氏は、「彼 [ニック] を通してのみギャツビーは存在する」(武藤, p. 8) と分析する。ニックはギャツビーをめぐるすべてのことに〈想像〉と〈解釈〉を行なうが、しかし、ニックの語り口調は、「一般的妥当性を充てることを目指して」おり、「個人的な関心」(武藤, p. 9) をとおして真実を語ろうとしている、と武藤氏は評価する。

しかしながら、はたして、ニックはギャツビーの〈真実〉を語ったのだろうか。そもそも、作者フィッツジェラルドは登場人物の一人の〈一人称の語り〉を利用することで、読者にどのように〈物語〉を読ませたかったのか。フィッツジェラルドが心酔していたコンラッドの〈一人称の語り〉に影響を受けたにせよ、『グレート・ギャツビー』で〈一人称の語り〉を用いる効果は何を意図したのだろうか。『グレート・ギャツビー』の問題点は、語り手ニックのギャツビーに関する情報の真偽が明白でない点だ。ギャツビーに関する風評と同様に、ギャツビー自身が語った自身の家系や職業の〈真相〉もいかがわしい。ニックもこれらに関しては全く信用していない。「ヨーロッパのあちこちの大きな都市で若きインドの王侯顔負けの生活を送った」(『ギャツビー』, p. 123), と明かすギャツビーの告白には、「あほらしくて、思わず吹き出しそうになるのを、必死に抑えなくてはならなかった」(『ギャツビー』, p. 123) ほどで、「彼の身の上話はいかにも陳腐で、裏が透けて見えた」(『ギャツビー』, p. 124), とニックは語り、ギャツビーの身の上話をすべて嘘だと見抜いたつもりでいる。ところが、ニックとギャツビーとの親交が深まると、ニックはギャツビーが語る過去のすべてを、〈真実〉として受け入れる。ギャツビーの生い立ち、両親のこと、ダン・コーディとの出会い——ギャツビーから聞いた過去の出来事

を、ニックは客観的に証明されなくても、〈真相〉として語る。ニックはなぜ、ギャツビーの話を実際として信用できるようになったのだろうか。

ニックの〈語り〉は「思い出して、記録する」という形式をとっているが、ニックに語らせることの効果は何か。ニックの記憶に基づいて過去の出来事の場面を再現している、という前提で語られているが、しかし、ニックはところどころ、「明確には覚えていない」と告白している。ギャツビーとデイジーのロマンスは、ギャツビーの言葉を忠実に紹介する記述ではなく、ニックの想像力とレトリックで書き直されており、読者は〈ギャツビーの語った真相〉の再現を聞かされるわけではない。一方で、トム・ブキャナンに関わる出来事——例えば、トムがギャツビー邸に友人と共に立ち寄ったこと、ギャツビーを昼食に招待したこと、プラザホテルでの騒動——などは、彼らの会話は〈引用〉の形式で、引用符に入れられ、忠実に再現されて、ニックの〈語り〉の枠組みが消え、〈全能の作者の語り〉にすり替えられる。二十世紀半ば以降の文学作品では、〈記憶〉は〈不確実なもの〉としてとらえられ、当事者の心的状況によって〈思い出の記憶〉は書き換えられる場合がある、と認識する。しかし、フィッツジェラルドは〈ニックの記憶〉を作者の記述のような正確さ、確実さでニックに語らせる。ギャツビーは嘘をいくつもついているし、ニックも知り合った当初はギャツビーの語ることを信用していなかった。にもかかわらず、ニックが突然、ギャツビーの言葉を信頼するようになるのはなぜか。作者が物語る場合は、登場人物の語る〈嘘と真実〉を読者は判断できる。しかし、登場人物が語り手になる場合は、はたして、〈嘘と真実〉は判別できるだろうか。

ケント・カートライトはニックを「信頼できない語り手」(“unreliable narrator”, pp. 218-32)と評した。本論考では、ギャツビーを回想するニッ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

クの〈語り〉の特質について検討し、作品の再評価を試みる。

## 1章 ニックの〈語り〉

### 1. 〈語り〉の構成

『グレート・ギャツビー』は語り手ニックの自己分析から始まる。若いころに父親が与えてくれた忠告のおかげで、「何事によらずものごとをすぐに決めつけないという傾向を身に」（『ギャツビー』, p. 9）つけたニックは、その性格が原因で、「一風変わった性格の人を数多く招き寄せることになったし [中略] 退屈極まりない人々の格好の餌食」にもなり、「取り乱した（そしてろくに面識のない）人々から、切実な内緒話を再三にわたって打ち明け」（『ギャツビー』 pp. 9-10）られた。ニックは「昨年の秋に東部からここに戻ってきたとき」、「人間の心根を高めから偉そうにのぞき込むような、派手ばでしい浮かれ騒ぎにすっかり食傷していた」（『ギャツビー』, p. 11）と振り返り、「本書の題名に名前を使わせてもらったギャツビーという人物一人だけが、そのような僕の思いから外れたところ」に位置している」（『ギャツビー』, p. 11）[下線筆者]と語り始める。原文では、“Only Gatsby, the man who gives his name to this book, was exempt from my reaction”（*Gatsby*, p. 8）と記述されているが、ニックが語り始める「本書」（“this book”）は、はたして、〈ギャツビーの思い出〉を回想してニックが書く〈ギャツビー回想記〉なのだろうか。このあとニックは、ギャツビーのパーティに招待され、ギャツビーと初めて顔を合わせた日までのことを語ると、「ここまで書いたものを読み返してみて、それぞれ数週間の感覚を置いてめぐってきたこれら三度の夜のことで、あたかも僕の頭がいっぱいになっていたかのような印象を与えかねないことがわかる」（『ギャツビー』, p. 107）[下線筆者]と語って、〈ギャツビー回想記〉をニックが今、書いている過程であることを読者に確認する。原文で

は、“Reading over what I have written so far, I see I have given the impression that the events of three nights several weeks apart were all that absorbed me.” (*Gatsby*, p. 56) と書かれており、ニックが過去に体験した出来事について書いている現在の姿が想起できる。

また、ニックは「この本」が個人的回想記にとどまらず一勿論、日記でもなく一〈読者〉を念頭に置いて書かれていることを明らかにしている。ギャツビー邸のパーティに参加した人々について言及した時、ニックはこのように記している。

僕は時刻表の余白の部分に、その夏にギャツビーの屋敷を訪れた人々の名前を列記したことがある。[中略] ギャツビーの屋敷を訪れてその歓待にあずかりながら、彼について何ひとつ知らずにおくという奥ゆかしい敬意を表したのがどのような人々であったか、僕が通り一遍の概説を加えるより、そこに記された名前を丸ごと列記したほうが、その様子をより鮮やかに思い浮かべていただけるものではないかと思う。 (『ギャツビー』, pp. 115-116) [下線筆者]

ニックが名前を列記するのは、「その様子をより鮮やかに思い浮かべて」くれる読み手を想定しているからで、その対象者は「この本」の読者である。原文では上記引用の下線部はこのように書かれている——“I can still read the grey names, and they will give you a better impression than my generalities of those who accepted Gatsby’s hospitality” (*Gatsby*, p. 60) [下線筆者] ——。ニックは明らかに〈読者〉を想定して〈ギャツビー回想記〉を書いている。しかもその読者は、名前の列記だけで、「ギャツビー邸を訪れた人々」の「様子をより鮮やかに思い浮かべ」ることができる読者、つまり、ギャツビー邸を訪れた名士、有名人たちを認識できる読者、〈ギャ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ツビー回想記)を〈虚構の物語〉ではなく、〈ドキュメンタリー〉——読者の生きている同時代の記録——として読むことができる、ニックと同時代を生きていて、ギャツビーのことを知っている人々になる。

ニックが「この本」を〈回想記〉として書いているのであれば——と、作者フィッツジェラルドが想定しているならば——何故、ニックは出来事を細部に至るまで正確に再現しながら、ある場合には記憶が飛んでいたり、ニック個人の憶測だけでギャツビーの過去を記述し、ギャツビーの語らなかつた言葉をニックが豊かな想像力によって生み出す華麗な文体で〈ギャツビーの真相〉であるかのように語るのだろうか。また、ニックはトムたちとプラザホテルに行き、部屋に案内されるが、その「細かい経緯は今となっては皆目思い出せない」(『ギャツビー』, p. 229)と語りながら、プラザホテルに行く直前に、トムの屋敷の昼食会で交わされた会話の一部始終、ホテルの部屋での会話の詳細は、ニックは〈全能の作者〉のごとくに詳細を再現する。ニックが〈信頼できない語り手〉と〈全能の作者〉の二つの顔を使いわけるとの効果、意図は何なのだろう。

## 2. 〈語り〉の信頼性

ニックは「親密な好奇心」(『ギャツビー』, p. 110)を抱くようになったジョーダン・ベイカーがくしらっと嘘をつく不誠実な女(『ギャツビー』, p. 110, p. 111)であることを語った時、ニック自身の人格についてはこのように自己分析している——「人は誰も自分のことを、何かひとつくらいは美德を備えた存在であると考えものだ。そして僕の場合はこうだ——世間には正直な人間はほとんど見当たらないが、僕はその数少ないうちの一人だ」(『ギャツビー』, p. 113)。ニックは自身を「正直な人間」——“I am one of the few honest people that I have ever known”, *Gatsby*, p.

59- [下線筆者] ——と評価しているが、しかし、ニックは〈正直さ〉としてどのような特性を示しているのだろうか。ニックはジョーダンの「不誠実さ」を話題にしたが、彼はこの時、ジョーダンとの「関係を一步前進」させながら、実は、故郷には婚約を噂された女性がいる。ニックは「婚約した」と噂になったのでこの女性を残してニューヨークに出てきたが、彼女には週一回、手紙を書いており、その手紙の末尾には「ラブ、ニック」(“Love, Nick”, *Gatsby*, p. 59) と記していた。故郷に残してきた女性に毎週手紙を送り、しかも、ジャージーシテイに住む経理部の女性と関係を持ち、その兄に無言の圧力をかけられるとさりげなく関係を解消する (“I let it blow quietly away”, *Gatsby*, p. 57)。そして、このあとニックはジョーダンと親密になっていく。

ジョーダン・ベイカーは借りた車の屋根を開けたまま雨の中に放置しながら、自己の責任を認めない。最初の大きなゴルフ・トーナメントで、悪いライのボールを動かす不正を行なったと糾弾されたが、結局、目撃者の見間違いに転嫁された。ジョーダンの「不正直さ」は、ニックが複数の女性に対して不誠実な態度をとったこととは、問われるモラルが異なるだろうが、ニックは自身が評価するほど「正直な人間」とは言えないだろう。さらに、ニックは〈妄想する語り手〉でもある。

五番街を歩きながら、人混みの中から夢をかきたてる女性を選び出し、さあ、これから僕は彼女の生活に入り込んでいこうとしているんだと、しばし想像するのが好きだった。[中略] ときどき、あくまで想像のうちでだが、僕は人目に付かない通りの角にある彼女たちの住居まであとをつけていった。そして彼女たちは、戸口を抜けてほんのりとした暗闇の中に消えていく前に、こちらを振り向き、意味ありげなほほ笑みを僕に送るのだ。(『ギャツビー』, pp. 108-109) [下線筆者]

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

「夢をかきたてる女性」(“romantic women”, *Gatsby*, p. 57) に目を留め、想像力で彼女の部屋に入り込む、と語るニックは、ニューヨーク生活の孤独 (“a haunting loneliness”, *Gatsby*, p. 57), 沈んだ心 (“a sinking in my heart”, *Gatsby*, p. 57) を吐露する。

ニックは冷静にニューヨークの思い出を語る〈回想記の作者〉ではない。夢想家で感傷的、自己陶醉的、成功を約束する街ニューヨークで証券マンとしての人生をスタートさせたばかりで将来が見えないが、野心家でもある。ニックは〈全能の作者〉のごとくにニューヨークでの出来事、ギャツビーの過去を細部に至るまで語るが、その〈語り〉は彼のロマンティックな想像力の影響を逃れることはない。〈事実〉と〈夢想〉、〈具象〉と〈抽象〉の混合する語りは、はたして、作者フィッツジェラルドが意図した、〈一人称語り〉の効果だったのだろうか。

## 2章 回想されたギャツビー

### 1. ニックの観察

ニックはギャツビー邸のパーティで、初めてギャツビーと話をした時、彼が「エレガントだがどこかに粗暴さのうかがえる」男で、「その念の入った丁重な物言いは、危ういところで滑稽の域に達することを免れている」(『ギャツビー』, p. 93), と感じる。「オールド・スポーツ」(“old sport”) というギャツビーの呼びかけには「一通りの親密さしかこもっていない。安心させるように相手の肩に手をやるのと同じことだ。」(『ギャツビー』, p. 102) ——“The familiar expression held no more familiarity than the hand which reassuringly brushed my shoulder”, *Gatsby*, p. 54) ——と受け止めている。最初に招待されたパーティのあと、ニックは「二度ばかり、彼のパーティに顔を出し、彼の水上飛行機に乗り、是非にという誘いを受けて専用ビーチをときどき使わせてもらっていた」(『ギャツビー』, p. 119)。ギャ

ツビーと知り合っひと月の間に、ニックは彼と「5, 6度話をしたと思うが、彼は話題というものをろくすっぽ持たず [中略] 正直なところがっかりしてしまった」(『ギャツビー』, p. 121) と失望する。「この男は正体こそよくわからないが、何かしら重要性をもった人物に違いないという、僕の抱いた第一印象は次第に薄らぎ、今では隣地で豪勢な宴会を催すただの人でしかなくなっていた」(『ギャツビー』, p. 121), と語り、ギャツビーに対する好奇心を失っていた。そして、彼に誘われたドライブの最中に、唐突に切り出されたギャツビーの告白——中西部の裕福な家に生まれ、オックスフォード大学で教育を受けた、家族全員が亡くなり、莫大な財産を相続し、パリ、ヴェニス、ローマでインドの王侯のような生活を送り、宝石を集め、狩猟も楽しんだ——といった身の上話でニックは、「あほらしくて、思わず嘔き出しそうになるのを、必死に抑えなくてはならなかった」(『ギャツビー』, p. 123) ——“With an effort I managed to restrain my incredulous laughter”, *Gatsby*, p. 64——。ニックはギャツビーが身の上話をする時の口調を瞬時に分析し、彼が「早口で教育はオックスフォードで受けた」[下線筆者] と言ったことを聞き逃さなかった。ニックの観察は鋭く、ギャツビーが「言葉を途中で呑み込み、あるいはのどにつかえそうになった」ことに言及する。さらに、「以前にもその台詞を口にするにあたって、困難を覚えて経験があるよううかがえた」と分析し、「そしていったんこのような疑念が生じると、彼の話すことすべてが信頼感を失い、結局のところ、この男にはなにか不正なところがあるのではないかと考えだす」(『ギャツビー』, pp. 122-123), と推論する。ニックは鋭い観察者で、ギャツビーの表情、目の動き(「彼は横目づかいに僕を見た」, 『ギャツビー』, p. 122), 口調、声のトーンから、「君には真実を話そう」(『ギャツビー』, p. 122) と語ったギャツビーの〈真実〉を分析し、疑念を抱く。

ところが、ギャツビーがフランスでの戦闘の功績で勲章を授与されたこ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

とを語ると、ニックの疑念は払拭され、魅了に代わる。ギャツビーが「ちっぽけなモンテネグロ」からも勲章を授与された一件をほほ笑みを浮かべて語る様子をニックは、「そのほほ笑みには、モンテネグロという国の苦難に満ちた歴史に対する理解と、モンテネグロ国民の勇猛な戦いぶりに対する思いやりが見て取れた。[中略] その国家の置かれた複雑な立場を、その微笑は隅まで心得ていた」(『ギャツビー』, pp. 124-125) [下線筆者]、と語る。ギャツビーの身の上話に対するニックの「疑念」は「魅了」に変わり、ギャツビーの微笑の意味を好意的に、称讃を込めて読み取る。さらに、ギャツビーがオックスフォードのトリニティ・カレッジの中庭で学友(だとニックは推測している学生たち) 5人と並んだ写真を見せられると、「すべては真実であったのだ」(『ギャツビー』, p. 126) ——“Then it was all true”, *Gatsby*, p. 65——と、一切の疑念を払拭してしまう。そればかりか、「あほらしくて、思わず嘔き出しそうになるのを、必死に抑えなくてはならなかった」、インドの王侯のような暮らしぶりの思い出話さえも、「すべては真実」として受け入れる。モンテネグロの勲章やオックスフォードの写真を見るまでは、話を聞いてもイメージがわからず、「かろうじて思い浮かんだのは、ターバンを頭に巻いた人形劇の登場人物が、裂け目のいたるところからおが屑をこぼしながら、虎を追ってブローニュの森を駆け抜けている情景だけだ」(『ギャツビー』, p. 124)、と語り、ギャツビーを〈ボロを出しながら走る人形〉のイメージに滑稽化していた——“a turbaned ‘character’ leaking sawdust at every pore”, *Gatsby*, p. 64——。ところが、この笑劇風のイメージは一変する——「すべては真実であったのだ。ヴェニスの大運河の畔にある彼の宮殿を鮮やかに彩るいくつもの虎の毛皮を、僕は想像した。癒えることのない心痛をやわらげるべく、ルビーの詰まった宝石箱を開け、その緋色の光の深みを愛でる彼の姿が目には浮かんだ」(『ギャツビー』, p. 126)。

突然、「すべては真実」として、壮麗で、優雅なイメージが喚起されるのはなぜなのか。ニックのギャツビー評価が一変し、ギャツビーの告白が〈事実〉として受け入れられる根拠は何か。モンテネグロの勲章とオックスフォードの写真は、ギャツビーの説明だけで彼の過去を証明する証拠になるのだろうか。あれほど鋭い洞察力と観察眼で、ギャツビーの言動を分析し、疑念を抱いたニックが、勲章と写真を見ただけで、ギャツビーの告白を無批判に信用するのはなぜなのだろう。冷静な観察者を自負しているニック自身が実は気付いていない、判断の甘さがあるということなのだろうか。〈全能の作者〉が語る場合は、〈物語〉の中でニックが観察者の役割を担っていても、彼の判断の誤りや不完全さは読者には明らかにされるはずだ。しかし、「この本」の語り手、著者として、ニックが彼の視点と判断によって人物と出来事について語る構成の『ギャツビー』は、あえてニック本人が自身の判断の誤りに気付いて言及しない限り、読者に〈真相〉は伝わらない。

## 2. ニックの想像、あるいは創造

ギャツビーが語った過去の出来事を「すべて真実であった」と受け入れたニックが語る〈ギャツビー回想記〉は、ギャツビーにまつわる出来事や彼の告白をニックが彼自身の判断で分析し、想像力と感性で創造しながら、あたかも〈現実の記録〉であるかのように提示する〈ギャツビー像〉である。ギャツビーの〈事実〉はすべて、ニックの分析と想像で状況説明され、読者に見えるのは、〈ニックの観察したギャツビー〉に他ならない。

ギャツビーが初めてデイジーを自宅に招き入れた時の様子をニックは次のように語る。

彼はひとときたりともデイジーから目をそらさなかった。思うにギャ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ツビーはその屋敷の中にあるすべてのものを、それらがどれほどの反応を彼女の愛しい瞳から引き出せるかによって、あらためて評価しておしていたのだ。また折に触れて彼は、自分の所有しているなにかやかを困惑した目でしげしげと見渡した。彼女が自分の目の前に存在するという、そんな信じがたい状況が生じたせいで、まるで何もかもが現実味を失ってしまったみたいに。

(『ギャツビー』, pp. 169—70) [下線筆者]

ニックはギャツビーがデイジーに屋敷を案内していた時の心境を語っているが、〈事実〉の描写は、ギャツビーがデイジーから「目をそらさなかった」ということだけだ。この後に続く状況描写は、「思うに」(“I think”, *Gatsby*, p. 88), 「まるで...みたいに」(“as though”, *Gatsby*, p. 88) と語っているように、ニックの推測でしかない。そして、ニックはギャツビーの語った言葉を再現する時も、その時の彼の心境を推測し、説明を補足する。

「霧さえ出ていなければ、湾の向かいにあなたのうちが見えるんだが」とギャツビーが言った。「お宅の棧橋の先端には、いつも夜通し緑色の明かりがついているね」デイジーはふいに彼の腕に自分の腕をからめた。しかしギャツビーは、自分が口にした言葉に深くとらわれているようだった。その灯火の持っていた壮大な意味合いが、今ではあとかたもなく消滅してしまったことに、自分でもおそろく思い当たったのだろう。デイジーと彼を隔っていた大きな距離に比べれば、その灯火は彼女のすぐ間近に [中略] あるものとして見えた。月に対する星ほどに近いものに思えたのだ。しかし今ではもう棧橋の先端についた、何の変哲もない緑色の灯火に戻っていた。彼が魅了されていた事物が、またひとつ数を減らしたわけだ。

『ギャツビー』, p. 172) [下線筆者]

ギャツビーはデイジーの敷地に設置された栈橋の端に「夜通し緑色の明かりがついている」とデイジーに語った時、実際には一体、何を考えていたのだろう。ギャツビーが明らかにしなかった——ニックが忠実に再現しなかった——心境をニックは推測し、イメージを飛躍させて、〈全能の作者〉のごとく、描写する。「深く囚われていたようだった」(“he seemed absorbed”, *Gatsby*, p. 90), 「おそらく思い当たったのだろう」(“Possibly it had occurred to him”, *Gatsby*, p. 90), 「あるものとして見えた」(“it had seemed”, *Gatsby*, p. 90), 「思えたのだ」(“It had seemed”, *Gatsby*, p. 90), とニックがギャツビーの心情を語る時、描かれたのは、実はギャツビーの心情ではなく、ニックの憶測に過ぎない。「彼が魅了されていた事物」とはおそらく、「緑色の明かり」を示しているのだろう。しかし、「またひとつ数を減らした」とニックが断言する状況は、ギャツビーの言動からニックが想像した仮定である。ニックが自身の心境を豊かなイメージで詩的に描く場合、読者はニック個人の感性、個性として受け入れ、ニックの心理的状況の〈事実〉として理解できる。しかし、他者の心境をニックが自身の憶測に基づいたイメージで語る場合、それは〈事実〉の描写にはならない。読者はギャツビー本人ではなく、〈ニックが想像/創造するギャツビー〉を見ていることになる。ニックは「この本」を書いている〈全能の作者〉の立場で〈ギャツビー〉の心境を描写する。ところが実際には、ニックはギャツビー同様、『ギャツビー』の登場人物のひとりである。〈全能の作者〉の豊かなイメージが人物の心境を情緒的に描写する場合、読者は〈心的事実〉の詩的表現として受け入れる。しかし、ニックが〈全能の作者〉のごとくにギャツビーの〈心的事実〉を語っても、読者には〈事実〉は見えてこない。

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ギャツビーがどのような口調で、どのような表情で語ったのか。ニックはギャツビーの言葉を再現せず、具体的な描写ではなく、ニックの解釈で状況のイメージを描く。デイジーを案内し終えたギャツビーの様子から、ニックが「彼の顔に困惑の色が戻っていることが見て取れた」（『ギャツビー』, p. 177）としても、その「困惑の色」を、「今ここにある幸福をそのまま真に受けていいものか、かすかな疑念が生じたらしい」（『ギャツビー』, p. 177）、とニックはなぜ、説明できるのだろうか。

デイジーが彼の夢に追いつけないという事態は、その後になって幾度も生じたに違いない。[中略] 結局のところ、彼の幻想の持つ活力があまりにも並はずれたものだったのだ。それはデイジーをすでに凌駕していたし、あらゆるものを凌駕してしまっていた。彼は創造的熱情を持って、その幻想に全身全霊を投じていた。寸暇を惜しんで幻想を補強増大し、手もとに舞い込んでくる派手な羽毛を余すところなく用いて日々装飾に励んできたのである。

（『ギャツビー』, pp. 178-79）[下線筆者]

「デイジーが彼の夢に追いつけないという事態」（“moments [中略] when Daisy tumbled short of his dreams”, *Gatsby*, p. 92）が、具体的にはどのような状況なのかニックは説明しない。ギャツビーの「夢」, 「幻想の持つ活力」（“colossal vitality of his illusion”, *Gatsby*, p. 92）, 「創造的熱情」（“creative passion”, *Gatsby*, p. 92）は、ニックがジョーダンからデイジーとギャツビーの過去のロマンスのいきさつを聞いて推測した、〈ギャツビーの心情〉である。

「彼はデイジーに自分の屋敷を見てもらいたい」<sup>1</sup>と彼女は説明し

た。「あなたの家ならすぐ隣でしょう」

「そういうことか」

「彼はいつかデージーがふらっと、彼のパーティーに顔を見せるんじゃないかって半ば期待していたのでしょね」とジョーダンが続けた。「でもそううまくはいかなかった。それで彼はいろんな人々にさりげなく尋ねまわり始めた。彼女のことを知りませんか。そしてこの私がデージーの知り合いとして最初に浮上してきたわけ。このあいだのパーティーで、使いが来て私が呼ばれたでしょう。あの時のことよ。すべてがどれほど念入りにお膳立てされたか、一部始終をあなたに聞かせたかったわ。もちろん、私はその場ですぐに提案したわよ。じゃあ、ニューヨークでお昼でも一緒にいかがって。すると彼は、こちらがはらはらするくらい、取り乱してしまった。

『私は人の倫に反することをするつもりはない!』って彼は言い続けた。『私はただ、隣のお宅であの人に会いたいです。』

(『ギャツビー』, p. 148)

ジョーダンはギャツビーがニック宅でデージーと再会したいと相談を受け、ギャツビーが語ったことをニックに伝えた——ギャツビーが現在の屋敷を手に入れたのは、「それが湾を隔ててデージーの向かい側にあるから」(『ギャツビー』, pp. 146-47)であり、「ひょっとしてデージーの名前がちらっとでも出てくるんじゃないかと期待して」(『ギャツビー』, p. 149), 「シカゴの新聞を何年にもわたって読み続け」ており(『ギャツビー』, p. 149), 「いつかデージーがふらっと、彼のパーティーに顔を見せるんじゃないかって半ば期待していた」(『ギャツビー』, p. 148)。屋敷にデージーを迎えた時のギャツビーの心理は、ジョーダンから聞いたギャツビーの言葉と様子を根拠にして、ニックが想像した〈ギャツビーの心情〉に他なら

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ない。ニックこそが「創造的熱情をもって」、〈ギャツビーという男の幻想〉  
を読者に語る役割を果たすことに「全身全霊を投じていた」のではないか。

### 3. ギャツビーの告白

「ロング・アイランドのウェスト・エッグ在住のジェイ・ギャツビーは、  
彼自身のプラトンの純粹觀念の中から生まれ出た像なのだ」(『ギャツビー』、  
p. 181) ——“The truth was that Jay Gatsby of West Egg, Long Island, sprang  
from his Platonic conception of himself”, *Gatsby*, p. 95 ——とニックは語る  
が、ギャツビーが自身の過去をこのように表現したわけでは、もちろん、  
ない。「この本」がニックの語る〈ギャツビー回想記〉である以上、ギャ  
ツビーの言説はすべて、語り手ニックの想像力と文学的素養によって記述  
されていく。

例えば、ギャツビーが17歳のころの思い出は、ギャツビーの口からはど  
のように語られたのだろうか。ギャツビーがニックに語った過去の事実  
は——

- ① ギャツビーの両親は貧農。
- ② ギャツビーの本名はジェームズ・ギャッツで、17歳の時に「ジェイ・  
ギャツビー」を名乗り始める。
- ③ 家出した後、一年以上の間、スペリオル湖の南岸を移動しながら、は  
まぐり掘りをしたり、鮭採りの漁師として暮らす。寝食のために、で  
きることは何でもした。
- ④ 若いころに既に、多くの女性と関係を持った。
- ⑤ スペリオル湖を去り、ミネソタ州南部にあるセント・オーラフ大学に  
入学。授業料免除の代わりに、用務員の仕事をする。大学の授業内容  
に失望し、用務員職にも我慢できず、二週間で退学。
- ⑥ スペリオル湖に戻る。この時、ダン・コーディと出会う。コーディの

船で西インド諸島とバーバリー・コーストに向かう。コーディはギャツビーにその時の状況に応じて、さまざまな役割を任せる（船室係、航海士、船長、秘書、看守）。ギャツビーは5年間、コーディの船で働く。

- ⑦ コーディの死。コーディはギャツビーに25,000ドルの遺産を残したが、女性新聞記者エラ・ケイが横取りする（どのような法的策略が用いられたのかは不明）。

ギャツビーがコーディと出会った時、彼はコーディに「いくつかの質問」をされ、それで彼はギャツビーが「利発で、人並み外れた野心を抱いていることを知った」（『ギャツビー』, p. 184）。それでギャツビーはコーディの船と一緒に航海することになるのだが、コーディが気に入ったのはギャツビーの「人並み外れた野心」（“extravagantly ambitious”, Gatsby, p. 96）だったのだろう。しかし、17歳のギャツビーは当時、一体、何を語り、どのように質問に答えたのだろう。コーディの質問とギャツビーの応答、ギャツビーの態度をギャツビー自身が記憶していて、詳細に記録された日記を読むかのように、ニックに語り聞かせたのだろうか。そして、ニックはその詳細を敢えて、「この本」に写すのではなく——ギャツビーの野心の具体的な設計図を読者に伝えるのではなく——ニックの詩的想像力が創出するイメージで書き直していく。

きわめてグロテスクで幻想的なさまざまな奇想が、ベッドの中の彼を夜半に見舞った。[中略] 言葉にできないほど俗悪なるものの宇宙が、彼の脳裏に際限なく紡ぎ出された。そして、彼は夜ごと、自らの妄想の図柄をさらに豊かなものへと膨らませていった。眠気がやってきて、そこにある鮮烈な情景を忘却の抱擁をもって覆い隠し

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

てくれるまで、倦むことなくそれは続いた。そのような夢想が彼の想像力にあるところまではけ口を提供してくれた。現実というものの非現実性について、それは納得のいく示唆を与えてくれた。世界の礎は間違いなく妖精の翼の上に捉えられているのだと請け合ってくれた。(『ギャツビー』, p. 182) [下線筆者]

ギャツビーの「奇想」(“The most grotesque and fantastic concepts”, *Gatsby*, p. 95), 「宇宙」(“A universe of ineffable gaudiness”, *Gatsby*, p. 95), 「妄想の図柄」(“the pattern of his fancies”, *Gatsby*, p. 95), 「夢想」(“these reveries”, *Gatsby*, p. 95), 「鮮烈な情景」(“Some vivid scene”, *Gatsby*, p. 95), 「現実というものの非現実性」(“the unreality of reality”, *Gatsby*, p. 95), 「世界の礎は間違いなく妖精の翼の上に捉えられている」(“the rock of the world was founded securely on a fairy’s wing”, *Gatsby*, p. 95) ——はギャツビーが語った言葉ではない。〈グロテスクで幻想的な奇想〉とは、具体的にはどのような想いだったのか。〈言葉に出来ないほど俗悪な宇宙〉も明確なイメージを印象付けることはない。〈世界の礎が妖精の翼の上に築かれている〉という現実認識は、17歳のギャツビーが自身の将来に抱く不安定感、確信のなさを想起させるが、明確な説明を避けて曖昧で抽象的なヴィジョンだけで心理を描写することで、読者に解釈を委ねる語り口である。ニックはギャツビーの身の上話を聞いて17歳のギャツビーの心的葛藤を想像し、結局、読者が鮮明で具体的なイメージを構築できるような語り方をしない。

ギャツビーはプラザホテルの一件のあとでニックにデージーとの過去のロマンスについて告白した時——「そのようなわけで、私は野心なんぞ放つたらかしくにして、日ごとに深く恋に落ちていった。そしてあるとき、もうかまうものかと腹を決めた。偉業を達成することにどんな意味があるだろ

う。自分がこれから目論んでいることを、彼女に語っているほうがはるかに楽しいというのに」(『ギャツビー』 p. 271) [下線筆者] と語った。原文では——“Well, there I was, ‘way off my ambitions, getting deeper in love every minute, and all of a sudden I didn’t care. What was the use of doing great things if I could have a better time telling her what I was going to do?” (Gatsby, p. 143) [下線筆者]。ギャツビーは「野心」を抱いていたことには言及するが、具体的には語らないし、「偉業を達成する」や、「自分がこれから目論んでいること」が何をすることなのかも明らかにしない。まだ成功を手に入れていなかった頃のギャツビーは、壮大な野心を膨らませ、実現するための様々な方策を探っていたことは伝わってくる。しかし、「言葉にできないほど俗悪なるものの宇宙」とニックはギャツビーの〈妄想〉を説明したが、ギャツビーが語った「野心」や「偉業」を連想させるには、言葉のイメージが複雑で難解だ。ギャツビー本人には、自身の心情を詩的イメージで説明するだけの文学的素養はなく、極めて単純で、往々にして非常に稚拙な、詩的重層性を全く持たない語り口が彼の言語表現の特徴である。結局のところ、引用符で囲まれたギャツビーの言葉を除いて、すべての〈ギャツビーの心理描写〉は語り手ニックの詩的連想が紡ぎ出した〈ギャツビーの心象風景〉である。ギャツビーの「妄想の図柄」は、実は、〈ギャツビー物語〉を構築するニック自身がギャツビーに抱いた〈妄想の図柄〉に他ならない。

ギャツビーがデージーとの5年前のロマンスを語った時、その時の光景を「家々のひそやかな明かりが、かすかな唸りをたてて暗闇にこぼれ」(『ギャツビー』, p. 202) ていたと描写したのは、ギャツビーではなく、語り手ニックである。「何ブロックもまっすぐに続く歩道が紛れもなく一本の梯子となって、樹木の頭上にある秘密の場所に届いていることを見て取った」(『ギャツビー』, p. 203) のは、ギャツビーではなく、ギャツビー

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

の告白を聞いてニックが思い描いた〈ギャツビーの心象風景〉だろう。ニックはギャツビーの話を「あまりの感傷に辟易しながら (“appalling sentimentality”, *Gatsby*, p. 107) 聞いていた、と語るが、ギャツビーが語ったという思い出話は、ニックの想像力でインスピレーションを与えられ、ニックの修辞で飾られた感傷的描写である。ギャツビーは実際、デイジーとのロマンスを感傷に浸って語ったのかもしれない。しかし、これまでもそうであったように、〈ギャツビーの物語〉を「辟易するほど感傷的」な文体で語るのは、ギャツビー自身ではなく、語り手ニックの〈語り〉の特徴である。デイジーがトム・ブキャナンと結婚して去った町にギャツビーが訪れた時――

太陽は低く身を落とし、今は消えなんとする都市に――デイジーがかつてその空気を胸に吸っていた都市に――祝福を与えるべく、自らの身を広く延べているかのように見えた。ギャツビーはその空気のせめて一筋をもぎ取ろうと、デイジーが彩ってくれたその場所のかけらをひとつでも取り置こうと、切なく片手を前に差し出した。しかし、彼のにじんだ目の前を、すべてはあまりにも素早く過ぎ去っていった。 (『ギャツビー』, pp. 275-76) [下線筆者]

ギャツビーがデイジーの去った町を訪れた時、「片手を前に差し出した」とニックに語ったのだろうか。たとえ語ったとしても、その行動の動機と心理的状况をギャツビーは「その空気のせめて一筋をもぎ取ろう」として、「その場所のかけらをひとつでも取り置こう」として「切なく」手を前に出した、とニックに説明したのでだろうか。

ギャツビー、デイジー、トム、ジョーダン、ニックの5人がプラザホテルに繰り出し、トムがギャツビーのビジネスの実体が酒の密造や違法賭博

に関係していることを暴露し、トムの友人のウォルターが「この僕にもしゃべれないような恐ろしい何かが、お前の身边にはある」(『ギャツビー』, p. 244), とギャツビーに声を荒げた時、ニックはデイジーが「怯えた目でギャツビーと夫とを見比べ」、ギャツビーが「まともな言葉では描写できそうにない形相」(『ギャツビー』, p. 245)を顔に浮かべているのを見る。彼はまさに「人を殺したことのある」男のように見えた、とニックは語る。プラザホテルでの対立、応酬はニックの冗長なコメントは極力省かれて、対話のすべてが忠実に再現される形式で記述され、緊張した関係が読者の意識に鮮明に映像化される。ところが、この危機的場面を切り抜けようと試みるギャツビーの心の内をニックが忠実に再現できるはずもなく——ニックは〈全能の作者〉ではないのだから、他者の心理は当人が吐露しない限り、すべて〈語り手〉ニックの憶測になる。

どれだけ言葉を尽くしたところで、彼女はますます自分の内側に退いていった。ギャツビーもそれを見て弁明をあきらめ、午後が刻々と過ぎ去っていくあいだ、命脈を絶たれた夢のみが空しく戦いを続けた。それはすでに触れることのできななくなったものに手をのばし、部屋のあちら側にある失われた声に対して痛切に、しかしあきらめることをよしとせずすがつた。(『ギャツビー』, p. 245) [下線筆者]

「命脈を絶たれた夢」(“the dead dream”, *Gatsby*, p. 128)が戦い続ける——事実として、ギャツビーはどのような態度をとっていたのだろう。トムがギャツビーの〈正体〉を暴露し、ギャツビーが自己弁明のために口にした「ウォルターの一件」でさらに悪化したギャツビーの立場。ますますデイジーがおびえて言葉もでない。ギャツビーは弁明をあきらめる。そして、この後のギャツビーの心境はニックの推測になる。ギャツビーはデイ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

ジーをあきらめきれず、何とか彼女の心を開かせたいと葛藤し、デイジーにすぎるような視線を送っていた——ようにニックには見えた、ということなのだろう。

## 結 論

ニックは〈ギャツビー回想記〉の最終ページで次のように記している——

そこに座って、知られざる旧き世界について思いを馳せながら、デイジーの栈橋の先端に緑の灯火を見つけた時のギャツビーの驚きを、僕は想像した。 (『ギャツビー』, p. 325) [下線筆者]

結局のところ、ギャツビーについて語るニックの〈語り〉はすべて、「僕は想像した」というただし書きが必要だろう。ニックが語る〈ギャツビー回想記〉で知らされる〈ギャツビー〉の人物像は、ニックがギャツビーやウルフシャイムから聞いたエピソードや、トムが依頼した身辺調査によって断片的に情報が集められていくが、〈ギャツビー〉の正体の全貌を明確に描くものではない。ギャツビーがニックに告白した過去——「若きインドの王侯顔負けの生活を送った」——はギャツビーの作り話のように聞こえるが、あるいはニックが思い直したように、〈事実〉なのかもしれない。ギャツビーがニックに見せた「モンテネグロの勲章」と、のちにウルフシャイムからニックが聞いた話——「戦争でもらった勲章をぎっしりと付けていました」(『ギャツビー』, p. 307) ——をつなげれば、ギャツビーが戦争で功績をあげたことは事実なのだろう。そして、退役したばかりで「すっからかんで、私服を買うことができなかった」ギャツビーを「使い道がありそうだとぴんときた」ウルフシャイムが、彼を「在郷軍人会に登録させ、

そこで有力な地位につかせ」(『ギャツビー』, p. 307), オルバニーにいる取引先のために、「ちょいとした働き」(『ギャツビー』, pp. 307—8)をさせたということも〈事実〉なのだろう。しかし、「ちょいとした働き」(“he did some work for a client of mine”, *Gatsby*, p. 162) [下線筆者]とは具体的にはどのような仕事だったのだろうか。ウルフシャイムは1919年のワールド・シリーズで、八百長を仕組んだギャンブラーである。その彼が刑務所に入れられなかったことをギャツビーが、「尻尾がつかめなかったのさ、オールド・スポーツ。頭の切れる男だからね」(『ギャツビー』, p. 138), と評価する時、ギャツビーの生き方やビジネスのモラルが垣間見える。「以前、警察長官のために便宜を図る機会があつてね、それ以来、毎年クリスマス・カードを送ってくれる」(『ギャツビー』, p. 128)——警察長官がギャツビーに恩義を感じるほどの「便宜」(“I was able to do the commissioner a favour once”, *Gatsby*, p. 67) [下線筆者]とは何なのか。「毎年クリスマス・カードを送って」くるのは警察長官の個人的謝意の表れであり、ギャツビーの「便宜」が公然と謝意を表すことの出来ない案件にちがいない。トムの依頼した身辺調査では、ギャツビーがウルフシャイムと共に「ニューヨークとシカゴで、ぱっとしないドラッグ・ストアを片端から買い上げて、大っぴらにエチル・アルコールを売っている」(『ギャツビー』, p. 243), 「賭博法違反でお前を突き出すこともできたんだ」(『ギャツビー』, p. 244), 「ドラッグ・ストアの商売なんて、所詮小銭稼ぎにすぎない」(『ギャツビー』, p. 244), 「ウォルターがこの僕にもしゃべれないような恐ろしい何かが、お前の身辺にはある」(『ギャツビー』, p. 244)——ことが〈暴露〉されて、ギャツビーが酒の密造に関わり、賭博で違法行為を働いたことは〈事実〉なのだろう。ギャツビーの死後にかかってきたスレイグルという男からの電話——「パークのやつがまずいことになった。[中略] 債券をさばっている現場を押さえられたんだ。そのたった五分前

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

に、ニューヨークから回状がまわってきててな、ブツの番号が割れていたんだよ。まいっちゃったぜ。ちんけな田舎町だっていうのに」(『ギャツビー』, p. 299) ——は、ギャツビーのビジネスの暗部を明白に語っている数少ない場面の一つである。ギャツビーは生前、ニックの面前で電話に應對し、「小さい町での取引」に限定するように指示を出していたが(『ギャツビー』, pp. 173-74), ニックの記憶の中にあつたこの不可解な電話は、ギャツビーの死後、ニックが偶然に受話器を取って、直接聞くことになるギャツビーの仕事に関連した電話の内容と結び付けられると、トムが示唆したくギャツビーの仕事の闇が、中傷やうわさではなく、く事実であることが証明されていく。

ギャツビーのくビジネスの実体はトムやウルフシャイム、スレイグルといった仕事仲間の話からく事実の断片が見えてくる。しかし、ギャツビーのく心情はニックの憶測でしかない。

ダイジーの棧橋の先端に灯火をみつけたときのギャツビーの驚きを、僕は想像した。彼は長い道のりをたどって、この青々とした芝生によるやくたどりついたのだ。夢はすぐ手の届くところまで近づいているように見えたし、それをつかみ損ねるかもしれないなんて、思いもよらなかったはずだ。その夢がもう彼の背後に、あの都市の枠外に広がる茫漠たる人知れぬ場所に——共和国の平野が夜の帷の下でどこまでも黒々と連なり行くあたりへと——移ろい去ってしまったことが、ギャツビーにはわからなかったのだ。

(『ギャツビー』, p. 325) [下線筆者]

ギャツビーの死後、ニックはニューヨークを離れて帰郷する前にギャツビー邸を訪れ、邸の前に広がる海岸の砂の上におおむけに寝転んで、くギャツ

ビーの夢〉に思いを馳せる。一体、〈ギャツビーの夢〉とは何だったのだろうか。ギャツビーは確かにニックの前で、「夢」や「野心」という言葉を口にしていて。しかし、ギャツビーが自身の夢や野心について、具体的にニックに語ったかどうかはわからない——少なくともニックはギャツビーの野心や夢を具体的に、忠実に、彼の言葉を引用して〈ギャツビー回想記〉の中で語ることはなかった。「思いもよらなかったはずだ」、「ギャツビーにはわからなかったのだ」と断言したのはギャツビーではなく、ニックである。「夢はすぐ手の届くところまで近づいているように見えた」という心境も、ニックの推測だろう。ニックが語る〈ギャツビー回想記〉の読者は、ニックの言葉で説明され、描写される〈ギャツビーの心情〉をたどるだけである。

『グレート・ギャツビー』で取り入れられた〈一人称の語り手〉の設定がめざした効果は何だったのだろうか。事実を客観的に語ることのできる〈全能の作者〉の語りではなく、作品中の人物を語り手にすることで、事実の背景や人物の心理の客観的分析よりも、〈語り手〉のロマンティックな思い込みを利用して、より自由にイメージを飛躍させ、過剰とも見える、しかも、かなり偏向した想像力で人物と出来事を描くための手法だったのだろうか。〈語り手〉の憶測による状況と心理の描写は、読者の想像力を刺激する文体こそ〈芸術的〉と考えた作者の技巧だったのか。

ニックには〈語り手〉として欠陥があるのではないか。ニック自身は優れた洞察力と判断力を自負しているが、ギャツビーの「インドの王侯のような生活」に関する判断が一転したエピソードでも明らかのように、ニックは〈嘘と真相〉を明確に区別して語ることのできる〈全能の作者〉のような語り手ではない。作者フィッツジェラルドの技巧的ミスでないのであれば、ニックという〈信頼できない語り手〉の設定は『ギャツビー』の

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

〈語り〉の構造の前提なのか。そうだとすれば、語り手ニックは〈全能の作者〉ではないので事実の真相を明確に説明、描写する必要はない。語り手が自身の思い込みと想像力で判断しながら、その憶測を〈真相〉であるかのように思いこんで語り、人物や状況の描写が読者に明確で具体的なイメージを与えるものでなくても、それは作者フィッツジェラルドが技術的な欠陥としての責任を負うことにならない、という作者の目論見だったのか。ギャツビーの心情を描く時、語り手ニックは多様なイメージを混在させ、飛翔させて、読者の想像力を刺激するが、具体的な実体を捉えさせることはない。イェール大学で文章を書いていた、というニックの自負が、一流の詩人、作家気取りでイメージに依存した人物評を書かせた、という〈語り〉の設定なのだろうか。

〈ギャツビー回想記〉の最終ページ――

ギャツビーは緑の灯火を信じていた。年を追うごとに我々の前からど  
んどん遠のいていく、陶酔に満ちた未来を。それはあの時我々の手か  
らすり抜けていった。でもまだ大丈夫。明日はもっと早く走ろう。両  
腕をもっと先まで差し出そう。・・・・・・そうすればある晴れた朝に

---

だからこそ我々は、前へ前へと進み続けるのだ。流れに立ち向かうボー  
トのように、絶え間なく過去へと押し戻されながらも。

(『ギャツビー』, pp. 325-26) [下線筆者]

ギャツビーが信じていた「陶酔に満ちた未来」(“the orgasmic future”, *Gatsby*, p. 171) とは、ギャツビーが実際には語らなかつたかもしれないが、ニックが推測した〈ギャツビーの夢〉だろう。そして、ニック自身が実は

ギャツビーについて語る時に吐露していた〈ニックの夢〉でもある。「この橋をいったん超えてしまえば、どんなことも可能になるのだ [中略] 思いもよらぬことさえ…… そう、このギャツビーですらそれほど突飛ともいえない存在になってしまう」(『ギャツビー』, p. 129) ——“‘Anything can happen now that we’ve slid over this bridge,’ I thought; anything at all...’ Even Gatsby could happen, without any particular wonder.” (Gatsby, p. 67) [下線筆者]。〈ギャツビーという在り方〉がニューヨークではあり得る、と思えた頃のニックはニューヨーク生活になじんできて、証券マンとしての成功を目指して勉強していた。しかし、ギャツビーがトム・ブキャナンの嫉妬による悪意で破滅していく時、〈ギャツビーという在り方〉は結局、つぶされていく、とニックは実感したのだろうか。ニックが語る「我々」とは、ニックを含むすべての〈夢追い人〉だろう。もちろん、ギャツビーがそうであったようにニックもまた、他の人々同様に「陶酔に満ちた未来」を夢見て、幾度もチャンスを掴みかけ——あるいは、掴みかけたように感じただけかもしれないが——、しかし、掴むことができず、それでも諦める事をせず、必ず成功を手にする事を信じてさらに努力を続けていく。〈ギャツビー的在り方〉の可能性を信じていた頃のニックは〈夢の実現〉の可能性を信じていたのだろうか。しかし、ギャツビーの死の顛末によって〈ギャツビー的在り方〉と〈夢の実現〉は幻想でしかなくなったのではないか。そして、ギャツビーの存在自体が実体を失い、〈虚構の人物〉になってしまったのではないか。

ニックがニューヨークに抱いた幻想とギャツビーに抱いた妄想は表裏一体となって、ニックの〈ギャツビー像〉を完成させていった。「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」、とニックはギャツビーを評したが、〈ギャツビー回想記〉の形式で語りながら、実は、ニックこそ

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

が〈ギャツビーなる人物〉を創造していたのではないか。ニックはギャツビーとの出会いを通して、想像と憶測の中でギャツビーの人生を追体験し、再現を試みた。ただし、〈語り手〉の憶測と想像力で書きあげる〈回想記〉という構成は、〈ギャツビー像〉の忠実な再現にはならない。読者は最後まで、ギャツビーの実像と彼の心的状況の真実を知ることができない。結局のところ、『グレート・ギャツビー』の主人公は語り手のニックであり、読者が〈知る〉のはニックのニューヨーク生活の現実であり、彼が観察し、分析し、描写する、〈ギャツビー像〉である。作者のフィッツジェラルドが〈一人称の語り手〉を利用して意図した効果が、〈信頼できない語り手〉による夢想的物語の構築だったのだろうか。フィッツジェラルドは『グレート・ギャツビー』執筆中に『スクリブナーズ』の編集者に宛てた手紙の中で、「光り輝く世界のような想像力を維持しながら」、「芸術性を意識した作品」を構想している、と書いていた。フィッツジェラルドは「光輝くような想像力」を語り手ニックに与え、〈ギャツビー回想記〉を「芸術性を意識した作品」に仕上げさせた、ということなのだろうか。

フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』は、実は、〈ギャツビー〉の物語ではなく、ニック・キャラウェイが〈ギャツビー物語〉を創造する、『ニック・キャラウェイ物語』として読むべき作品なのかもしれない。

#### 参考文献

Fitzgerald, F Scott, *The Great Gatsby*. London: Penguin Books, 1960.

スコット・フィッツジェラルド、『グレート・ギャツビー』村上春樹 訳、中央公論新社、2011年

アレン、フレデリック・ルイス、『オンリー・イエスタデイ』藤井ミネ訳、筑摩文庫、2000年

ターンブル、アンドルー、『完訳フィッツジェラルド伝』永岡定夫、坪井清彦

- 訳, こびあん書房, 1992年
- 野間正二, 『グレート・ギャツビー』の読み方, 創元社, 2008年
- 武藤脩二, 『1920年代アメリカ文学』, 研究社, 1993年
- 村上春樹, 『ザ・スコット・フィッツジェラルド・ブック』, ティービーエス・ブリタニカ, 1988年
- Beuka, Robert. *American Icon: Fitzgerald's The Great Gatsby in Critical and Cultural Context*. New York: Camden House, 2011.
- Bloom, Harold, ed. *F. Scott Fitzgerald's The Great Gatsby*, New York: Chelsea House Publishers, 1986.
- Brucoli, Matthew, J. *F. Scott Fitzgerald: A Life in Letters*. New York; Charles Scribner's Sons, 1994.
- Cartwright, Kent. "Nick Carraway as an Unreliable Narrator." *Papers on Language and Literature* 20, no 2 ( Spring 1984)

「こうして彼はジェイ・ギャツビーなる人物を創造した」

## SYNOPSIS

### “So he invented just the sort of Jay Gatsby”

—*The Great Gatsby* and its Narrative Technique—

ONO Yoshiko

This paper is an attempt to re-examine the narrative technique adopted in *The Great Gatsby*. The first chapter deals with the structure and the authority of the first-person narrative. The second chapter analyzes how Gatsby, introduced as the main character of the book, is portrayed from the narrator's point of view. The narrator assumes the role of the omniscient “I” and endeavors to recollect the smallest details of his encounter with Gatsby; however, the ‘authorized’ story-telling reveals the psychological depth of the narrator himself and his emotionally biased judgements about Gatsby. The first-person narrative fails to present the clear portrayal of Gatsby, only to create the character in the way the narrator wants to see.

# 多読用教材（Graded Readers）を 使用した読みの指導が与える影響： 非英語専攻の初級レベル学習者を 対象とした場合

釣 井 千 恵

## 1. はじめに

本研究の目的は、英語教育のアプローチのひとつである「多読指導」が英語学習者にどのような影響を与えるのか、実際に授業の一部で多読指導を実践した後に行った質問紙調査の結果をもとに考察することである。長谷・釣井・ハーバート・山科・中野（2015）では、英語を専攻する中上級レベルにあたる学習者を対象にしたので、本研究では非英語専攻の初級レベルの学習者に対する影響を調査したい。

日本語を母語（または第一言語）とする学習者が大半を占めるクラスで、多読指導を授業の一部として行ったうえ、課外学習の一部として多読を課した場合、半期（1回90分×15回）のコースで、学習者にはどのような変化が見られるのだろうか。特に、英語を専攻としない学部に所属し、受講生の多くが英語に対して苦手意識や嫌悪感を抱いている場合、多読指導は

---

キーワード：多読、流暢な読みの指導、単語認知の自動化、  
多読学習に対する態度、質問紙調査

学習者にどのような影響を与えるのだろうか。

長谷, 他 (2015) では, 授業内多読 (Sustained Silent Reading, 以下 SSR) を中心とした多読指導が英語学習者のリーディングに対する姿勢に与える影響について論じている。この研究で対象となった学習者は日本の大学生の英語力としては「中, または上級」にあたる学習者である。多読コースは学部全体で統一のカリキュラムで導入され, 多読指導を集中的に行い, 多読指導の後に実施したアンケート結果をもとに論じている。本研究では長谷, 他 (2015) で用いられたアンケートを適宜, 本研究での状況に合わせて修正したものを用いて, 長谷, 他 (2015) で対象となった学習者とは異なる特性をもつ学習者への多読指導の効果について論じたい。本研究では, 統一カリキュラムに組み込まれたものではなく, 一つのコースを多読指導に費やすのではなく, 授業の一部で多読教材を用いたもので, 長谷, 他の研究とは異なった状況での多読指導である。そして, 英語非専攻で英語に対する苦手意識や嫌悪感を抱いている学習者にはどのような影響があるのかを考察することにより, 「多読アプローチ」による英語教育についてより深く知見を得られるのではないかと考える。

## 2. 英語多読指導の理論的背景

### 2.1 多読とは

多読とは, 「学習者が自分にとってやさしい英語の本を楽しく読んで, 読書速度を上げ, 読書を流暢にできるようにすること」(The Extensive Reading Foundation, 2011) で, Graded Readers (英語を外国語として学ぶ学習者向けの段階別に書かれた本, 「語彙や統語構造を制限して書かれた教材」(門田・野呂・氏木, 2010), GR と略す) や Leveled Readers (英語を母語とする児童向けの段階別学習絵本, LR と略す) を大量に読み, 徐々にレベルを上げていく学習法である (古田・神田, 2013)。1980年代

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

から世界的に多読を取り入れた教育実践や多読に関する研究が行われており、日本国内の高校や大学でも多読指導の実践とその成果報告が多く見られる。やる気のない学習者に対する打開策や TOEIC 対策として多読指導を導入するなど、国内での多読授業が急速に普及している (高瀬, 2010)。

第二言語でのリーディング指導のアプローチとして、Day and Bamford (1998) は、多読指導の10の特徴をあげている。「学生は出来るだけ多く読む」、「学生は自分の読みたいものを選ぶ」、「教材は、語彙と文法の点で十分、学生の言語能力の範囲内である」、「リーディングは、教室内では学生ペースで個人的に静かに行う」、「速度は……速い。学生が容易に理解できると感じている本や読み物を読んでいるから」(梶井 (監訳), 2006: pp. 9-10) といった特徴を挙げており、受講者全員が同じ教科書を読む従来のリーディング授業とは異なった指導法であることがわかる。

従来のリーディング授業の特徴と比較しながら、高瀬 (2010) は、「受講態度」、「テキスト選択」、「教材・レベル」、「読書量」、「英語の内容」、「英語の難易度 (構文・語彙すべて)」、「読むスピード」、「辞書」、「日本語訳」、「内容理解」、「教師の役割」の項目にわけて、多読授業の特徴をまとめている (p.24)。「多読授業での学習者の受講態度は能動的、積極的であり、テキストの選択は学習者自身が行うため教材レベルは多様である。英語の難度が低い教材を使用するので読むスピードは速く、辞書を使って読む必要がないため大量に読むことができる。本1冊単位で全体を把握し、状況に即した内容理解をする。一語ずつ日本語に訳す必要のない、英語のまま内容理解できる素材を読む。教師の役割は説明や解説をしたりといった、いわゆる『教える』ことではなく、学習者の読みを観察し図書選択の指導を行ったりすることである」とまとめることができるだろう。

## 2.2 多読の効果

学習者の英語力や英語学習への動機づけの強さなどによって多読を取り入れる目的は異なり、また多読指導の取り入れ方も多様で、どのような学習者に対してどのように行なえば、どのような効果があるのか、研究調査の余地は多いが、高瀬（2010）では大きく分けて「英語学習における情意面での効果」、「英語力に関する効果」、「各種試験に対する効果」があるとしており、それぞれについて詳述されている。

国際多読教育学会（2011）も、学習者の言語能力の発達に対する多読の主な効果を6点挙げており、主に「英語力」と「情意面」に触れている（p.1）。6点の効果をまとめると、以下のようになる：

- (1) 自然な文脈の中で使われる表現に出会い、言葉が現実にもどのように使われているか知ることができる。
- (2) 語彙を増やす。大量の本を読むことにより数多くの単語や文型に何度も何度も繰り返し出会うため、その使い方が自然に身につく。次にどんな語句や文型が来るのか予測できるようになる。
- (3) 読書の速度が上がり、より流暢に読めるようになる。その結果、[脳内における]言語の処理がより自動化され、脳に他のことを記憶する余裕が生まれる。
- (4) 自信、やる気、楽しさが増し、読むことが好きになる。また、学習者の言語学習における不安感を下げる。
- (5) 自分に適切なレベルの英語を大量に読んだり、聞いたりするので、英語の読みや聞き取りのよい習慣が身に付く。
- (6) 多読によって英語のセンスが磨かれ、文脈の中で文法がどのように働くのか、勘が養われる。

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

授業内の一部の活動として多読指導を行う場合、ひとつのコース全体を多読指導にあてる場合、授業外で行う場合など、さまざまな形態があるが、いずれも従来のリーディング授業では実行できなかった「速く、大量に読む」ことによりインプットの量を増やすことができるというのが、多読指導の一番の特徴だと言える。外国語の習得、運用力をつけるために必須のインプット (門田, 2015) を確保できるのが多読である。

たとえ授業内の10分間程度の読書であったとしても、新出単語や文法、構文を含んだ文を学ぶために10分間精読するときの読書量と、辞書を使わずに理解できるレベルのものを10分間読む量を比べれば、簡単なものを読むほうがインプットの量は圧倒的に多い。野呂 (2009) では、中学・高校で「10分間読み」の活動を実施し、その結果を報告している。10分間を10回実施 (中学では7~9回) したので、合計100分の読書となり、高校での総読語数の平均は8,856語、中学校での読語数の平均は5,972語だった。この数字はそれほど多いようには見えないが、当該高校で使用している教科書の総語数は6,916語であり、1冊の教科書の総語数より約2,000語多いものを授業の一部の時間 (10分×10回実施) で読んでいるのである。中学に関しては、中学での使用教科書の3年分の総語数が6,148語なので、10分間多読でほぼ3年分を読んだことになる。

門田・野呂・氏木 (2010) では、単語認知と統語処理の自動化を促進し、読みの流畅さを身に着けさせることが、多読指導の最大の目的であると論じている。「学習者の知らない語・語句、文法・構文がなく、楽々と意味理解ができる (門田, 2015)」教材のインプットを大量に処理することで、語彙や文法・構文に関する既存の宣言的知識を、自動化した手続き知識に変えることができるという (門田, 2012)。

そして、門田 (2015) では、短期留学の効果に関しては「語彙などの新たな知識が増えるというよりも、既存の知識を自動的に使えるようにする

効果がある (p.227)」ことを裏付けた研究を紹介し、大量インプットの確保をめざす多読にも同様の効果があると述べている。

### 2.3 理論的背景 (読解過程)

人間の言語処理過程に関するモデルとして、全体がより単純で独立的な部分から構成されるという性質をもつ「モジュール的」なシステム (阿部・桃内・金子・李, 1994) が考えられている。そして、「読み」はさまざまな構成要素を含む多面的で複雑な認知活動であり、外国語で読むとなると、その複雑さはさらに増す (Koda, 2005)。これらの複雑な処理はボトムアップ処理とトップダウン処理に大きく分けることができる。読解過程に関しては、文字認識から形態素知識を適用した単語認識、そしてその意味認識、次に「句」や「節」や「文」などの統語構造へと進んでいくというように、言語の最小の単位から次第により大きな言語単位へと進んでいくのがボトムアップ処理である。ボトムアップ処理では取り入れた言語情報だけを手掛かりに内容を理解していくので、テキスト駆動型とも言われる。一方のトップダウン処理とは背景知識としてのスキーマを用いるなど、テキストに含まれている情報に関して読み手が仮説をたて、その仮説を検証していく読み手中心の情報処理であり、読み手駆動型とも呼ばれる (大石晴美, 2006; 門田・野呂, 2001)。読解過程では、処理した情報を一時的に活性化状態のまま保持して、次の情報処理に対処しており (苧坂, 1998)、ボトムアップ処理とトップダウン処理の相互作用が最も効率の良い手段だと考えられている (大石, 2006)。

### 2.4 理論的背景 (下位処理の自動化)

日本の学校英語教育では「わかること」、そして「知識を得ること」に主眼を置いており、このような状態は「顕在知識」を身に着けた状態、す

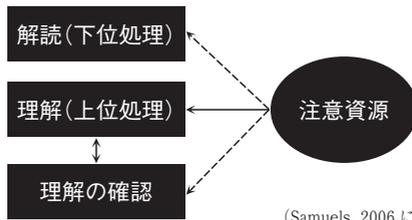
多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

なわち、長期記憶から意識して思い出す努力をして、使えるようになる状態である。しかし、実際のコミュニケーションで使えるような状態というのは、かなり高速に、無意識に、意味へのアクセスを止めることなく、最小限の認知資源を用いて記憶から取り出せる自動化した状態 (Grabe & Stoller, 2002: p.21), すなわち「顕在知識の手続き知識化」に転化する必要がある (門田, 2012: p.20)。

人間の脳が情報処理に割ける資源には限りがあり、そのためリーディングにおいて、未熟な読み手と熟達した読み手は異なった方略を利用しているという。読解処理には「Decoding (解読・下位処理)」, 「Comprehension (理解・上位処理)」, 「Metacognition (メタ認知・理解の確認)」, 「Attention (注意資源)」の4つの要素が不可欠であるが、熟達した読み手は、図1が示すように、下位処理に関しては自動的に処理ができるため、下位処理に認知資源を消費する必要がなく、別の処理、すなわち上位処理を同時に行うことができる。一方、未熟な読み手は、まず下位処理に注意をとられてしまうため、上位処理や理解の確認などを同時にすることはできない (図2-A)。下位処理を終えたのちに「理解」に進む。この処理でも多くの注意資源をとられてしまうため、同時に他のタスクは遂行されない (図2-B)。上位処理を終えた後、理解が満足できる程度のものかどうかを確認する (図2-C)。このように未熟な読み手は、「下位処理」「上位処理」「理解の確認」の間を行ったり来たりしながら読解をしているのである (Samuels, S. J., 2006)。

外国語での読みに関する研究に比べて、母語 (または第一言語) での読みに関する研究は進んでおり、上で挙げた Samuels (2006) のモデルも第一言語での読みを対象にしたものである。このように第1言語での読みにおける単語認識に関する多くの研究が行われているが、その理由は、読解は単語認知スキルなしでは成し遂げられないからである。そして、このよ

図1 熟達した読み手の読解（筆者による訳，以下同様）

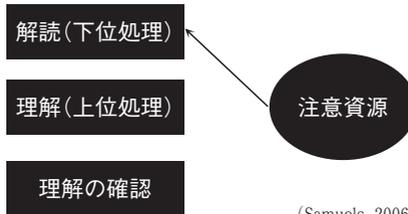


(Samuels, 2006 にもとづく)

※実線は注意が向けられている状態，破線は自動化されている状態を表す。

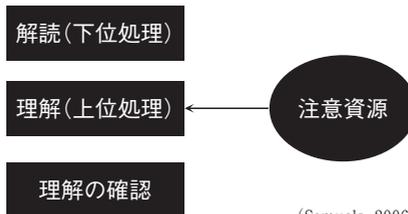
図2 未熟な読み手の読解

A



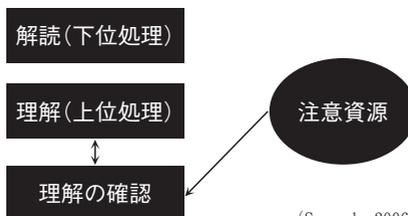
(Samuels, 2006 にもとづく)

B



(Samuels, 2006 にもとづく)

C



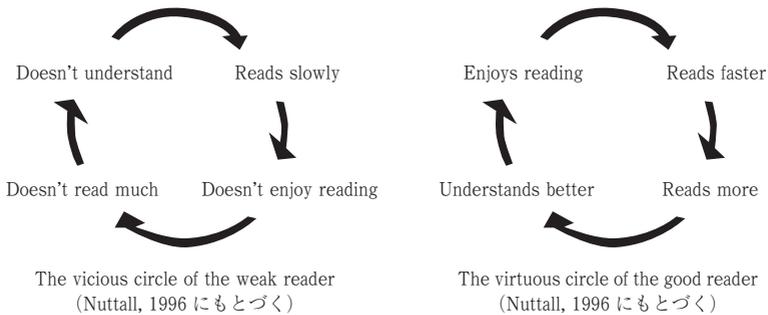
(Samuels, 2006 にもとづく)

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

うなスキルは長時間にわたって大量に読むことによってしか習得できない (Grabe & Stoller, 2002)。Grabe and Stoller (2002) では、単語認知のスキルを自動化するには数千時間の練習が必要であるとも述べられている。しかし、高速かつ自動的な単語認知の重要性についてそれほど認識されていないことと、第二言語での学習状況で、単語認知の自動性を高めるための時間と素材と練習を確保するのが難しいことを理由として挙げ、第二言語での読みの自動化に関する研究が少ないことを指摘されている。第二言語での読解教育でも単語認知の自動化は無視することができない重要なスキルである。特に英語を「外国語」として学習している日本の英語教育では、さらに長時間、大量に読む練習をする必要があると考える。

「読む」ことを学ぶには「読む」しか方法がなく、そして、学習している外国語についての知識を増やすには「読む」ことが最も良い方法の一つである。Nuttall (1996) が図示した「悪循環」にはまっている学習者が多いが、楽しい雰囲気で見たいものを読める多読をすることで、このような学習者が「悪循環」から抜け出すことができ、そして「好循環」の中に入ることができれば、さらにより良く読めるようになるのである (図3)。「好循環」の輪に示されているように「速く読める」ことが重要である。簡単なものを読むことで速度をあげ、速いスピードで読むことによって大量のインプットを取り込むことができ、結果として単語認知の自動化につながる。自動化によりさらに速く読めるようになり、理解が促進され、読むことを楽しめる。そして、読むことが楽しくなれば、さらに多くの本を読むようになり、さらに多くの本を読むことによって大量のインプットが確保できるのである。

図3 Nuttall (1996) の読みの「悪循環」と「好循環」



### 3. 他大学の実践, 研究例

世界の教育機関で、多様な背景をもつ学習者に対して多読指導が行われ、その研究報告や実践報告が多く見られるが、本稿では、日本の大学での英語教育で実践された多読指導に関する研究や実践報告例を挙げる。日本の大学英語教育では、日本語を母語（または第一言語）とする学習者が大半を占める。日本社会では英語は外国語であり、教室を出れば、ほとんどの学習者にとっては英語に触れる機会も少なく、使う必要もほとんどない。そのような背景をもつ学習者を対象とした英語教育と、第二言語（または公用語）として英語が使われている状況での英語学習は区別して論じる必要がある。

上述したように、日本でも多読を取り入れる教育機関や施設が急増しており、高瀬（2010）に多読実施校の一覧が掲載されている。特に「成功した多読」の章で、国立豊田工業専門学校（豊田高専）、近畿大学が挙げられており、豊田高専では英語力の伸び、とくに TOEIC のクラス平均点が毎年着実に40点以上伸びてきたことが報告されている。近畿大学では再履修のクラスで多読指導が行われ、授業の出席率が上がったこと、読書に対

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

する態度が変わったこと、読解力が上がったことが報告されている。

摂南大学では、一部のリーディング科目で多読を扱ったり、学部全体で「多読マラソン」を実施したりして、多読指導に対する様々な試みが行われている。「リーディングラウンジ」という多読本専用のスペースを設置していることもあり、学生の読書習慣を形成するなどの効果がみられているという (松田, 2012)。教員の個人蔵書を教室に持ち込んで行った多読指導は、93%の学生から好意的に評価されており、学生が実感した多読の効果として「読書の習慣づけ」, 「(英語に対する) 抵抗感の減少」, 「スキルアップ」, 「読書の楽しさ」が見られたという (松田, 2009)。

関西学院大学国際学部では、2010年の学部設立時から多読だけを扱う科目を、学部共通カリキュラムの一部として必修にしている (Yamashina, Tsurii, & Herbert, 2011; 釣井・ハーバート・山科, 2012; 長谷・釣井・ハーバート・山科・中野, 2015, など)。授業内多読 (SSR) と課外での課題として多読を課したコースで、読解力が大きく向上したことが報告されている。Yamashina, Tsurii, and Herbert (2011) では、読了語数に従って上位群と下位群にわけて分析した結果、上にあげた virtuous circle のような効果が出るには、10万語以上を読む必要があると結論づけている。

吉田 (2015) は、大阪経済大学での英語再履修クラスにおいて行った多読指導により、リーディング力の伸びが見られたことと、リーディングに対する意識の改善が見られたことを報告している。

以上のように、大学全体、または学部全体のカリキュラムの一部として多読指導ができるのか、各教員の担当授業の一部として多読指導を組み込んでいるのか、数年にわたって実践できるのか、半期の担当科目内の一部でしか実践できないのかなど、それぞれ状況は違っているが、程度の差こそあれ多読指導による英語力 (特に読解力) の向上と英語学習に対する意識の変化が多く報告されている。

## 4. 本研究における多読指導実践の概要

### 4.1 参加者

一年生を対象とした外国語科目のひとつとして開講されている「英語 IA」の、筆者が担当する非英語専攻学部クラスの受講者を対象とする。基礎科目として非英語専攻学部の学生は春学期（4月～7月の15週間）に「英語 IA」と「英語 IB」を、秋学期（9月～1月の15週間）に「英語 IIA」と「英語 IIB」を履修する。「英語 IA」と「英語 IIA」では、『読む』、『聞く』といった受容的スキルを中心に、コミュニケーションの手段としての実践的な英語運用能力を高めることを学習目標としている。当該学部では、さらに教科書を指定し、共通の学期末試験を実施している。指定教科書は、TOEIC テストに対応した内容のものである。学習目標に「英語運用能力を高める」と掲げられていることから、授業の一部（10分程度）の活動と、宿題の一部として「多読」を取り入れることにした。

開講当初は再履修科目として受講した2年生以上の学生を含む37名の登録があったが、再履修の学生は最初から授業に出ないこともあり、また、英語科目では4回欠席すると失格となり成績評価をされないという全学共通の規定があるため、最後まで授業を継続して受講した学生は28名であった。そのうち、本研究で使用したアンケート調査に2回とも参加し、有効と判断された回答を提出したのは23名であった。

### 4.2 多読指導

#### 4.2.1 授業内多読

授業内多読では2種類の多読本を使用した。一つは Cengage Learning 社による Foundation Reading Library (FRL) シリーズの Level 1 の6点である。FRL シリーズはレベル1からレベル7まであり、各レベルに6点

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

の多読本がある。春学期はレベル 1 の 6 点 (*Sarah's Surprise, Goodbye Hello!, Rain! Rain! Rain!, Bad Dog? Good Dog!, Get the Ball!, The Tickets*) を使用した。同じ高校に通う高校生たちが主人公の物語で「学校や家庭を舞台に等身大の高校生を描き、中学生から大学生まで幅広く人気がある (古川・神田 (編著), 2013: p.121)」シリーズである。1 冊平均560語で書かれており、4 分～8 分程度で読める<sup>1)</sup>。

もう一種類は Oxford University Press 社による Oxford Reading Tree (ORT) の Stage 1+ (24点), Stage 2 (18点), Stage 3 (24点) である。イギリスの小学校で採用されている教科書で、10段階にわかれている。Kipper, Biff, Chip という名のわんぱく三兄弟とその家族、愛犬 Floppy の日常生活を描いた物語で、Stage 1+ は平均42語 (26語～67語), Stage 2 は平均66語 (36語～93語), Stage 3 は平均82語 (69語～124語) で書かれている。

開講後 2 回目の授業で、1 分程度で終わる簡単な導入活動 (パワーポイントのスライドを用いて、一語ずつ時間をかけて読むよりも、意味のかたまりごとに読むほうが理解しやすく、記憶に残りやすいことを実感させた) の後、読解処理と記憶に関する簡単な説明をした。そして、FRL シリーズの *The Tickets* を全員に配布し、導入活動で紹介した読み方で読むように指示をした。教室前方に設置したスクリーンにはストップウォッチを映し、読解にかかった時間を記録するように指示をした。読書後、受講生たちはペアで内容を確認し (口頭で確認)、要約を書いた (両タスクとも、使用言語は日本語)。その後、2 分であらすじを述べ、スピーキングの練習をした (使用言語は英語)。開講後 3 回目以降の授業では、FRL シリーズ、レベル 1 の残りの 5 点の中から 1 点を選び、時間を測定しながら読み、要約と感想をレポートにまとめた後、内容や感想を英語で話す練習をした。FRL を用いた活動は 6 回行ったので、すべての授業に出席していれば、

レベル1の6点はすべて読んでいることになる<sup>2)</sup>。

開講前の予定では、レベル2の6点も春学期中に使用する予定だったが、FRLシリーズの多読本を読んだ後に書くレポートの内容や、授業中の他の活動の受講生の反応から、FRLシリーズのレベル2は難しく、多読の効果が出ないのではないかと考えられる受講生が複数いることが判明したので、FRLのレベル2ではなく、ORTのStage 1+, Stage 2, Stage 3を用いた多読指導に変更した。10分～15分の時間内にできるだけ多く読むように指示をし、全タイトルを一覧にしたプリントに、読了した本についての情報を書き入れさせることによって読書記録を管理した。

#### 4.2.2 授業外多読

授業外多読(宿題)として、多読本を読むように指示し、単位修得のための評価の一部とした。各受講生が授業以外の時間帯に自分で図書館へ行き、「読みたい」、または「面白そうだ」と感じる本を選び(実際には、図書館が所蔵している多読本のうち、在学生のレベルに合っているのはほんの一部であり、その一部の本を多数の学生が借り出すため、いつも「本が足りない」状態であった。残ったわずかな選択肢の中から選んで読むという状態だったので「読みたい」、または「面白そうだ」と感じる本を読めるわけではなかったようだ)、図書館、または自宅で読む。春学期の授業期間内で3万語以上を読むことを課した。「最終授業日までに…語」というような指示をすると、期限の間際になって大量に読もうとする受講生が絶えないので、「1週間に2,500語を読むことを目標に」という指示をできるだけ頻繁に与え、さらに「5月末までに1万語」、「6月末までにさらに1万語」というように、合計3回の期限を設定した。

読書量は語数で管理をした。受講生の読了語数を記録するために、京都産業大学のロブ・トーマス・ニール氏が開発したリーディングチェックシ

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

システム “M-Reader” を使用した。インターネット上に M-Reader のサイトがあり、受講生は多読本を読み終えるごとに M-Reader 上で出題される、読んだ本の内容に関する問題に答える。一定の正解数を超えると「読了した」と判定され、各受講生の専用ページに自分の読書記録として残る。実際に受講生が解くのは10問だが、各多読本に対して約20～30の質問が用意されており、その中からランダムに選ばれた10問を15分の制限時間内で解く。

M-Reader では様々な設定ができ、特に、1冊の本のクイズを受けてから、次のクイズを受けるまでの時間設定ができるのが便利である（教員のみが設定、変更できる）。この機能を使うと、一度クイズを受験したのちに、続けて複数冊の本のクイズを受験することができなくなる。1時間（または2時間、3時間、など時間の設定ができる）待たなければ次のクイズを受けることができないのである。多読指導の困難点のひとつが、期限間際にまとめて読もうとする受講生があとを絶たないことであり、続けて受験できないようにすることで、計画的に読むよう促すことができる。

資料1から4は、M-Reader のページの一部である。実際に本研究で使用したものの一部を掲載するので、個人が特定される可能性のある部分は加工している。

資料1：ホームページの一部。本システムを利用している加盟大学（世界20か国、200校以上の大学で利用されている<sup>3)</sup>）の受講生の中から、レベルごとに最も多い語数を読んだ受講生の名前が表示されている。

資料2：受講生の多読記録の一覧表。受講生のユーザー名（学籍番号で登録しているので、ユーザー名から学籍番号がわかる）、名前、クイズを受験した本の冊数、合格した本の冊数、不合格だった

本の冊数、読了語数、他のコースでも多読を取り入れている場合は該当受講生の全コースでの読了語数などがわかる。

資料3：各受講生の個人別ページの一部。読了した本の表紙が並んでいる。

資料4：各受講者の個人別ページの読書記録の部分。日付、出版社、タイトル、レベル、クイズの合否、各本の語数、総語数が表示される。この資料で示されている受講生は4月28日までに8冊読み、その総語数は4,857語だということがわかる。

## 5. データ収集

### 5.1 読解力テスト

初回の授業で、エジンバラ大学の多読研究プロジェクト (Edinburgh Project on Extensive Reading) が開発したクローズテスト E.P.E.R. Edinburgh Project on Extensive Reading Placement/Progress Test (以下 EPER テスト) を実施した<sup>4)</sup>。Test A, Test B, Test E の3種類のテストがあり、すべてのテストが同じ形式をとっているため、素点を標準スコアに変換することによって、テスト間の得点の比較が可能である。厳密に等間隔の語を空欄にしたクローズテストではないが、十数種類 (Test A は12種類、Test B は13種類、Test E は10種類) の英文が印刷され、文中に空欄があり (Test A は合計141箇所、Test B は147箇所、Test E は146箇所)、英単語を書くというクローズテストである。当該クラスでは事前テストとして Test A を、事後テストとして Test E を使用した。しかし、この読解力テストに関しては、事後テストの予定日に台風による暴風警報発令のため複数の学生に対して公認欠席が認められ、受験しなかった学生が多かったこと、そして、欠席者が多かったことが影響したのか、受験した受講生の答案にも不完全なものが多く、本研究では分析の対象から外すこととした。

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

## 5.2 アンケート

EPER テストを実施した次の授業時に、アンケートを行った。今回の調査特有の状況に合わせて一部文言を変更したが、質問項目の内容や尺度は長谷，他 (2015) で使用したのと同じものである。資料5が4月に行った事前アンケートで、資料6が7月に行った事後アンケートである。

事前アンケートでは、英語学習に対する考え、とくに英語リーディングに対する意見や態度などについて問う項目を、事後アンケートではそれに加えて、多読の取り組み方や記録、そして多読に対する意見を問う項目を作成し、「1 そうは思わない」から「5 そう思う」までの5段階のリカー・スケールを用いた。

## 5.3 読後数

1年次の英語科目では、「4回欠席すると失格となる」というルールがあり、履修登録者数は37名であったが、最後まで継続して受講したのは28名であった。この28名の宿題としての授業外多読の平均読了語数は21,499語 (max. 45,651, min. 836, SD 12,198.63) だった。アンケート調査に2回とも参加し、有効と判断された回答を提出した23名では、平均は25,645語 (max. 45,651, min. 11,507, SD 9,003.56) だった。

# 6. 結果・考察

## 6.1 英語学習に対する考え

4月に実施した事前アンケート (資料5) では、英語学習 (特にリーディング) に対する考えや態度、意見、経験、方法などを問う設問を27問準備した。7月に実施した事後アンケートでも同じ項目を使用した (ただし、27番目の設問は、4月の事前アンケートでは「これまでに読んだ、レベル別リーダーの冊数」を聞き、大学入学までの多読本を利用した学習の経験

表1 英語多読指導に関するアンケート（4月・7月実施）

Q	Q1	Q2	Q3	Q4	Q5	Q6	Q7	Q8	Q9
4月	4.70	4.00	1.83	2.70	3.65	1.57	1.22	1.70	4.30
7月	4.57	4.09	2.04	2.52	3.83	2.30	1.65	2.09	3.91
Q	Q10	Q11	Q12	Q13	Q14	Q15	Q16	Q17	Q18
4月	4.13	4.30	1.30	1.30	4.09	4.13	4.43	3.30	3.96
7月	3.91	4.22	2.43	1.61	3.87	3.83	4.17	2.78	3.78
Q	Q19	Q20	Q21	Q22	Q23	Q24	Q25	Q26	Q27
4月	3.78	3.13	3.09	4.09	1.43	1.43	1.57	4.24	1.13
7月	3.70	3.00	2.82	3.91	1.52	1.61	1.57	3.87	3.26

数値：平均値

を確認し、7月の事後アンケートでは「春学期に読んだ、多読本の冊数」を確認したため、この部分は文言が変わっている）。表1は事前・事後アンケートの質問に対する回答の平均値である。

それぞれの質問に対する回答の平均値をt検定で検証したところ、有意な差があると考えられるものはほとんどなかった。非英語専攻学部の学生を対象としたクラスで、15週間のコースを終えた段階で、それほど大きく英語学習に対する考えが変わることはないのだろう。

アンケートの集計結果から、「英語学習に強い苦手意識を持っているが、英語学習の必要性は感じている」という学習者像が考えられる。Q1は「長文を読むのが苦手である」という項目であるが、この設問に対して、「そう思う」と「ややそう思う」という回答がほとんどで、事前アンケートでの平均は4.70であった。Q9「英語の文章を読んでいて、途中でやめたくなくなることがある」に対する回答の平均は4.30、Q16の「わからない語があると、文の意味がとれなくなってしまう」という設問に対しては4.43というように、英語のリーディングに強く問題を感じている受講生がほとんどである。しかし、Q2「英語の成績を上げるには、リーディングが大切

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

である」という設問に多くの受講生が同意し (平均4.00), Q14「英語のリーディングの勉強は, 就職活動において役に立つと思う」(平均4.09), Q15「英語のリーディングをして, 知識を増やしたい」(平均4.13) に対する回答から, 英語リーディングの学習の必要性は感じているということが推察できる。

中学・高校での数年間の英語学習, 中学入学以前や高校卒業後, または公教育以外での英語学習で持つようになった意見や英語学習に対する態度が, 15週間の間 (アンケートを実施したのは2週目と15週目なので, 実質14週しか経過していない) に有意な差があると考えられるほど変わることは考えにくい。しかし, その中でも, 有意な差があるのではないかと考えられる項目が2点あった。Q6「時間があるときには, 英語の文章をできるだけ読むようにしている」( $p=0.011$ ) と Q12「教科書以外の英語の本を, 自ら, できるだけ読んでいる」( $p<.01$ ) である。英語の授業を週に2コマ受講しているので, もう一方のコースの影響がある可能性はあるが, 教科書を使った予習や復習以外に, 「できるだけ」, 「自ら」読むようになったという可能性が示唆されている。

## 6.2 多読学習に対する意見

多読指導の導入後, 前期授業の最終日に行ったアンケートでは, 事前アンケートと同じ質問項目に28項目を追加して, 合計55項目について尋ねた。追加した項目では, 主に多読に対する意見と, 多読をするときの読み方など, 多読の取り組み方について尋ねた。これらの項目でも, 全体的な傾向を見たところ, 多くの受講生が「3 どちらとも言えない」と回答していた。たとえば「多読をすることによって, リスニング力が伸びた (設問30)」という項目に対して, 「3 どちらとも言えない」と回答した受講生が14人 (60.9%), 「2 あまりそうは思わない」が2人 (8.7%), 「1 そうは思わ

ない」が2人(8.7%),「4 ややそう思う」が4人(17.4%),「5 そう思う」が1人(4.3%)で、平均が3.00だった。前項と同様に、14週間程度では、英語のスキルが伸びたとは感じる事ができず、さらにそれが「多読の成果」なのかどうかはよくわからないといったところだろう。以下では、「3 どちらとも言えない」と回答する受講生が多いことには変わりはないが、肯定的な回答(「4 ややそう思う」と「5 そう思う」)、または否定的な回答(「2 あまりそうは思わない」と「1 そうは思わない」)のどちらかにも回答が偏って、何らかの傾向がみられる項目について報告する。

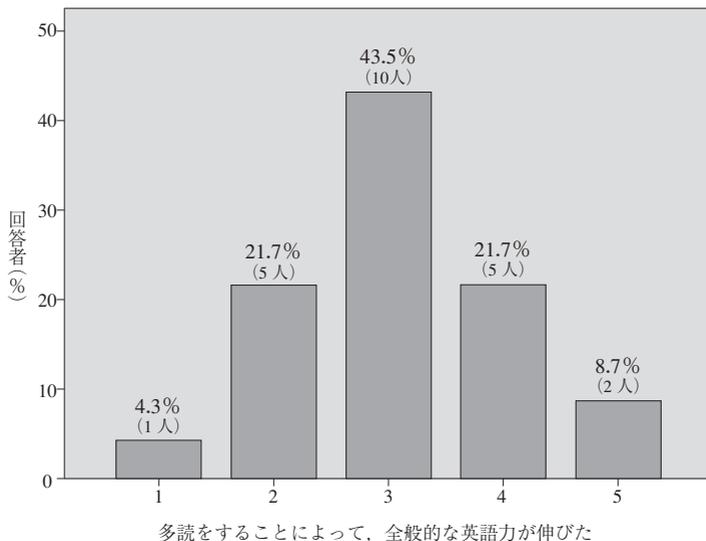
### 6.2.1 英語力

「多読をすることによって、全般的な英語力が伸びた(設問45)」に対して、約30%の受講生が肯定的な回答(「5 そう思う」と「4 ややそう思う」)をした(図4)。英語のスキル別に尋ねた項目「多読をすることによって、リスニング力が伸びた(設問30)」、「多読をすることによって、スピーキング力が伸びた(設問32)」、「多読をすることによって、英語の単語をたくさん覚えた(設問37)」、「多読をすることによって、ライティング力が伸びた(設問38)」、「多読をすることによって、文法の知識が増えた(設問54)」についてはそれほど多くの受講生が肯定的な回答をしたわけではないので(リスニング, 21.7%(「5 そう思う」と「4 ややそう思う」の合計, 以下同様);スピーキング, 8.7%;英単語, 13%;ライティング, 17.4%;文法, 26.1%), どのような力が伸びたのか具体的には自覚できず、説明はできないが、特に多読本を使った学習時に何らかの手ごたえを感じ、何となく力になったという感触があったのではないだろうか。

多読活動では「読み」を中心に行っているので、設問31の「多読をする

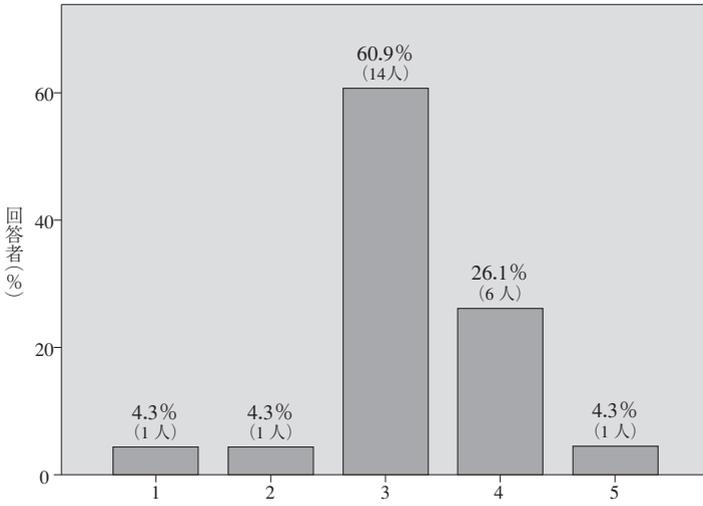
多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

図 4



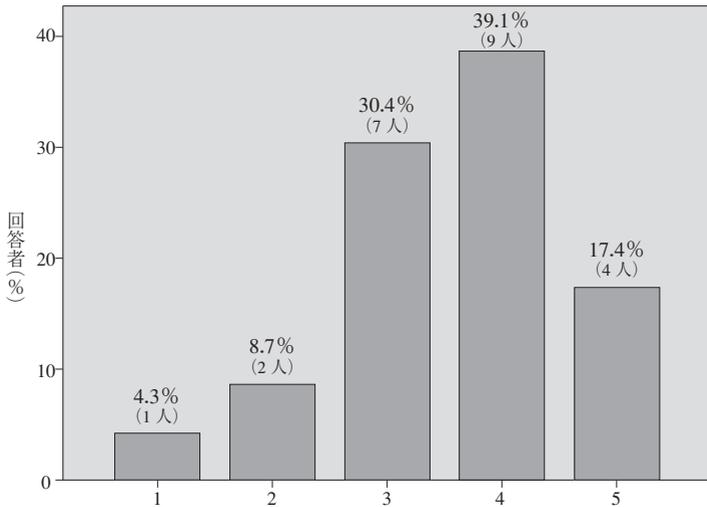
ことによって、「リーディング力が伸びた」に対して30%の受講生がそのように感じた」と回答した。「3 どちらとも言えない」と回答する受講生が大半を占めているのは、「伸びたのか」と問われると、それほど理想の英語力に近づいたわけではないと考えたからだろう。否定的な回答をしたのはごく少数であった（図5）。特に、読む速度に関しては、過半数の受講生（56.5%）が読む速度が速くなったと感じており（図6）、多読本以外の英文を読む力もついたと約30%の受講生が感じていることから（図7）、英語の知識が増えたり、英語を使って書いたり話したりする力がついたのかどうかは分からず、英語力が足りないことは自覚しているが、「英語が（速く）読める」という手ごたえは感じたようである。

図5



多読をすることによって、リーディング力が伸びた

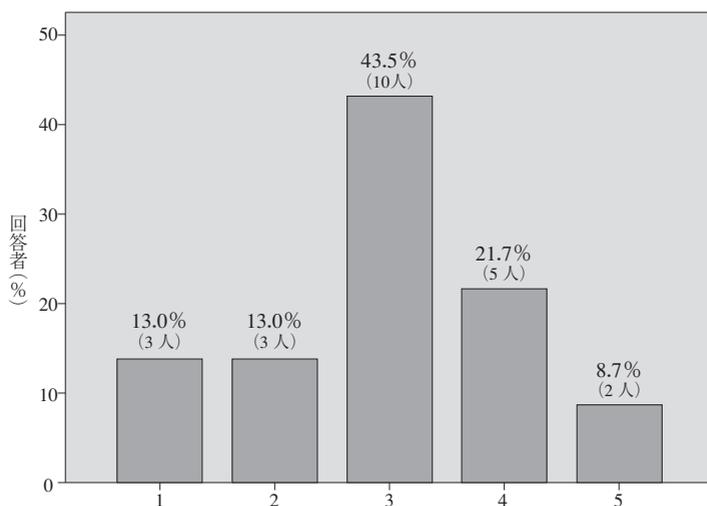
図6



多読をすることによって、英語を読む速度が速くなった

多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

図 7

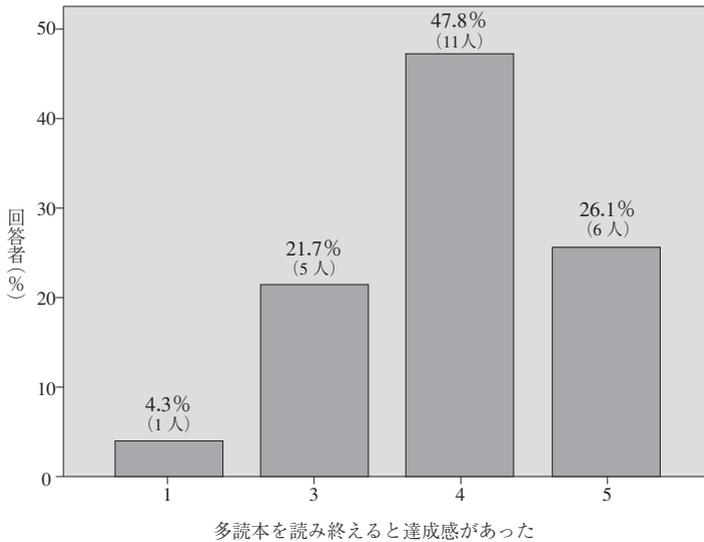


多読をすることによって、多読本以外の英文を読む力もついた

### 6.2.2 達成感

本研究が対象としたような学習者に対する英語教育で、授業の一部で多読アプローチを取り入れた場合の効果として挙げられるのが「達成感」ではないだろうか。簡単な英語で書かれたもので、薄い本とはいえ、外国語で書かれた本を1冊読み通した上、本の内容を理解し、外国語で「読書」を楽しんだという経験を多くの受講生がしたようだ。設問51「多読本を読み終わると達成感があった」に対して、70%以上の受講生が「ややそう思う」、または「そう思う」と答えた（図8）。語数としては1冊につき、500語から600語程度の長さのものなので、プリント1枚に収まる量である。この程度の長さであれば、高校などでの授業で読んだことがあるはずである。従来の英語の授業で使われるような英語の長文を読んだときにも同じような達成感を味わっていたことも考えられるが、そのような体験を問う

図8



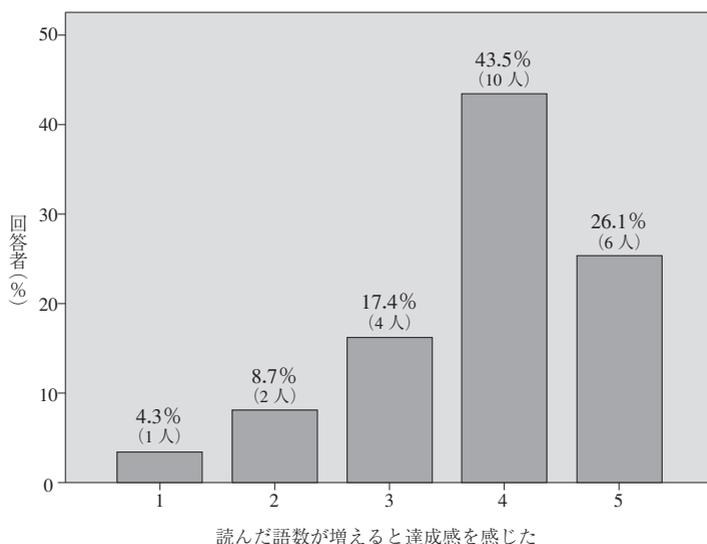
設問を本研究では準備しておらず、事前アンケートの長文の読みに関する設問（「1 長文を読むのが苦手である（平均4.70）」、「7 長文を読むのが得意である（平均1.22）」、「13 長文を読むのが好きである（平均1.30）」、「21 長文を見ると緊張する（平均3.09）」）に対する回答からの推測でしかないが、英語の長文の読みに対して、それほど肯定的な体験をしてきた学習者ではないようである。そのような学習者の大半が多読本を読むことによって「達成感」を感じたのである。

また、多読本を1冊読み終えることに対する達成感だけではなく、そのような教材を複数冊読んでいくという活動にも達成感を感じたようである（図9）。70%近い受講生が、「読んだ語数が増えると達成感を感じた（設問44）」と答えている。

多読アプローチはその性質上、読後の課題や評価の導入に対して賛否両論がある。「評価をどのようにするのか」というのが、大学のような教育

多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

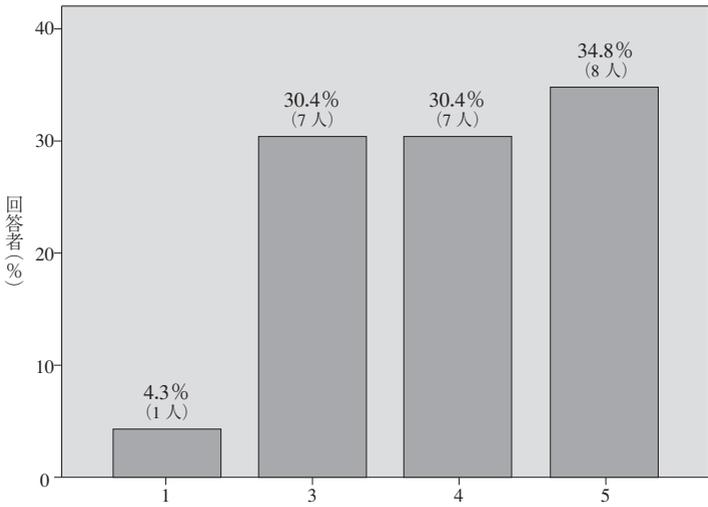
図 9



機関での英語教育で多読を導入する場合に生じる問題点のひとつである。本研究での多読指導では、M-Reader による読後の内容理解テストを利用したが、M-Reader での試験を受けることによって「本を読み終えた」との達成感を感じた受講生が多かった（図10）。65%以上の受講生が「M-Reader をすると、本を読み終えた達成感があった（設問55）」と回答している。また、上で紹介したように、M-Reader では読解テストを受験するだけでなく、合格した本についての情報が蓄積されていき、総語数や読んだ本の表紙の写真が増えていくことなどでも多くの受講生が達成感を感じたようだ（図11）。

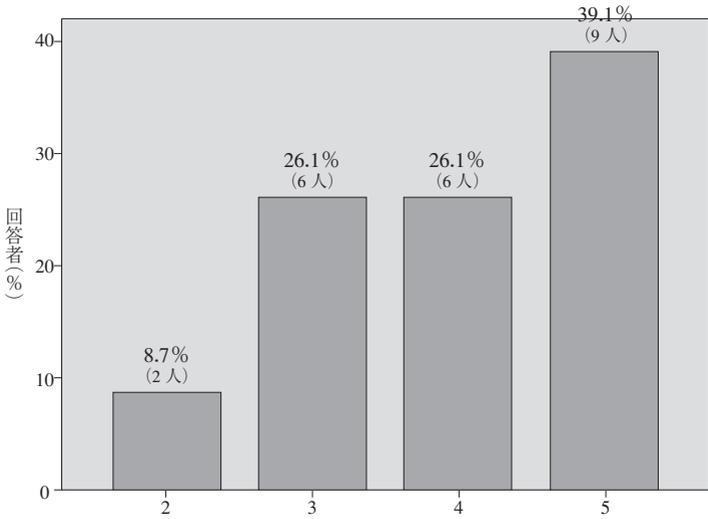
読後課題に関する学習者の体験について調査をおこなった釣井・ハーバート・山科（2012）では、読後課題として本の要約（ブックレポート）を課した場合の効能として、「多読促進効果」と「読書に取り組む姿勢向上」と「学習効果」を挙げ、「達成感から次の本へ」という連動と共に、「記録

図10



M-Reader をすると、本を読み終えた達成感があった

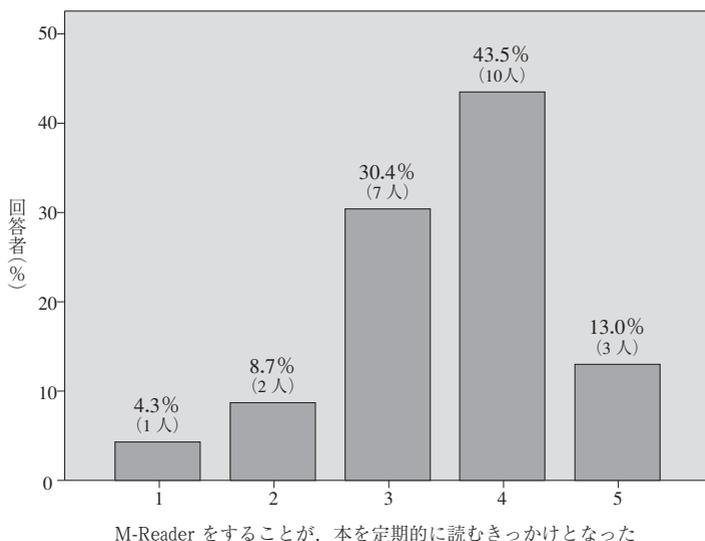
図11



記録 (M-Reader) をつけると達成感を感じた

多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

図12

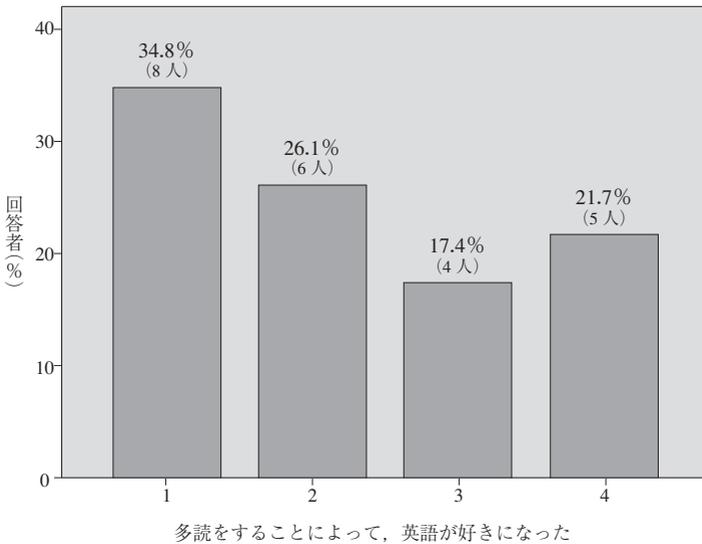


を残した充実感」が多読促進につながっていたことを明らかにしている。本研究でも、多くの受講生にとって「M-Reader をすることが、本を定期的に読むきっかけとなった（設問41）」ようである（図12、「4 ややそう思う」と「5 そう思う」の合計56.5%）。

### 6.2.3 英語学習に対する情意面での変化

図13は設問28「多読をすることによって、英語が好きになった」に対する回答である。相変わらず英語が嫌いで、1セメスターの授業の一部を使った多読活動で英語が好きになったとは思えない受講生が大半である（「1 そうは思わない」と「2 あまりそうは思わない」の合計60.9%）。しかし、「好きになった」と答えている受講生がいることに注目したい（21.7%）。英語専攻ではなく、英語の学習や英語に関する経験を問う設問に否定的な

図13

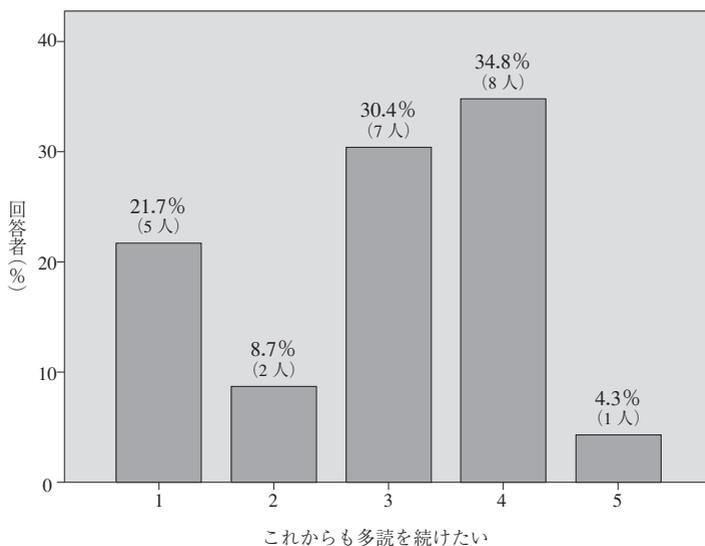


回答をする受講生がほとんどであるクラスで、5人にひとりが「多読」で英語が「好きになった」と答えているのである。

図14は「これからも多読を続けたい」という設問52に対する回答であるが、40%近くの受講生が「4 ややそう思う」または「5 そう思う」と答えている。英語を専攻していない学生にとって、必修科目である英語の授業の課外学習として「多読」を行うことは時間的にも労力的にもかなりの負担である。そのため、「もう嫌だ」と思う学生も多いだろう。設問52に対して「2 あまりそうは思わない」、または「1 そうは思わない」回答者も多く、約30%であった。授業の大半は共通指定教科書を用いた内容であるので、課外課題の多読を全くしない場合は別であるが、単位の修得にはそれほど大きく影響しないので、多読が原因で脱落した受講生はほとんどいないと考えるが、それでも可能性が全くないわけではないので、回答者の割合は少し変化するかもしれない。しかし、それでも、複数の受講生

多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

図14



が「これからも続けたい」と回答した。英語（学習）に対して苦手意識のある、非英語専攻の学生が、多読をすることによって、「これからも続けたい」と感じるような経験をしたようである。

## 7. おわりに

英語を専攻としない大学1年生に対して、1セメスターの授業の一部と課外学習の一部で多読を取り入れ、その多読活動に関するアンケート調査を行った。得られた回答から、「英語学習に強い苦手意識を持っているが、英語学習の必要性は感じている」学習者が、コース開始時は教科書以外の本は読んでいなかったが、教科書を使った予習や復習以外に、「できるだけ」、「自ら」英語を読むようになったという可能性が示唆された。そして、一部の学習者は、多読をすることによって全般的な英語力がついたと感じ

た。特に「英語を読む速度」に関しては、大半の学習者が速くなったと感じた。

外国語としての英語学習者を対象に開発された、語彙や統語構造を制限して段階別に書かれた多読本を使用することにより、70%以上の学習者が達成感を感じた。多読本を読み終えることに加えて、語数で学習を管理すること、そして、語数管理のツールとしてオンライン上のプログラムを使うことによって「達成感」を感じた。外国語の学習や運用面で何らかの向上を感じることで、そして達成感を感じることで、英語学習や多読アプローチに対して、「英語が好きになった」や「多読を続けたい」と言った肯定的な感情を持つようになった学習者が見られた。非英語専攻の学習者を対象とした多読指導で、最初に見られる効果としては、「読書習慣を形成すること」、「リーディング速度を主とした英語力の向上を感じさせること」、「多読や英語（学習）に対して肯定的な態度を持たせること」が挙げられるだろう。

しかし、本研究で行った多読指導というのは授業の一部で取り入れたただけであり、英語の知識や運用力に対する多読の効果を十分に考察できるほど学習者は多読本を読んでいない。期間も1セメスターの15週間だけであり、多読活動の期間としても短く、効果が出たのかどうかを調査するにも早すぎる。また、筆者の担当したクラスでアンケート調査を行ったため、回答者数も少ない。かなり限られた範囲の調査である。今後、さらに長い期間、大量の多読を導入したプログラムなどで、広く、そして細かく多読アプローチの効果を調査する必要があるだろう。

多読アプローチの最大の特徴のひとつとして挙げられるのが、「学習者のレベルに合った（学習者が簡単に読めるほど易しいレベルの）、そして、学習者が読みたい、面白そうだと感じる多読本を大量に読むこと」であるが、その特徴を活かすことができるほどの蔵書がないことが、コースの途

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

中であきらかになった。大学図書館に多読本専用の書棚はあるものの、極端にレベルが高いものが多く、簡単に読めるものはいつも足りない状態であった。図書館に行っても書棚に本がほとんど残っていないことが多く、運よく残っていたら、「読みたい」と思う本なのか、「面白そう」なのかを考えることなく、とにかくそれを読むしかないと訴える受講生が続出した。

より効果的な英語 (外国語) 教育, とりわけ, 英語 (外国語) 運用能力の育成と伸長について調査するためには, 多読アプローチの利点を活かせるような蔵書を確保し, 長期的, 広範に, そして様々なレベルの学習者に対して実践し, どのような効果や影響があるのか, 多様な手法をもちいて調査, 研究をする必要がある。

### Notes

- 1) *Sarah's Surprise* [526 words] / *Goodbye Hello!* [568 words] / *Rain! Rain! Rain!* [504 words] / *Bad Dog? Good Dog!* [622 words] / *Get the Ball!* [521 words] / *The Tickets* [620 words]
- 2) 授業内多読を行う際には教室前に設置したスクリーンにストップウォッチを提示し, 時間を測定している。1回目のSSRでは, 目標時間を「8分」とした。最初は8分で読了できない受講生が数名いたが, 最終的には4分程度で読了できる受講生が大半を占めた。
- 3) 京都産業大学 多読ラーニングプロジェクト『多読プログラムの歩み』  
[http://www.kyoto-su.ac.jp/50th/dna/tadoku/pdf/MR\\_facts-Japanese.pdf](http://www.kyoto-su.ac.jp/50th/dna/tadoku/pdf/MR_facts-Japanese.pdf) (2015年8月6日)
- 4) Edinburgh Project on Extensive Reading は2011年に終了し, 開発された教材やテストが国際多読教育学会によって引き継がれている。

### 謝辞

本研究で使用した質問紙は「2012年度 関西学院大学共同研究 授業内 SSR を中心とした多読指導が英語読解力向上に与える影響について (研究代表者 長谷尚弥)」のプロジェクトの一部として山科美和子先生 (関西大学), ハーパー

ト久代先生（甲南大学）と共同で作成したものを使わせていただきました。M-Reader の画像使用に関しては、ロブ・トーマス・ニール先生（京都産業大学）よりご許可をいただきました。そして、本稿の改善に向けて、野原康弘先生（桃山学院大学）、フィリップ・ピリングズリー先生（桃山学院大学）、マット・バリー先生（桃山学院大学）より、きめ細やかなご助言をいただきました。心より御礼を申し上げます。

### 引用文献

- 阿部純一・桃内佳雄・金子康朗・李光五. (1994). 『人間の情報処理—言語理解の認知科学—』東京：サイエンス社.
- Day, R. R. & Bamford, J. (1998). *Extensive Reading in the Second Language Classroom*. Cambridge: Cambridge University Press. [梶井幹生（監訳）. (2006). 『多読で学ぶ英語—楽しいリーディングへの招待』東京：松柏社]
- The Extensive Reading Foundation. (2011). *Guide to Extensive Reading*. The Extensive Reading Foundation. [山中純子・高瀬敦子・古川昭夫（訳）. 『多読指導ガイド』国際多読教育学会]
- 古川昭夫・神田みなみ（編著）. (2013). 『英語多読完全ブックガイド 改訂第4版』東京：コスモピア.
- Grabe, W. & Stoller, F. (2002). *Teaching and Researching Reading*. Longman, Harlow.
- 長谷尚弥・釣井千恵・ハーバート久代・山科美和子・中野陽子. (2015). 「授業内SSRを中心とした多読指導が英語学習者のリーディングに対する姿勢に与える影響について」『国際学研究』Vol. 4, No. 1, 1-8.
- 門田修平. (2012). 『シャドーイング・音読と英語習得の科学』東京：コスモピア.
- 門田修平. (2015). 『英語上達12のポイント』東京：コスモピア.
- 門田修平・野呂忠司（編著）. (2001). 『英語リーディングの認知メカニズム』東京：くろしお出版.
- 門田修平・野呂忠司・氏木道人（編著）. (2010). 『英語リーディング指導ハンドブック』東京：大修館書店.
- Koda, K. (2005). *Insights into Second Language Reading: A Cross-Linguistic*

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

*Approach*. Cambridge: Cambridge University Press.

松田早恵. (2009). 「教員の個人蔵書を用いた1年間の授業内多読」 *Setsunan Journal of English Education*, Vol. 3, 115-136.

松田早恵. (2012). 「多読最前線：摂南大学の現状と比較して」 *Setsunan Journal of English Education*, Vol. 6, 65-89.

野呂忠司. (2009). 「中学・高校生に対する10分間多読の効果」『中部地区英語教育学会 紀要』第38号, 461-468.

Nuttall, C. (1996). *Teaching Reading Skills in a Foreign Language, New Edition*. Oxford: Macmillan Heinemann English Language Teaching.

大石晴美. (2006). 『脳科学からの第二言語習得論』京都：昭和堂.

苧坂直行 (編). (1998). 『読み—脳と心の情報処理』東京：朝倉書店.

Samuels, S. J. (2006). “Toward a Model of Reading Fluency.” In Samuels, S. J. & Farstrup, A. E. *What Research Has to Say About Fluency Instruction*. International Reading Association, 24-46.

高瀬敦子. (2010). 『英語多読・多聴指導マニュアル』東京：大修館書店.

釣井千恵・ハーバート久代・山科美和子. (2012). 「多読指導における学習者評価法としての要約課題に関する質的研究—多読に成功した学習者の体験分析から—」『国際学研究』第1号, 97-110.

Yamashina, M., Tsurii, C., & Herbert, H. (2011). “Exploring the Relationship between Extensive Reading Instruction and EFL Learners’ Reading Proficiency,” *Kwansei Gakuin University Humanities Review*, Vol. 16, 73-86.

吉田弘子. (2015). 「英語再履修クラスにおける多読指導の成果」『大阪経大論集』第65巻第5号, 45-57.

資料1：M-Reader ホームページ（個人が特定される可能性のある部分は加工している。以下同様。）

[View available quizzes](#) [About M-Reader](#)



Hosted by the Extensive Reading Foundation



# Extensive Reading

## The fun way to learn English!

There is a new "lost password" function. Is your email address correct?

**Login:**    [New users, click here to register!](#)  
[Forgot your password?](#)

**Top readers Congratulations!!**

Past 30 days			
<small>Students must have read at least 75% of their books at the stated level.</small>			
Level 0	██████████	Hibikino ER Outreach	12,744

多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

資料 2：M-Reader 内、受講生の一覧

<input type="checkbox"/>	Username	Fullname Click to view screen	Start level	Current level		Taken quizzes	Passed quizzes	Failed quizzes	Total words this term	Total words all terms	Goal
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		28	23	5	41576	80221	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		19	18	1	51492	103548	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		34	29	5	41361	41361	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		37	34	3	42348	94646	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		22	22	0	41102	41102	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		30	25	5	51720	105198	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		34	29	5	45395	96035	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		17	15	2	47145	99140	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		27	26	1	43274	55208	15000
<input type="checkbox"/>	mpq-15000	XXXXXXXXXX	0	0		21	21	0	41661	92486	15000

資料 3：M-Reader 内、各受講生の個人別ページ

資料4：M-Reader 内、各受講生の個人別ページ




Reading Report For: XXXXXXXXXXXX

You are now in class: Tsurii F2

Go to Tsurii F2  Don't show my name to other students  
 Show this name to other students: XXXXXXXXXXXX

Don't show book covers

	Date	Publisher	Book title	Level	Status click for %	Words	Total words	Retake?
<input type="checkbox"/>	19 Apr 2015	Cengage Foundations	Rain, Rain, Rain!	Level 1 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="504"/>	504	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	22 Apr 2015	Cengage Foundations	Old Boat, New Boat	Level 2 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="713"/>	1217	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	27 Apr 2015	Oxford Classic Tales	Rumplestiltskin	Beginner 1 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="600"/>	1817	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	27 Apr 2015	Oxford Classic Tales	Mansour and the Donkey	Level 1 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="643"/>	2460	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	27 Apr 2015	Oxford Classic Tales	Three Billy-Goats	Beginner 1 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="432"/>	2892	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	28 Apr 2015	Oxford Classic Tales	The Enormous Turnip	Beginner 1 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="450"/>	3342	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	28 Apr 2015	Oxford Classic Tales	Big Baby Finn	Beginner 2 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="717"/>	4059	<input type="checkbox"/>
<input type="checkbox"/>	28 Apr 2015	Oxford Classic Tales	Jack and the Beanstalk	Beginner 2 [0]	Passed	<input style="width: 80px;" type="text" value="798"/>	4857	<input type="checkbox"/>

多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

資料5：事前アンケート

英語多読指導に関するアンケート

以下の質問に対し、あてはまる数字をマークしてください。  
今後の多読指導において参考にするため、成績評価には一切関係ありません。

1 そうは思わない 2 あまりそうは思わない 3 どちらとも言えない 4 ややそう思う 5 そう思う

1	長文を読むのが苦手である	1	2	3	4	5
2	英語の成績を上げるには、リーディングが大切である	1	2	3	4	5
3	英語で小説を読むのが好きである	1	2	3	4	5
4	英語のリーディングをして、他の文化について学びたい	1	2	3	4	5
5	英語の文章はできるだけ読みたくない	1	2	3	4	5
6	時間があるときには、英語の文章をできるだけ読むようにしている	1	2	3	4	5
7	長文を読むのが得意である	1	2	3	4	5
8	英語の文章を読んでいて、没頭することがある	1	2	3	4	5
9	英語の文章を読んでいて、途中でやめたいことがある	1	2	3	4	5
10	英語の資格試験の勉強には、リーディングが重要である	1	2	3	4	5
11	英文の内容を理解するために、イラストを参考にする	1	2	3	4	5
12	教科書以外の英語の本を、自ら、できるだけ読んでいる	1	2	3	4	5
13	長文を読むのが好きである	1	2	3	4	5
14	英語のリーディングの勉強は、就職活動において役に立つと思う	1	2	3	4	5
15	英語のリーディングをして、知識を増やしたい	1	2	3	4	5
16	わからない語があると、文の意味がとれなくなってしまう	1	2	3	4	5
17	時間があるときには、本（日本語）を読もうと思う	1	2	3	4	5
18	英文を見ると読む気がしない	1	2	3	4	5
19	リーディングの勉強が英語力の基礎である	1	2	3	4	5
20	英文を理解するために、後ろから前に戻って読む	1	2	3	4	5
21	長文を見ると緊張する	1	2	3	4	5
22	英語を読むのは、課題として与えられているからである	1	2	3	4	5
23	英語の新聞を読むのが好きである	1	2	3	4	5
24	英語の雑誌を読むのが好きである	1	2	3	4	5
25	英語のリーディングを勉強することは無駄である	1	2	3	4	5
26	留学にはリーディングの勉強が役立つと思う	1	2	3	4	5
27	これまでに読んだ、レベル別リーダーの冊数					
	1 [なし]	2 [1～3冊]	3 [4～10冊]	4 [11～30冊]	5 [31冊以上]	

資料6：事後アンケート  
表面

## 英語多読指導に関するアンケート

以下の質問に対し、あてはまる数字をマークしてください。  
今後の多読指導において参考にするため、成績評価には一切関係ありません。

1 そうは思わない 2 あまりそうは思わない 3 どちらとも言えない 4 ややそう思う 5 そう思う

1	長文を読むのが苦手である	1	2	3	4	5
2	英語の成績を上げるには、リーディングが大切である	1	2	3	4	5
3	英語で小説を読むのが好きである	1	2	3	4	5
4	英語のリーディングをして、他の文化について学びたい	1	2	3	4	5
5	英語の文章はできるだけ読みたくない	1	2	3	4	5
6	時間があるときには、英語の文章をできるだけ読むようにしている	1	2	3	4	5
7	長文を読むのが得意である	1	2	3	4	5
8	英語の文章を読んでいて、没頭することがある	1	2	3	4	5
9	英語の文章を読んでいて、途中でやめたくることがある	1	2	3	4	5
10	英語の資格試験の勉強には、リーディングが重要である	1	2	3	4	5
11	英文の内容を理解するために、イラストを参考にする	1	2	3	4	5
12	教科書以外の英語の本を、自ら、できるだけ読んでいる	1	2	3	4	5
13	長文を読むのが好きである	1	2	3	4	5
14	英語のリーディングの勉強は、就職活動において役に立つと思う	1	2	3	4	5
15	英語のリーディングをして、知識を増やしたい	1	2	3	4	5
16	わからない語があると、文の意味がとれなくなってしまう	1	2	3	4	5
17	時間があるときには、本（日本語）を読もうと思う	1	2	3	4	5
18	英文を見ると読む気がしない	1	2	3	4	5
19	リーディングの勉強が英語力の基礎である	1	2	3	4	5
20	英文を理解するために、後ろから前に戻って読む	1	2	3	4	5
21	長文を見ると緊張する	1	2	3	4	5
22	英語を読むのは、課題として与えられているからである	1	2	3	4	5
23	英語の新聞を読むのが好きである	1	2	3	4	5
24	英語の雑誌を読むのが好きである	1	2	3	4	5
25	英語のリーディングを勉強することは無駄である	1	2	3	4	5
26	留学にはリーディングの勉強が役立つと思う	1	2	3	4	5
27	春学期に読んだ、多読本の冊数					
	1 [9冊以下]	2 [10-19冊]	3 [20-29冊]	4 [30-39冊]	5 [40冊以上]	

裏にもあります

多読用教材（Graded Readers）を使用した読みの指導が与える影響：……

裏面

1 そうは思わない 2 あまりそうは思わない 3 どちらとも言えない 4 ややそう思う 5 そう思う

28	多読をすることによって、英語が好きになった	1	2	3	4	5
29	多読をするとき、知らない単語は辞書で調べた	1	2	3	4	5
30	多読をすることによって、リスニング力が伸びた	1	2	3	4	5
31	多読をすることによって、リーディング力が伸びた	1	2	3	4	5
32	多読をすることによって、スピーキング力が伸びた	1	2	3	4	5
33	M-Reader の試験で合格するために（または IRC のレポートを書くために）、内容を把握しながら読もうとした	1	2	3	4	5
34	多読をすることによって、英語を読む速度が速くなった	1	2	3	4	5
35	記録（M-Reader / ORT の黄色い用紙 / IRC など）をつけると達成感を感じた	1	2	3	4	5
36	多読をすることによって、英語を読むことに抵抗がなくなった	1	2	3	4	5
37	多読をすることによって、英語の単語をたくさん覚えた	1	2	3	4	5
38	多読をすることによって、ライティング力が伸びた	1	2	3	4	5
39	授業の課題だったから、多読本を読んだ	1	2	3	4	5
40	多読をすることによって、英語を読むことが楽しくなった	1	2	3	4	5
41	M-Reader（または IRC）をすることが、本を定期的に読むきっかけとなった	1	2	3	4	5
42	意味のわからない単語は、話の前後から意味を推測して読んでいる	1	2	3	4	5
43	ほかの科目の勉強が忙しくて、多読の時間をとれなかった	1	2	3	4	5
44	読んだ語数が増えると達成感を感じた	1	2	3	4	5
45	多読をすることによって、一般的な英語力が伸びた	1	2	3	4	5
46	多読をすることによって、多読本以外の英文を読む力もついた	1	2	3	4	5
47	英語を読むことが、日常的になった	1	2	3	4	5
48	M-Reader の試験を受けるために（または IRC のレポートを書くために）、同じ本を読み返すことがあった	1	2	3	4	5
49	SSR（授業内多読）では、集中して読めた	1	2	3	4	5
50	英語を読む時、日本語に訳をしないで読んでいる	1	2	3	4	5
51	多読本を読み終えると達成感があった	1	2	3	4	5
52	これからも多読を続けたい	1	2	3	4	5
53	簡単な本を読んでも、無駄である	1	2	3	4	5
54	多読をすることによって、文法の知識が増えた	1	2	3	4	5
55	M-Reader（または IRC）をすると、本を読み終えた達成感があった	1	2	3	4	5

ご協力ありがとうございました

# **The Effects of Extensive Reading Instruction with Graded Readers on EFL Learners: Questionnaire Surveys of Non-English-Major University Students**

TSURII Chie

The main purpose of the study was to explore the effects of extensive reading instruction on EFL (English as a Foreign Language) learners' perceptions and attitudes towards learning English, and on their English ability. The study employed questionnaires as pre-instruction and post-instruction surveys. Preliminary questionnaire items investigated learners' attitudes towards English reading, their past experiences, and their strategies for reading in English. Post-instruction survey items included items asking about learners' perceptions of their own English abilities, and about their experience of learning English through extensive reading using graded readers.

The learners in this study could be categorised as false beginners, with most of them feeling some difficulty in reading and understanding English passages. Their major was neither English nor foreign language but business administration. In the one-semester (15 weeks) English programme, extensive reading instruction was implemented as part of both in-class activities and homework. Learners read a graded reader given out in class and wrote a summary, then discussed the book with another student for several minutes. Alternatively, they read as many words as possible within 10-15 minutes, recording information on the book on a worksheet in the classroom. For homework, they were required to read graded readers borrowed from the University Library, then take a test on the book using 'M-Reader,' an online programme which maintains a record of students' reading.

多読用教材 (Graded Readers) を使用した読みの指導が与える影響：……

The questionnaires were administered twice, once before implementation of the extensive reading instruction, and once again at the end of the semester. The results were as follows:

(1) the number of students who tried to find time to read outside the classroom appeared to increase;

(2) approximately one out of three participants felt that their general English language ability had increased, and approximately six out of ten experienced an increase in their reading speed;

(3) most students felt a sense of completion when they finished reading a graded reader, and a sense of achievement from passing the M-Reader test and from seeing the record of the number of words they had read; and

(4) approximately four out of ten students displayed willingness to continue learning English with graded readers, while one out of five responded that they had begun to like learning English thanks to extensive reading instruction.

# 教職実践演習における 「教師学」訓練の実践

島田 勝 正

## 1. はじめに

2008年に「教育職員免許法施行規則」の一部が改正され、2010年度以降、大学に入学して教職課程を履修する学生には、「教職に関する科目」の1つとして「教職実践演習」という新設科目（2単位）が必修となった。この改正により、「総合演習」（本学での科目名称は「教職総合演習」）は「教職実践演習」に取って代わった。

この新設科目の目的は、教員として必要な知識・技能を修得したことを「確認」することにある。そして、教職課程の「総仕上げ」に位置づけられ、4年次後期に開講されている。この科目の授業内容は、(1) 使命感や責任感、教育的愛情に関する事項、(2) 社会性や対人関係能力に関する事項、(3) 幼児児童生徒理解や学級経営に関する事項、(4) 教科・保育内容等の指導力に関する事項の4つの項目から構成されている。

教員として必要な知識・技能の修得を確認するためには何らかの枠組みが必要である。そして、確認のための規準は多岐にわたることは言うまでもない。本稿では教員養成課程における「教職実践演習」の授業において、

---

キーワード：教師学訓練，教職実践演習，教員養成

上記の(2)および(3)の目的に関して、受講生が教員として必要な知識・技能を身につけているかを確認するために実施した「教師学訓練 (Teacher Effectiveness Training; T.E.T.)」プログラムについて詳述する。

## 2. 教師学訓練の背景

安倍晋三第3次内閣に文部科学大臣として入閣した馳浩氏は、高校教員だった約30年前に生徒に体罰を与えたことを謝罪している(2015年10月14日付 朝日新聞)。教員は学校教育法第11条で「体罰を加えることはできない」と禁止されているにもかかわらず、なぜそのような不法行為が繰り返されてきたのであろうか。教員が、専門職としての教員として、生徒との対人関係スキルを修得していないからというのが、その答えである。体罰に関しては、「先生は大学を出て、免状をもらってやっているわけだから専門家だ。その専門家が殴ったり、けったりして子どもを指導しているのなら僕にも教師がつとまる」という魚屋さんの指摘に尽きる(島田, 2015)。つまり、生徒に対する対人関係スキルを十分修得しておらず、専門職としての自覚のない教師が、教師という「権威」に頼って、そして、自分の感情にまかせて、生徒に暴力をふるうのである。

教師学訓練は、家庭における親と子どもの効果的な人間関係の確立を目指した「親業訓練 (Parents Effectiveness Training; P.E.T.)」から派生したプログラムである。ちなみに、関連するプログラムとして、職場における上司と部下の効果的な人間関係の確立を目指したりーダー訓練 (Leader Effectiveness Training; L.E.T.)がある。学校において教師は数多くの生徒とかかわるという点で、教師学訓練は他の2つのプログラムと異なる点もみられるが、権威に頼らずに、一人ひとりとの効果的な人間関係の確立を目指しているという点で、この3つのプログラムは共通している。

学校において、教師と生徒はその心理的な距離が小さい方が良好な関係

## 教職実践演習における「教師学」訓練の実践

にあると言える。小川（1958）は、対教師態度テストの得点から児童と担任教師の関係位置を決め、その上に第一選択によるソシオグラムを描いた。そして、児童間では人気があるのに、担任教師との人間関係が極めて悪い児童がいる学級において暴力事件が突発したと報告している。この報告は、学級経営を行う上で、教師が担任する学級の一人ひとりの生徒と信頼関係を築くことがいかに重要であることを示している。

学校にあって、教師は生徒の問題行動に何らかの対応を迫られる。が、ともすると、教師は「権威」をもって対処しようとする。これでは生徒の自立心は育たない。教師学訓練は教師という権威に頼らない方法 — 問題をもった生徒が自分自身で解決策を見出すように援助する対話技術を教えてくれる。教師学訓練の実践は、「生徒を変える」ことから「教師が変わる」という意味で斬新的であり、教師が変われば生徒も変わる（島田, 1987）。イソップ寓話のひとつ「北風と太陽」の話を思い出す。

このように、教師学訓練では、生徒が自分で課題を解決しようとする自己問題解決能力を育成することを目標としていることに注目したい。この目標設定は与えられた課題をこなすだけの「指示待ち」人間の育成とは対極的である。この自己問題解決能力の育成は、生徒との効果的な人間関係の確立という目標に対して、さらに高次のレベルの目標設定である。

### 3. 教師学訓練の概要

#### 3.1 問題所有の考え方

教師学訓練プログラムにおける最初の作業は、「問題所有（problem ownership）の考え方」に基づいて、誰が — 生徒か教師か — 問題を所有するのかを考えることである。例えば、生徒が授業中に隣の級友と私語をしている場合は、生徒が問題をもっていることになる。しかし、生徒の言動について教師がそれを受け入れられないという場合、今度は教師が問

題をもつことになる。誰が問題を所有するかは「行動の4角形 (rectangular)」で整理する。教師が問題を所有する領域と問題なし領域は「受容ライン (acceptance line)」で区分される (図1)。受容ラインの高さは個々の教師によって異なるし、同じ教師のそれであっても状況によって刻々と変化する。

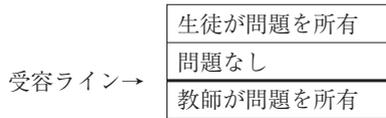


図1：行動の4角形と受容ライン (Gordon, 1974, p. 40 に基づく)

問題なしであれば、当然、対応する必要もないが、生徒が問題をもっている場合は「能動的な聞き方 (active listening)」で対応し、(生徒の言動に影響されて) 教師が問題をもった場合は「私メッセージ (I-message)」で対応することになる (図2)。この2分法は極めてシンプルでわかりやすい。2つの異なる対応の場合分けの出発点となるのがこの問題所有の考え方である。

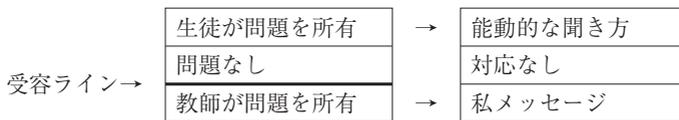


図2：問題所有の考え方と教師の対応

例えば、ある生徒が「先生の説明はさっぱりわからん」と訴えたとしよう。教科内容が理解できないわけだから、明らかにこの生徒が問題をもっている。しかし、まじめで責任感の強い教師は生徒の問題を自分の問題として捉える傾向がある。つまり、教師は自分の教科指導の力量不足により生徒がわからないのだと思い悩むことになる。また、まじめで責任感の強

## 教職実践演習における「教師学」訓練の実践

い教師は、例えば、生徒は教師の話聞くべきであると、「～すべきである」というビリーフ意識が強く、生徒のちょっとした問題行動が許せない。さらに、上司（管理職）、同僚、生徒、保護者等からの教師に課せられた「役割期待」に応えようとして、本来は自分の問題ではないのに、生徒の問題を自分の問題として所有してしまう。このように、教師が生徒の問題に巻き込まれてしまう事例は頻発する。したがって、問題をもっているのは教師なのか生徒なのかを見極めること — 誰が問題を所有しているのかを冷静に考えることが、その後の対応を考えるうえで重要なポイントとなる。

### 3.2 能動的な聞き方

生徒が問題を所有している場合、教師はカウンセラーとして生徒の問題に共感的理解を示す。生徒は自分の感情を記号化して言動で教師に示す。教師は記号化された言動の裏に隠された生徒の感情を読み取り、理解を共感的に示す。上述した例に関して言えば、「私の説明が理解できないのでイライラしているんだね」と「感情語」を用いて対応する。これが「能動的な聞き方」である。生徒は教師からのフィードバックを得て自分の感情に気づくことになる（図3）。



図3：能動的な聞き方（Gordon, 1974, p. 68 に基づく）

能動的な聞き方の具体的な実践例を次に紹介する（島田, 1986）。

（ある雨降りの放課後、サッカー部のキャプテンが職員室の顧問のところ

に来た)

S：先生，K達出て行ってしまた。あとで話し合いしようと思って皆に言っていたんだけど，正直ゆうてこんな雨の中やりたくないわ。

T：困ったね。分裂しとったんでは，クラブとはいえやんわね。

S：うん。あいつら，勝手にでて行ってしまた。クラスに残っている者もいるし。

T：2年生が分裂してこんな時にどうしたらいいかわからんようになるで困るとるんやね。

S：うん。だから，規則を作ったらええんや。そしたら，迷うこともないし。

T：そうやね。規則を作っておけば，雨が降っても，迷うことはなくなるわな。

(その後，いろいろな話が続く——職員室を出ていく時に)

S：先生，ありがとう。

このやりとりにおいて注目すべきは生徒の訴えに対してその顧問である教師が「困ったね」と「感情語」で対応している点である。さらに，教師が「規則を作ってみたら」という提案を一切行っていないにもかかわらず，生徒が「規則を作ればいいんだ」と問題の解決策を自らみつけたことに注目したい。

教師がカウンセラーの役割を果たすためには自分が問題を所有してはいけな。教師が問題を所有しては自分の気持ちを整理することで精一杯で，生徒に共感している余裕などないからである。

学校現場では実に多くの問題が起こる。上記の事例のように，生徒の問題がその場で解決される場合はむしろ少ないし，その場で解決される必要もない場合もある。重要なことは，問題が解決に至らなくても，教師と生

## 教職実践演習における「教師学」訓練の実践

徒の心理的な距離が短く保たれるということである。「先生には話を聞いてもらった」、「先生に相談してよかった」と生徒が思うような対応が望まれる。「二度と先生とは話したくない」と思われてしまう対応をしている教師は、専門職としてのスキルに乏しいと言わざるをえない。

### 3.3 私メッセージ

生徒とかかわる場合、教師は「あなたメッセージ (You-message)」で対応することが多い。主語は「わたし」ではなくて「あなた」である。これは生徒に対して攻撃的なメッセージとなり、問題は何も解決しない。教師が自分の感情を素直に伝えることを忘れているからである。

教師学訓練では生徒のせいで教師が問題をもった場合、「私メッセージ」で対応することを教えている。私メッセージでは主語は常に「わたし」である。自分の感情を生徒に伝えて相手の行動変容を期待する。具体的には、図4に示すように、(1) 受け入れられない生徒の言動、(2) その言動が教師に与える影響、そして、(3) その影響により教師の内部にひきおこされた感情を、順次、生徒に伝える。

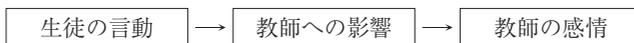


図4：私メッセージの作り方

例えば、ある生徒が授業中に隣の生徒とひそひそ話を始めたとする。「(あなたは) ひそひそ話をやめなさい」と「あなた」メッセージを発するのではなく、「君が隣の子とひそひそ話をすると (生徒の言動)、わたしは気になって授業に集中できず (教師への影響)、イライラするんだ (教師の感情)」と、素直に自分の気持ちを伝えればよい。私メッセージは生徒に対する否定的評価を最小限にとどめ、生徒と教師の関係をそこなわない。

## 4. 教師学訓練の実践

「教職実践演習」の事前準備として、「教育実習」中に実際に起こった生徒への対応（言葉のやりとり）を対話文の形式で5セット記述することをレポートとして課した。その教育実習中に記録しておいた生徒とのやりとりをデータとして、(1)「非受容を表すことば」の分類、(2)「行動の4角形」への分類 (3)「能動的な聞き方」の練習、(4)「私メッセージ」の練習を教職実践演習の授業時間に行った。以下、順にその手順と結果を考察する。

Gordon (1974) は、非受容を表すことばとして「コミュニケーションの障害 (communication roadblocks)」となる12の型を挙げている (pp. 80-87)。この12の型はすべてあなたメッセージである。この分類に照らして、教育実習中に実際に起こった教育実習生と生徒とのやりとりがこの中のいずれに該当するかを分析した。表1から分かるように、生徒とのやりとりの多

表1：コミュニケーションの障害となる12の型

番号	分類	頻度
(1)	命令・指示	3
(2)	注意・脅迫	0
(3)	訓戒・説教	0
(4)	助言や解決策の提案	5
(5)	講釈・理詰めの説得	4
(6)	判断・批判・不同意・非難	0
(7)	悪口・きめつけ・嘲笑	0
(8)	解釈・分析・診断	3
(9)	ほめる・同意する	5
(10)	激励・同情・慰め・支持	3
(11)	質問・尋問・詰問	5
(12)	注意をそらす・皮肉を言う・笑ってごまかす	4

## 教職実践演習における「教師学」訓練の実践

くは非受容を表すことばとして分類されている。その中でも、(4) 助言や解決策の提案、(9) ほめる・同意する、(11) 質問・尋問・詰問の頻度が高い。

### 4.2 行動の4角形への分類作業

次に、教育実習中に実際に起こった生徒への対応を、「行動の4角形」のワークシートを使って、生徒が問題を所有している、問題なし、教師が問題を所有しているの3つに分類した。その後、ワークシートをペアで交換して、相互評価した。受講生により同じ事例でも異なる範疇に分類していることに気づかせることがねらいである。つまり、受容ラインの高さ(低さ)は教師により変異することを経験的に気づかせようとした。

### 4.3 能動的な聞き方の練習

3人1組のグループを作り、その3人にそれぞれ教師役、生徒役、コメント役の役割を割り当てた。なお、その役割は順次、ローテーションにより交替した。教師役と生徒役のやりとりはICレコーダーで録音し、一連のやりとりが終了した時点でコメント役が評価をした。ICレコーダーを再生して具体的なやりとりの事実確認とより良い対応をグループで検討した。

次に成功例を示す。

S：先生、学校やめたいわ～。

T：あ～、そうだよね～。いろいろ大変だもんね～。

S：いろいろ友達関係とか、人間関係とかめんどくさいし。

T：そうだよね～。そういうの大変な時期あるよね。

S：先生、またゆっくり話聞いてもらえる？

T：もちろん、いつでもおいで。

この事例では、問題は解決していない。そして、学校をやめたいというような問題がすぐに解決するはずもない。しかし、「先生、またゆっくり話聞いてもらえる？」という生徒の発言は、生徒と教師との心理的距離が小さくなっていることを示している。

もう1つの事例を見てみよう。

S：先生、給食の味が美味しくなくて食べれないんですけど。

T：大変やなあ、けど、食べへんかったら元気出ーへんよ。

S：でも、それでも食べれないんですよ。

T：大変やなあ、けど、食べへんかったら元気出ーへんよ。元気なかったらクラブできひんし、倒れるで。

S：それは困りますよ。じゃ、できるだけ頑張って食べます。

この事例では、「じゃ、できるだけ頑張って食べます」と、一見問題は解決したように見える。しかし、何らかの理由で給食が食べられないという問題をもった生徒と、食べなかったら倒れると脅した教師の心理的な距離は今後開いていくだろうと予想される。

#### 4.4 私メッセージの練習

手順については前項の能動的な聞き方と同様であるので省略し、次に成功例を示す。

S：先生、〇〇先生ってもう帰ったん？

T：せやな～、午後から出張やからもう帰ったで。

## 教職実践演習における「教師学」訓練の実践

S：ほんまに？やったあ！〇〇先生おらんかったら，掃除楽勝やん！

T：そんなことないやろ～。自分らが掃除してくれんかったら，教室もきれいにならんし，先生は嫌やわ～。

S：え～，じゃあがんばるわ。

T：うん，先生も手伝うし，一緒にがんばろう。

このやりとりでは掃除をサボりたいという生徒が問題をもっている。しかし，生徒が掃除をサボるのを受け入れられない教師は問題をもってしまった。しかし，その教師はその生徒を教師の権威に頼って叱ることなく，私メッセージで対応している。「自分らが掃除してくれんかったら」と生徒の行動を挙げ，「教室もきれいにならんし」とその影響を説明し，「先生は嫌やわ～」と教師自身の感情を伝えている。教師の気持ちが伝わったのか，生徒は「じゃあがんばるわ」と掃除することに同意し，問題は解決している。

## 5. まとめ

本稿は，「教職実践演習」の授業の一環として，教員として必要な知識・技能の修得を「確認」するために実施した「教師学訓練」プログラムの実践報告である。このプログラムは，教師という権威に頼らずに，生徒と効果的な人間関係を築くためのスキルを修得することを目標としている。このプログラムでは，まず，誰が問題を所有するのかを特定し，生徒が問題をもった場合は能動的な聞き方で対応し，教師が問題をもった場合は私メッセージで対応すると教えている。このような教師学訓練の枠組みの中で，教育実習中に経験した生徒とのやりとりを分析・考察している。

参考文献

- Gordon, T. (1974). *T.E.T. Teacher Effectiveness Training*. New York: David McKay Company. [奥沢良雄・市川千秋・近藤千恵 (訳) (1985) 『教師学 効果的な教師＝生徒関係の確立』東京：小学館]
- 小川一夫 (1958). 「児童生徒の問題行動に対する教師の態度に関する研究」『教育心理学研究』第5号, 80-86.
- 島田勝正 (1986). 「能動的な聞き方実践例」三重県員弁郡東員町立東員第二中学校 校内研修レポート
- 島田勝正 (1987). 「教師と生徒の効果的な関係を求めて一本年度の研修を振り返って一」三重県員弁郡東員町立東員第二中学校 PTA 新聞『わかば』第15号
- 島田勝正 (2015). 「編集後記」桃山学院大学教職課程委員会 (編) 『教職課程年報』第10号

## **Teacher Effectiveness Training as a Teacher Education Program**

SHIMADA Katsumasa

Teacher Effectiveness Training (T.E.T.) is a teacher education program which aims at the establishment of effective relations between teachers and students. The program begins by determining who has the problem, student or teacher. If the student, the teacher applies active listening to discover the feelings behind the problem and feeds those feelings back to the student. If the teacher, she/he should deliver an I-message to the student to indicate how the problem makes her/him feel.

Student teachers were required to describe their interactions with students during teaching practice, and to analyze the interactions based on the T.E.T. framework. Finally, they were asked to discuss how they should have communicated with the students through reflecting on their role-play practice.

# 同一性の脱神話化をめぐって

——ホーソーンの「牧師の黒いヴェール」——

佐々木 英哲

- I. 三つ巴の謎：作家と牧師そしてヴェール
- II. (反-) 実存主義者としての牧師
- III. 代用的言語としてのヴェール
- IV. 言語ゲームの転換
- V. 脱構築される人格同一性の神話

## I. 三つ巴の謎：作家と牧師そしてヴェール

ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne, 1804-64) は、「牧師の黒いヴェール」(“The Minister’s Black Vail: A Parable,” 1836) の刊行後10年にあたる1846年に、“Mosses from an Old Manse” に於けるフーパー (Hooper) 牧師を彷彿させるような自己イメージを前面に打ち出した<sup>1)</sup>。つまりホーソーンは「私が真に個人としての特性を持った人間であるとするならば、私はヴェールで顔を隠す」(X, 32) と吐露したのである。この述懐と明らかに矛盾するのが、『緋文字』(The Scarlet Letter, 1850) の結幕に於ける語り手の何やら教訓めいた言辞である——「最悪のものが推察できるように、なんらかの印を世間に対しては隠すことなく明らかにすべし」(I, 260)。しかしながら『緋文字』のこの箇所は誤解を招くとして、ロバー

---

キーワード：人格同一性、言語ゲーム、(反) 実存主義、アレゴリー、目に見える聖人

ト・マーティン (Robert Martin) などは一刀両断に切り捨てている (232)。マーティンに言わせると、この述懐は眉唾物であり、むしろ “Mosses from an Old Manse” のほうが作者の本音に近いと考えられる、というわけである。

ちなみに「牧師の黒いヴェール」とほぼ同時期に記述されたと思われる創作ノート *American Notebooks* には「おそらくヴェールは不要。マスクはまず必要ない」(VIII, 23) とあり、ヴェールとマスクを峻別している。『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance*, 1852) では明らかだが、ヴェールは搾取される負け組の弱者プリシラ (Priscilla) に、一方マスクは自らの利益のために他者を欺き他者を搾取する勝ち組のゼノビア (Zenobia) やウエスタヴェルト教授 (Professor Westervelt) と結びつく。ヴェールは女性的、マスクは男性的とも言える。論者としてはクラーク・デイヴィス (Clark Davis) と意見を同じくし、「フーパーのヴェールは他者との交渉を完全にシャットアウトするマスクと化して」おり (14)、それゆえに物語はヴェールの必要性を認めつつもフーパーには批判的な論調をとっているものと捉えておきたい。

ここで “Mosses from an Old Manse” に於ける語り手のスタンスは、職業作家としての読者に対するホーソーンのスタンスを含意してはいまいか、という疑問が沸き起こる。フーパー牧師と会衆との関係が、ホーソンと読者との距離感をシンボリカルに示しているのではなからうか、という疑問である。“Mosses from an Old Manse” でヴェールに韜晦すると独りかこつ語り手とフーパー牧師には、相通じるところがあるのではなからうか。フーパー牧師は作者ホーソンにとって——丹羽隆昭の評言を借りると——「恐怖の自画像」に相当するのではなからうか。だとすれば、フーパーに向けられることになるネガティブな評価を、自分に向けられた批判として作者は予知していたのではなからうか。

## 同一性の脱神話化をめぐる

まずは議論を進めて行くうえで作業仮説を設定したい。牧師フーパーは会衆に誤解され、作者ホーソーンは読者に誤読されるという点で、互いに類比的である事実に注目し、「牧師フーパー」対「会衆」の関係が「作者ホーソーン」対「読者（批評家）」の関係、つまり他者との関係性で牧師と作者はアナログカルにある、という作業仮説をここで設定する。これは牧師と作者がただちに直結することを意味しない。しかし牧師と作者が人々に誤解誤読されるうえで同じようなメカニズム（心的政治的機制）が作動しており、そのようなメカニズムを引き起こすのは、牧師と作者がおそらく同じような立ち位置にあるからだと推察することが可能である。そこで本稿では、牧師にとっての他者（会衆）と作者にとっての他者（読者）の類比性に着目しつつ、牧師、作者、ヴェールという三つ巴の関係を解きほぐしていくことを目的としたい。

## II. (反一) 実存主義者としての牧師

先行研究を振り返ると、この作品の（アンチ・）ヒーローたるフーパー牧師の評価は肯定的に評価する側と否定的に評価する側におよそ二分されることが判明する。前者は実存主義的な英雄としてフーパーを捉えているレイモンド・ベノイト（Raymond Benoit）、G. A. サンタンジロウ（G. A. Santangelo）などによる批評で、およそ1970年前後に相次いで発表された批評が中心となる。たとえばベノイトのような実存主義的視点から作品を批評する者からすると、生の充溢を得ようと思えば、逆説的に誰しもが避けて通ることができない死と向き合い、死から逆算して生を生きるしかなく、牧師は死と寄り添う生を黒のヴェールでシンボライズしようとしたのだ、ということになる。作品では Veil の代わりに Crape なる語も使われているが、Crape は喪服、喪章にも使われるため、それは「死」を暗示する。またフロイト主義の観点からフーパー牧師を眺めると、エロ

スの破壊的衝動を生産的な方向に転換するためには、逆説的に生（エロス）の欲動とは対蹠的な死の欲動（タナトス）と真正面から向き合うしかなく、性の欲動に起因する罪意識と向き合う必要性を人々に訴えるために、人々の眼前にヴェールを被った顔を差し向けたのだ、としてフーパー牧師は評価とされることになる。

さて1970年前後と言えば、1968年に一応の終焉を見た公民権運動に続くベトナム反戦運動、1968年のパリ五月革命、シカゴ民主党大会、コロンビア大学闘争、1970年の映画『いちご白書』、ケント州立大学銃撃事件、（日本では1969年の東大安田講堂事件）といった若い世代の反体制社会運動が想起されるが、そこにビートからヒッピーに至るカウンターカルチャー・ムーブメントが合流し、かまびすしい様相を呈していた。このような学生運動の精神的支柱となった公民権運動やフランツ・ファノン（Frantz Fanon, 1925-61）をはじめとするポストコロニアリストの先駆者にも影響を及ぼした実存主義が1950年代60年代に思想界を席卷し、1970年代に入る直前まで余韻を引きずっていたことが、肯定的なフーパー評価につながっているものと推察される。実際60年代70年代の実存主義の影響を受けた批評家としてはスーザン・ソントク（Susan Sontag）、ポール・ブロトコープ（Paul Brotkorb）、ジェフリー・ハートマン（Geoffrey Hartman）、キリスト教実存主義者として出発したウィリアム・スパノス（William V. Spanos）のような批評家を挙げるのが可能である。しかしながらすでに1962年、実存主義者サルトル（Jean-Paul Sartre, 1905-80）が構造主義文化人類学者レヴィ・ストロース（Claude Lévi-Strauss, 1908-2009）との論争で、実質的な敗北を喫して以来、実存主義は劣勢に立たされ、70年代前半から特に脱構築が急速に普及することとなった。こうして認識の枠組みが変化した以上、フーパー牧師への捉え方も変わってきた。たとえば、N. S. ブーン（N. S. Boone）、サミュエル・コール（Samuel Coal）、マイケ

### 同一性の脱神話化をめぐる

ル・コラカーチオ (Michael J. Colacurcio), リチャード・ミリントン (Richard H. Millington), リー・ニューマン (Lea Bertani Vozar Newman), E. スタイビッツ (E. Earle Stibitz), ジューディス・ソーンダーズ (Judith P. Saunders) といった批評家にはフーパーの受けが良くない。

ここで急いで申し添えておくと、フーパーに対する風向きが悪くなったからと言って、作品の芸術的価値がなんら損なわれるわけではなく、実際はむしろその逆で、解釈の幅が広がり作品の奥行きが増したと言わねばなるまい。既に述べたことを繰り返すが、フーパーを肯定的に評価する側からすれば、フーパーは「充溢した生」を送るためにメメント・モリではないが、敢えて「死」を暗示するヴェールを被ったと解釈されることになる。一方、否定的に評価する側からすれば、まさにこの肯定的な解釈そのものに疑義が投げかけられることとなる。つまりフーパー牧師がこのような積極的な意図をもっていても、彼の意図は彼を取り巻く人々に伝わっていたのか、という疑問が投げられるのである。論者に言わせれば、主体的な生の意味を問い続けるなかでフーパーが嵌った落とし穴は、他者に対する顧慮の意識が欠落していることであり、この事実はフーパーを肯定的に評価する実存主義的、フロイト心理学的批評家の目からもすり抜けているように思われてならない。以下の議論では、他者たる会衆との対話が成立しないフーパー牧師の姿勢を検証し、牧師、作者、ヴェールの三つ巴の関係に迫る手だてとしていきたい。

### Ⅲ. 代用的言語としてのヴェール

会衆との交渉を避け、唯我独尊の世界に閉じ籠もるフーパー牧師は、強迫神経症患者よろしく自らの行為を改めることができず、自動人形オートマトンと化し、主体性を失っている。そもそも実存主義者のいう実存 Exist とは stand outside という語源が示すように己の壁を打ち破ることが

前提とされるが、フーパーには己の壁を乗り越え、他者との連携を模索するいわゆるサルトル的なアンガージュマン（エンゲイジメント）的姿勢は見られない。実存主義的観点からフーパーをポジティブに捉えるようにすると、皮肉にも逆に非実存主義的な側面が浮き彫りになってしまう始末である。

フーパーは実存主義者どころかピューリタニズムの「あらゆる者は例外なく罪人である」という「全的墮落（Total Depravity）」というドグマに基づき、罪人なるアイデンティティを会衆に押し付けようとしている。このようなフーパーの姿勢はフェミニズムやポストコロニアリズムに立脚する批評家から、「劣等者」が自らを表現する権利を剥奪している、として告発されるだろうが、それも無理からぬことである。なぜなら眼差しを向ける者フーパーにとっては他者の個別性、独自性、個性といったものも、コントロール可能なモノとしての対象 Objects に過ぎないからである。フーパーの場合、他者は「私（I）」「私の考え（my thoughts）」「私の持ち物（my possessions）」「私の知が産出したもの（the products of my knowledge）」に滅殺されてしまっている。強い帝国主義的志向性を示すフーパー牧師は、「実存は本質に先立つ」として本質主義を否定したサルトル的実存主義、ファノンの反植民地主義とは根本的に矛盾するスタンスの持ち主なのである。

そうは言ってもフーパー牧師はキリストよろしく会衆の罪をすべて一人で背負ってみせるという言わば「罪人の代理（キリスト者の鑑）」であると見間違えるような姿勢を見せている。実際のところはどうなのか。ここでポストモダン社会に於いて他者に対する主体としての応答責任を説くレヴィナスが唱える倫理的要請——すなわち、人が顔であるかぎりには、人は自らを露出し、皮膚をさらけ出し、他者の足元にひれ伏せねばならない、とする要請、主体が他者に近づくことができるのは、主体が他者

## 同一性の脱神話化をめぐる

に対して隣人であるかぎりに於いてである、とするレヴィナスの倫理的要請を思い起こしてみると、当然のことながら文字通りヴェールで顔を覆うフーパーの姿勢には疑義をはさみたくなる。しかしながらレヴィナスを無批判に有難がるのも考えものだ。ニック・ブーン (Nick Boone) によれば、主体へのレヴィナスの要請は、他者も責任ある主体になりうる存在である事実を軽視しており、「われ思う、故にわれあり (I think, therefore I am)」というデカルト的モデルに留まるものであるとされる。その意味でまさにレヴィナスあるいはフーパーはデカルト的な十全なる主体としての他者への優越性という陥穽に陥っている、という批判の対象となる。

そもそも黒のヴェールで顔を隠したフーパーの意図はどういうものであったのだろうか。歴史的には、植民地の経済活動が軌道に乗っていくことに反比例して衰弱の一途をたどり存亡の瀬戸際に追い込まれたピューリタン信仰／ピューリタンの権威を盛り返そうと、ジョナサン・エドワーズ (Jonathan Edwards, 1703-58) がいわゆる大覚醒運動を主導したのが、この時代である。会衆を前に信仰告白を行うことが要請され、実際、回心体験記 (Conversion Narrative) なる文学ジャンルも隆盛を見ることとなる。人は自分が真正なるクリスチャンであること、さらに言えば「目に見える聖人 (Visible Saints)」であることを証明することに血道をあげるようになり、聖職者であるならば「目に見える聖人」でなければならないとする心理的プレッシャーは相当なものであったと推察される。フーパーはクリスチャン／聖人であることを文字通り体現するために、黒いヴェールを被ったことになりはしないだろうか<sup>2)</sup>。

さて「目に見える罪人 (Visible Sinner)」であることを体現するのがヘスター (Hester) の緋色の文字だとすれば、「罪から回心した者」であり「目に見える聖人 (Visible Saint)」であることを証明するのが牧師の黒のヴェールだとなるだろう。この論法を推し進めると、たとえば Black の B

という文字こそ表記されてはいないが、実質的にヴェールは The Black Letter B であり、The Scarlet Letter A に対応する、という推論が成り立つ。急いで申し添えると、ロラン・バルト (Roland Barthes) に倣いアートモードもあらゆるものがテキストだとするならば、フーパー牧師のヴェールもテキストであり、言語記号だと理解できる。一方、ギルバート・フォウクト (Gilbert P. Voigt) は、頑なな罪人達に回心を迫るための手段として、一見、常軌を逸したとも思えるシンボリックな行動をとったというヘブライの預言者達エレミア、エゼキエル、ホセアを挙げ、ヴェールを被るフーパーの振舞もこういったヘブライの預言者の振舞に相通じるところがあると指摘する。ヘブライの預言者の尋常ならぬ振舞であれ、「目に見える聖人」であることをヴェールで顔を隠すことで逆説的に示す行為であれ、アンソニー・シセルトン (Anthony C. Thiselton) の定義に従えば<sup>3)</sup>、そういった行為はその行為が成される環境の内部にあっては有効な意義を持つアレゴリーの諸形態であり、アレゴリーを通して「見る／読む者」が本義を汲み取ることができることを前提としている、と理解される。

さてここで耳を傾けたいのはフェミニストの立場からアレゴリーの父権主義的／全体主義的な特質を指摘したアン・ウィリアムズ (Anne Williams) である。ウィリアムズは「アレゴリーはもっとも父権的な詩的／文学的形式として、父なる法に於ける意味の秩序／階層／ヒエラルキーを肯定し、なおかつ、事実上、そういった意味秩序を構築するもの」だと指摘する (81)。ここでピューリタン神権共同体がヘスターの胸に The Scarlet Letter A を強要した事実や、大覚醒運動によりピューリタン父権制を再興しようとしてフーパー牧師が黒いヴェールを顔にまとった事実、ヒトラーがユダヤ人達に黄色のダビデ星型ワッペンを胸につけるよう強制した事実を鑑みれば、ウィリアムズの指摘は傾聴に値する。さらに続けてウィリアムズは、アレゴリー作者が描き出す「語る主体 (speaking sub-

## 同一性の脱神話化をめぐって

ject)」とは「アプリオリ（先験的、既に決定済み）の概念に基づき、自らの世界を方向づけ操作する全体主義的独裁者」であると述べる。ヘスターの緋文字Aを「姦淫（Adultery）」として一義的に読ませようとするピューリタン共同体の長老達然り。「神の言葉（The Word of God）」を伝えるべく、黒いヴェールを黒文字（the Black Letter）Bとして一義的に理解させ、人々に回心を迫るとするフーパー牧師然り。

翻って「作者ホーソン」対「読者（批評家）」の関係に目を転じると、キャノニカルな職業作者としてナショナル・アイコンの地位を得ようと躍起になっていたと思われる作家修行時代のホーソンも、ひょっとしたらアレゴリーを通して「父なる神の言葉（the Word of Father God）」あるいは「創造主たる神の言葉（the Word of Creator God）」ならぬ「作者の言葉（The word of author）」を読者にわからせようと勇み足になっていたのかもしれない、と推察を巡らせることも可能だ。あるいはこうも考えられはしまいか。作者ホーソンはフーパー像の中に自虐的な形で自画像を描いているのかもしれない、と。

ここで「牧師フーパー」対「会衆」の関係に立ち返る。そもそもフーパー牧師が会衆に理解されず会衆と疎遠になっていくその要因は、牧師と会衆、その双方が「アレゴリー」の限界、「アレゴリー」の自己脱構築的な特質に理解を示すことがなかったからだと思われる。allegory はギリシャ語 *allegoria* に基づく。このギリシャ語は *allos* = other（他の）と *agoreuein* = speak（agoreuein 話す）から合成されたものであり、直接的ではなく比喩的な表現、言ってみればヴェールをかけられた表現（veiled language）となっている。allegory とは、指示対象以外の何かを同時に示すということであり、ポール・ド・マン（Paul de Man）やジャック・デリダ（Jacques Derrida）の言う脱構築（Deconstruction）の可能性、つまり同一性にとられない差延的運動の可能性を作品空間に導き入れることになる。

フーパー牧師はヴェールをまとった動機（意図）を人々に明らかにしなかったため、人々は牧師に対して疑心暗鬼になる。語り手としても読者に対しては「あまりに恐ろしくすべてを隠すことができない大きな罪を犯したために、良心が牧師を苦しめていた」（38）といった、おざなり程度の説明しかしていない。そのためリチャード・フォークル（Richard H. Fogle）が簡潔にまとめあげたように、「下種な人間はヴェールの意味を卑しく捉え、善意の人々は遺憾に捉えた」（36）となるわけだ。黒のヴェール、こう言ってよければ「緋文字」ならぬ「黒文字」はアレゴリカルな記号として、あるいは代用的言語として機能不全となっている。一義的つまり神学的に解釈されるべき黒のヴェール/黒文字は空文化されるどころか、様々に、しかもネガティブに解釈されてしまっている。脱構築主義者のチームで言い直すと、我々としてはここに代補（Supplement）の論理が働くのを確認できよう。しかしこれは何を意味するのか。

先のウィリアムズの指摘を想起すれば、アレゴリカルな作品に於いては作中人物ないしは作者の父権主義的／全体主義的な権威が前提とされる。ならばフーパー牧師の場合、黒いヴェールという代用的言語（記号）を自身のパワーでコントロールができなくなり、牧師は父権主義的／全体主義的な権威を喪失していると理解できる。この現象はアレゴリカルなこの作品が自己脱構築的な様相を帯びていくことを意味する。

ここであらためてアレゴリーとパラブルの定義を確認しておきたい。というのも、作品「牧師の黒いヴェール」に「たとえ話（parable）」なる副題が添えられている事実は軽視できないからだ。欧米文化の根幹をなす聖書では、パラブル（たとえばからし種、放蕩息子の話）とアレゴリー（キリストの肉と血を象徴するパンとワイン）とが多用されている。また作者ホーソンがエドモンド・スペンサー（Edmund Spenser, 1552-99）の『妖精の女王』（*The Faerie Queen*）やジョン・バニヤン（John Bunyan,

## 同一性の脱神話化をめぐって

1628-68) の『天路歷程』(*The Pilgrim's Progress*, 1678) などをはじめとするアレゴリー諸作品に親しんでいたことは、周知の事実となっている。ここでパラブルとアレゴリーの違いは何か、双方を峻別できるのかという疑問が当然のことながら湧き上がる。Parable なる語の定義は『オクスフォード辞典』によれば、アレゴリー、類推、比較などと定義されており、アレゴリーとパラブルとは、実質的に重なり合う部分が多く峻別は難しいように思われる。ポストモダン社会に於ける神学の可能性を探る神学者で、先に言及したシセルトンによれば(38)、アレゴリーとパラブルは次のように定義される。「アレゴリーとは(既に存在している)共通理解を前提としているが、パラブルは(これから)共通理解を醸成するものだ。」「アレゴリーは(状況を)知る内部の人間に語りかけるのに対し、パラブルは…外部の人間を取り込もうとする。」すなわちアレゴリーとは「すでに内容を知っている／原義が理解できる」「内部」の人間に語りかけるのに対し、パラブルは「外部」の人間から信頼を得るために「外部」の人間に働きかけ、あらたに共有意識を構築するものだ、という定義である。もちろんパラブルといえどもアレゴリカルな要素を含んでいないわけではないし、さながら隠語めいたアレゴリーが部外者には理解しにくいことは認めるにしても、パラブルならば人が耳にしたその場で本義を理解できるか問われれば、そうでもない以上、シセルトンによる定義を額面通りに受け入れるにあたっては一定の留保が必要である。しかし作品理解の上で参考にはなる。新約聖書では、非キリスト教徒としての聴き手が神学的アレゴリーを理解できないことを想定し、キリストが説教にパラブルを多用している事実を思い起こしてみよう。そしていみじくも作者がパラブルなるサブタイトルを付している事実を思い起こしてみよう。さすれば、本作品「牧師の黒いヴェール」はアレゴリーが解体するプロセスを提示している、と解釈できないだろうか。

アレゴリーが解体しパラブルに移行するというプロセス、あるいは、アレゴリーの原義が伝わらなくなるというプロセスが暗示するのは、政治的レベルでは旧体制（権威的体制）から新体制（非権威的体制）への移行であり、文化的レベルでは知的エリート読者層から有象無象の俗人読者層への移行である。さらにはこの両極で揺れ動く作者ホーソンの両義的なスタンスである。この両極を揺れ動くという点がホーソンとフーパーとの決定的な違いである。フーパーはヴェールによって「神の言葉（the Word of God）」を再現（represent）せねばならないし、それは可能だと固執しているから、本人としては自分の姿勢を両義的とみなすことはなかったはずだ。その一方で人々は勝手にフーパーの動機を解釈するから、脱構築にはいっそう拍車がかかり、牧師と人々の溝はさらに深まり、牧師は自己の世界に閉じこもるといふ負のスパイラルに陥ってしまう。このようなフーパーの有りようを作者ホーソンは第三者的な審級として客観的に描写しつつも、自らと似た者、フーパーを見て恐れ、たじろぐのである。

#### IV. 言語ゲームの転換

アレゴリーであれパラブルであれ、「神の言葉」を伝えようとする聖書の姿勢は変わらない。少なくともキリストが用いたパラブルは、教義を伝えることを狙いとする限り、脱構築の差延（Différance）を始動させるとは考えにくい。一方、ホーソン作品にあっても、差延的運動がとめどもなく繰り広げられるわけではないように思われる。神学的意味ではなく、歴史的な意味で、である。ホーソンは歴史的文化的コードがもはや無用の長物であると言っているわけではないし、デリダのような脱構築的概念を無条件に受け入れているわけでもないのだ。

そもそもテキストとは比喩的な記号システムであり、テキストを構築する比喩／言語記号と指示対象は恣意的な関係にある。言語記号と指示対象

## 同一性の脱神話化をめぐって

を媒介するものがコードと呼ばれる規約のシステムである。カルチュラル・スタディズのグレーム・ターナー（Graeme Turner）の理解に従うと、テキストの産出者と解釈者とを結ぶ「媒体／コード／メタ知識／共同性」は時代状況、社会的・文化的状況に応じて刻々と変わるものとされる。それをミシェル・フーコー（Michel Foucault）の用語で表現すれば「エピステーメ（*épistémè*）」となるだろうし、ヴィドゲンシュタイン（Ludwig Wittgenstein）の用語では「言語ゲーム」となるだろう。いうならば「コード」とは人間が相互に取結ぶ「共同性」の規則である。したがって「言語ゲーム」の規則が変われば、命題が真なのか偽なのかも変わってくる。時代状況、政治状況に反応する世代意識を取って感じさせない村上春樹的、荒川洋治的な要素もホーソンにはあるにしても、それでもやはり鋭敏な歴史的感性をもったホーソンは同時代の言語ゲームを意識していたことは想像に難くなく、そのようなホーソンを相手にする我々としては作品をヒストリサイズする、コンテクスチュアライズする作業が必要となってくるわけだ。

この作品が設定時代として18世紀前半を想定していることは、在職期間1730-41年のヴェルチャー総督（Governor Belcher）への言及があること、なおかつフーパー牧師のモデルであることを匂わせる人物ジョーゼフ・ムーディ（Joseph Moody, 1700-53）が作品の後注で言及されていることから明らかだ。実はこの18世紀前半という時期に、「エピステーメ」の転換が起こり、「言語ゲーム」が一変するのである。まさにこの時期、反動的な大覚醒運動を起こすジョナサン・エドワーズの一派と、当時のドイツ観念論とペラギウス主義を吸収した自由意思を重んじるアルミニウス派とがせめぎ合うのである。

ここで、歴史的観点からすると、「エピステーメ」の転換が、作品舞台である18世紀前半に起き、また作者が活躍した19世紀前半から中葉にか

けても起きたことに注目したい。特に後者に於ける「エピステーメー」の転換には、本稿の第1章で触れた実存主義的批評にもかかわってくる。もちろんホーソーンの同時代人で実存主義の先駆者であるキルケゴール (Søren Aabye Kierkegaard, 1813-55) の著書をホーソーンが読んだとは思えないし、ケッセルリングの (Marion Louis Kesselring) の *Hawthorne's Reading, 1820-1850* にもその記載は見当たらないが、注目すべきはいみじくも両者が置かれた環境が似通っていた事実である。つまり19世紀前半から中葉にかけて、勢いを増したアルミニウス神学の影響を受け、アメリカではカルヴァン神学が、デンマークではルター神学が訴求力の衰えを見せ始めていた事実である。この事実を鑑みれば、フーパー牧師は実存主義的な一面を見せていると評価する70年代の批評家達の指摘を等閑視するわけにもいかないだろう。

再び作品に戻るが認識革命前夜1740年代、危機的な状況が繰り広げられることになる。作品では、ともすれば見過ごされがちな些細な事件に軽く触れることで、この危機的状況を劇的に浮き彫りにする。それは老ソーンダース判事 (Old Squire Saunders) なる人物が説教を終えたフーパー牧師を食事に招待するのを忘れた、という事件である。コルカーチオによれば老ソーンダース判事は、ジョナサン・エドワーズとは対蹠的な世俗主義の代表として知られるベンジャミン・フランクリン (Benjamin Franklin, 1705-90) が『貧しいリチャードの暦』 (*Poor Richard's Almanac*, 1757) を書くときにペンネームとして用いたリチャード・ソーンダースを反映するという。一方、旧体制とりわけ父権体制が弱体化の様相を見せ始めると、最後の足掻きとも言おうか、父権体制を支えるイデオロギーは逆に強まる傾向を見せる——火が消える直前に一瞬激しく燃える——と言ったのは、かの有名なホモソシアル理論を打ち立て、残念ながら数年前に亡くなったクィア・セオリストのイーヴ・コソフスキー・セジウィック (Eve

## 同一性の脱神話化をめぐる

Kosofsky Sedgwick) であった (82)。この最後の燃え上がりにピューリタニズムの再興を賭けたのがエドワーズであり、フーパーなのだと思われる。フーパーは総督ヴェルチャーのために選挙祝賀説教を行うが、このヴェルチャーなる人物はエドワーズと共に大覚醒運動を推し進めたジョージ・ホイットフィールド (George Whitefield, 1714-70) に影響を受けたとされる守旧派の代表であることを想起すれば、まさに新旧両勢力がせめぎ合う緊迫した空気が作品空間に漲っている、と言えるだろう (古平)。

ここでホーソーンが未だ独身の作家修行時代にあつてこの作品を著した1836年から、本格的な職業作家となるべく『緋文字』の準備をしていた時期にスポットを移してみる。周知の如く『緋文字』の前夜、あたかも示し合わせたかのように、災難が縦続けに作家を襲った。このときの災難とは、母親の死という個人的な不幸に加えて、チャールズ・アパム (Charles Wentworth Upham, 1802-75) の画策により、本来、引込み思案であつた作家が世間の晒し者となり (こう言ってよければヴェールを引き剥がされ)、実際セイレム税関職を追われてしまったこと、『緋文字』の「税関」に於いて、自分とともに働いていた老人達を愚弄するかのような描写をしたため、地元の間人達から顰蹙を買ったこと、といった災難である。

さらに言うならば、民主党から大統領となるフランクリン・ピアース (Franklin Pierce, 1804-69) とは、学生時代からの生涯にわたる友人であるが、このピアースなる大統領はカンザス・ネブラスカ法案やオステンド・マニフェストへの支持をはじめとし、南部寄りの姿勢をあからさまに打ち出したため、北部の奴隷解放論者から不評を買ひ、今日でも不人気大統領ワースト5に入る大統領である。このピアースとの親交が唯一の原因ではないが、奴隷制をめぐるホーソーン自身のどうにも煮え切らない姿勢、ホーソーンの父権主義的スタンスが、作者の死後、とくに1980年代90年代以降、問題視されることとなり、ポストコロニアリズム (ジョナサン・アラック

(Jonathan Arac)), フェミニズム (ルイーザ・ドサルポー (Louise DeSalvo)), 歴史修正主義 (サクヴァン・バーコヴィッチ (Sacvan Bercovitch) およびジョン・カルロス・ロー (John Carlos Row)) などから批判を浴びるようになった。そのためラリー・レイノルズ (Larry J. Reynolds) が指摘するようなホーソーンのパシフィズムを重んじる姿勢は霞んでしまうことになる。

ここで注目したいのは、作品「牧師の黒いヴェール」が舞台として設定する1730~40年代と同様に、南北戦争前夜の1850年代は大きなパラダイム・シフトの時期、言語ゲームが変わる時期に当たっていることである。しかも1850年代のパラダイム・シフトの遠因は1730~40年代にあったと考えられることだ。作品舞台の18世紀前半、ピューリタニズムによる主体の確立が困難となり、ピューリタニズムで意識や行動を律することはもはや不可能になることが誰の目にも明らかになってくると、人々は新たな言説に飛びつき、新たな倫理を実践することでぐらつく主体を支えようと躍起になる。ここでの倫理的要請なるものは神学的なものではなく、実践的なものである。それは18世紀、19世紀のコンテキストで言えば超越主義者にも多大なる影響を与えたカント的倫理、俗人的といっては不謹慎かもしれないがフランクリン的あるいはマクス・ウェーバー的な実践哲学、時代が下ればウィリアムズのプラグマティズムが相当するだろう。そういった実践主義は、ホーソーンが実存主義的用語でいうアンガージュマンに躊躇い距離をおいた社会運動や奴隷解放運動として、クライマクスを迎えたのかも知れない。冷戦時代の一時期、社会運動を支える実存主義陣営からホーソーンが評価されるのを見ると、まさに歴史の皮肉を感じざるを得ないところである。

ともあれ、このような実践哲学へと向かう近代の動きに対してポストモダニストのリオタール (Jean-François Lyotard) は倫理を実践とすり替え

### 同一性の脱神話化をめぐる

ることで多元的自己が抱える倫理を矮小化してしまうと批判しているし、ホーソンも『ブライズデイル・ロマンス』(*The Blithedale Romance*, 1852) や「美の芸術家」(“The Artist of the Beautiful,” 1846), 「ラパチャーニの娘」(“Rappaccini’s Daughter,” 1844), 「イーサン・ブランド」(“Ethan Brand: A Chapter from an Abortive Romance,” 1850) などの作品で、ホリングズワース (Hollingsworth), ダンフォース (Danforth), バリオーニ (Baglioni) 教授, バートラム (Bartram) 等の人物を通し, 見かけ倒しになりがちな実践倫理に冷やかな眼差しを向けている。かと言って, ホーソンはピューリタニズムに回帰せよと叫び, 復古主義に走ったわけではない。それは作家の筆運びから明らかである。実際, 作家は, 人々の罪を一人で引き受け人々から物笑いの種にされるフーパー牧師を, キリストのパロディとして描いている。そうすることで作家は「神の言葉 (大文字の Word)」を伝える牧師の脆弱さを例証するのである。

パラダイム・シフトと言えば, 人文社会科学の領域でパラダイム・シフトが進む転換期に当たるのが1970年代である。20世紀後半に起きたこのシフトは反戒律主義, 多様性と非決定性に対する寛容といった体裁を示している。この時期, サブカルチャー領域でもビートを受け継ぐヒッピーがカウンターカルチャー・ムーブメントを起こす。しかもカウンター・カルチャーの遠因はエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-82), ソロー (Henry David Thoreau, 1817-62), ホイットマン (Walter Whitman, 1819-92) らが活躍する1850年代に求められる。人々から理解されないフーパー牧師同様に, また1970年代を境にフーパー牧師の評価が一変するのと同様に, 自らの作品評価の振幅が大きくなることを, 「牧師の黒いヴェール」時代である1830年代そして『緋文字』時代の1850年代にホーソンはすでに予知していたことにもなる。デリダのいう差延運動を完全に封じ込めることは不可能であり, 時と場所に応じて評価も変わるということ, ホーソンはニュー

・ヒストリシストとしての視座から預言していたのである。フーパーと自分との類縁性を察知していたからこそ、ホーソーンはヴェールで顔を覆い人々を混乱に陥れたフーパー牧師に自らをなぞらせ、牧師を恐怖の自画像として描いたのではなかろうか。フーパーを鏡像として自らを映し出したのではなかろうか。フーパー牧師が人々から誤解される様をカリカチュア的にグロテスクに描きつつ、ホーソーンは15年後に、あるいは150年後に自らが評価される様を預言していたのではなかろうか。自らの存在を自由に定義するという実存主義的な主体構築が不可能であることを、フーパー同様、作者は十分承知していたのではなかろうか。

## V. 脱構築される人格同一性の神話

本稿の最終目的は牧師、作者、ヴェールという三つ巴の関係を解きほぐすことにあるから、再度、ヴェールの問題に立ち返る。ホーソーンとは異なりフーパーは自分が預言者イメージのパロディとして、あるいは「目に見える聖人」イメージのパロディとして、人々の眼に映っていることなど知る由もないが、逆に意識的にそのようなフーパーを悲喜劇的な形で描いたのが作者ホーソーンなのである。だとすれば、牧師をあたかも自分の似姿であるかのように読者に見せつける文学的装置として、作者は牧師を利用したのではなかろうか。フーパー的アイデンティティを装う作者にとって、フーパーはシンボリックな次元で作家的自我を覆い隠すヴェールとしての意義を帯びていたのではなかろうか。

その一方で創作ノートである『アメリカン・ノートブックス』の記載からすれば、牧師は自分ではヴェールを被ったつもりでいても、他者の目にはむしろタブーとしてのマスク／仮面／ペルソナを被ったように映ったのでは、という疑念も沸き起こる。木乃伊取りが木乃伊に、の構図である。第1章で述べたようにマスクは弱者を搾取することが可能なマルクスの

## 同一性の脱神話化をめぐって

「資本」、フーコー的「知」、父権的／帝国主義的権力を振るうポジションにある人物、たとえばゼノビア、ウェスタヴェルト教授、ラパチーニ博士といった人物が着用するものである。だとすれば、作者は牧師に批判的論調をとりつつも牧師と同一化し、意識的にあるいは無意識的に文字通り「恐怖の自画像」と一体化してしまったのではなかろうかとも推察されよう。

本稿第二章でフーパーは他者（会衆）への顧慮が欠如していると述べたが、同様の批判はフーパーにとっての会衆（他者）に対しても向けられる。これは他者に対する主体の応答責任というレヴィナス的倫理に作品テーマが収まり切れないことを意味する。黒いヴェールで顔を隠した牧師に対する会衆の半ばコミカルに描かれる態度は、ホーソン文学でいうところの「許されざる罪 (unpardonable sin)」一歩手前の非礼である。このような非礼極まりない会衆の態度が増長すると、ディムズデイル (Dimmesdale) 牧師に対するチリングワース (Chillingworth) の執拗な態度となり、行き着く先としてこのような「許されざる」姿勢は、ヴェールとしての聖職者の服から牧師の胸を曝け出したチリングワースのいわばホモセクシャルレイプまがいの行動という形になる。これはつまり「ヴェールを取り払えというイデオロギー（的要請）(the ideology of unveiling)」に応じることが無益な徒労に終わるのみならず、暴力的結果を導くという事実を、『緋文字』執筆に先立つこと、はるか15年前に「牧師の黒いヴェール」で作者ホーソンが暗示していたことになる。つまり倫理的観点からすれば、「ヴェールを剥ぎ取れというイデオロギー (the ideology of unveiling)」(的正論)は批判の対象とされねばならないというわけである。

「ヴェールを剥ぎ取れ」という（イデオロギー的）要請は、その実、暴力——別言すればホーソン文学でよく言われるところの「許されざる罪」——を覆い隠す巧妙なヴェールとして機能する。ただ、「ヴェールは剥ぎ

取らねばならない」というもっともらしい（イデオロギー的）正義に隠された誤謬〔暴力〕を明らかにするには、見栄えのいいヴェール／イデオロギーを剥ぎ取る（unveil）ことが必要となる。同語反復的なヴェールは実に曲者で、我々としても二進も三進もいかない状況に陥ってしまう。

ともあれ、このように作者はすぐれて倫理的な問題を扱っているかのように見える。しかし作品空間に厳粛な雰囲気を漂わせるのではなく、フーバーの行動に右往左往する人々を作者は紋切型に描き笑いを誘っている。ホーソーンは作品をいわゆる俗受けする「キッチュの商品（ドイツ語でけばけばしい安物、アンティークめいて実は大量生産可能な代物であるキッチュ）」に仕立てあげることに躊躇しなかったのである。もはや対象がエリートではなくなった19世紀の小説購買層に対して商業的意味を含めてアピールするためには、芸術的／哲学的／神学的メッセージの上にヴェールを被せることも「やぶさかならず」というしたたかな姿勢を、ホーソーンは見せているのである。傷つきやすい皮膚が露出した顔を他者の前に曝け出し、他者に対する主体としての応答責任を全うせよ、と説いたレヴィナスの倫理を素直に受け入れるほどホーソーンはウブではなかった。

作者同様、牧師もまたレヴィナスの倫理からは遙か遠くに隔たっている。牧師はピューリタンの行動様式に固執するあまり、神（学）の道を踏み外してしまっている。しかし神学的倫理的次元とは異なる文学的次元で両者を捉えるならば、二人を取り巻く状況をどう理解できるのか。もし脱構築主義者のデリダの指摘が妥当であるとするならば、つまり「行動が純粋に現前的であり、ヴェールを剥がされ、丸裸にされ、よそ者のな能記の迂回もなく真理において生身で差し出されうるとしたら、すなわち極限的に言えば、差延されていないロゴスが可能であるとしたら、それは〔文学、（文学的）解釈、あるいはドグマに囚われない自由な発想〕を誘〔発〕しない」（『散種』106）というデリダの指摘が妥当だとすれば、「ヴェール」

## 同一性の脱神話化をめぐる

は逆説的に（ホーソン）文学に利するのである。主体と他者との関係性を越えた先にある問題／アポリアをシンボライズする文学的装置としてホーソンはヴェール（を被ったフーパー）をむしろ巧妙に利用しているのである。もちろん逆にフーパー牧師の場合はヴェールをまとことが裏目に出て、不利益を被っている。

大上段に構えた物言いと受け取られることも承知で敢えて言わせてもらおう——人は脱構築を免れることはないし、他者による同定そして自己による同定も永遠に不可能であり、人は自己にとって「異質」な自己なるものを抱え込み続ける、と。この自家撞着的アポリア（「異質」なるもの）を具現するのが、文学的装置としてのヴェールであり、ヴェールが覆う顔であり、エクリチュールの性格を帯びた作品であり、その作者に対する他者／読者からの評価なのだ。ヴェールはいわゆるフォルマリストのいう「異化」効果により「日常」から「非日常」を現出する。

こうして現れ出るアポリアは解消不可能である。だからこそあたかも開き直ったかのように「私はヴェールで顔を隠す（“I veil my face”）」と（X, 32）、ホーソンは言い放つのであるが、それも無理からぬことであろう。ホーソンの「牧師の黒いヴェール」を解説しようとした脱構築主義者ヒリス・ミラー（J. Hillis Miller）の自虐とも諧謔とも判断しかねる次のような繰言をも（123）、ホーソンは既に織り込み済みであったのだ。

矯正可能な不注意とか度忘れではなく、どうにも御し難い衝動を通して、疑義に付そうとして躍起になっていた当のものを、私は解釈の手段として不可避免的に利用してしまったのではなからうか。つまり「覆いを上げる（lift the veil）」という意味のギリシャ語に語源を遡及する] 黙示（啓示）（apocalypse）というイデオロギーを、それと関連深いヴェールと擬人法という

イデオロギーと関連深い比喩表現とともに、不可避免的に利用してしまっただけではなからうか<sup>4)</sup>。

ヴェールの意義を脱構築する過程で可視化したものは、その人物にとってのプライバシー侵害凌辱といった問題ではなく、その人物を墮落させた罪などというものでもない。そうではなく、隠すために着用したヴェールが皮肉にも逆に暴き出したものは、ヴェールをまとった人物の属性、つまり「同定と同化が不可能な異質な属性」である。自分であって自分ではないもの、にもかかわらずその人物の人格の根幹を成すものである。それはヘーゲル的な自己疎外に似ている。しかしヘーゲルにとってはそのような自己を対象として把握することが可能であり、なおかつ最終的には止揚できるとしたから、ホーソーン的な自己疎外とは異なる。そのような異質な自己を認識することはおろか、接近すること自体、難しいとホーソーンは考える。だからフーパー牧師は、偶然、姿見に映った自己の姿を目にして「たじろぎ、唇から血の気は失せるわ、絨毯に葡萄酒はこぼすわで、[婚礼の場を後に] ほうほうの体で闇へと走り去ったのであった」(43-44)。

ヴェールとはアポリア的人格であり、人格はアポリアであることをヴェールは暗示し、このアポリア的人格に対して自己としてあるいは他者としてどのように向かい合うかが、問われているのである。この異質なものを除去／浄化／ピューリファイしようとすれば、結果は「痣」(“The Birth-Mark,” 1843)に於けるジョージアナ (Georgiana) の痣を取り除こうとした医師である夫エイルマー (Aylmer) の轍を踏むこととなる。さらに言うならばこのアポリア的人格の「異質な属性」とは「ラパチーニの娘」ベアトリーチェ (Beatrice) の毒、あるいはベアトリーチェが象徴する「毒の花」に相当する。そもそも同種療法 (Homeopathy) と逆症両方 (Allopathy)、つまり「同一なるもの」、「他なるもの (毒なるもの)」をめ

## 同一性の脱神話化をめぐる

ぐる問題系を扱ったのが「ラパチーニの娘」であった。そして意外にも「牧師の黒いヴェール」も「ラパチーニの娘」と共通するテーマ性を孕んでいることが判明する。こうして「牧師の黒いヴェール」（及び「ラパチーニの娘」）により「同一性と差異性」をめぐる従来の概念が幻想であることが示され、自己をアイデンティファイすることは不可能であると判明する。人格の同一性という神話を脱構築したのが「牧師の黒いヴェール」（及び「ラパチーニの娘」）なのである。ここに、ホーソーンは我と他の峻別も困難であることを明らかにしようとしたのだ、とする結論を導引することが可能となる。我のみならず他者も等しくヴェールを被った者となるのだ。本稿第V章で確認したように大文字で記される「神の言葉（“The Word of God”）」でさえ脱構築される定めにあるのだから、一介の人間が脱構築から逃れることはないのだ。これは全的墮落というピューリタンのな発想が別の形で蘇っていることを意味するかもしれない。

ともあれ、人がこのようなアポリア的状况に置かれて逃れることができないとするならば、クラーク・ディヴィスが考えるように、いっそこと、「眼差しを我に差し向ける他者／読者」と「共感」を取り結び、他者／読者に対しては同定不可能性を暗示するヴェールの意義を共感により汲み取ってもらいたいと願うのも自然な流れである。しかしその願いは叶わない。「他者」が「我」を同定することは難しいから、「他者」による「我」への共感も難しい。同定不可能性と共感不可能性。この二重の不可能性を「二重になったヴェール（“two folds of crape”）」の下からフーパーを通して嘆く（wail）するホーソーンを15年後に受け止めたのが、鯨（Whale）の物語を書いたハーマン・メルヴィル（Herman Melville, 1819-91）であった。しかしこの唯一の理解者メルヴィルを跳ね除けて切り捨てたホーソーンが、友人を殺害したムーディ牧師であったとしたら、恐怖の自画像としての作品はさらなる迫真性を帯びてくる。つまりホーソーンによる15年後

の殺人予告の書として作品は新たな解釈の局面を導き入れることになるのだ。自分に理解を示し、愛を寄せ、愛を乞う人を殺すというアンパードナブルな、すぐれてホーソーン的な冷酷さを解明せねばならないが、その議論はまた別の機会に譲りたい。

本論考は2015年5月22日、日本ナサニエル・ホーソーン協会第34回全国大会（於 日本大学）での発表原稿をもとに、加筆修正を施したものである。

#### 注

- 1) テキストとしては Nathaniel Hawthorne, *Twice-Told Tales*. Columbus: Ohio State UP, 1974. Vol. IX of *The Centenary Edition* of the Works of Nathaniel Hawthorne を使用し、本文中での引用箇所は括弧内に示した。
- 2) もちろん、このような視覚偏重の姿勢に対して、後にハーマン・メルヴィル (Herman Melville, 1919-91) がエイハブ船長 (Captain Ahab) に「目に見えるものは厚紙のマスクのようなもの」と、異議を唱えさせたことは周知の事実である。
- 3) “An allegory therefore presupposes shared understanding; a parable creates shared understanding. There are two further differences. An allegory addresses insiders who are in the know; a parable attacks, or seeks to win over outsiders.” (Thiselton 38)
- 4) “Have I not, not through some inadvertence or forgetting, but through an ineluctable compulsion, unavoidably used as the ‘tool’ of reading the very thing I have most wanted to put into question, just that ideology of apocalypse with its associated figure of the veil and prosopopeia?” (Miller 123)

#### Works Cited

- Benoit, Raymond. “Hawthorne’s Psychology of Death: ‘The Minister’s Black Veil.’” *Studies in Short Fiction* 8 (1971): 553-60.
- Boone, N. S. “‘The Minister’s Black Veil’ and Hawthorne’s Ethical Refusal of Reciprocity: A Levinasian Parable.” *Renascence: Essays on Values in Literature*.

57. 3 (2005), 165-76.
- Carreira, Jeff. "Substance, Utility, Existence: Heidegger's Modes of Being." *Philosophy Is Not a Luxury* (August 25, 2011). Internet. 25 March 2013.
- Coale, Samuel. "Hawthorne's Black Veil: From Image to Icon." *CEA Critic: An Official Journal of the College English Association* 55. 3 (1993): 79-87.
- Colacurcio, Michael J. *The Province of Piety: Moral History in Hawthorne's Early Tales*. Harvard UP, 1984.
- Davis, Clark. "Facing the Veil: Hawthorne, Hooper, and Ethics." *Arizona Quarterly* 55. 4 (1999): 1-19
- DeSalvo, Louise. *Nathaniel Hawthorne*. Brighton: The Harvester Press, 1987.
- Fogle, Richard H. *Hawthorne's Fiction: The Light & the Dark*. Norman: U of Oklahoma P, 1952.
- Hawthorne, Nathaniel. *The Scarlet Letter*. Columbus: Ohio State UP, 1963. Vol I of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . *Twice-Told Tales*. Columbus: Ohio State UP, 1974. Vol. IX of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . *Mosses from an Old Manse*. Columbus: Ohio State UP, 1974. Vol. X of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- . *Passages from the American Note-Books of Nathaniel Hawthorne*. Columbus: Ohio State UP, 1972. Vol. VIII of *The Centenary Edition of the Works of Nathaniel Hawthorne*.
- Kesselring, Marion Louis. *Hawthorne's Reading, 1828-1850; A Transcription and Identification of Titles Recorded in the Charge-Books of the Salem Athenaeum*. New York: New York Public Library, 1949.
- Lévinas, Emmanuel. *Otherwise than Being. Or Beyond Essence*. Trans. Alphonso Lingis. Boston: M. Nijhoff, 1981.
- Milder, Robert. *Hawthorne's Habitations: A Literary Life*. New York: Oxford UP, 2013.
- Miller, J. Hillis. *Hawthorne & History: Defacing It*. Cambridge, Mass.: B. Blackwell, 1991.
- Millington, Richard H. *Practicing Romance: Narrative Form and Cultural*

- Engagement in Hawthorne's Fiction*. Princeton: Princeton UP, 1992.
- Newman, Lea Bertani Vozar. "One-Hundred-and-Fifty Years of Looking at, into, through, behind, beyond, and around 'The Minister's Black Veil.'" *Nathaniel Hawthorne Review* 13.2 (1987): 5-12.
- Rowe, John Carlos. "Nathaniel Hawthorne and Transnationality." In Bell, *Hawthorne and the Real: Bicentennial Essays*, 88-106. Columbus: Ohio State UP, 1993.
- Santangelo, G. A. "The Absurdity of 'The Minister's Black Veil.'" *Pacific Coast Philology* 5 (1970): 61-66.
- Saunders, Judith P. "Hawthorne's theory of mind: An Evolutionary Psychological Approach to The Minister's Black Veil." *Style* 46. 3/4. 420-38.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. New York: Columbia UP, 1985.
- Stein, William Bysshe. "The Parable of the Antichrist in 'The Minister's Black Veil.'" *American Literature* 27 (1955): 386-92.
- Stibitz, E. Earle: "Ironic Unity in Hawthorne's 'The Minister's Black Veil.'" *American Literature* 34.2 (1962), 182-90.
- Thiselton, Anthony C. *Hermeneutics: An Introduction*. Grand Rapids: Eerdmans, 2009.
- Turner, Graeme. *British Cultural Studies: An Introduction*. New York: Routledge, 1992.
- Voigt, Gilbert P. "The Meaning of 'The Minister's Black Veil.'" *College Literature* 13 (1952): 337-38.
- Walsh, Thomas F. "Hawthorne: Mr. Hooper's Affable Weakness," *Modern Language Notes* 74.5 (1959): 404-06.
- Williams, Anne. *Art of Darkness: A Poetics of Gothic*. Chicago: U of Chicago P, 1995.
- ヴィトゲンシュタイン, ルートヴィヒ (Wittgenstein, Ludwig) 『哲学探究』岩波書店 2013。
- 古平ユキ 「フーパー牧師の二重のヴェールの意味——ホーソーンの神学的曖昧さ」『鶴見英語英米文学研究』12 (2011): 59-75.

同一性の脱神話化をめぐる

土田知則『ポール・ド・マン = Paul de Man : 言語の不可能性, 倫理の可能性』岩波書店 2012。

デリダ, ジャック (Derrida, Jacques)『根源の彼方に: グラマトロジーについて』訳 足立和浩 現代思潮社 1990。

——.『散種』訳 藤本一勇, 立花史, 郷原佳以 法政大学出版局 2013。

ド・マン, ポール (de Man, Paul)『読むことのアレゴリー: ルソー, ニーチェ, リルケ, プルーストにおける比喩的言語』訳 土田知則 岩波書店 2012。

丹羽隆昭『恐怖の自画像: ホーソンと「許されざる罪」』英宝社 2000。

フーコー, ミシェル (Foucault, Michel)『知の考古学』河出書房新社 2012。

——.『言葉と物: 人文科学の考古学』新潮社 1974。

——.『監獄の誕生: 監視と処罰』新潮社 1977。

リオタール, ジャン=フランソワ (Lyotard, Jean-Francois)『モダンの条件: 知・社会・言語ゲーム』水声社 1994。

レヴィナス, エマニュエル (Lévinas, Emmanuel)『存在の彼方へ』訳 合田正人 講談社 1999。

## Demystifying the Identity Myth: Hawthorne's "The Minister's Black Veil"

SASAKI Eitetsu

In "Mosses from an Old Manse" (1846), Nathaniel Hawthorne (1804-64) paradoxically dropped off his mask to blurt, "So far as I am a man of really individual attributes, I veil my face." In making sure of his hidden undissembled intention regarding the author-reader communion, this paper treats "The Minister's Black Veil" (1836), a short fiction written during Hawthorne's apprenticeship to become a professional writer.

"The Minister's Black Veil" depicts the unintelligible behavior of the Reverend Hooper, who wears a black veil. Critics are divided over the problem of whether Hooper merits praise or harsh criticism. Existentially aware of the meaning of life, or to use Heidegger's phraseology, *Dasein*, Hooper warns his parishioners, it seems, of how foolish it is to stay ignorant in plausibly blissful daily activities. If closely inspected, however, Hooper is far from being an Existentialist. He forcefully imposes the same identity as sinners on one and all parishioners, in the name of Puritanism and its dogmatic doctrine, the notion of total depravity. He shows unawares his totalitarian inclination toward essentialism ---- the sort of attitude that Existentialists denounce. Furthermore, he neglects to hold communion with his parishioners and even with God, and thus incarcerates himself in his own solipsistic realm. When we recall the author's above-mentioned confession of "I veil my face," we confront this question: How close is Hawthorne to Hooper the veiled minister?

The Deconstructionist Paul de Man points out that, because of its etiological definition of speaking about something other than itself, the deconstruction of the allegory is part of the allegory itself. From this perspective, we can un-

derstand that it is impossible for Hooper to allegorically represent the w/Word(s) (of God), the Origin, and the Cause (of Sin) with the use of his black veil, the proxy, symbol, letter, and or language with which he hopes to allegorically convince the congregation of the Puritan notion of total depravity. Aware of how he appears to the eyes of his parishioners, Hooper stops associating with them. He is openly avoided and secretly ridiculed by men and women, young and old. In these adverse circumstances, the degree of their misapprehension over the reason for his veil deepens all the more. In a negative way, Hooper exemplifies the process of what the leading Deconstructionist Jacques Derrida calls “*Différance*” and attests to Derrida’s insistence that allegory deconstructs itself.

More than a decade after publishing this story, Hawthorne became a canonical writer by dint of his masterpiece, *The Scarlet Letter* (1850). But around this time he also suffered severe hardships, most of which sprang from misunderstanding on the part of his contemporaries: he was expelled from the sinecure position at the custom house, targeted in a hate campaign by Charles Upham, and incurred the displeasure of locals through his sarcastic depiction of the locally employed officers at the custom house. Moreover, since the 1980s, Hawthorne’s support for Franklin Pierce, the notoriously pro-slavery politician who went on to win the presidency, has induced left-minded critics to undermine the writer’s literary reputation.

In his apprenticeship to become a professional writer, Hawthorne already depicted his future self in the image of Hooper. Portraying both Hooper’s liability to be a victim of misapprehension and his resigned acceptance of this fate, the author predicted the fate that was to befall him later in life and after his death. Through the Reverend Hooper, Hawthorne paradoxically allegorized his own nature of veiled otherness in the form of desacralized allegory/parable, and conveyed the difficulty of how to face the unexposed foreign self.

# 先進文明による介入に関する一考察

——米テレビ連続SFドラマ番組「スター・トレック」に  
おける「最優先指令」から考える——

松村昌廣

政治学の一分野である比較政治学（comparative politics）においては、圧倒的に軍事、政治、経済、イデオロギー等の現象に分析・考察の焦点が置かれがちであり、文化面が重視されることはあまりない。とはいえ、個別社会の政治文化（political culture）と秩序観（sense of orderliness）は表裏一体であることから、その秩序の安定性や変動を考察する上では極めて重要であり、比較政治分析においてもっと関心が払われてしかるべきであろう<sup>1)</sup>。

政治文化は勿論具体的な社会現象を実証的な手法で分析することによっても明らかにできるが、政治文化が表出されたフィクションや寓話を考察することによっても可能であろう。本稿では、こうした観点から、米国の連続SFドラマ番組「スター・トレック（Star Trek）」を取り上げ、考察の焦点を劇中に繰り返し出てくるキーワードである「最優先指令（Prime Directive）」に置くこととする。

## 1. 「スター・トレック」と比較政治分析

連続テレビSFドラマ「スター・トレック」は、庶民が一日の仕事の後、

---

キーワード：①スター・トレック、②プライム・ディレクティブ、③介入、  
④多民族型帝国、⑤分割統治

娯楽に観るものであり、日本なら差し詰め「水戸黄門」などの時代劇に当たる。もっとも、米国の場合、以前は米国版時代劇ともいえる西部劇に人気があったのだが、こここのところ未来劇に軍配が上がる状況なのが特徴的である。「スター・トレック」のタイトル自体が示唆するある種の冒険旅行の目的が西部開拓ならぬ、宇宙開拓がテーマであることを考えると、西部劇の発想の延長線上にあると言えなくもないだろう。)とはいっても、毎回放送のストーリー展開は本質的に勧善懲悪のワンパターンであり、時代劇と「スター・トレック」に大きな差はない。

この番組は第一シリーズから第五シリーズまであり、概ね22世紀から24世紀に時代を設定している。古い順に「スター・トレック—宇宙大作戦」(初回放送、1966年～1969年)、「新スター・トレック (Star Trek: The Next Generation)」(1987年～1994年)、「スター・トレック—ディープ・スペース・ナイン」(1993年～1999年)、「スター・トレック—ヴォイジャー (Star Trek: Voyager)」(1995年～2001年)、「スター・トレック—エンタープライズ (Star Trek: Enterprise)」(2001年～2005年)である<sup>2)</sup>。この番組、2005年に初回放送が終わった第五番目のシリーズまでの長寿番組で、その後も繰り返し再放送されている。また、既に米 CBS 放送は2017年から新シリーズを放映すると発表している<sup>3)</sup>。

この未来劇が比較政治分析や比較文化分析の題材になりうるのは、異星人との接触・交流・介入がこの地球上の異文明の異邦人とのそれと本質的に極めて多くの共通点を有しているからである。時代劇が現在の日本の社会問題を過去に投影するのに対して、SF未来劇は現在の米国が直面する国際問題を未来に投影している。米国の西部開拓を振った未知なる宇宙の開拓に始まり、地球を含む惑星連邦とその他先進文明を持った対抗勢力との接触・摩擦、そして後進・未開の異星人文明との遭遇など、その設定は米国が覇権国であるだけに、時間的、空間的にスケールが大きい。惑星連

## 先進文明による介入に関する一考察

邦と他の先進文明勢力との関係は米国が国際関係において抱える列強とのそれに相等する一方、後進・未開の異星人文明との関係は発展途上国とのそれに当たると言えるだろう。

したがって、「スター・トレック」が米国民の間に広く受容されているという事実から、この番組に米国民の発展途上国の対する発想や考え方が表出されていると考えても問題はなかろう。また、米国が民主制を採っていることから、長期的には、そうした発想や考え方が米国政府の対発展途上国政策の大枠を大きく規定するといっても過言ではなかろう。翻って、そうした発想や考え方に関する考察は我が国を含め主要先進国の対発展途上国政策の比較評価基準（reference point）になりうるのではないかとの観点から、以下の考察を進める。

## 2. 「プライム・ディレクティブ」とは何か

ストーリー展開のモチーフの一つとして繰り返し出てくるのが、後進・未開文明に対する惑星連邦の行動指針、「最優先指令」である。惑星連邦憲章第1章第2条第7項によれば、

惑星連邦憲章のいかなる規定も本質上いずれかの惑星の社会システムの対内的管轄権内にある事項に関する権限を惑星連邦に与えるものではなく、またその事項をこの憲章に基づく解決に付託することを加盟惑星に要求するものではない。ただし、この原則は、第7章に基づく強制措置の適用を妨げるものではない<sup>4)</sup>。

この憲章規程に基づく「最優先司令」は次の様に定義されている。

一切衆生が正常な文化的進化に従って生きる権利は神聖だと見做

されるのであるから、惑星連邦艦隊の要員は異星人の生活と文化の正常で健全な発展に介入してはならない。そうした介入は優越する知識、力、技術を賢明に役立てる能力を有していない異星人社会にそれらをもたらすこととなる。惑星連邦艦隊の要員は、たとえ異星人たちの生命や宇宙船を救うためであっても、既になされた「最優先指令」違反や偶発的に異星人社会に及ぼした悪影響を正すため以外には、「最優先指令」に違反してはならない。この指令はいかなる他のすべての考慮に優先し、最高の道徳的な義務感を持って実行されねばならない<sup>5)</sup>。

「最優先指令」によって、惑星連邦艦隊の要員は異星人文明の内的な発展過程に介入することを禁止されている。つまり、連邦側が異星人にとって未知であるか開発・製造できないような卓越した科学技術力、文化力を用いて自らの価値観や理念を押し付けてはならない。劇中では、「ワープ・ドライブ」(光速の亜空間航法)及びそれを可能とする「ワープ・エンジン」,「トランスポーター」(瞬間転送装置),「防御シールド」,「プルトン・トービード」(光子魚雷),「フェーザー」(位相光線砲・銃)などの先進科学技術が常に登場する。また、「最優先指令」の系である「暫定最優先指令(Temporary Prime Directive)」は次のように求めている。

惑星連邦艦隊の要員は(後進・未開の異星人文明の)歴史的な事件に直接的に介入することを厳格に禁止されており、歴史年表の展開を維持し、歴史が変更されないように防がねばならない。また、矛盾を引き起こしたり歴史年表の展開を変えたりしないように、異星人に対してその未来について多くを告げないように控えなければならない<sup>6)</sup>。

## 先進文明による介入に関する一考察

「スター・トレック」では、しばしば船長その他幹部たちは自分たちの道徳観や価値観と「最優先指令」や「暫定最優先指令」との相克に苦悶する。目前の蛮行や不合理を放っておかねばならないからである。さもないと、自分たちが神や悪魔と扱われたり、異文明社会内に戦争を引き起こしたり、激化させたり、或いは本来勝つべきでない勢力を勝たせる結果となるなど、秩序や発展のパターンに予期せぬ影響・結果を与えてしまうからである。ドラマは、しばしば影響を中和するために苦勞し、苦笑するしかない結果でラストシーンとなる。

もちろん「最優先指令」や「暫定最優先指令」はフィクションの世界の戯言なのであるが、「スター・トレック」が多分に現代の米国の対発展途上国政策を巡る論争の投影であることを考えると、二つの指令の背後にある原則についてその現実世界での含意を考察してみなければならないだろう。また、近現代の日本が採った対発展途上世界政策への意味合いも考察してみなければならないだろう。

### 3. 先進性と後進性

歴史的にも（時系列的にも、空間横断的にも）、これまで人類には文明や文化の点で多様な社会が存在してきた。これらに対して特定の価値観を基準にして優劣をつけることは論理的には十分可能であるが、その基準の是非自体が大きな論争を呼ぶだろう。

そこで以下では、先進性と後進性の基準を分析を進める上で便宜上、飽く迄個別社会が有する総合的なパワー（power）—政治学では最も基本的な分析概念の一つとされる—と見做して考えてみる。パワーは一義的には物理的強制力である軍事力であり、より分析的に見れば、科学技術力、武器生産能力、武器運用能力である。とはいえ、その基盤には、経済力や組織力があり、これらが中長期的には重要な要因となる。（さらには、先進

社会はこれらの諸力によるモデル効果，デモンストレーション効果により，自発的に後進社会に変容を促すパワーも及ぼしうる。）ところがこうした諸力を習得し使いこなすには，物理的・客観的要請に沿って，その土地本来（native）で独自・固有の伝統的価値観，社会構造，社会秩序を全廃または一部修正せざるを得ない。往々にして，後進社会は自民族中心的（ethnocentric）で独善的な世界観・イデオロギーを有しており，そうした適用能力を全くも持たない或いは非常に限定的にしか持たない。つまり，後進社会は道具的な意味での合理精神を導入しなければ支配を受けるか減じるしかなく，導入したら導入したで，従来の独自文化・社会の在り方との間で深刻な矛盾や不調和を抱え込むこととなり，最悪，内破することとなる。一言で言えば，弱者が生き残るためには，強者を模して自己変革・改造をせねばならず，それは非常に困難であり，しばしば大失敗・大惨事となる。

この見方を現実の世界に引き寄せて言えば，西洋近代国家（modern Western nation-state）の抬頭・隆盛と多民族型帝国社会の没落の問題となる。実際，前者が出現し，その各々が対外的に帝国主義・植民地主義を採るまでは，人類社会における大規模な政治社会秩序の主流は圧倒的に後者であった。欧州と中東との関係で言えば，軍事的には，フランス西部，トゥール・ポワティエ間の戦い（西暦732年，ウマイヤ朝のイスラム政権とフランク王国との戦い），オスマン・トルコの海上覇権（1532年のプレヴェザの海戦で勝利し，地中海全域における確立した。1571年のレパントの海戦で敗北し，海上覇権は東地中海に限定されたが，一大勢力として影響力を保持した。），オスマン・トルコ帝国軍によるウィーン包囲（1529年及び1683年）と，同帝国が大トルコ戦争（1683年～1699年）で敗北するまで，欧州側の劣勢は明らかであった。また，日本とシナ大陸との関係も，清朝が阿片戦争（1840年）に敗北して，その後西洋列強に蚕食され屈服するま

## 先進文明による介入に関する一考察

では、華夷秩序は圧倒的な存在感を有した。

その後、優劣が逆転するのは、西洋近代国家が経済的には高い科学技術力と生産力を有する資本主義、政治的には民主制による安定した国民国家を確立し、常備軍による圧倒的な軍事力とそれを運用する能力を持つに至ったからである。また、西洋近代国家がこうした軍事力を背景に、多民族型帝国を経済的に蚕食し、経済的支配を達成し、それを梃に政治的な支配を確立していったからであった。

逆に、文明史・文化史の視点から俯瞰すれば、多民族型帝国社会の有りが西洋近代国家のそれと比べて劣っていたとは言えず、寧ろ多くの点で圧倒的に優れていたという見方もできる。一般によく知られており、詳説の必要はないだろうが、ルネサンスは学術・思想的には、イスラム勢力（オスマン・トルコ帝国）の攻撃による東ローマ帝国（ビザンチン帝国、395年～1453年）の滅亡の結果、陥落した首都コンスタンチノーブルから学者が大挙してイタリアに移ったことが契機となって開花した。また、これらの学者はアラビア語を介して古代ギリシャの古典やその注釈研究を含め、隆盛を誇ったイスラム文明やそこでの成果を伝達されていた<sup>7)</sup>。また、中世の欧州においては半ば腐敗した肉が食されていたり<sup>8)</sup>、18世紀末に至っても宮廷生活においてすら全くトイレ設備がないなど<sup>9)</sup>、公衆衛生の面でも著しく劣っていたこともよく知られている。つまり、今日の一般的なイメージとは逆に、欧州こそ中東の辺境・後進地域だったのである。また、日本とシナ大陸との関係も、日本の文明的・文化的洗練性の点で議論は分かれるであろうが<sup>10)</sup>、華夷秩序の中で日本が辺境・後進地域と位置付けられてきたことに議論の余地がなからう。

それでは、以上のように定義した圧倒的「先進性」を有する西洋近代国家が「後進性」を払拭できない発展途上世界・諸国に介入すると、何故そして如何なる問題を引き起こすのであろうか。

#### 4. 介入が引き起こす問題

注目すべきは、西洋近代国家が軍事的、経済的、文化的に発展途上世界に介入をする際、前者が善意からであれ悪からであれ、はたまた意図的であれ無意識であれ、西洋近代国家の近代化、民主化、その基盤となる近代合理精神を持ち込んだため、後者の社会システム全体に予期せぬインパクトを与える結果となったことである。

多民族型帝国秩序の下では、個人の帰属意識は専ら「帝国臣民」である。民族、宗教、宗派、地域、階級などへの帰属意識は二義的であり、社会的、政治的な紛争の焦点としては重要ではない。モンゴル帝国史が示すように、帝国秩序はそれに逆らうものを無慈悲なまでに徹底的に根絶やしにする一方、その秩序に従う限り、多様な共同体の平和的な共存を受容した。逆に言えば、帝国秩序に従う限り、個別部分社会の社会秩序（当然、宗教、言語、習俗、その他の民族固有の法・価値観等を含む）がそのまま存続を許されたことを意味する。

特に注意を要する点は、ここでいう「そのまま」とは「本質的に古代の形を保持したまま」という意味であることである。西洋近代国家の誕生は西洋及び日本に特有の封建時代を経て形成されたものである。そもそも、これらの二地域は地勢的に有利なおかげで、モンゴル帝国に強靱に抵抗し蹂躪されずに済んだ。モンゴル騎馬軍団は大挙して渡海して日本列島に侵攻することはできなかったし、山勝ちな地勢と大河に阻まれて西欧にも侵入できなかった。他方、これらの地勢的な特徴によって、西欧と日本では小規模な政治共同体が多数並存し、それらが相互に激しい戦争を繰り返すなか、好戦的な戦略文化と戦闘技能・技術の発展が加速した。したがって、西欧近代国家が絶対王政から市民革命への政治的な発展と産業革命による生産能力・科学技術力の発展を梃に多民族型帝国に対して圧倒的軍事力を

## 先進文明による介入に関する一考察

保有・行使したのは単なる偶然ではなかったと言えるだろう。

つまり、嘗ての多民族型帝国の崩壊後に残った社会や帝国秩序に組み込まれていた周辺・辺境社会は依然として中世封建時代以前の段階、つまり誤解を恐れずに言えば、程度の差こそあれ古代社会の特徴を多分に保持したままの状態にあるといえる。典型的には、近現代の中東イスラム社会、シナ、朝鮮はそうした典型例であろう。中東イスラム社会は未だ西洋型の宗教改革を達成しておらず、当然、民主制の前提である政教分離（separation of church and state）一個人の原子化と選挙を通じた利益集約一が全く或いは充分には実現されていない。また、聖典「コーラン」は習俗を含めた包括的で完成度の高い戒律を多く含んでおり、保守的・原理主義的なイスラム社会は本質的に7世紀のままの姿である。次に、シナは秦朝（西暦紀元前221年～同206年）から辛亥革命（西暦1911年）年による清朝（1636年～1912年）の滅亡まで、多少の変容はあるものの基本的には古代社会の特徴を維持した<sup>11)</sup>。また、朝鮮は三韓時代（1世紀～5世紀）から長らく分裂したままで持続的に朝鮮半島全域を安定的に統治する国家を統一したのは漸く李氏朝鮮王朝になってからである<sup>12)</sup>。実際、日韓併合（1910年）までは、衣服を染色する技術や経済的余裕もなく下水処理施設がないなど公衆衛生の面でも極めて劣悪な生活条件にあった<sup>13)</sup>。（この点、日本では元禄時代〔1688年～1704年〕には、大阪でコメの先物市場が成立するなど、近代合理精神と資本主義経済が発達し、産業革命こそ経ていなかったが、糸の精密加工に見られるように家内制工業が著しい発展したとことと対比される<sup>14)</sup>。）

つまり、近現代の欧米や日本は西洋近代国家の近代化や民主化の論理に依拠して、古代の段階に留まっていたポスト多民族帝国型の発展途上国に介入したため、長年続いてきた社会システムを破壊ないしは大幅に変容してしまつたと捉えることができるだろう。オスマン・トルコ帝国は政教分

離と西洋化に邁進するトルコ共和国に縮小再編成されたし、清朝は漢文古典の習得を重視した科挙を廃して自己破滅的な近代化を余儀なくされた。

こうした介入は低開発を深刻化し、社会の不安定化・武力紛争を惹起する一方、過去に帝国の栄光を経験した帝国臣民の末裔たちに対してその自我意識、自尊心を大きく傷付ける結果となり、強烈な抵抗を招くことになる。実際、中東では、米国がイランのパフラビー朝に急激な欧米化を推進させたが、国民的抵抗にあつて同朝が倒され、反米的なイスラム共和国（1979年～現在）が樹立された。また、今日、米国はアルカイダや「イラク・レバントのイスラム国」等の国際テロ運動・ネットワークの武力闘争による抵抗・攻撃にさらされている。日本は中華人民共和国と韓国から「南京大虐殺」「慰安婦問題」等、実証歴史学的には根拠のない歴史論争を執拗に仕掛けられ、苦悩している。

これまでの分析に基づいて言えば、現在、米国が中東に対して、そして日本が中国や韓国に対して抱える諸問題は現近代において「最優先指令」や「暫定最優先指令」に背いた結果だといえるだろう。もちろん、個別具体的には経済的搾取・収奪の動機や地政学的な利害の面も多分にあつたことは否定できないであろうが、米国は中東に民主化、日本は北東アジアに近代化をもたらそうとの動機付けがあつたことも否めないだろう。キリスト教国である米国は欧州が中東イスラム圏との間に築いてきた長年の交流を思想的・政治的に引き継いでいたし、旧約聖書を共通の啓典として共有する中東イスラム教圏に対してある種の親近感を持ってきたことは否めないだろう。また、日本は漢民族に対しては同文同種や一衣帯水、朝鮮民族に対しては内鮮一体や一視同仁等の語句に如実に示されるように、親近感を持っていたことは否定しがたい。ある部分、日米は各々中東や北東アジアの発展途上世界に部分的にはこうしたある種のナイーブな善意から、近代化、民主化、そしてその基盤となる近代合理精神を持ち込んだため、え

## 先進文明による介入に関する一考察

も言えぬ厄介な社会を生み出してしまったのが現実である。身から出た錆だと言えなくもない。

それでは、他にやり方はなかったのだろうか。

### 5. 「分割統治 (divide and rule)」

「分割統治」は「分断支配 (divide and conquer)」とも呼ばれ、ある者が統治を行うにあたり、被支配者を分割することで統治を容易にする手法である。また、被支配者同士を争わせ、統治者に矛先が向かうのを避けるとも言い換えることもできよう。一般的に、大英帝国はその対植民地政策としてしばしば狡猾にも分割統治の手法を用いたと理解されている。この手法は、裏を返して言えば、現地の社会の在り方には介入せず、内在する対立を上手く使って支配する方法であるともいえる。

その典型とも言えるのが、大英帝国によるインド帝国 (1858年～1947年) の統治である。イギリスの君主が皇帝を兼ねる同君連合の形式が取られたが、事実上イギリスの植民地であった。つまり、インド社会内部の対立を最大限利用することにより、ごく少数の植民地官僚と職業軍人で巨大なインドの統治が可能となった。従来の藩王国を存続させる統治の手法をとるとともに、カースト制度など社会の在り方には介入しなかった<sup>15)</sup>。

さらに一般的に、大英帝国の植民地政策はかつての被支配国から大日本帝国の朝鮮半島に対する植民地政策やシナ大陸における植民地経営のような批判を受けていない。むしろ、筆者の個人的な経験に則して言っても、一般的にはある種の畏怖と尊敬の対象となっている場合すら散見される。しかし、大英帝国のインドに対する経済的搾取・収奪は過酷なものであったし、アムリットサル事件 (1919年) では抗議集会をしている非武装の市民に対して、完全武装の部隊が発砲し1500人以上を虐殺したなど、非常に強圧的な面もあったことは注目せねばならない。

他方、このような無辜の市民の大規模な虐殺を伴う事件は日本の朝鮮統治では起こらなかった。また、日本は朝鮮を搾取するどころか、その30年間に及ぶ統治を通じて（1910年～1945年）、本国から財政資金を投入しており、寧ろ日本の方が朝鮮の開発のために自発的に経済的な負担を引き受けたといえよう。今日、朝鮮・韓国側は、日本が朝鮮に対して七奪（主権、国王、人命、国語、姓氏、土地、資源を奪った）を行ったと非難するが、客観的には、七恩（日本の国費で朝鮮に学校を建設、庶民にハングルを普及〔国語〕、日本の統治により朝鮮の食糧生産が増加、衛生環境の改善、餓死者や病死者の激減、朝鮮の人口が2倍に増加〔人命〕）を施したと考える方が妥当であろう<sup>16)</sup>。この点は、35年間の大日本帝国の朝鮮統治と800年に及ぶイングランド・大英帝国によるアイルランド統治を比較すれば一見極めて明らかになる。大英帝国はアイルランドに対して小麦の飢餓輸出を強いるなど、その搾取は激烈でアイルランド人を困窮させた。そのため、主食のジャガイモが疫病により枯死したことで起こった飢饉（1845年～1849年）が勃発し、人口の少なくとも20%が餓死および病死（80万人～150万人）、10%から20%が国外へ脱出した。また、今日、アイルランド人の殆どは英語を話し、固有のケルト語は辺境のアラン島などに少数の話者が残っているに過ぎない<sup>17)</sup>。ここでは、詳述しないが、日本の満洲国経営も優れた殖民地経営であったと言えるだろう<sup>18)</sup>。

したがって、問題の根本原因は、明らかに日米が近代化や民主化のために被支配国の社会秩序や伝統習慣を変革しようとしたことにあると言えよう。

## 6. 結 語

ここまで、本稿では米テレビ連続SFドラマ番組「スター・トレック（Star Trek）」における「最優先指令」と「暫定最優先指令」をとりあげ、

## 先進文明による介入に関する一考察

先進文明による介入を考察してきた。その結果、このテレビ未来劇は単に娯楽作品であるだけでなく、現在の先進国による対発展途上世界政策に関して最重要な論争の一つを暗に取り扱っていると解釈されることが明らかになった。また、比較文化的な視点が、比較政治研究や地域研究にとっても極めて重要なことも分かった。

具体的には、先進国側の根拠のない親近感や手前勝手な使命感に基づく介入は結局、異星人ならぬ発展途上世界における異邦人に対する無関心と無責任、冷徹な計算と冷酷な支配よりも劣っていたとの仮説に辿り着いた。もちろん、この仮説は大きな論争を生むであろう。というのは、現在、我々の時代は人権思想などの道徳観に根差した時代精神（Zeitgeist）とそれに基づく言説が「政治的に正しい（politically correct）」ものとして大きく政治判断や政策判断を動かしているからである。この論争の決着は現在の時代精神の持続性や今後の時代精神の変動にも大きく左右されるであろうから、そうすぐに簡単には出まい。さて歴史の審判はどう出るか、草葉の陰から垣間見たいものだ。

### （註）

- 1) Armond, G. A., G. B. Powell, Jr., *Comparative Politics: System, Process, and Policy*, Little, Brown, 1978.
- 2) 詳しくは、<http://www.cbs.com/shows/star-trek-series/>, accessed on November 8, 2015, 参照せよ。
- 3) <http://www.cbs.com/shows/star-trek-series/>, accessed on November 8, 2015.
- 4) 言うまでもなく、これは国連憲章第1章第2条第7項と瓜二つである。
- 5) “Enterprise Continuity Problem”, *Ex Astris Scientia*, [http://www.ex-astris-scientia.org/inconsistencies/enterprise\\_continuity.htm](http://www.ex-astris-scientia.org/inconsistencies/enterprise_continuity.htm), November 10, 2015.
- 6) *Memory Alpha*, [http://memory-alpha.wikia.com/wiki/Temporal\\_Prime\\_Directive](http://memory-alpha.wikia.com/wiki/Temporal_Prime_Directive), accessed on November 11, 2015.
- 7) ハワード・R・ターナー、久保儀明（訳）『図説科学で読むイスラム文化』

- 青土社，2001年。
- 8) 会田雄次・中村賢二郎，『世界の歴史12 ルネサンス』河出書房新社，1989年。
  - 9) 藤井康男。『異説糞尿譚—古今東西，ちよっとくさい話』光文社，1986年。
  - 10) 岡田英弘は日本文化は洗練された中華文明の亜種であると捉えるが，サミュエル・ハンティントン是世界七大文明の内の最小規模の一国家＝一文明であると捉えている。岡田英弘『倭国の時代』筑摩書房，2009年。Samuel P. Huntington, *The Clash of Civilizations and the Remaking of World Order*, New York: Simon & Schuster, 1996.
  - 11) 岡田は中国史を3つの時代に区分している。第一期は紀元前221年の秦の始皇帝による中国統一から西暦589年の隋による中国統一まで，第二期が589年から1276年の元による中国統一まで，第三期が1276年から1895年の日清戦争敗北までとしている。岡田英弘『中国文明の歴史』講談社，2004年，23頁～24頁。
  - 12) 高麗（918年～1392年）も一応統一王朝と言えるが，金や元遼陽等処行中書省により朝鮮半島北部には支配は及ばなかった。また，1231年から1273年まで元の占領下にあった。特に，1259年から1273年までは，高麗全域が元に併合された。1356年から1392年は，元から独立したものの，国内では親元派と親明派の抗争が起こり安定しなかった。
  - 13) イザベラ・バード（著），時岡敬子（訳）『朝鮮紀行～英国婦人の見た李朝末期』講談社，1998年。古田博司『『侵略』といえなかった朝鮮統治』『産経新聞』2015年4月15日。
  - 14) 川勝平太『文明の海洋史観』中央公論社，1997年。
  - 15) 本田毅彦『インド植民地官僚—大英帝国の超エリートたち』講談社，2001年。
  - 16) 黄文雄『韓国は日本人がつくった』ワック，2005年。
  - 17) 林景一『アイルランドを知れば日本がわかる』角川グループパブリッシング，2009年。
  - 18) 黄文雄『満州国は日本の植民地ではなかった』ワック，2005年。

## 先進文明による介入に関する一考察

### (参考文献)

- ・アレン・アイルランド『The New Korea 朝鮮が劇的に豊かになった時代』桜の花出版編集部，2013年。
- ・梅棹忠雄『文明の生態史観』中公文庫，改訂版，1998年
- ・岡田英弘『この厄介な国』ワック，2008年。
- ・黄文雄『中国・韓国の歴史歪曲』光文社。1997年。
- ・——『歪められた朝鮮総督府—だれが近代化を教えたのか』光文社，1998年。
- ・——『韓国人の「反日」，台湾人の「親日」』光文社，1999年。
- ・——『近代中国は日本がつくった』ワック，2005年。
- ・高木桂蔵『北京を支配する始皇帝の血』はまの出版，1989年。
- ・ジョージ・アキタ，ブラントン・パーマー（著），塩谷紘（訳）『日本の朝鮮支配を検証する 1930～1945』草思社，2013年。
- ・戸部良一『日本陸軍と中国—『シナ通』にみる夢と蹉跎』講談社，1999年。
- ・ヒルディ・カン，桑畑優香（訳）『黒い傘の下で日本植民地で生きた韓国人の声』・ブルース・インターアクションズ，2006年。
- ・松村昌廣「アメリカよ，日中戦争の教訓に学べ」『諸君！』2007年10月号。
- ・Robert Chaires, Bradley Chilton, ed., *Star Trek Visions of Law and Justice* (Law, Crime, and Corrections Series, version 1, University of North Texas Press, 2002.

**A Politico-Cultural Inquiry into Intervention  
in the Developing World:  
Contemporary Significance of *Star Trek's*  
Prime Directive**

MATSUMURA Masahiro

This study will explore the relevance of the so-called Prime Directive as found in *Star Trek*, a very popular U.S. T.V. science fiction drama, for comparative political and area studies, with a major focus on the application of it to advanced Western modern states' intervention in the developing world after multi-ethnic empires. The paper will elucidate the directive, followed by an interim definition of "advancedness" and "backwardness". The analytical focus will be placed on why such intervention will cause unexpected and undesired resultants that will further lead to intractable complication and entanglement later. Then the work will argue for the wisdom of "divide and rule" and warn of being driven by moralized commitment to intruding as modernizer and to missionary zeal to interfere as democratizer.

# ディケンズとジェンダー

—家父長制神話の崩壊とディケンズの限定的理解—

吉 田 一 穂

## 序

チャールズ・ディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) の作品をジェンダーの観点から考えるとき、気づかざるを得ないことがある。それは、ディケンズが家父長制神話の崩壊を描きながらも、男女同権を主張するような女性を描ききれていないことである。*Jane Eyre* (1847) のヒロインであるジェイン (Jane) と *Vanity Fair* (1847-48) のベッキー・シャープ (Becky Sharp) は、ガヴァネスとなり自力で社会を渡っていこうとするが、このように自立心を持ち力強く生きていく女性がディケンズの作品には少ない。それでは、完全に男性に依存して生きていく女性ばかりなのかというところではない。

例えば、*Little Dorrit* (1857) の若い未婚女性の教育者ジェネラル (General) 夫人は、自身の職業によって生計を立てている。彼女は、45歳で60歳の兵站部将校と結婚したが、夫の死後、自分の資産が少なかったため、良家の若い子女の精神教育と礼儀作法訓練をすることにする。彼女は、名門のやもめ男に14歳の娘の精神教育と礼儀作法訓練を頼まれ、7年間その仕事に従事し、その間ヨーロッパ旅行をして文化的教養の持ち主たる者が

---

キーワード：ジェンダー，家父長制神話，男性優位主義，女性の権利，女性の解放

見る必要がある様々な物を見て回る。娘もやもめ男も結婚し、役目が終わったので、ジェネラル夫人は折りよく申し出たウィリアム・ドリット (William Dorrit) に年額400ポンドで雇われ、彼の娘たちの教育係となる。

このことにより、ジェネラル夫人が自分の稼ぎにより生計を立てていることは明らかである。また、エイミーからアーサーに宛てた手紙の中で、ジェネラル夫人がフランス語やイタリア語の指導をしていることを述べていることから、彼女が莫大な財産の法廷相続人になったウィリアムの娘の教育係としてふさわしい教養の持ち主であることが解る。

しかし、ジェネラル夫人が小説のヒロインでないということに我々は注目しなければならない。作家の思想はヒロインの生き方に反映される場合が多いことから、我々はエイミーに目を向ける必要がある。*Little Dorrit* で、ひたすら父親思いのエイミーは、マーシャルシー (Marshalsea) 監獄から出た後、父親の意に沿うように生きようとするが、父親がマードル (Merdle) 夫人の夕食会でマーシャルシー監獄で生活していたときのアイデンティティに逆戻りすることにより、家父長制神話の崩壊に直面する。

家父長制神話の崩壊は、*Little Dorrit* だけでなく、すでに *Dombey and Son* (1848) と *Hard Times* (1854) にも見られる。その崩壊の過程においてある共通の要素が見られる。それは、ディケンズが父親と娘の関係において、人間の自然な状態の重要性を訴えているということだ。当然その人間の自然な状態の重要性の中には女性の自然な状態の重要性も含まれていることから、フェミニズムの先駆け的意味合いもあるわけだが、ディケンズは多くの女性たちを家庭を顧みてしかるべきであるという考えの元で描き出している。その境界線が色濃く現れているのが *Bleak House* (1853) である。

本論文では、*Dombey and Son* と *Hard Times* における家父長制神話の崩壊を考慮した後、*Bleak House* でどのような境界線が見られるかを考えて

いきたい。

## 1. *Dombey and Son* と *Hard Times* における 家父長制神話の崩壊

まず *Dombey and Son* における家父長制神話の崩壊について見ていきたい。この作品において顕著なことは、ドンビー (Dombey) 氏が社会的価値を家庭に持ち込むことによってもたらされる弊害である。フィリップ・ホブスバウム (Philip Hobsbaum) が「*Dombey and Son* は、ビジネスというよりも家族関係についての作品である」(Hobsbaum 110) と述べているように、作品はドンビー氏がビジネスを家庭に持ち込むことにより、家族関係、特に父親と娘の関係に支障を来す物語である。

ポール・デイヴィス (Paul Davis) が指摘しているように、祖父と父親から商会を引き継いだドンビー氏は、「17世紀と18世紀の重商主義の時代を表している人物」である (Davis 142)。また、アンドルー・サンダース (Andrew Sanders) が指摘しているように、「ドンビー氏は19世紀初期の営利主義の価値体系の代表者であり、金持ちで商売の世界で傑出していることを誇りにしている男」である (Sanders 122)。ドンビー氏にとって一番重要なことは、代々引き継がれてきた商会を確実に次世代に引き継がせることであった。もちろん引き継ぐ人間は彼の息子であり、娘は商会にとって全く関係のない存在なのだ。ディケンズが説明しているように、ドンビー氏は娘に嫌悪を抱いていないが、生まれたときから彼女に対して否定的なのである。それは、娘が商会を引き継ぐわけではないという彼の気持ちからきている。その気持ちは、息子のポール (Paul) が生まれてからますます強くなる。ドンビー氏は、姉のルイーザ (Louisa) に「ポールの幼少期が順調に過ぎ、彼が一刻も早く生まれながらにあてがわれたポストにふさわしい人間に成長してくれさえすれば、ほくに文句はありません。後はあ

いつが好きなように有力者の知遇を得ればいい」(46)<sup>1)</sup>、「誰もぼくと息子の間に割って入ってほしくないんです」(46)と言う。ドンビー氏の言葉は、ドンビー父子商会に娘は不要であることを暗示している。ルーイーザもまた、「フローレンス (Florence) はきっすいのドンビーにはなれっこありませんからね、たとえ千年生きながらえたって」(48)と言うことにより、ドンビー氏の考えを肯定している。すなわち、ドンビー氏の家庭では、男性の長子相続が当然であることから、男性優位主義的な価値観が支配的であると言える。

ポールの死後もドンビー氏は、娘に対する態度を変えない。彼はプライドのゆえに、また金で買えるイーディス (Edith) の身分と美しさのゆえに、さらにイーディスが別の息子を産んでくれるかもしれないがゆえに、イーディスと結婚する (Fielding 59)。しかし、イーディスはドンビー氏の期待を裏切り、結婚記念日にカーカー (Carker) と駆け落ちする。フローレンスは、父親を哀れに思い、今までの拒絶も恐れることなく駆け寄るが、ドンビー氏は残酷にも腕で彼女を斜めに打ち払う。父親の冷酷と無視に耐えてきたフローレンスであったが、彼女は自分にとって父親はもはやいないと考え、屋敷を飛び出す。

イーディスにも娘にも逃げられたドンビー氏は、商会の破産に直面する。ドンビー氏は自ら破産に直面し、ようやく拒まれ、打ち捨てられた娘の気持ちを知る。ドンビー氏は悲嘆と悔悛に打ちひしがれるが、彼を救ったのは戻ってきた娘であった。フローレンスはドンビー氏に祈りを捧げ、「パパ！ いとしいパパ！ ごめんなさい、どうか私を赦して！ 私、こうしてひざまずいて赦しを請うために戻ってきたの。こうでもしなければ、もう二度と幸せにはなれないわ！」(843)と言う。ドンビー氏は、娘が変わっていない、自分に赦しを請う姿を見る。フローレンスは自ら赦しを請うことにより、かつて冷酷だった父親を赦していることとなる。すなわち、家父

長制が崩壊した今となつては、ドンビー氏にとってフローレンス以外に救いはないのだ。家庭に慰安を与え、やさしく、害をもたらず、慎み深く、受動的で感じのよい、ヴィクトリア朝時代の理想的な女性フローレンスが家庭を飛び出すことは、フェミニズムの先駆けとしての行動ととらえることができる。しかし、フローレンスは、父親に赦しを請うことにより、依然としてヴィクトリア朝時代の理想的な女性であり続ける。一方で、社会的価値を重んじる自己を保ったまま硬直化したドンビー氏は、フローレンスによって救われることにより人間の自然な状態に目覚める。このことにより、フローレンスの役割は、ドンビー氏を救い彼の自然を回復させる役割だと言える。

次に *Hard Times* について考えてみたい。*Hard Times* において産業社会と教育の問題は、作品と密接に関係していて、ディケンズは、グラッドグラインド (Gradgrind) 家の親子関係を通してそれらの問題を明確に読者に提示している。作品において特に注目に値するのは、*Dombey and Son* の場合と同様に父親と娘の関係である。アンガス・ウィルソン (Angus Wilson) が指摘しているように、ルイーザ (Louisa) は生まれると同時に、父親の事実主義の教育によって人生を奪われた女性であり、あまりにも早くから、几帳面で物質万能の人生観を強いられ、父親の意志と弟に対する物質面の支援のために結婚する (Wilson 238)。ルイーザには、事実主義の教育を肯定も否定もする余地がなく、彼女は、いわば押しつけられた形で事実主義を受け入れるが、時の経過とともに事実主義に対するアンビヴァレンスがめばえる。彼女のアンビヴァレンスは、父親の価値観を受け入れるかどうかについての反対感情両立と言ってもいい。*Hard Times* において、トマス・グラッドグラインド (Thomas Gradgrind) 氏は、自身のことを「現実主義者」、「事実と計算を重んじる人間」(3)と説明し<sup>2)</sup>、子供を事実主義の教育で管理し、空想を禁じる。エドガー・ジョンソン (Edgar

Johnson) が指摘しているように、グラッドグラインド氏の学校を支配する原理は、コークタウン (Coketown) とその産業を支配する原理であるが、グラッドグラインド氏の事実一辺倒の哲学は、ヴィクトリア朝時代の実利主義の非人間的な精神の一表現である (Johnson 809)。たとえ不快なものであったとしても、事実一辺倒の哲学は、グラッドグラインド氏にとって信頼できるものであり、公平無私なものである。このような哲学に基づいてルーザーは育てられる。それは、グラッドグラインド氏の学校を支配する哲学でもあることから、グラッドグラインド氏は家庭に自分の信奉する哲学を持ち込んでいることになる。グラッドグラインド氏の信奉する事実一辺倒の哲学には、彼の社会的立場が密接に関係している。

*Hard Times* において、学校経営者グラッドグラインド氏は、工場経営者バウンダビー (Bounderby) 氏と同じ中産階級に属する。それゆえに、階級のことを考えると、グラッドグラインド氏は、将来産業のリーダーないしはその妻として自身の子供たちに事実による管理をさせるために空想を禁じたと言える。ルーザーが弟に「トム、私、不思議に思うのだけど」(49)と言っているのを立ち聞きしたグラッドグラインド氏は、「ルーザー、決して不思議に思ったりしてはならない！」(49)と言う。ディケンズは、「この言葉にこそ理性を教育するための機械的技術と奥義の源が存在した。感情や愛情の育成に身を屈してはならない。決して不思議に思ったりしてはならないのだ」(49)と説明している。感情や愛情の育成に身を屈することは、人生を誤らせるもととなるのだ。

すなわち、空想、感情、愛情は産業社会を支える事実中心主義によって無視されてきたのである。第1巻第15章「父親と娘」において、グラッドグラインド氏は、結婚に関しても事実を持ち出し、バウンダビー氏が50歳でルーザーが20歳で年齢が離れているが、イングランドとウェールズの統計数字から結婚の大部分が年齢のひどく離れた者の間で行われていること

から、バウンダビー氏とルーザの結婚に問題はないと言う。ルーザは、バウンダビー氏の申し込みを受け入れると父親に伝えるが、そうせざるを得ない経緯を説明している。ルーザは、「好みや空想，熱情や愛情についてこの私がどんなことを知っていると言うのですか？」、「説明できる問題，把握できる現実からどうやって逃げ出すことができたでしょう？」(101)と言う。彼女の言葉は、ルーザが父親の押しつける価値観により生きなければならなかったことを示している。ルーザは家父長制の秩序の中、父親の押しつける価値観の元で生き、政略結婚さえ受け入れざるを得なくなるのだ。

バウンダビー氏との結婚は、順当にいくと彼女自身の中産階級としての安定した生活と弟の出世を約束するはずであった。しかしながら、ルーザは自身の自然な状態に逆らいがたく、バウンダビー氏との生活を捨てる。折しもルーザはハートハウスに誘惑され、父親のところへ逃れる。彼女がはっきりと父親の教育に対して反発を表現するのはこのときである。ルーザは、「分かっていることはただ、お父様の哲学やお父様の教育では、私を救えないということです」(219)と言う。ルーザの言葉は、彼女が無視しようとしてきた自然を無視できなくなってきたことを示している。

娘の状態を見たグラッドグラインド氏は、「人によれば、頭の知恵と心の知恵というものがあると考えていよう。わしはそう思っていなかった。だが、今も言ったように自信がないんだ。頭脳こそ全能だと思っていた。しかし、そうでないのかもしれない。今朝になって頭脳が全能などどうして言えよう」(223)と言う。これは、娘の結婚の失敗を目の当たりにしたグラッドグラインド氏が自身の価値観の誤りをはからずも告白した瞬間である。このことから、*Hard Times* におけるルーザの役割は、人間の自然を無視した父親の教育方針の誤りを指摘する役割だと言える。

*Dombey and Son* においても *Hard Times* においても、ディケンズは、

家父長制神話の崩壊を描いている。このことは、女性の権利にディケンズが理解を示しているかのような印象を与えるが、その理解はあくまで限定的なものに留まる。女性の社会進出を全肯定するには至っていない。その理由が見られる作品が *Bleak House* である。次に *Bleak House* について考えてみたい。

## 2. *Bleak House* に見られるディケンズの境界線

*Bleak House* においてディケンズは、家庭の中でのみ留まらない女性を描き出している。その女性とは、ジェリビー (Jellyby) 夫人である。第4章「望遠鏡的博愛」(‘Telescopic Philanthropy’) でディケンズは、ジェリビー夫人が自分の周囲のことには気づかず、遠くのことばかり見ていることを描写している。彼女は、ニジェル (Niger) 河の左岸で、150から200ほどの健全な家庭にコーヒーを栽培させ、ボリオブーラ・ガー (Borriboola-Gha) の現地の人たちを教育させることを望んでいる。

*Bleak House* が出版される10年前、ファウエル・バクストン (Fowell Buxton, 1786-1845) によって管理されたアフリカ文明化協会 (African Civilization Society) とニジェル協会 (Niger Association) は、無謀な遠征を企画した。アルバート (Albert) とウィルバーフォース (Wilberforce) という名前の二隻を含む三隻の蒸気船がアフリカに向けて出港した。目的は、北部ニジェルとの貿易を開始することと、キリスト教の教化の中心地を確立することであった。この計画に関しては、多くの人が風邪で死んだので、全ての企てが一年以内に断念され、最終的には失敗に終わった。遠征に関するバクストンの主な目的は、合法的な商業によりアフリカ人を奴隷貿易から守ることであった (House 87)。

このバクストンによって計画された遠征がジェリビー夫人が没頭するアフリカ開発計画のモデルとなっていると考えられる。ジェリビー夫人は、

アフリカ計画に没頭するあまり、家庭を無視し、子供を無視している。第4章でエスタたちがジェリビー夫人の前に出るとき、子供たちの一人が大きな音を立てて階段から落ちる。その際のジェリビー夫人の様子をディケンズは、次のように描写している。

Mrs. Jellyby, whose face reflected none of the uneasiness which we could not help showing in our own faces, as the dear child's head recorded its passage with a bump on every stair—Richard afterwards said he counted seven, besides one for the landing—received us with perfect equanimity. She was a pretty, very diminutive, plump woman, of from forty to fifty, with handsome eyes, though they had a curious habit of seeming to look a long way off. As if—I am quoting Richard again—they could see nothing nearer than Africa! (36)<sup>3)</sup>

かわいい子供の顔が一段ごとにドシンドシと墜落を告げるので——踊り場の音を別にしても7回音が聞こえたとリチャードがあとで言いました——私たちは顔に不安の念をあらわさずにはられませんでしたが、ジェリビー夫人はその気配も示さず、平静そのものように私たちを迎えるのでした。40歳から50歳のあいだの、とても小柄で肉づきのよい、きれいな人で、その目は美しいけれども、はるか遠いところを眺めているように見える奇妙な癖のある目でした。まるで——またリチャードの言葉を使いますが——アフリカより近いところにあるものはすべて見えないみたいに！

「アフリカより近いところにあるものは全て見えないようである」と表現されるジェリビー夫人は、ポリオプーラ・ガー関係の仕事に追われ、子

供たちが怪我をしてもピーピー (Peepy) がゆくえ不明になって家に戻ってきても平然としている。キャディ (Caddy) は、母親から無視されているという疎外感を「ママは親としての義務をどうしたの？ きっと社会とアフリカに売り渡しちゃったんでしょ！」(47)と表現する。キャディは、自身が母親にとってペンとインクにすぎない存在であり、結婚すれば、もう二度とアフリカの話の聞かされることはない、と自身の本心をエスタに明かす。

ところで、ジョン・スチュアート・ミル (John Stuart Mill, 1806-73) が、ハリエット・テイラー (Harriet Taylor) への手紙の中で「*Bleak House* は、ディケンズの作品の中で最悪の作品であり、私の一番嫌いな作品である。この作品には、女性の権利をあざ笑うような下品な無礼さがある。そのあざ笑いは、最も下品なやり方で行われている。それは、下品な男性がかつて学問のある女性を子供や家庭を無視しているとしてあざ笑ったのと同じやり方である」(1854年3月20日)と述べていることを見落としてはならない。

このことにより、ミルがジェリビー夫人の非家庭的側面の強調に不満を持っていることは明らかである。ミルは *The Subjection of Women* (1869) で、才能のある女性が結婚したために天職につくことを妨げられてはならないという自身の考えを強調している。ミルの職業と地位を女性に解放するようにしなければならないという主張は、女性教育の発展という背景を持たないと意味を持たない。

イギリスで女子教育改革の必要性が認識されるのは、メアリー・ウルストンクラフト (Mary Wollstonecraft, 1759-97) の死後半世紀近くを経た1840年代の後半である。ミドルクラス女性唯一の職業であるガヴァネスが供給過剰に陥り、質の低下や経済的な困難に直面した。1843年ガヴァネス互恵協会が結成され、1848年にはガヴァネスの質的向上をめざして、ロン

ドン・クイーンズ・カレッジ (Queen's College) が設立された。クイーンズ・カレッジは、ロンドン大学キングズ・カレッジ (King's College) の教授フレデリック・モーリス (Frederick Denison Maurice, 1805-72) を校長として、職業技術よりも女性の人格形成をめざす一般教育を主眼とした中等程度の教育を提供した。その翌年、エリザベス・リード (Elizabeth Reid) が女性が管理運営に参画するベッドフォード・カレッジ (Bedford College) を創設した。二つのカレッジは、女性に自由の精神と真理探究の場を提供し、そこからフェミニストや先進的女性教師を輩出することとなった<sup>4)</sup>。

ミルが *The Subjection of Women* で職業と地位を女性に解放するよう主張していることは、女性をめぐるこのような社会的背景から不自然なことでないことは明らかである。それでは、果たしてディケンズは本当に *Bleak House* において女性の権利をあざ笑っているのであろうか？ ミルの見解に対して二つの異論を唱えることができる。

一つの異論は、作品のプロット展開から、ディケンズがジェリビー夫人の非家庭的側面を強調したと考えられることだ。ヒロインであるエスタは、結婚前のデッドロック (Dedlock) 夫人とホードン (Hawdon) 大尉との間に生まれた私生児である。エスタの伯母ミス・バーバリ (Barbary) は、妹の不祥事に怒り、子供を取りあげて引越してしまった。ホードン大尉が死んでしまったと思いこんだデッドロック夫人は、デッドロック卿と結婚する。彼女は、死んでしまったと思いこんでいた自分の子供が生きていることを初めて知る。折しも、エスタは天然痘に倒れる。四つ辻掃除人 (crossing sweeper) のジョーを助けたことから女中のチャーリーがまず天然痘にかかり、チャーリーの看病を続けたエスタにも伝染したのだった。やがてエスタは快方に向かうものの、その病は彼女の顔から美しさを奪ってしまう<sup>5)</sup>。

ジェフリー・サーリー (Geoffrey Thurley) は、天然痘をエスタにうつすだけでなくエスタの母親であるデッドロック夫人がエスタの父親であるホードン大尉の墓を訪れる際案内をしたことに注目し、ジョーがエスタと両親の取り成しをしていることを指摘している (Thurley 177)。社会から無視された状態にある子供ジョーは、ひどい状態のスラム街から天然痘を運び、エスタは病気になる。彼女の病気は、彼女のアイデンティティの物語を危機的状况へ追いこむ。ジョーもエスタも、親から無視された犠牲者と言ってもいい存在である。エスタは、ジョーによってもたらされた天然痘により、すっかり変わりはてた顔になってしまう。このことは、単にエスタがスラム街の影響を受けることを示すにとどまらず、作品において重要な意味を持つ。その意味とは、見捨てられた子供のイメージの強調である。このようなプロット展開を考えると、ディケンズが、コンテクスト上母親から見捨てられたような状態にあるエスタを強調するため、ジェリビー夫人の非家庭的側面を強調して描いていると考えられる。ディケンズの作品には、家庭の天使が多く存在し、*Our Mutual Friend* (1865) においても、改心し、ロークスミス (Rokesmith) との駆け落ち結婚の後、ベラ (Bella) が *Complete British Wife* (『完全なる英国の主婦』) という家事ガイドブックを参考にしている。このことから、ディケンズが家庭の天使としての女性の使命を強調し、その考えを支持していることは明らかである。また、ジェリビー夫人の非家庭的側面を強調した方がメイン・プロットにおいて効果的であるということは明らかである。

ところで、デッドロック夫人がエスタが病気の間、気も狂わんばかりだったと心情を吐露することに関し、興味深い天然痘に関する事実がある<sup>6)</sup>。それは、18世紀前半から19世紀前半にかけて、家族の中でまた大きなコミュニティにおいて、種痘の普及が親、特に母親に依存していたことだ。コンスタンティノープル (Constantinople) のイギリス人大使の妻であるメア

リー・ウォートリー・モンタギュ (Mary Wortley Montagu, 1689-1762) は、彼女自身天然痘にかかりながらも生き残った人であり、接種に関する情報を集めることを仕事とした。1718年彼女は、夫の留守中に息子に接種を受けさせた。1721年イングランドに戻った彼女は、外科医に娘の接種を託した。それ以後、彼女は社交界で接種を受けさせるのに重要な役割を果たした (Bennett 500)。また、1799年ロンドン天然痘・種痘病院における牛痘の最初の集団試行には200人の患者が来ていて、そのうち3分の2は7歳以下であり、母親の付き添いがあった (Bennett 503)。1800年7月ヨークシャー州アストウィズ (Astwith) の聡明な女性ワセ (Wase) 夫人は、娘に牛痘を接種した。その牛痘は、隣の村の家具職人によって接種された患者から柳葉刀で夫が持ってきたものであった (Bennett 507)。1808年4月から1810年4月までのセント・パンクラス (St Pancras) のロンドン天然痘病院における3804人の接種は、女性の中心的役割を確かなものだと示している。男性と女性の割合は、49.6パーセントと50.4パーセントであった。しかし、重要な点は、予防接種済みの人の90パーセント以上は、2歳以下であったことである。サンプルになったのは、家族の一員である年上の子供たちや大人たちであった。そういったサンプルで大人と言えども母親だった (Bennett 511)。このことから、天然痘である娘を放っておくことは、時代背景から考えても母親として失格と言われてもしかたがない。

ミルの見解に対する二つ目の異論は、社会貢献していれば、家庭をないがしろにしてもいいとは言えないという見解である。ここで、第4章のタイトルである「望遠鏡的博愛」(‘Telescopic Philanthropy’) に注目してみたい。望遠鏡にも、地上望遠鏡 (フィールド・スコープ)、天体望遠鏡、双眼鏡などいろいろな種類があるが、天体望遠鏡に関して言えば、望遠鏡が歴史的観点から女性に全く疎遠な物でなかったことを付け加えておきたい。18世紀後半にすでに英国学士院会員ウィリアム・ハーシェル (William

Herschel, 1738-1822) の妹であるキャロライン・ハーシェル (Caroline Herschel, 1750-1848) は、二つの彗星を発見していた。英国学士院会員ウィリアム・ソマーヴィル (William Somerville, 1771-1860) の妻であるメアリー・ソマーヴィル (Mary Somerville, 1780-1872) は、1816年ハーシェル家の望遠鏡を見ている。また英国学士院会員ウィリアム・パーソンズ (William Parsons, 1847-1920) のいとこであるメアリー・ワード (Mary Ward, 1827-69) は、科学的道具の歴史と機能について美しい挿し絵の入った本、すなわち、*The Microscope* を1868年に、そして *The Telescope* を1869年に出版していた。1660年に設立された英国学士院は、1945年まで規則により女性の会員を許可していなかったにもかかわらず、血縁関係により機会を得た女性は、望遠鏡に接する機会がなかったわけではないのだ<sup>7)</sup>。

しかし、ディケンズが望遠鏡と女性との関係を示すために「望遠鏡的博愛」という言葉を使ったわけではないことは明らかである。ジェリビー夫人の場合、子供たちへの愛情が欠けていることを示すために、「望遠鏡的博愛」という言葉が用いられている。また、ジェリビー夫人が家事をおろそかにしている様子をキャディは、次のように伝えている。

“As to Pa, he gets what he can, and goes to the office. He never has what you would call a regular breakfast. Priscilla leaves him out of the loaf and some milk, when there is any, over-night. Sometimes there isn't any milk, and sometimes the cat drinks it.” (46)

「パパはね、ありあわせのものを食べてお役所へ行くのよ。世間の人がいう、ちゃんとした朝ご飯を食べたことなんかありゃしないわ。前の晩にパンと牛乳があれば、プリシラが出しっぱなしにしておくの。牛乳のないときもあるし、猫が飲んじゃうときもあるわ」

## ディケンズとジェンダー

ジャーンダイス (Jarndyce) 氏にエスタが言う言葉、「まず自分のお宅の務めをなさるべきだと思います。それを忘れ、おろそかにしているかぎり、たぶん、他のどんなお仕事をなさってもだめなのではないでしょうか」(64)にディケンズの主張が窺える。すなわち、ディケンズは、博愛的事業に女性が携わることに反対しているのではなく、家庭をないがしろにしていることに問題があると言っているのだ。そのように考えるとき、ディケンズによるジェリビー夫人の取り扱いは、エスタの出生をめぐるメイン・プロットに繋がり、「女性は家庭や子供をないがしろにしていいいわけではない」というメッセージとなる。

## 結 び

コヴェントリ・パットモア (Coventry Patmore, 1823-96) の *The Angel in the House* (1854-63) やサラ・エリス (Sarah Ellis, 1799-1872) らのコンダクト・ブックに見られる理想的女性像は、男性優位社会が強いる家庭崇拜主義の産物である。ディケンズは自身の作品の中で男性優位主義に女性が耐え切れない姿を描き出している。*Dombey and Son* と *Hard Times* において、父親と娘の関係を通してディケンズは家父長制神話が崩壊する様を描き出しているだけでなく、女性の権利を認めつつも家庭をないがしろにしてはならないとメッセージを伝えている。この当時、女性の解放を象徴することとして、ブルーマリズムがある。これは、女性のドレスにおける解放と言ってもいい。きついしめ紐やコルセットから女性を解放したものとして画期的なドレスであった。ディケンズはブルーマリズムを揶揄しながらも、全般において女性の権利や自由を否定しているわけではない。

ディケンズの自伝的部分から一つの推察をすることができる。かつて父親ジョン・ディケンズ (John Dickens) の借財不払いのため、ディケンズ一家はチャールズ以外マーシャルシー監獄に入った。チャールズは、少し

前から働いていた靴墨工場で引き続き働くことになった。三ヶ月ほどして一家が監獄を出、チャールズも工場を辞めることになった。父親が工場の経営者と喧嘩したのが原因であった。このとき母親が、せっかく収入になるのだから工場の仕事を続けるようにと主張し、経営者の所へ謝りに行ったことが、チャールズの心に母親に対する深い失望感を抱かせることになった。靴墨工場で野卑な少年たちと一緒に仕事をしなければならなかったことだけでなく、母親から拒絶されたと感じ、彼は屈辱と絶望を感じた。このときの屈辱と絶望は彼の心に生涯トラウマとなって残った。

一方で、ディケンズの身近にアンジェラ・バーデット・クーツ (Angela Burdett-Coutts, 1814-1906) という女性がいたことも忘れてはならないことである。彼女は、母方の祖父トマス・クーツ (Thomas Coutts) から莫大な財産を相続し、慈善事業や寄付に貢献した女性である。ディケンズの運営に関わったユレイニア・コテージ (Urania Cottage) は、彼女によって設立された売春婦の更生施設である。

このことから、ディケンズが社会的な貢献をする女性の重要性を十分認識していたと考えられるが、かつて母親から見捨てられたと感じた経験から、社会的貢献をしているからと言って家庭や子供をないがしろにしてはならない、というメッセージを作品の中で伝えているのかもしれない。

#### 注

\*本稿は、欧米言語文化学会第4回年次大会におけるシンポジウム「ディケンズ生誕200周年を迎えて」(2012年9月2日、於日本大学江古田校舎)での発表原稿に加筆修正を施したものである。

1) Charles Dickens, *Dombey and Son* (New York: Oxford UP, 1987), p. 46. この作品からの引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、田辺洋子訳『ドンビー父子』(こびあん書房)を参考にした。

- 2) Charles Dickens, *Hard Times* (New York: Oxford UP, 1991), p. 3. この作品からの引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。
- 3) Charles Dickens, *Bleak House* (New York: Oxford UP, 1991), p. 36. この作品からの引用文はこの版により、引用末尾の括弧にページを示す。日本語訳の部分は、青木雄造、小池滋訳『荒涼館』(筑摩書房)を参考にした。
- 4) 1860年代には、エミリー・デイヴィス (Emily Davies, 1830-1921) を中心に女性高等教育運動が開始された。ケンブリッジ大学のガートン・カレッジ (Girton College) は、1869年、エミリー・デイヴィスにより、イギリスで初めて女性のため創設された全寮制のカレッジであった。1865年に発足した学校調査委員会で、女子教育の劣悪さや助教師の質の低さが指摘され、女子教育の改革や高等教育の必要性を支持する声の中流階級を中心に広がった。エリザベス・ギャレット (Elizabeth Garrett, 1836-1917) は、女性初のイギリス国内での医師免許取得者となった。

中等教育では、1871年女性教育全国連合が結成され、その翌年通学制女子学校会社が発足して、男子のグラマー・スクールをモデルとする女子ハイ・スクールが主要都市に設立された。この学校は、19世紀末にはイギリスの全域に普及し、学校数は38校、生徒数は7200人余に及んだ。また、学校調査委員会の勧告に沿った基金立の女子学校も、この時期に80校以上も新設された(香川 206-7)。

- 5) 天然痘は、盲目の最大の原因であり、外観を損なうことがよくあった。あばたは、女性の雇用、特に子供の世話や家の中での奉仕という仕事において有利に働くこともあった。しかし天然痘は、若い女性の結婚の見込みを減らしかねなかった (Bennett 499)。
- 6) 種痘は、エドワード・ジェンナー (Edward Jenner, 1749-1823) によって発明された。ジェンナーは、1775年頃初めて種痘について研究して、牛痘には実は二つ病型があり、その一方だけが人痘失敗例が多いのは、この二型を区別しないためであることを明らかにした。1796年5月14日に、乳しぼりの女の手にできた牛痘の水泡から内溶液を採取し、8歳の少年の腕に接種することに成功した。1798年には有名な「牛痘の原因と効能に関する研究」(‘Inquiry into Cause and Effects of the Variolae Vaccinae’) を発表した。1803年には、種痘を正しく普及させるため、ロンドンにジェンナー協会が創設さ

れた。そして最初の一年半に1万2000人に種痘を行った結果、痘瘡による年間死亡率が2018人から622人に減少した（ギブニー 525）。

- 7) 科学に携わる女性は他にもいた。ジェイン・マルセ（Jane Marcet, 1769-1858）は、英国学士院会員である夫アレグザンダー・マルセ（Alexander Marcet, 1770-1822）の励ましを受け、1806年 *Conversation in Chemistry, in which the elements of that science are familiarly explained and illustrated by Experiment* を出版した。この本は、マイケル・ファラデー（Michael Faraday, 1791-1867）に靈感を与え、科学に導いた。古生物学者であるメアリー・アニング（Mary Anning, 1799-1847）は、プレシオサウルス（plesiosaurus）などの自身の発見を認めさせるのに何年間も格闘した。英国学士院会員チャールズ・リル（Charles Lyell, 1797-1875）のアシスタントであったアラベラ・バックリー（Arabella Buckley）は、経験を用いて若者のための科学の概論 *A Short History of Natural Science, and of the Progress of Discovery From the Time of the Greeks to the Present Day*（1876）を書いた。

#### 作 品

- Charles Dickens. *Bleak House*. New York: Oxford UP, 1991.  
———. *Domey and Son*. Oxford: Oxford UP, 1987.  
———. *Hard Times*. Oxford: Oxford UP, 1991.

#### 参 考 文 献

- Bennet, Michael. “Jenner’s Ladies: Women and Vaccination against Smallpox in Early Nineteenth-Century Britain”, *History*. Vol. 93. No. 312. Ed. Joseph Smith. Oxford: The Historical Association and Blackwell Publishing, 2008.  
Davis, Paul. *Dickens Companion*. Harmondsworth: Penguin Books, 1999.  
Dickens, Charles. *Christmas Stories*. New York: Oxford UP, 1992.  
Fielding, K. J. *Studying Charles Dickens*. Harlow: York P, 1986.  
Hobsbaum, Philip. *A Reader’s Guide to Charles Dickens*. London: Thames and Hudson, 1972.  
House, Humphrey. *The Dickens World*. London: Oxford UP, 1961.  
Johnson, Edgar. *Charles Dickens: His Tragedy and Triumph*. Vol. 2. Boston: Little,

ディケンズとジェンダー

- Brown and Company, 1952.
- Lerner, Laurence. "An Essay on *Dombey and Son*", *The Victorians*. Ed. Laurence Lerner. London: Methuen & Co., 1978.
- Mill, John Stuart. *The Subjection of Women*. Ed. Stanton Coit. London: Longman, Green, and Co., 1924.
- Sanders, Andrew. *Charles Dickens*. Oxford: Oxford UP, 2003.
- Thurley, Geoffrey. *The Dickens Myth: Its Genesis and Structure*. London: Routledge & Kegan Paul, 1976.
- Wilson, Angus. *The World of Charles Dickens*. Harmondsworth: Penguin Books, 1970.
- 香川せつ子, 「女性教育史」, 『西洋の教育の歴史』, 山崎英則 (編著), ミネルヴァ書房, 2010
- ギブニー, フランク・B (編), 『ブリタニカ国際大百科事典 8』, テイビーエス・ブリタニカ, 1994.

## Dickens and Gender: The Collapse of the Patriarchal Myth and Dickens's Limited Understanding

YOSHIDA Kazuho

When we consider the works of Charles Dickens (1812-70) from the viewpoint of gender, we can safely state that Dickens represents the collapse of the patriarchal myth but he does not represent the women who assert equal rights of men and women.

In *Dombey and Son* (1848), Dombey's family has a system where the male head of the family has nearly absolute authority and the oldest male child falls heir to his father's property. The father's love and hopes are centered in Paul, Dombey neglects his daughter, Florence, and the estrangement is increased by the death of her brother. The representation of Florence's flight from her father takes the initiative in Dickens's later representations of feminism, but Florence's return is different from the return of Louisa Gradgrind in *Hard Times* (1854), because Florence asks her father to forgive her for her running away from home.

In *Hard Times*, Gradgrind imposes his sense of values of materialism on Louisa, and she gets married to Bounderby to obey her father's will and support her brother. However, she cannot go against her nature and gets out of her life with Bounderby. In both *Dombey and Son* and *Hard Times*, Dickens represents the collapse of the patriarchal myth. It shows his affirmation of women's right, but the two works does not show that Dickens completely approves of women's advances into society. *Bleak House* gives a clue to it.

In *Bleak House*, Mrs. Jellyby neglects her domestic responsibilities because of her mission in Africa. Her telescopic philanthropy causes her neglect of her

family when her young son Peepy gets his head caught in the area railing. John Stuart Mill (1806-73) showed his opinion about *Bleak House* in the letter to Harriet Taylor: '*Hard Times* has the vulgar impudence to ridicule rights of women. It is done in the very vulgarest way—just the style in which vulgar men used to ridicule 'learned ladies' as neglecting their children and household etc.'

Mill's opinion admits of refutation, because it is likely that Dickens emphasizes the bad side of Mrs. Jellyby who neglects domestic responsibilities, in *Bleak House* which shows both the situation of Esther as an orphan and the lack of responsibility of Mrs. Dedlock. Dickens did not deny the right and the conspicuous activity of women. He also knew the usefulness of women who contributed to society.

As the granddaughter of Thomas Coutts, founder of the London bank, Angela Burdett-Coutts (1814-1906) was one of the wealthiest woman in Victorian England. She was one of the busiest as well, not only helping to manage the bank, but also engaging herself very activity in an enormous range of philanthropic project. Urania Cottage, at which fallen women could acquire new skills, was set up with Dickens's assistance.

Although Dickens knew the usefulness of women like Angela Burdett-Coutts, he represented the negative side of Mrs. Jellyby. His representation of Mrs. Jellyby might come from his own experience. Dickens had a bitter experience with his own mother: she was against the plan that he would be released from the blacking factory, and tried to keep him there. Dickens unconsciously reveals his conviction that maternal love is important in his works. In *Bleak House*, the absence of mother has a great influence on Esther's life and Esther feels a deep sense of isolation. Therefore Dickens might have used his past experience with his own mother.

# Emotional Intelligence in Education

Hershey WIER

## Summary

This paper sets out to show the benefits of emotional intelligence (EI) in developing successful students and world citizens. Researchers Mayer and Salovey, who developed the ability model of EI, describe EI in part as the ability to perceive and regulate emotions, as well as to enlist them to facilitate emotional and intellectual growth (Mayer, Salovey, & Caruso, 2004).

Though historically, education systems have emphasized IQ (intelligence quotient), there are a number of advantages to adding EI programs to school curricula in order to boost EQ (emotional quotient) levels. These advantages include: creating a positive educational environment where students, staff, and teachers feel that they are valued, and feel safe emotionally and physically; a positive correlation between EQ and academic achievement in students; amelioration of student attrition rates; amelioration of teacher burnout symptoms; and, improved perceived performance in educational administrators.

In university EFL classrooms in Japan, utilizing EI techniques during discussion activities gives students a chance to think about how classmates make them feel and vice versa. In an environment where it is common for class-

---

**Keywords:** EI, Education

mates to ignore each other in class, and to loathe social interaction, teaching EI techniques helps to develop social skills that will be needed when these students go out into the world of work.

Implementing a comprehensive EI program in schools is a large undertaking, one which means a fundamental change in the way all players in an educational institution interact with each other. To implement change effectively, it must begin at the top, with educational administrators first being trained in EI techniques, in order to learn how to implement such change in a way that does not alienate staff, which respects the concerns of staff, and in a way in which staff will appreciate the benefits of EI for themselves and their students. All players involved must also be aware of certain caveats to be considered when utilizing EI techniques, due to cultural and personality differences amongst individuals.

This paper suggests that a comprehensive approach to implementing EI in education would potentially have a positive effect on the promotion of a peaceful world. The current world situation is such that we see problems being solved by violence and war, rather than through intellectual discussion and negotiation. An EI program that begins in kindergarten and extends through university can be one way in which to develop a population that understands the importance of implementing peaceful means to solve problems. Imagine a world in which students spend upwards of 12 years of their lives in school EI programs, learning how to get along with each other, and how to accept, value and negotiate differences. They can learn to revile the thought of harming another human being as a means to an end, and to despise the thought of warfare. Theoretically, this is possible. A more peaceful world could be possible when EI is implemented on a comprehensive basis.

## 1. Introduction

Large swaths of the world are embroiled in humanitarian crises. We see in the Middle East currently, for example, that human beings are being killed in large numbers, their homes, livelihoods, and countries are being destroyed. That governments oversee the vast proportion of education, and yet at the same time persuade their citizens to participate in the killing of fellow human beings through their militaries, reveals a lack of peaceful emotional intelligence skills on a large-scale. On a macro level, if our educational institutions would advocate for non-violent solutions, this world would conceivably become a more peaceful place. However, as things currently stand, government entities promote and engage in the use of violence in order to conquer differences. This violence is committed by once children who likely never had the opportunity to learn how to use peaceful activities such as negotiation, to solve problems large and small. To negotiate for a peaceful win-win outcome in complex situations takes extensive emotional intelligence (EI/EQ) skills, which largely go untaught in schools. People who understand how to sense and work with the emotions of others are less involved in aggressive interactions (Freedman & Jensen, 2007). It is becoming increasingly imperative for educational systems to develop children into adults who are trained in using such emotional knowledge, so that they are less apt to resort to aggression to solve problems. We must develop human beings who stand up to authorities who order them to fight in senseless wars and to resort to violence as a solution; and, who understand how to create peace within our homes, schools, workplaces, society and world. Teaching students to work out solutions using non-violent means can be done in part through EI techniques. Developing EI must

start in childhood, and continue to be taught through university, so that as students become adults, they will have learned how to solve differences using peaceful means, and shun barbaric acts of violence and war.

On a micro-level, in the English as a Foreign Language (EFL) classroom, utilizing EI techniques is beneficial in part by helping students assess how others around them are feeling. EI techniques assist students in more effectively conversing with each other, starting with the simple act of acknowledging one another's presence. In the university EFL classrooms in Japan where I work, it is rather common for students, largely Japanese university freshmen, to enter the classroom, sit in their seats and stay silent, without making eye contact, nor conversation with nearby students. They often occupy themselves by sleeping, daydreaming, or looking at their smartphones. Further, upon beginning small group activities, regardless of the number of times students have worked together, it is common for them to behave in a detached manner. They may stare at the floor and remain silent. They then require prompting from the teacher in order to begin speaking with each other. Even then, conversations are stilted and short in duration. When they have completed the activity at hand, they go back into silent mode, and once again do not acknowledge each other. Students lack social skills and the ability to get along naturally, without teacher guidance. Incorporating EI techniques in the Japanese EFL classroom assists students in becoming friendlier and more conversational. Such attributes are unquestionably an asset in school, the workplace, and society. On a macro level, when students feel disconnected from each other, there is less likely to be the kind of human connection that is necessary in creating citizens of society and the world who will reject the notion of engaging in violence as a solution, even when ordered to do so. EI techniques aim to tap into

## Emotional Intelligence in Education

one another's humanity. To recognize that all people basically need the same things: to be heard, to be accepted, to be respected, to be loved, and to be treated in a humane manner. For students to learn this in their schools and universities is important in the effort of creating peaceful, emotionally mature world citizens.

The benefits of EI affect more than just students. Teachers and administrators also benefit because the same emphasis on understanding the emotions of others is key. In order for teachers to effectively implement EI, educational administrators must be competent in utilizing EI methods in introducing such programs to teachers. Introducing organizational change is not easy. This is especially true when dealing with overworked teachers. It is common for teachers in educational organizations to suffer from overwork and stress due to issues such as decreasing pay, job cuts, and increasing workload. Further, teaching is people-intensive in nature. Teachers must continuously be mentally on guard while on the job, and their workdays can be long. They are constantly monitoring, guiding, responding to questions and solving problems. They must deal with discipline issues on a regular basis. They must deal with students who present with cognitive and/or social adjustment issues. They must deal with heavy workloads that follow them during evenings and weekends. Teachers are engaged in work activities on a continual basis. Such working conditions contribute to stress and burnout. When implementing EI programs in schools, teacher opinions, both positive and negative, will naturally be voiced. When administrators show effectiveness in using EI techniques to listen and to provide thoughtful impetus in providing solutions to workplace issues, the outcome is win-win. Teacher concerns are heard, and ideally, dealt with by administration in a respectful, thoughtful, and effective

manner, in part thanks to EI training in leadership that administrators will have received.

This paper explores the benefits of implementing emotional intelligence principles in educational environments, while at the same time, examining some of the challenges.

*Keywords:* Emotional intelligence, education.

## **2. Definition and Scientific Background**

### **2.1 Defining Emotional Intelligence**

Mayer and Salovey define emotional intelligence as “the ability to perceive emotions, to access and generate emotions so as to assist thought, to understand emotions and emotional knowledge, and to reflectively regulate emotions so as to promote emotional and intellectual growth” (as cited in Cobb & Mayer, 2000, p. 5). Emotional intelligence offers a way to blend thinking and feeling in order to make optimal decisions (Freedman & Jensen, 2007). In most areas of society, people are interconnected, and work gets done through people cooperating to varying degrees. In such cases, a high IQ is not the only crucial factor in success because ideas need to be effectively communicated, accepted, and collaborated on. To achieve acceptance in a group requires social, emotional, and communicative skills, in short, EI. Therefore, in order to succeed, it is important to have not just a high IQ level, but a high EQ level, as well.

### **2.2 The Science Behind Naming Feelings**

Naming one’s feelings is a core practice in EI. According to O’Connor (n.d.), a study conducted by UCLA professor of psychology, Matthew D.

Lieberman, naming our feelings makes sadness, anger and pain less intense. When we feel angry, Lieberman states, we have increased activity in the amygdala, which sets off biological responses to protect from danger. When an emotion such as anger is labeled, Lieberman noted a decreased response in the amygdala and increased activity in the right prefrontal cortex, which helps to inhibit behavior and process emotions. Lieberman states that labeling emotions is akin to hitting the brakes on emotional responses, thereby resulting in less anger or sadness. Lieberman believes that when emotions are labeled, we can be less reactionary and more responsive (O'Connor, n.d.).

### **3. Problem Statement**

With regard to findings in this report on the positive effects of utilizing EI principles in school settings, this paper has turned much to the work of Joshua Freedman and Anabel Jensen. Freedman developed an EI-focused curriculum; and, Jensen developed a variation of an EI curriculum called Self-Science (Jensen capitalizes it as such), which in part, utilizes specific activities to help people overcome negative feelings in order to develop respectful behaviors.

Both curricula were included in Daniel Goleman's 1995 landmark book, *Emotional Intelligence: Why It Can Matter More Than IQ*, a work which helped bring the concept of EI into the mainstream.

Regarding schools of thought, this paper refers largely to the ability model of EI, developed by Peter Salovey and John Mayer. It focuses on the individual's ability to process emotional information and apply it to the social environment.

In spite of the fact that humans need both academic and interpersonal skills in order to succeed in the world, education traditionally has focused primarily

on the former. Given the world conditions previously described, interpersonal skills and emotional intelligence are in dire need of being taught widely in schools, so that the general population understands how to arrive at solutions peacefully at all levels of society. Such skills can be developed through learning and applying principles in EI.

Applying EI principles can also help mitigate the effects of stress and incidences of teacher burnout. There is an ongoing decline in the quality of working conditions in the education field, particularly for non-tenured university instructors. For example, in Japan, issues such as declining pay; outsourcing of teachers to temporary agencies at a fraction of the salary that direct-hire university lecturers enjoy; large class sizes; lack of autonomy regarding the number and type of classes meted out to teachers; diminishing respect and courtesy from administrative and office staff; as well as lower prestige, due to the transitory and lowly paid nature that has been made of many teaching positions, contribute greatly to stress in the profession. Additional issues include a lack of decision-making power regarding important issues that affect teachers' futures; lack of sick leave and job security; low academic proficiency levels of students; and, lack of common courtesy, and disciplinary issues in some students.

This paper endeavors to explain how EI can help create students who succeed both in school and society; how learning peaceful conflict resolution strategies can contribute to a more peaceful world; to help teachers to be better prepared to handle the many stressors in their profession; and, to help administrators who are prepared to make change in their schools using EI in ways that do not alienate staff and teachers. Though the research discussed in this paper is not specifically focused on students in Japan, the results of such

research are applicable to many situations in Japan.

## **4. Merits of EI**

### **4.1 Assists in Creating Positive School Environments**

Education is a field in which human interaction is key. And, human interaction is necessary to succeed in life. Thus, a good education ought to give students tools which help them to successfully interact with people. One set of tools is interpersonal skills, and they can be taught through principles of EI. Gibbs declared that emotional IQ may be the best predictor of success in life, and redefines what it means to be smart (as cited in Cobb & Mayer, 2000). Even so, schools have traditionally focused on academic achievement over interpersonal skills. According to Freedman and Jensen (2007), EQ is “strongly linked to staying in school, avoiding risk behaviors, and improving health, happiness, and life success” (p. 2).

School environments should also have organizational cultures that are uplifting and positive. Freedman and Jensen (2007) assert that “it is possible to ascertain the emotional context, or climate, of a school or organization,” (p. 8); and, that if emotional intelligence principles are being implemented, that “perceptions of the climate will be generally more positive” (p. 8).

Positive, uplifting school environments are important because bullying and sometimes even violence in academic environments are not new problems. Bullying and, at very least, dysfunctional, hostile interactions take place amongst players in educational environments between and amongst teachers, staff, administration, students and parents. All players in a school environment would do well to be trained in emotional literacy. According to Freedman and Jensen (2007), emotional literacy is developed through appraising emotions,

and is an important component of emotional intelligence because it reduces the emotional reaction in the amygdala, which is responsible for fight-flight-freeze reactions. The researchers contend that when emotional intelligence is being exercised, thoughts and feelings are working together. People are then able to self-regulate feelings and reduce behaviors that could potentially escalate in volatility (Freedman & Jensen, 2007). Further, Shriver and Weissberg (2005) assert that students who learn social and emotional principles “have significantly better attendance records; their classroom behavior is more constructive and less often disruptive; they like school more; and they have better grade point averages” (as cited in Freedman & Jensen, 2007, p. 9). This is encouraging news for the many Japanese university students that I work with who are of remedial to low intermediate English language proficiency, with a large percentage of students in low to moderate ranges of motivation. With the assistance of EI techniques, attitudes, performance, as well as attrition rates are set to improve.

#### **4.2 Positive Correlation Between EQ and Academic Performance**

It is common to note that IQ and academic achievement are strongly correlated. However, EQ and academic achievement are still thought to be fairly unrelated realms. Thus, the concept of EI principles being incorporated into school programs is still in its nascency. However, according to Parker et al. (2004), as depicted in Figure 1, students with the highest grades have the highest EQ, showing a strong positive correlation between EQ and academic achievement (as cited in Freedman & Jensen, 2007).

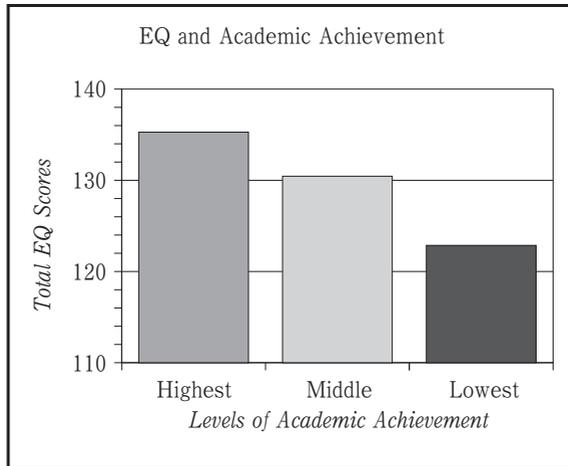


Figure 1. Bar graph showing the positive correlation between EQ and academic achievement. From “Academic achievement in high school, does emotional intelligence matter?” by J. Parker et al., 2004, *Personality and Individual Differences*, (37), pp.1321-1330 (as cited in Freedman & Jensen, 2007, [www.6seconds.org/pdf/case\\_for\\_EQ\\_school.pdf](http://www.6seconds.org/pdf/case_for_EQ_school.pdf), p. 9).

### 4.3 Amelioration of Student Attrition

Through my observations of university classes in Japan, student stressors include making friends, passing courses, and, with increasing frequency, financial pressures. Freedman and Jensen found that levels of stress can be so high as to derail students from their projected academic trajectory; and, that utilizing emotional intelligence skills seems to help students to more effectively cope with such stress (2007). Students with limited emotional skills are more likely to experience stress and emotional difficulties, and will benefit from emotional skills that allow them to cope with these difficulties (Fernández-Berrocal & Ruiz 2008).

Petrides, Frederickson, and Furnham suggest that “emotional intelligence

may be especially important for students at risk” (as cited in Freedman & Jensen, p. 11). Freedman and Jensen (2007) found that “students with higher emotional intelligence are less likely to drop out of school than their peers” (p. 13). According to a study, and as shown in Figure 2, students who were high academic achievers also showed more interpersonal competency, adaptability, and stress management than lower achieving students (Freedman and Jensen, 2007). An emotionally intelligent school environment has a major effect on performance: When students feel a sense of belonging in a respectful environment, they are more able to focus their energy on academic work (Freedman and Jensen, 2007). Students performing well academically are less likely to withdraw from school.

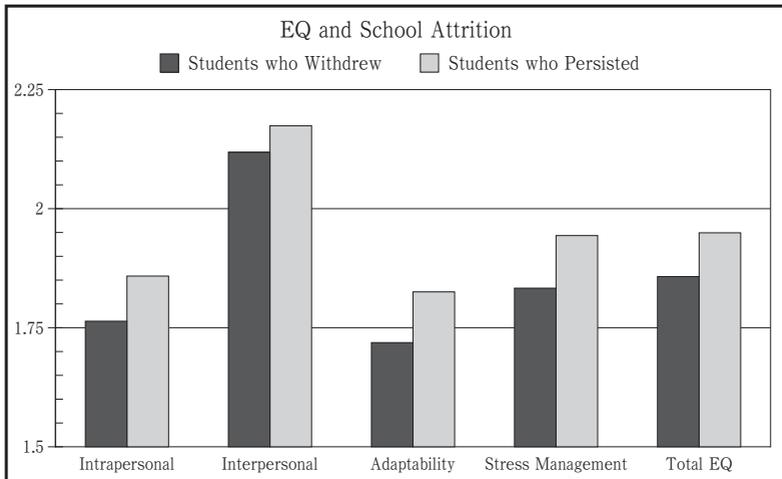


Figure 2. Bar graph showing the negative correlation between university attrition and EQ. From “A case for emotional intelligence in our schools,” by J. Freedman and A. Jensen, 2007, [www.6seconds.org/pdf/case\\_for\\_EQ\\_school.pdf](http://www.6seconds.org/pdf/case_for_EQ_school.pdf), p. 14.

#### **4.4 Amelioration of Teacher Burnout**

Research corroborates claims of stressors in the teaching profession. In addition to stressors previously mentioned in this discussion, Johnson, et al. assert that “many teachers report high levels of stress - or the absence of positive emotions in school” (as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett, 2013, p. 264). Elvira, Cabrera and Hargreaves add that “Stressors include non-useful policies, time-consuming bureaucratic tasks, and challenging students, all of which make the teaching profession one of the most demanding occupations (as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett, 2013, p. 264). It is this researcher’s observation that additional stressors stem from lack of autonomy of particularly adjunct instructors to: freely choose classes that have fewer behavioral problems, higher maturity, higher academic proficiency; control class size; and, arrange teaching schedules. Further, the emotional impact of teaching is great. Brotheridge and Grandey state that teachers experience “intense, emotion-laden interactions on a daily basis, and have a great number of emotional demands compared to most other professionals” (as cited in Iqbal & Abbasi, 2013, p. 224). Johnson, Travers, and Cooper add that “many educators report poor physical and psychological health due to high levels of stress and job dissatisfaction” (as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett, p. 264). Kyriacou and Pratt state that in reaction to such stressors, some teachers develop psychological symptoms such as frustration, anxiety, irritability, emotional exhaustion, and psychosomatic and depressive issues (as cited in Vaezi & Fallah, 2011).

That such stress leads to negative consequences in education is a logical outcome. Regarding lower performance on the part of teachers, Borg, Riding, and Falson state that stressed and dissatisfied educators tend to have negative

self-views about their teaching, less professional commitment, and are absent more often; and, Wubbels and Brekelmans add that such teachers have students who then perform lower academically (as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett, p. 264).

One possible solution to ameliorating the effect of stressors, which would then assist in decreasing teacher burnout, building healthy relationships, and enhancing student performance, is to develop teachers' social and emotional skills in order to build resiliency. These skills have been shown to help teachers deal with conflict, manage unpleasant emotions, and improve classroom climate (Brackett, Palomera, Mojsa-Kaja, Reyes, & Salovey, 2010; Carson, Plemmons, Templin, & Weiss, 2011; Sutton, 2004, as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett, 2013). Mendez found that “those who score high on emotional intelligence skills are more likely to cope effectively with environmental demands and pressures connected to occupational stress and health outcomes” (as cited in Iqbal & Abbasi, 2013, p. 223). Naturally, eliminating the stressors themselves would be the optimal choice. However, even in the best of circumstances, the teaching profession, being highly people interactive, has an endemic propensity for stress. Applying EI strategies to help deflect stress is beneficial both to teachers and their students.

#### **4.5 Enhance Performance of Educational Administrators**

Though teachers can independently do what they can to apply EI principles in their classrooms, a school's leadership dictates the school's organizational climate. If teachers, staff and/or students are not treated by the administration in emotionally intelligent ways, there will naturally be negative effects on performance, as well as a negative impression of the administration. Moore

asserts that emotional intelligence provides administrators the awareness necessary to lead staff in developing a common school vision, maintaining high student achievement, and creating school cultures of trust and respect (2009).

Administrators who choose to implement emotional intelligence programs in their schools will likely face a number of emotional reactions from teachers. Such an implementation is; large-scale change, and such change does not come easily. To implement change effectively, Moore (2007) found that administrators benefited from receiving training in emotional intelligence skills themselves (as cited in Moore, 2009). Williams discovered that competencies gained through emotional intelligence training such as self-confidence, organizational awareness, and conflict management significantly differentiated outstanding principals from typical principals (as cited in Moore, 2009). In one study, as shown in Figure 3, Freedman and Jensen discovered that school administrators with high EQ were more often rated as above average in job performance by supervisors and staff; and, that EQ was a significant predictor of administrative success (2007). Clearly, in order for teachers to buy into and facilitate an emotional intelligence program requires administrators who respect and embody the concept themselves.

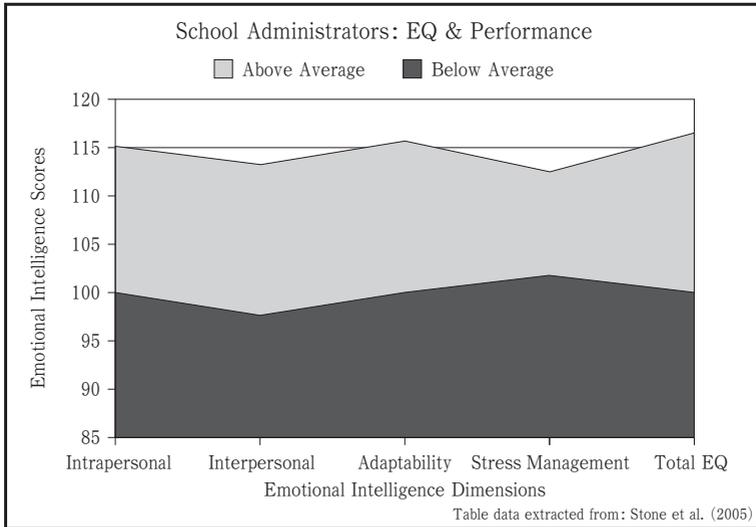


Figure 3. Graph showing the positive correlation between educational administrator job performance and EQ. From “A case for emotional intelligence in our schools,” by J. Freedman and A. Jensen, 2007, [www.6seconds.org/pdf/case\\_for\\_EQ\\_school.pdf](http://www.6seconds.org/pdf/case_for_EQ_school.pdf), p. 21.

In addition, hope for EI programs to be implemented in schools lies at the administrative level. When administrators buy into the EI concept, EI can be more successfully be implemented at all levels. In this way, students, teachers, staff and administrators are more likely, with the help of applied EI strategies backed by the administration, work positively, cooperatively and effectively together.

#### 4.6 Teaching Tolerance and Acceptance of Others

In O'Connor (n.d.), Lieberman found that when we listen to each other without judging, with empathy and compassion - while naming an emotion or emotions - we uncover the emotions that are fueling our behavioral choices.

Our self-awareness, Lieberman found, increases, as well as our ability to connect with and understand ourselves, and to express ourselves more clearly (O'Connor, n.d.). From an educational standpoint, this increased tendency to communicate in an emotionally intelligent manner is a positive aspect in terms of helping students to feel accepted and affirmed in the school environment, as well as, conceivably, to ameliorate attrition rates. This would also apply to the language learning classroom. Students who ordinarily feel uncomfortable speaking with other students will feel more included, accepted and affirmed during discussion activities. That students, and particularly Japanese students feel insecure and anxious in English group discussions, is well known. EI principles are designed to help alleviate such anxieties through allowing the acknowledgment of feelings, and providing channels for those feelings to be honestly discussed together.

#### **4.7 Relatively Quick Results**

Freedman and Jensen found that significant improvement in EQ occurs after a relatively short period of training of six weeks (2007). As shown in Figure 4, student EQ scores increased by almost five points, Freedman and Jensen found, on an assessment called EQi-YV, about which the creator, Reuven Bar-On, wrote that the students were better able to express themselves and to relate to others; as well as, to manage and control their emotions, and to adapt to their immediate school environment (Freedman & Jensen, 2007, p. 19).

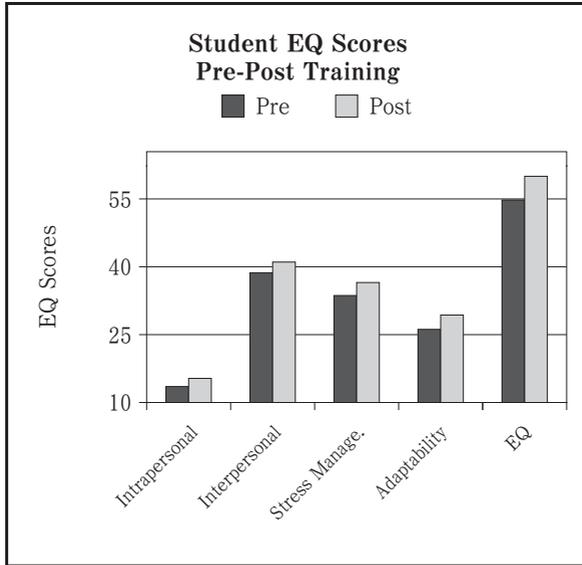


Figure 4. Graph showing student scores before and after EQ training. From “A case for emotional intelligence in our schools,” by J. Freedman and A. Jensen, 2007, [www.6seconds.org/pdf/case\\_for\\_EQ\\_school.pdf](http://www.6seconds.org/pdf/case_for_EQ_school.pdf), p. 19.

We see in this finding that EQ improvements are relatively quickly achieved, and the return on investment - behavioral, academic, and life success benefits - are great. A relatively quick return on investment is good news for teachers who may feel that they are too busy to incorporate EI principles in their classrooms.

## 5. EI in the Classroom

### 5.1 Improving interpersonal skills

Group communication can be a trying ordeal for the many students I work with who suffer from low self-confidence or issues that cause them to be very uncomfortable, sometimes nonparticipative in group discussions and activities.

## Emotional Intelligence in Education

The same group dynamics play out in each class session, with often little being done to correct the root cause. This scenario is troubling both to students and teachers.

Students can be guided to use EI in the classroom by teaching them how to express how they feel during their group activities. Such an activity is conducive to many EFL classes in which group discussions are a part of the lesson plan. Williams promotes the following EI technique entitled, “Are We Progressing?” On a scale of 1 to 10, students respond on paper to statements that determine what was felt during each group activity. In this process, Williams includes statements such as: I feel valued; my opinions count; and, I feel safe sharing my ideas, as shown in Appendix A. In addition, Williams also gives students the opportunity to state what worked in the group, and what could be improved. Further, in Williams’ activity, teachers average the scores after each session, and post them so that the class can see their progress (2007). This activity gives students an opportunity to talk about issues such as how they felt they were treated in their group; and, to discuss issues that would otherwise go without closure. In the EFL classroom, students have not only the usual concerns such as self-consciousness about their appearance and what others are thinking of them, but also about L2 comprehension and production. It is understandable that much behavior, some of it which is antagonistic, such as power plays, interruptions, and insults, transpires quickly and cannot be fully absorbed nor reacted to cognitively, analyzed, nor verbalized on the spot. The case is also true when students are speaking casually in L1. The treatment that students receive during casual L1 conversations before, during and after class, is often transferred to group learning activities carried out in L2. Therefore, expressing feelings about L2 group activities can positively af-

fect L1 conversations, conceivably improving a student's overall classroom experience.

## 5.2 Assessing Quality Communication

What is a quality interaction with regard to implementation of EI techniques? Pugh (2008) set about assembling a set of observation points with which the quality of verbal interactions is rated, as shown in Appendix B. Though the list is extensive and could possibly be looked upon as a burden for teachers to implement, the aspects of the evaluation itself are worth noting. First, included in the group of attributes are factors such as eye contact, facial expressions, gestures, voice intonation, voice volume, and confirming that students fully understood what the speaker was saying (Pugh 2008). Such attributes are transferable to common exercises, for example group discussions and speeches in language learning classrooms. Paralinguistic attributes such as feelings, facial expressions and gestures; and, sounds depicting emotion such as disgust or joy, are rightfully acknowledged as components of communication. It is important for students to understand that communication is more than lexical utterances. Indeed, paralinguistic forms of communication are absorbed by and can make a strong impact on the receiver. Therefore, it is important to understand the power that such communication has, especially as it relates to the practice of communicating in an emotionally intelligent manner. To accommodate teaching sessions that are already jam-packed with activities and goals, the attributes in the form in Appendix B can be reduced and/or modified to suit class needs.

## **6. Some Caveats and Solutions in Utilizing EI**

### **6.1 Resistance to Implementing EI Programs**

Though treating people with respect, acceptance and understanding are common concepts, implementing a new program such as EI is understandably met with concern given the myriad challenges that teachers already face. Thus, when introducing EI, it is imperative that its benefits are clearly and thoroughly explained; and, that those who are in charge of introducing and implementing change do so while demonstrating competency in EI principles. Applying EI principles during the change process would help to ensure that respect and care are practiced during the transition. Moore states that restructuring and reorganizing a school requires a leader skilled in emotional intelligence (2009). Fullan remarks that in the change process “emotions frequently run high”; and, that leaders must possess emotional intelligence and be able to create successful relationships (as cited in Moore, 2009, p. 21).

### **6.2 EI vs. Unbridled Positive Thinking**

Positive thinking is a cliché that has taken society by storm. However, simply thinking positive thoughts does not necessarily solve problems. Cobb and Mayer (2000) state that “a social and emotional approach that emphasizes positive behavior and attitudes can be a turn-off for a negative thinker - often the very student that the teacher is trying to reach” (p. 17). Further, Forgas (1995) states: “Positive messages appear less believable and less sensible to unhappy people than sad messages do” (as cited in Cobb & Mayer, 2000). Thus, according to Cobb and Mayer (2000), troubled students may actually be alienated by insistent positivity.

In a similar vein, using EI to insist that students must always be considerate can bring unwanted results. Cobb and Mayer state that when too much emphasis is put on students getting along with one another, this could stifle creativity, healthy skepticism, and spontaneity. And, that teaching people to always be tactful or compassionate then rules out allowing students to discern occasions where one may actually need to be blunt or even cold. The researchers believe that it may be better to let students learn how to make these decisions on their own in their own contexts. (Cobb & Mayer, 2000)

### **6.3 EI in Multicultural Environments**

EFL teaching is done in a work environment that is often multicultural and multilingual. Too often, it is the teacher's perspective and worldview that take precedent over those of students. However, working in multicultural and international arenas must take into consideration a variety of cultural sensitivities to avoid imposing one's personal or culturally based viewpoints onto students. When a teacher is aloof or otherwise unaware, unresponsive or unconcerned about dynamics in the classroom such as culture, gender, and learning style, it makes for an unsatisfactory learning experience because student feelings and cultural viewpoints are being ignored. Jennings and Greenberg believe that emotionally competent teachers recognize the emotions of others and regulate their own; build strong relationships; effectively discuss solutions to conflict; are culturally sensitive; and, respect multiple world views (2008).

Appropriateness of behaviors is influenced by culture. Cooper, Doucet, and Pratt assert that "appropriateness is strongly dictated by cultural values and scripts" (as cited in Shao, Doucet, & Caruso, 2014, p. 6). Mesquita and Albert

state that “Happiness is a highly desired outcome of emotion regulation activities in American culture, but not in others” (as cited in Shao & Doucet, 2014, p. 7). One example of this is that Japanese culture values group harmony over individual happiness and satisfaction. Based on teaching experience in the U.S. and Japan, it is conceivable that American teachers working with Japanese students may find them reluctant to voice their opinions. There is concern regarding offending others with a possible difference in opinion. Yet, an American teacher might welcome some discord in order to bring about a debate, and to allow individuals to display their expertise. In an American classroom, this display of expertise may result in pride and happiness for the individual student, and admiration by classmates. However, in a Japanese classroom, such individualistic behavior may create disharmony amongst classmates due to the lack of concern for group consensus before voicing an opinion. It is thought that individualistic behavior is not conducive to creating stable social order. Shao, Doucet, & Caruso (2014) found that “Cultures that are highly concerned about maintaining social order are more likely to have rules that emotions should generally be suppressed so that they do not threaten the social order” (p. 7).

#### **6.4 Need for Teacher Training in EI**

Though teachers are responsible for creating positive classroom environments for their students, with heavy workloads, student discipline and motivation problems, and more and more teachers in Japan facing working conditions that force them to worry about financial survival, it can be challenging for teachers to create positive learning environments. Hamre and Pianta note that “less positive classrooms tend to have lower levels of achievement and greater

conflict” (as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett (2013), p. 264). It can be argued, then, that when attempts to create positive environments are made, benefits such as less conflict in the classroom can flow back to the teacher, making the job of teaching somewhat less stressful.

Wubbels and Brekelmans state that teachers who create positive and communicative learning environments have students who perform better academically (as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett, 2013). Cornelius-White, Van Uden, Ritzen, Pieters, Wubbels, and Brekelmans assert that promoting positive interactions influences student outcomes such as cognitive, emotional and social functioning (as cited in Castillo, Fernández-Berrocal, & Brackett, 2013). With such positive outcomes, implementing EI principles in the classroom can be a win-win situation, even for tired teachers.

However, before an EI program can be applied in the classroom, teachers themselves need to show that they are willing and competent to teach such principles. Weare and Grey noted that “it is not possible to teach a competency which one has not acquired, just as it is not possible to have quality teaching in the absence of the teacher’s own well-being” (as cited in Ramana, 2013, p. 20). In addition, Hwang found that “only those faculty members who had superior EI competencies like comfort, empathy, leadership, and self-esteem, tended to perform better in overall teaching effectiveness” (as cited in Ramana 2013, p. 20). EI trainers, however, must be aware of negative workplace environmental factors which threaten the possibility of teachers reacting positively to what might initially be viewed as yet more unremunerated work. The positive effects of EI on students, the learning environment, and effectively teachers, must be clearly laid out for teachers to understand.

## Conclusion

At the crux of it all is the emotionally competent teacher. A teacher who models positive ways of interacting with students, so that students learn how to peacefully and respectfully interact amongst themselves and with society. This is especially true when dealing with disciplinary issues and conflict. I can still recall as an elementary school student, my tall, strong, male teacher chasing a naughty boy down the hallway, grabbing him, and slamming him against a locker. Such behaviors induce fear in students, and fear reduces the ability to learn. It sends a message of an authority figure condoning the use of violence. And, students lose an opportunity to see how conflict can be resolved peacefully. This is exactly the type of conflict resolution situation that students need to see dealt with in an emotionally intelligent manner over and over again throughout their student lives, so that dealing with such situations positively comes easily and naturally.

This paper has cited several benefits of applying principles of EI in education. The biggest benefit is when students have respectful, peaceful conflict resolution behaviors modeled for them by their teachers and via their school environments throughout their entire student lives, the effect will likely be a student who will grow into an adult who is better able to recognize the feelings of others and self, and to work with those feelings in win-win ways. This win-win concept, extended to society and the world, and with regard to international conflicts, can conceivably effect a significant portion of the population in creating peaceful solutions, rather than rallying around calls for violence and war. The resulting peace for the human species is the greatest benefit of all.

Appendix A

Handout: Are We Progressing?

**DIRECTIONS:** Place an X on each continuum to represent your opinion. One represents the lowest score and ten represents the highest score.

**I feel heard:**

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

**I feel valued:**

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

**My opinions count:**

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

**My contributions are appreciated:**

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

**I feel safe sharing my ideas:**

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

**I feel like I belong on the team:**

1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
---	---	---	---	---	---	---	---	---	----

**Describe one thing the team does right:**

**Describe one thing the team could improve:**

## Emotional Intelligence in Education

### Appendix B

#### Emotional intelligence lesson observation form

This feedback should be read alongside any feedback using the QTS standard criteria <b>Student Teacher—XXXXXX Class—Y2 (26 pupils) Subject—Science Date—XXXX</b>					
Use of non-verbal communication—maintained throughout lesson.					
<b>Eye contact</b> Good on 1 to 1; develop shifting eye contact amongst pupils	<b>Gesture</b> Some use to aid explanations	<b>Voice intonation</b> Some, within narrow range			
<b>Facial expression</b> Initially hard faced, but softened! Then smile registered relaxation; developed to show range of positive feelings	<b>Humour</b> Quite good; mainly reactive; developed to initiate humour more	<b>Voice volume</b> Quite good; loud enough without being dominating or intimidating			
<b>What responses were shown to the mood of the class?</b> Certainly recognised mood in anticipating that pupils were sluggish about 'work'. However, you acknowledged this to them, without acting positively to change the mood.					
<b>Example of student giving pupils a chance to voice their feelings as well as thoughts?</b> Unfortunate message, three times, that you 'didn't want anyone bothering you'. Unintentional, I'm sure ... might have been better phrased to emphasise time needed with investigation group.					
Example of response to the feelings of any pupil. No examples noticed.					
<b>Student response to show that she <i>fully</i> listened and understood what pupils said.</b> Some examples of affirming—nodding, "Ah-huh". Some examples of interrupting before child finished talking; also rhetorical questions that didn't really seek a response ("Isn't that right? - Yes").					
<b>Response to pupils' non-verbal communication (above categories)</b> You noticed XXXX pulling a face; reassured her with a smile and said "don't look so gutted; you'll get a turn" [with investigation].					
<b>What feelings did she show to the pupils?</b> Interest (particularly one-to-one and with guided group), amusement, urgency, tension, impatience.					
<b>Behaviours that indicated anxiety or anger; any example of "emotional hijack"?</b> Just one incident—halting whole class, instructing them all to put hand up to get their attention, then rebuking them while they sat with hands up. Did you think <i>which</i> pupils were off-task, <i>why</i> and what were <i>your choices</i> of response before acting?					
Example of student apparently managing her own feelings. No examples noticed.					
<b>How many pupils had responses acknowledged in a manner that valued them? All pupil names used? Yes.</b>	1-3	4-5	7-10	11-20	20
<b>How often did she refer back later to individual contributions? Likely to develop as placement progresses</b>	0	1-2	3-4	5-6	7

<b>Evidence of any apparent prejudice towards particular pupils? No.</b>
<b>End score: Success in creating positive emotional environment. (10 highest) 5</b>
<b>Students Emotional Intelligence strength(s).</b> Conscientiousness (willingness to work hard, preparation, etc), Service orientation – focused on children’s learning. Some empathy – picking up pupil moods.
<b>Student’s EI area(s) for development.</b> Self-control (when anxious or irritated), being a change catalyst – evaluate, assess and be prepared to change approach & activities). More empathy – listening closely, more upbeat communication (modelling positive feelings towards learning and pupils).

REFERENCES

- Castillo, R., Fernández-Berrocal & Brackett, M. A. (2013). Enhancing teacher effectiveness in Spain: A pilot study of the RULER approach to social and emotional learning. *Journal of Education and Training Studies* 1 (2), pp. 263-272.
- Cobb, C. D. & Mayer, J. D. (2000). Emotional intelligence: what the research says. *Educational Leadership*, 14-18.
- Fernández-Berrocal, P. & Ruiz, D. (2008). Emotional intelligence in education. *Electronic Journal of Research in Educational Psychology* No 15, 6(2), 421-436.
- Freedman, J., & Jensen, A. (2007). A case for emotional intelligence in our schools [PDF document]. Retrieved from [www.6seconds.org/pdf/case\\_for\\_EQ\\_school.pdf](http://www.6seconds.org/pdf/case_for_EQ_school.pdf)
- Iqbal, F., & Abbasi, F. (2013). Relationship between emotional intelligence and job burnout among universities professors. *Asian Journal of Social Sciences and Humanities* 2(2), pp. 219-229.
- Jennings, P. A. & Greenberg, M. T. (2008). The prosocial classroom: Teacher social and emotional competence in relation to student and classroom outcomes. *Review of Educational Research*, 79(1), pp. 491-525.
- Mayer, J. D., Salovey, P., & Caruso, D. R. (2004). Emotional intelligence: Theory, findings and implications. *Psychological Inquiry*, 15(1), 197-215.
- Moore, Bobby (2009). Emotional intelligence for school administrators: A priority for school reform? *American Secondary Education* 37(3) Summer 2009, pp. 20-28.
- O'Connor, M. *The science behind why naming our feelings makes us happier*. <http://ornishspectrum.com/zine/science-behind-naming-feelings-makes-us-happier/>
- Pugh, E. V. (2008). Recognising emotional intelligence in professional standards for teaching. *Practitioner Research in Higher Education* 2(1), pp. 3-12.
- Ramana, T. V. (2013). Emotional intelligence and teacher effectiveness - an analysis. *Voice of Research* 2(2), 18-22.
- Shao, B., Doucet, L., & Caruso, D. R. (2014). Universality versus cultural specificity of three emotion domains: Some evidence based on the cascading model of emotional intelligence. *Journal of Cross-Cultural Psychology* (2014, November 6).

Vaezi, S. & Fallah, N. (2011). The relationship between emotional intelligence and burnout among Iranian EFL teachers. *Journal of Language Teaching and Research*, 2(5), pp. 1122-1129.

Williams, A. (2007). *Building emotional intelligence: A key to student success* [PowerPoint slides]. Retrieved from <https://www.abmp.com/school.../EmotionalIntelligencePowerPoint.ppt>

# 同格節 that における that 省略について

都 築 郷 実

## 1. はじめに

同格関係とは、「名詞の直後に that-clause がおかれて、その名詞の内容を説明する場合がある。この場合は「～という…」と訳すが、先行する名詞と that-clause とは同格関係にある」（『総解英文法』 p. 545）と説明されている。この説明から、通常 that を用いて名詞節を導く形になっている、その that-clause を同格（名詞）節と名付けている。『現代英文法辞典』をみると appositive clause（同格節）の項で「[1] The fact *that he wrote a letter to her* suggests that he knew her. に典型的な例で見られるもので、名詞の後に現れてその名詞で表されているものの具体的な内容を述べる節をいう。」とある。次に高等学校（大学受験用）として定評があり、教育関係者も参考にする『徹底例解ロイヤル英文法（改訂新版）』を紐解き、pp. 131-132 の同格節の項目の説明を読んでみよう。

「〈名詞＋名詞節〉 that 節や whether で始まる節が名詞につくのがふつう。

---

キーワード：同格節 that, that 省略, the fact (that)

I don't agree with the view that human beings cannot keep peace in the world. He heard the news that his team had won.」

の例があげられていて、「注 同格 that」の所で次のような補足説明がされている。

「1. 「…という」の意味の that は「同格の that」と呼ばれる。that 節はどんな名詞とでも同格になりうるわけではない。先行する名詞と that 節の間には、たとえば The news was that his team had won. という関係が成り立つ。

2. 同格の that 節は離れる場合もある。

The suggestion was made that English teaching should be improved.」とある。

ちなみに先に言及した『ロイヤル』には、同格節を導くことの出来る名詞について、pp. 809-810 で fact グループ、news グループ、remark グループ、idea グループ、order グループ、feeling グループの六つに分け、86の名詞があげられている。しかしながら『ロイヤル』の場合、同格節を導く that が省略されるケースについては、どのような環境において省略が起こるのか、または起こらないのかについては言及がなされていない。のみならず、後述するように日本の教育現場でよく使われる学習用の英和辞典でも十分な説明がされていないし、先行研究でも実証的な研究は少ない。これは日本の英語学習者が同格節の that を省略したケースに遭遇した時、その箇所を正しく理解することができない可能性が出てくるという由々しき問題が生じる。そこで本稿では今までなおざりにされてきた同格 that 節の that 省略の可能性について実証的に検討してみることにする。なお、分析にあたり本稿では同格節を導く that の生じる型を次の6つのタイプに分けて実証的に検討してみる。

## 同格節 that における that 省略について

6つのタイプに分類し分析する理由は、筆者がこれまで収集した用例とその分類から that-clause の起こり得る可能性のあるタイプはこの6種類しかないと帰納的に結論できたからである。さらにタイプ別でみることで名詞によって that 省略に差があることが分かるからである。

Type 1: 「動詞+(前置詞)+名詞+that 節」

Type 2: 「there be+名詞+that 節」

Type 3: 「(主語) be+名詞+that 節」

Type 4: 「名詞+that 節 (主語)+動詞」

Type 5: 「名詞 (主語)+動詞 that 節」

Type 6: 「前置詞+名詞+that 節」

に分けて、以下現代英語の実例を通して3つの課題を解明する。

- (1) 各タイプにおいて that 省略がいかなる名詞の場合に起こるのか
  - (2) 各タイプによって that が省略される頻度に差があるのか
  - (3) 文体(口語体, 文語体)の違いで that 省略に差があるのか
- を現代英語の実例を中心に明らかにする。

## 2. 先行研究について

ここでは that 省略について(1)英和辞典での扱い,(2)文法書・語法書での扱い,(3)論文での扱いはどうなっているのかを述べる。

### 2.1. 英和辞典での扱い

各種英和辞典で that 省略の扱いについて調べてみた。

『ジーニアス英和辞典(第5版)』では that の項の接続詞 ① b で [名詞+that 節] に(◆)(1) that 節は先行名詞の同格節 (2) 名詞と that 節が離れることがある (3) この that は省略しないのが普通)とある。

『新グローバル英和辞典（第2版）』では（普通省略されない）としながらも参考として「省略がまれではない例もある」として、I have a feeling Cal lied to me. の例をあげている。名詞によってまたどこで使われるかによって省略が起こることを示した例である。

『プログレッシブ英和辞典（第3版）』では There is no doubt (that) we were wrong from the start. の例を示しているだけで何の説明もないが、この例文では that 省略が可能であることを示している。

『ウィズダム英和辞典（第3版）』では2 [同格] …という (that を省略するのは《比較的まれ》) とある。

『スーパー・アンカー英和辞典』では3 A that … という A ((1) that 節は A と同格の名詞節 (2) (((インフォーマル))) ではしばしば that を省略する) とあるが例が示されていない。

『プラティカルジーニアス英和辞典』では文法のまとめの 22.5 同格の that 節の項で「同格の that 節は省略されることがある」として I have an idea (that) she is out on business の例をあげている。

『新英和中辞典（第7版）』では ① d [同格節を導いて] (用法 that を略すことはない) とある。

『ニューサンライズ英和辞典（改訂新版）』では ④ 名詞の同格節を導いて (◆that が省略されることは使用頻度の高い名詞のあとにくる場合を除いては比較的すくない) とあるが用例が示されていないし、使用頻度の高い名詞が具体的にどの名詞をさすのか分からない。

『コアレックス英和辞典』では4 (名詞の同格節を導いて) (◆that を省略することは少ない) とある。『同（第2版）』では (◆((口))) では省略されることがあるが②③よりはすくない) と記述が変更されている。

『旺文社レクシス英和辞典』では4名詞の同格節を導いて (◆that の省略はまれ) とある。

同格節 that における that 省略について

『オーレックス英和辞典（第2版）』では（名詞の同格節を導いて）（◆《口》では省略されることがあるが②③より少ない）とある。さらに例文の中で、（(1) 同格節が名詞から離れている場合は that は省略しない。）とある。

これについては実証検討のタイプ5の所で実態を示している。

この辞典には PLANET BOARD 欄があり、その79に「名詞の同格節を導く that を省略するか」で比較的詳しく述べられている。

[問題設定] idea, belief, fact, news などの名詞の後に同格節を導く接続詞 that は、他の用法とことなり省略されないとされることがある。実際の省略可能性を調査した。

- Q (1) (a) What gave you the idea that he was a genius?  
(b) What gave you the idea he was a genius?  
(c) 両方
- (2) (a) I heard the news that he had been promoted.  
(b) I heard the news he had been promoted.  
(c) 両方

(1) (2) ととも両方使うという人が最も多かった。(a) の that を省略しない形のみを使うという人は (1) が2割、(2) が約4割であった。(b) の省略した形のみ使うという人も少数いた。両方使うと答えた人の多くは、「2つの間に意味の違いはない」とし、「(a) は《堅》あるいは《文》で、(b) は《口》」とした。なお、(2) でどちらも使わないと答えた人のほとんどは、「the news は不用で、I heard (that) he had been promoted. という」と述べている。

[学習者への指針] では「名詞の同格節を導く that の省略可能性は、そ

の名詞によって異なるが、《口》では idea や news のときは省略されることが多い。ただし、《文》では省略しない方が無難である。」としている。これらの英和辞典の中では『オーレックス英和辞典（第2版）』が一番現実の用法を反映した記述になっている。

## 2.2. 文法書・語法書での扱い

同格の that 節とその省略について文法書や語法書がどのように扱っているかを概観してみると、同格の that 節についてはほとんどの文法書、語法書で取り上げているが、that 省略について言及しているものは少ない。まずは学習英文法から見てみよう。

『基礎からの英語（新訂第2版）』の接続詞の項 p. 436 の1. 同格の that 節「～という…」のところで「[that+S+V]の形が名詞の直後におかれて、その名詞を説明する場合がある。」として、The fact that he is a liar is well known. の例をあげている。さらに pp. 456-457 の108. 同格の項で1. 名詞+that 節 に「fact (事実), feeling (気持ち), impression (印象), belief (信念), rumor (うわさ) などのような名詞の内容を説明するために、that 節が同格として並置されている場合。この場合「～という…」と考える。」として次のような例をあげている。

Do you know the fact that the sea can freeze?

The rumor is spreading that he died. (=The rumor that he died is spreading.)

ただし、that 省略についての記述はない。

『実例解説英文法』の p. 102 の2.3.1. 名詞+that 節の項で「この型には、[A] 名詞と that 節の間に同格関係があり that 節が名詞の内容を述べている場合と、[B] もともと that 節をとる動詞あるいは形容詞の名詞形の場合の二つがあります。いずれの場合も接続詞 that は省略できないのが原

同格節 that における that 省略について

則です。」とあり「[A] 同格の場合 that 節はそれと同格関係にある news, fact, rumor, reason などの名詞の具体的な内容を示します。」として次のような例をあげている。

The news that the hurricane killed the whole family upset her.

No one can deny the fact that he told a lie.

There is a rumor that the big company will be bankrupt.

「[B] 名詞の場合 名詞に対応する動詞や形容詞が that 節をとります。」とあり

[1] 動詞に対応する名詞形の所では、

I had a strong feeling that something terrible was going to happen.

Do you believe his claim that he has already paid?

I have no doubt that you will succeed.

[2] 形容詞に対応する名詞形では

the likelihood/possibility that John will win the prize

There is no certainty that he will come to the meeting.

There is no evidence that the meeting actually took place.

の例をあげている。ただし「最後の例の evidence は「証拠」の意味であり、evidence to show that … (…ということを示す証拠) の意味ですから、that 節が evidence の内容を述べているわけではありません。」と説明している。この文法書の説明では純粹な同格の that 節は [A] だけということになる。他の文法書とは少し扱いが異なっている。ただ接続詞 that は省略できないとしているのは、実態を反映していない記述となっている。

さらに p. 428 の 3. the fact that 節の型の同格のところ「日本語で「～という事実・うわさ・主張・信念・考え・証拠・仮定」等々のように表現される名詞のほとんどが同格節をとります。同格節をとる名詞をあげておきましょう。」として evidence を含めて31の名詞があげられている。例と

して

There is a rumor that Susan is getting married again. を載せている。

前述の evidence の説明と整合性がないように思われる。

さらに p. 432 の [4] the fact that 節型の同格で4例あげている。

The knowledge that humans not only talk but also have grammatical rules for talking is taken for granted today.

What is more, the common belief that you can't think until you put into words has yet to be demonstrated.

What unified all Nihonjinron writings is their fundamental assumption and central conclusion that Japanese people are different and even unique.

Environmental scientists are becoming ever more concerned with the fact that without equal concern for these species, the planet's biological diversity will be destroyed, leaving us with a loss of potential new foods and drug.

本論で実証することになる Type 1, Type 3, Type 4 の例が示されているが、全て that が付いた例だけである。

『徹底例解ロイヤル英文法（改訂新版）』には 同格節の説明はあるが that 省略についての記述はない。

pp. 131-132 の 3 <名詞+名詞節>に次のような例がある。

I don't agree with the view that human beings cannot keep peace in the world.

He heard the news that his team had won.

『英文法解説（改訂三版）』では p. 24 (2) 名詞と名詞節, p. 381 の D. 名詞と同格の that- 節 には例だけ示されているだけで that 省略についての言及はされていない。

The rule that nouns form their plural by adding 's' does not apply to the word 'mouse.'

She coughed to give him the hint that he should leave the place.

同格節 that における that 省略について

The fact that her fever is going down is a hopeful sign that she is getting better.

I've got a hunch that I'll pass this test.

I came to the conclusion that our team needs (s) more speed and strength.

《参考》に「述語動詞の部分が短いときは、同格の that- 節が後ろに回ることもある。」として A rumor got about that Jack and Jean are going to divorce. の例をあげている。

『英文法ビフォー&アフター（改訂新版）』p. 417 に We hear (the rumor) that he got married to a rich man's daughter の例を載せているだけで that 省略の記述はない。

『総解英文法』p. 545 の「(f) 同格の名詞節を導く」の項に用例はあげられているが、that 省略についての記述はない。

The whole town is excited by the news that we have won the championship flag.

She tried to cover the fact that her husband was dead.

Some people had a theory that smoking is a cause of cancer.

I have an idea that he is still living somewhere.

There is no proof that he is the murderer of the merchant.

There was a rumor that the flying disc had been seen.

『EARNEST 英文法・語法（新装版）』の p. 517 に「口語では、idea, doubt, impression などの名詞の後では that が省略されることがある」とあり I have no doubt (that) he'll come. の例が載せられている。

『アルファ英文法』p. 36 1. 名詞節の項で「idea, fact, claim, rumor などの名詞の後に続いてこれらの名詞の内容を表す that 節も、名詞節と考えられている。」として、The fact that he was elected president surprised us all. の例をあげている。さらに p. 127 の（3）名詞句+名詞節の項で「fact,

chance, news, belief などの名詞には that で始まる名詞節がつづくことがある。」として、

We were delighted to receive the news that you won the first prize. の例をあげている。さらに p. 638 の ⑥ 同格節の項で「文の形でその内容が表せる名詞には、同格節となる that 節がつくことがある。」として次のような例があがっている。

The thought that she might not see him again never occurred to her.

He had confidence that he would win the 200M breast-stroke race.

We're looking for evidence that he stole the data of the customers.

「他に belief, claim, decision, feeling, idea, news, possibility, proposal, rumor, suggestion などの名詞が同格節としての that 節をとる。」との説明もある。

「また that 節が名詞から離れた位置に置かれる場合もある。」として次の例をあげている。

The possibility cannot be ruled out that he will be elected as chairperson.

that 省略については、p. 640 の (ウ) 名詞の同格となる that 節の項で

「名詞が fact や opinion などのように比較的使用頻度の高い単語である場合、that が省略されてもよいことが多い」として次の例をあげている。

[4] They held the opinion (that) women should stay home to look after their children.

同格節については比較的詳しく説明がされているが、that 省略については説明が不十分である。

『英文法総覧(改訂版)』の pp. 421-422 の 29.3.1. 「限定詞+名詞+that 節」の項で「この that 節は、先行する名詞の同格とみなされ、「of+(動)名詞」の形に言い換えられるものが多い。」とあり、解説に「同格節は、意味的には、先行する名詞によって表される事柄の内容をなしているものである」として次のような例があげられている。

### 同格節 that における that 省略について

The news that her son had been killed (=of her son's death) in the accident was a great shock to her.

This is positive proof that he is (=of his being) guilty.

There is every probability that he will take our side.

We have come to the conclusion that she is a genius.

She wanted to conceal the fact that she used to be a salesgirl.

There are rumors that he will resign.

There is no doubt that Mary will get married.

I am of the opinion that he will never come back.

There is quite a possibility that war may break out.

There was small likelihood that it would remain unknown to others.

Is there any certainty that they will carry out their undertaking?

They are under the apprehension that Russia will interfere.

I had an idea somehow that it would come to this.

I will do it on condition that I shall be paid.

He wrote a short article elaborating the thought that atomic energy should be under international control.

There is no record that it has been put to use.

同格節の例が羅列されているだけだが、多くの例があげられているのでどのような型で同格節が使われているかの参考になる。ただこれらの例でどれが that 省略の可能性があるのかはどこにも解説がない。

『現代英文法総論』の p. 55 の 1.7.14. 補語の [注意] 2 で「対応する動詞がない名詞が後続する that 節は、しばしば分析がむずかしい。補語と認定できそうな場合（例えば、John's idea that he can win the race is ridiculous.）もあれば、同格と分析したほうがよさそうな場合（例えば、The fact that their leader has died changes everything.）もあるからである。た

だし, that 節が非制限的なものであるとき (例えば, Their suggestion, that we should buy another car, didn't please my wife.) は間違いなく同格節である。」と解説があるだけで同格節に直接言及していない。なお that 省略についても言及がされていない。

『現代英文法講義』の p. 599 に 「[E] 前の名詞句と同格: that は落ちることもあるとして BNC, LDCE<sup>4</sup> (原文のまま) から 3 例あげている。ただ that 省略の例は There is little doubt he was the killer (LDCE<sup>4</sup>) だけである。どのような名詞がどのような場合に省略が起こるのか分らない。

『実例英文法 (第4版)』 pp. 428-429 には同格節をとる名詞については述べられているが that 省略についての説明はない。

*A Comprehensive Grammar of the English Language* p. 1260 の Appositive clause の項で She objected to the fact that a reply had not been sent earlier. The belief that no one is infallible is well-founded.

I agree with the old saying that absence makes the heart fonder.

He heard the news that his team had won.

などの例をあげているが, that 省略については言及していない。

*A Modern English Grammar on Historical Principles* (Vol. 3) p. 36 に that 省略について次のように述べている。

But very often in colloquial style the phrase “I’ve a notion,” “I’ve an idea” are used loosely so as to be practically nothing but equivalents of “I think,” and then they are analogically used without that:” I’ve a notion he’ll succeed.”

*A Grammar of the English Language* (Vol. 3) pp. 201-202 には, The appositive clause, however, often follows the noun directly, as appositive clause without a connective:... として His fear he might never accomplish anything is torturing him a good deal. の例をあげている。

しかし, 後で実証するがこの主語の that 省略の例はきわめて稀である。

## 同格節 that における that 省略について

*That's That* の p. 15 に ... all of them [=the remaining structures in which *that* clauses may occur], at least part of the time, permit the deletion [.]

とあり The fact they were unprepared leaked out. の例をあげている。

『英語語法大辞典』 p. 860, 『続英語語法大辞典』 pp. 582-584 に that 省略 について 「「文意の不明瞭にならないかぎりにおいて、とくに口語体では、同格内容節の *that* を欠くことがある」といった、漠然とした通例しかあげられないようです。」と述べて、次のような実例があがっている。

I had no idea (*that*), There is no doubt (*that*), you've a feeling (*that*), She had a notion (*that*), I had a premonition (*that*), I give you my word of honor (*that*), Mr. Belli had the anxious experience of feeling (*that*), with his victim in a deadly sweat of fear (*that*), The fact (*that*) he went abroad surprised me である。

*that* の省略について、実証的に示している文法書はあまりない。ただ『英語の語法研究・十章 (実例に基づく英語語法の実体的観察)』の pp. 286-288 の「f) 同格節 (Appositive Clause)」の項で次のようにまとめている。

「同格節の先頭にくる *that* は、これを欠かないのが原則と言えるが、なお以下のようにこれを欠いていることがある。」として5つに分類して実例を示している

### 1) 「have+名詞」に続く名詞節において

ここでは4例実例があげられている。以下は *that* が省略されている前半だけの例をあげる。

I still have a fear (*that*), ... you've a feeling (*that*), I had a premonition (*that*), I have a notion (*that*) である。

### 2) 同格名詞を含む述部が意味上1個の他動詞として働くとき

ここでも I was in hopes (*that*), there is no doubt (*that*), I came to the

conclusion (that), I'll take my oath (that) の4例実例があげられている。

3) 以上の2分類に入れがたい場合ここでは次のように説明があり、4例あげている。

「Robbins, *Definite Article* は ‘The fact he went abroad surprised me.’ という連結詞なしの表現を是認している。名詞 fact そのものに that なしの節を引きつける力があることを認めなければならないことになる。以下はこれに準ずる：」として

I got a telegram (that), I heard a rumor (that), I give you my word (that), with his victim in a deadly sweat of fear (that) をあげている。

4) 「前置詞＋名詞」が接続詞的に働くとき

ここでも for fear (that) が2例, in case (that) の2例があげられている。

in case については「in case の次に補うことの考えられる that は、関係副詞（したがって形容詞節）とみなすことができる。」としている。

なお「‘on (the) condition’ には that を伴うことが多いようである。」として on condition (that) を1例と on condition that, on the condition that の2例をあげている。

(5) 名詞と that 節とが分離した位置にあるとき

ここでは「that の存在するのが通例でありそれを欠くことはまれである」として that の欠く例2つとある例を2つあげている。

But the fact remains (that), But you have this consolation (that), the rumor reached you that, there's a story going about that の例である。

### 2.3. 論文での扱い

筆者の調べた限りでは、『言語文化論集（第21巻 第2号）』（名古屋大学）にある滝沢直宏氏の「同格名詞節を導く that の省略について」と『横浜市立大学論叢（第59巻 第1・2号）』（横浜市立大学）にある村山

## 同格節 that における that 省略について

和行氏の「同格名詞節における補文標識 that の省略について」である。

滝沢氏は「The Bank of English（主として1990年以降の英語を収集して構築されたコーパス）からのデータを観察することで、省略の実態の一端を解明していく」として実例を紹介して論を進めている。

実例の提示で、「there 構文中に生じた名詞句と同格にある場合」として2例、「前置詞句中に生じた名詞句と同格にある場合」として4例、「文主語に生じた名詞句と同格にある場合」で1例、「動詞の目的語となっている名詞句と同格にある場合」として1例あげている。筆者と同じような分類で例をあげている。

この4つ場合の個々で The Bank of English で実態調査をしている。

there 構文では (a) there is (there's) no doubt S (b) there was no doubt S, (C) there be fears S, (d) there are 又は were signs S について調べている。結果として次のように述べている。

「(a) の数字は、there 構文における名詞句と同格となっている that 節の that が、極めて省略され易いことを示しているように考えることができるが、(b) から分る通り、there 構文の時制によって、省略されている割合が大きく異なるという点に注意する必要がある。その要因を求めると、現在時制の there is (there's) no doubt は「疑いなく」といういわば副詞的な要素として解釈できるという点にあると考えられる。同じく there 構文の (c) (d) も、that の省略が頻繁にみられる。」としている。

次に前置句の中では (e) despite the fact S, (f) in spite of the fact S, (g) in the hope S, (h) under the impression S, (i) with the impression S, (j) for fear S について調査されている。観察結果として次のように述べている。

「同じく前置詞句中に生じているといっても、以下にみるように that の省略され易さは様々である。」

文主語の場合では (k) The fact S についてのみ調べて、次のように結果を

記している。

「文主語に生じた名詞句の場合にも that 省略が見られることは、第1節の例文(10)で見たとおりであり、コーパスでも約1割が that を伴わずに生じている。」

動詞の目的語の場合では V the impression S についてのみ調べていて、動詞毎に頻度を示している。たとえば form, get, give, have, receive などとの連語の場合に that 省略がよく起こっていることが分る。

村山氏は「しかるに、名詞の同格節においても定形補文標識が省略されるケースがいくつか観察される。これはいくつかのパターンに分類される。まず第一のパターは、例文(21)に例示されるものである。」として、次のような例をあげている。

I have no doubt (that), Rachel had little doubt (that), I've got a feeling (that), ..., I had a hunch (that), I've an idea (that), I got the impression (that), She had the sense (that), ..., all gave visitors the dizzying sense (that) の例をあげている。

次のタイプでは, there was always a chance (that), there was a good chance (that), Is there any chance (that), there's no doubt (that), there is the possibility の5例をあげている。that 省略がされる理由として次のように述べている。「これらの there 構文の例から言えることは, there is a chance (that) ... は it is probable (that) ... と, there is no doubt (that) は, it is doubtless (that) と, there is the possibility (that) ... は it is possible (that) とほぼ同義であるということである。要するに, 第2節で見た複合動詞として解釈される場合と似て, 形容詞に続く that 節と意味的に同義と見なすことができそうである。」

第3のタイプとして前置詞+名詞+that 節として4例あげている。

despite a claim (that), for fear (that), on condition (that), in the event (that)

## 同格節 that における that 省略について

の例である。まとめとして、

- 〔(i) 先行する動詞と同格名詞が一体になって複合動詞的な意味を表している場合：have a feeling (that) ... の類。
- (ii) 名詞節が、意味的には、形容詞に続く従属詞とほとんど同じ働きをしている場合：there is a possibility (that) ... の類
- (iii) 先行する前置詞と同格名詞が一体になって従属接続詞と同じ意味を表している場合：for fear (that) ...

というように、何らかの要素とともに、動詞・形容詞・従属接続詞と同じ意味を持つことのできる場合に、補文標識 that の省略が起っている。」とまとめている。

### 3. タイプ別の実例検討

序論で述べたように本稿では同格節を導く that 節を次の6つのタイプに分類し検討する。

Type 1: 「動詞+(前置詞)+名詞+that 節」

Type 2: 「there be+名詞+that 節」

Type 3: 「(主語) be +名詞+that 節」

Type 4: 「名詞+that 節 (主語)+動詞」

Type 5: 「名詞 (主語)+動詞+that 節」

Type 6: 「前置詞+名詞+that 節」

動詞+前置詞で一個の動詞観念を表す連語として使われていると判断された場合は Type 6 に分類せずに Type 1 に分類している。

#### 3.1. Type 1: 動詞+(前置詞)+名詞+that 節

このタイプの場合、通例「動詞+(前置詞)+名詞」で他動詞的な意味を帯びてくることが多い。それゆえ、that 節以下の意味的な繋がりが強まり、

文意が不明瞭になりにくいこともあって省略が起こりやすくなると考えられる。言葉の特徴の一つに文意が不明瞭にならない限り要を得て簡にするという原則があるので省略が容易になると思われる。これについては、『現代英語学辞典』 p. 218 に「… 1 個の動詞観念を表す連語の中にあるときは、ときどき *that* を欠く」とある。さらに『現代英語の表現と感覚』の p. 120 にも「他動詞感覚」として *that* 省略を容認している。このタイプの特徴の一つには動詞は *have* が多く、名詞は *doubt, feeling, idea, notion* と連語をなすことである。

例文の名詞の斜体字は筆者による。

(1) *assurance*

Openness didn't make anything easier, but she said it at least gave her the *assurance* I was busy with school and not plotting to steal my son back.

—Amy Seek: *God and Jetfire*

(2) *conclusion*

Having heard nothing further from him, I've come to the *conclusion* he's gone underground permanently ...

—J. Black: *Megacorp*

(3) *doubt*

“..., I have no *doubt* he is out now, but ...”

—A.C. Doyle: *The Return of Sherlock Holmes*

この *doubt* では *don't have any doubt (that)*, *haven't the slightest [least] doubt (that)* なども見られる。

同格節 that における that 省略について

(4) evidence

“He had an abiding fear of his own agency, although I have no *evidence* the DEA did anything to make this happen.”

—*Time*, Jan. 29, 1979

類例では他に have hard [new] *evidence* (that), show no *evidence* (that), investigate the *evidence* (that) など見られる。

(5) fact

...that manufactures in the European Communities (EC) are awaking to the *fact* they must make greater efforts and ...

—*The New York Times*, Weekly Review, March 13, 1976

他の例では hinge on the *fact* (that), make no bones about the *fact* (that), swear to the *fact* (that), wake up to the *fact* (that) など見られる。

(6) faith

I knew first that you have to have *faith* you're going to get the cards when you aren't getting the cards, ...

—*The New Yorker*, Dec. 25, 1979

(7) fear

Iran (AP)-But despite the comforting words, many women expressed the *fear* they might become record-class citizens in the Islamic Society ...

—*The Daily Yomiuri*, March 8, 1979

他に have no *fear* (that) が見られる。

(8) feeling

Cape Canaveral (AP)- “We just got that *feeling* we’re going to really do it this time,” said commander Joe Engle.

—*The Daily Yomiuri*, Nov. 12, 1981

これ以外に have a [the, this] *feeling* (that), have a [the, that] strange [distinct, funniest, queer] *feeling* (that), have an intuitive *feeling* (that), give the viewer the *feeling* (that) などの例もみられる。

(9) hope

He expressed *hope* the fair will help quicken economic recovery.

—*The Daily Yomiuri*, April 20, 1978

さらに cherish [entertain] the *hope* (that), have good *hopes* (that), interpret the *hope* (that) などの例もある。

(10) hunch

I have a *hunch* your trouble began long before he discovered he was almost a “genius.”

—‘Ann Landers’ in *Asahi Evening News*, Jan. 15, 1978

(11) idea

I have no *idea* he would turn out to be one of the great horses of our time.

—*Reader’s Digest*, Dec. 1978

その他, don’t get the [any] *idea* (that), give you the *idea* (that), have [get] an [the, some] *idea* (that), have the bright [a pretty good] *idea* (that), be consumed with the *idea* (that) that, reconcile the *idea* (that) など見られる。

(12) illusion

“You have no *illusion* you are going to take over,” says Washington post reporter Jackeline Trescot.

—*Newsweek*, Aug. 27, 1979

その他, be under no [an] *illusion* (that), have the *illusion* (that) などが見られる。

(13) impression

You create the *impression* I enjoy baiting judges and having them blast back at me.

—*Esquire*, Jan. 2-16, 1979

他の例では give the *impression* (that), give her *impression* (that), have [get] the (strange) *impression* (that), leave the *impression* (that), be under the *impression* (that) などがある。

(14) indication

“It contains no *indication* German-Soviet relations will worsen,” Schmidt revealed, “and no indication the world will improve.”

—*Newsweek*, March 24, 1980

他には give no *indication* (that), have no *indication* (that), be considered an *indication* (that) などが見られる。

(15) information

① Brazil (AP)- “I had *information* he was in Brazil,” Wiesenthal said, “but evidence is lacking...”

—*The Daily Yomiuri*, May 31, 1978

② The last time he heard from the police was when the officer told him they had *information* the child had been spotted in Milnerton with a middle-aged man, he said.

—*The Independent Online*, Oct. 13, 2015

③ Benke said officials had *information* the individual or individuals responsible fled away from campus and it was a targeted, not random, incident.

—KOMU-TV, posted Oct. 12, 2015

④ “We had *information* he was dealing and got enough probable cause for the search warrant…”

—*The Delaware County Daily Times*, Oct. 5, 2015

⑤ Then, 22 minutes later, they got *information* Wilson took his brother to the fire station.

—[www.myfoxmemphis.com](http://www.myfoxmemphis.com), Oct. 7, 2015

『英語語法レファレンス』p. 416の「同格節 that 節」の項で

(9) We got the information that Mayor was coming to our town. とあり、  
「この同格を表す that 節は接続詞であるが、省略しないのが普通である」として

cf.\*We got the information Mayor was coming to our town. (原文のまま)  
の例をあげて非文扱いしている。

that のある例に比べると that 省略の例は少ないのは事実であるし、the information (that) の例は手元にないので、the information の場合は that を省略しないのが普通であると解釈できる。

(16) mind

…I’d made up my *mind* I wasn’t going to enter.

同格節 that における that 省略について

—*The Daily Yomiuri*, Oct. 17, 1981

*Longman Dictionary of Contemporary English* (5th edition) には I made up my mind there and then that I would never get married. の例が示されているが、これは that の前に there and then などの副詞句が入っているために that の省略はしないのがよいと思われる。

(17) news

I am confident that my grandfather, Hans Walzlak, remembered where he was from that moment onward when he heard the *news* the Japanese had attacked Pearl Harbor.

—David Wlazlak: *The Minister of Law Enforcement*

(18) notion

Besides, he had a *notion* old Max would appreciate his company.

—J. le Carre: *The Honourable Schoolboy*

その他に、have a funny *notion* (that), reject the *notion* (that) などがある。

(19) possibility

“I don’t discount the *possibility* he might be more receptive to joining the autonomy talks, ...”

—*Time*, July 16, 1979

その他では be looking into the *possibility* (that), have not dismissed the *possibility* (that) などがある。

(20) rumor

London (AP)-... and still not commenting on *rumors* she was reconsidering

her marriage to Russian's Sergei Kauzov.

—*The Daily Yomiuri*, Aug. 12, 1978

(21) sensation

She was shaken by the *sensation* she was modelling it for Will Maddock's benefit, seeing his approval.

—Janet Daily: *Dakota Dreamin'*

(22) sense

"..., I always had the *sense* there was time to bounce back," a political operative says.

—*Newsweek*, June 4, 1979

(23) sign

"He showed no *sign* he knew how to overcome the difference," said one Israeli official.

—*Newsweek*, Jan. 25, 1982

(24) suggestion

Maro's letter, judged authentic by hand writing experts, contains the *suggestion* the government consider an exchange of prisoners and ...

—*The Daily Yomiuri*, April 2, 1978

他に make the *suggestion* (that) が<sup>3</sup>見られる。

(26) word

"..., but we do have *word* he's been dispatched," said Lt. Charles Mathis at

## 同格節 that における that 省略について

US Coast Guard headquarters in Cleveland.

—*The Daily Yomiuri*, May 4, 1980

これらの例で分ることは、話し言葉だけではなく、書き言葉でも that 省略がされている。特に話し言葉だから that 省略が起りやすいとは言えない。

### 3.2. Type 2: there be+名詞+that

このタイプの場合、Type 1 と同様 that 省略が普通に見られる。これは文意が不明確になりにくいという理由からだと考えられる。しかし名詞と that 節の間に他の要素が入り込んだ次の例の場合には省略はされにくい。London (AP)-There seems to be a *feeling* at the present time among the male community that any female, young or old, is fair game for their sexual activities...

—*The Daily Yomiuri*, Jan. 23, 1982

このタイプでは no+名詞+that 節の例が多いことも特徴の一つである。

#### (1) assurance

New York (AP)-..., that “there’s no *assurance* the brisk pace can be maintained for the rest of the year.”

—*The Daily Yomiuri*, Aug. 28, 1979

#### (2) belief

But there is a *belief* it is related to the complex assortment of economic, social, and demographic changes that took place in the country over the last 20 years.

—Gordon Green *et al.*: *Studies in the Distribution of Income*, Oct. 1992

次の例のように挿入句があると that 省略は起りにくい。

“In Java there is a *belief*, instilled by a shadow play, that one must sacrifice to the spirits around one in order to achieve a harmonious existence, ...”

—*The Economist*, Dec. 16, 1978

さらに次の例のような the *belief* の場合, that 省略の例を見つけられない。考えられる理由は that との結びつきが a *belief* の時より強まり, that を必要すると考えられる。

On the one hand, there is the *belief* that people who are unmarried after a certain age remain so because they are immature.

—Leonard Cargan: *Being a Single on Noah's Ark*

(3) *chance*

“We thought there was a very real *chance* the Chinese would administer a punitive blow against Vietnam, one official said.

—*Newsweek*, Jan. 22, 1979

(4) *danger*

New York (AP)-..., said there's a *danger* the inflation rate may go well above 6 percent in 1978 or 1979 if decisive action isn't taken.

—*The Daily Yomiuri*, Nov. 3, 1980

その他, no immediate *danger* (that) が見られる。

(5) *doubt*

“There's no *doubt* the company is generally outperforming the industry.”

—*Fortune*, Dec. 4, 1978

他に, little *doubt* (that) が見られる。

ただし次のように, 挿入句がある場合 that 省略は起こりにくい。

同格節 that における that 省略について

And there is no *doubt*, in fact, that he was very able, without the assistance of anybody, to make as good speeches as those he thus patched up:...

—Tobias George Smollett: *The Critical Review: Or, Annals of Literature*

(6) evidence

Moscow (AP)-... and there is no *evidence* they involve visits from outer space.

—*The Daily Yomiuri*, Jan. 15, 1979

他に, no immediate *evidence* (that), little [sound] *evidence* (that) が<sup>s</sup>見られる。

(7) feeling

There is a *feeling* Kennedy would arouse the dogs in the campaign, and a lot of politicians don't want the excitement.

—*The New Yorker*, Nov. 26, 1979

他に, more *feeling* (that) が<sup>s</sup>見られる。

(8) guarantee

New York (AP)-There's no *guarantee* it can prevent one, but ...

—*The Daily Yomiuri*, July 14, 1978

(9) hope

There isn't much *hope* Sunatco will have fifty million dollars cash on hand; ...

—A. Haily: *The Moneychangers*

(10) indication

① ..., and there are *indications* they will become a detente-related issue in the

political campaign.

—*The New Yorker*, May 11, 1976

② Berlin/Paris/Saint-Denis (AP)–“There are indications it is a false trail,” he said, adding that “it still cannot be ruled out that a terrorist headed for Europe and to France, probably via Germany.”

—*The Japan Times*, Nov. 19, 2015

他に, no *indication* (that), not much *indication* (that), strong *indications* (that) などが見られる。

(11) likelihood

Washington (AP)–“There is a *likelihood* it will be formed in the not-to-distance future and a possibility it will be next week,” ...

—*The Daily Yomiuri*, Oct. 20, 1979

他に, a strong *likelihood* (that) などが見られる。

(12) possibility

Washington (AP)–..., also said there is a *possibility* an Oregon team would visit mainland China.

—*The Daily Yomiuri*, Dec. 2, 1978

他に, the [every, little] *possibility* (that), a strong [reasonable, slight] *possibility* (that), the faintest [distasteful but real] *possibility* (that), not any *possibility* (that) などと例が多く見られる。

(13) probability

Washington (AP)–Morrison said there was a “great *possibility*” some form of intelligent life exists elsewhere in the universe, ...

同格節 that における that 省略について

—*The Daily Yomiuri*, Jan. 23, 1977

他に, no [little, much] *probability* (that) などが見られる。

(14) proof

... there is no *proof* the statue was even in Italy.

—*Saturday Review*, March. 31, 1979

(15) question

“...but there’s no *question* we’ll have trouble with the giants like Merrill,” Says Barbara McCarver, ...

—*Fortune*, Jan. 29, 1979

(16) rumor

Alternatively, there was a *rumor* he had been kidnapped by the Shah’s secret police.

—*Time*, Oct. 9, 1978

(17) sign

Washington (AP)-..., although Blumenthal said there are *signs* the economy is approaching its “realistic limits” of growth and ...

—*The Daily Yomiuri*, Dec. 16 1978

他に every *sign* (that) が見られる。

(18) speculation

“here was open *speculation* he’d wind up at least as Treasure Secretary, ...”

—*Newsweek*, July 30, 1979

3.3. Type 3: (主語) be+名詞+that 節

このタイプの場合も文意が不明瞭にならない限り省略は可能である。

(1) assurance

Washington (AP)-... may depend on getting across to the Western European people messages that establishing equality of deterrence between NATO and the Soviet block is the best *assurance* their land will not become nuclear battlefields.

—*The Daily Yomiuri*, Feb. 4, 1982

(2) evidence

Cantan, Sicily (AP)-However, experts said the smoke which later turned white was the *evidence* the volcano was releasing harmless otherwise bottled up gas.

—*The Daily Yomiuri*, Nov. 3, 1980

(3) fact

What he neglected to mention was the *fact* he had spent three months in the hospital with six broken ribs, ...

—*The Daily Yomiuri*, Oct. 26, 1978

fact の場合他に 2 例見られ、他の名詞に比べて例が多く見つかる可能性がある。

(4) feeling

“That’s a *feeling* you can’t find too many places.”

—*Newsweek*, Aug. 28, 1978

(5) indication

..., and the timing of his bill is another *indication* he expects more political than legislative results.

—*The New York Times Weekly Review*, July 27, 1976

他に one more *indication* (that) の例がある。

(6) possibility

Washington (AP)—..., said the significant aspect of the meeting “is the *possibility* these invitations could lead to contractual relations between American oil companies and the Chinese.”

—*The Daily Yomiuri*, July 28, 1978

(7) sign

..., you’ll begin to feel terribly depressed. That’s *sign* you’re getting well.

—K. Follet: *Eye of the Needle*

その他, be a sure *sign* (that), be the *sign* that が見られる。

省略の例は Type 1, Type 2 に比べるとかなり少ない。次のような that の付く例が多いのは Type 5 と似ている。

① The result is the *conviction* that there have not been—and are not likely to be—any significant and successful movements, evolutions or other systems in which ...

—George Barna: *Leaders on Leadership*

② Mere fluency in English is no *guarantee* that a person is truly “internationally minded.”

—V. L. Durham: *Between Japanese and English*

### 3.4. Type 4: 名詞+that 節 (主語)+動詞

このタイプの場合 that 省略はほとんど見られない。ただし fact は例外的に省略可能となっている。

『英語の型と正用法 (第2版)』 p. 497 で次のように述べている。

“The news that her son had been killed was great shock to her.” での that は省略できないとしている。

『英文法エッセンシャルズ』 p. 497 でも次のように述べている。

belief, conviction, suggestion などの名詞の後の that は省略できないとしている。

『実例英文法 (第4版)』 p. 345 に次の例があるが that の省略はない。

The announcement that a new airport was to be built really aroused immediate opposition.

A report that the area was dangerous was ignored by the residents.

The rumor that they would get married spread at once.

The proposal/suggestion that shops should open on Sundays led to a heated discussion.

これは名詞節が主語になる場合、通例 that は省略されないことに一因があると考えられる。

*A Reference Grammar for Students of English* の p. 43 に次のような解説がある。

That the driver could not control his car was obvious. における that について ‘The conjunction *that* is obligatory when the clause is subject’ とある。

(1) fact

① Moscow (UPI)-... that the mere *fact* a film is made in the United States is a virtual guarantee of long lines at the box office, whatever its quality.

同格節 that における that 省略について

—*The Daily Yomiuri*, Sept. 12, 1976

② Yet, already, the *fact* they had to be careful not to be seen together was a depressing intrusion upon their pleasure.

—E. Thompson: *Tattoo*

be 動詞以外では次のような例が見られる。

③ The *fact* one person says on a given day that he finds somethings acceptable doesn't mean it cannot be discussed again.

—*Time*, April 18, 1977

④ ... the *fact* he is a star may not work against him, no matter how the judge rules.

—*Time*, March 5, 1978

⑤ London (AP)—Sykes said the *fact* the hair samples were found so far apart, and so recently, suggests the members of the species are still alive.

—*The Daily Yomiuri*, Oct. 19, 2013

これ以外にさらに4例見られる。

fact 以外の名詞では手元に feeling, likelihood, news, possibility, probability の省略の例があるのみで他は見られない。

(2) feeling

Not for the first time, the *feeling* she was hiding something prickled to life inside him.

—Lynn Raye Harris: *A Game with One Winner*

(3) likelihood

① ..., since the *likelihood* she'd encounter any of her police brethren was slim.

—Carsen Taite: *The Best Defense*

② “She stopped, fuming impotently, because the *likelihood* she’d be able to get her hands on Krugman was nonexistent....”

—Linda Howard: *Prey*

③ The *likelihood* she would ever catch up to them was small and may be that was for the best.

—A. Rosaria: *Gone World Episode Five*

(4) news

She had asked him to think about it and then never got back to him to see what he thought—but *the news* she had sisters in his town had removed any questions from his mind.

—Dee Henderson: *The Witness*

(5) possibility

The *possibility* she may not see them again hit home.

—J. L. Redington: *A Cry out of Time*

(6) probability

Before this person went to trial the *probability* she was innocent was assumed to be .01; after the innocent verdict was given, this value has increased to .161.

—Harold J. Larson: *Introduction to Probability*

以下の例はすべて that のある例で普通にみられる。

同格節 that における that 省略について

(1) belief

The *belief* that disease was caused by intrusion of a foreign object was ubiquitous.

—Jerrold E. Levy: *In the Beginning: The Navajo Genesis*

(2) fear

As one might imagine, the *fear* that hostile or sadistic thoughts and feelings will magically eventuate in a disaster frequently leads to the denial and suppression of any angry emotions.

—Geraldo Amada: *The Power of Negative Thinking*

(3) feeling

The *feeling* that she wanted-no, needed-to do this for them engulfed her.

—Fiona McCallum: *Meant to Be*

(4) likelihood

The *likelihood* that she will use profanity in the future when she is teased increases.

—Michel Hersen: *Encyclopedia of Behavior Modification and Cognitive Behavior*

(5) news

In our own family, the *news* that she was pregnant with Woody's child shocked the children, particularly Soon-Yi, who "just hated him," recalled her sister Lark.

—Marion Meade: *The Unruly Life of Woody Allen*

(6) observation

The *observation* that the market is a man-made institution rather than a natural phenomenon is simple enough.

—William M. Dugger: *Underground Economics*

(7) possibility

The *possibility* that she might be striking too close to the nerve didn't bear thinking about.

—Suzanne McMinn: *Make Room for Mommy*

(8) probability

..., and the *probability* that she will buy both a blouse and a pair of shoes is 0.05.

—Jerome Kaufmann: *College Algebra*

(9) proposal

The *proposal* that political parties should receive help from public funds for their activities outside Parliament has not been discussed in Britain until comparatively recently.

—Keith D. Ewing: *The Funding of Political Parties in Britain*

(10) revelation

The *revelation* that he has AIDS leaves some of them in tears and the rest in stony silence.

—Eve K. Nichols: *Mobilizing against AIDS*

(11) suggestion

### 同格節 that における that 省略について

The *suggestion* that typing be added to the curriculum was made by many social studies classes and appeared often on the list of suggestions before it was revised by the representatives.

—Homer L. Hall: *Student's Workbook for Junior High Journalism*

#### 3.5. Type 5: 名詞（主語）＋動詞＋that 節

このタイプは Type 4 に似ているが主語にあった同格節が分離した形になっている。このタイプでは省略されないのが普通である。手元でも省略の例が極めて少ない。大規模に用例を収集すれば少しは見つかるだろうが、多くないことは予測できる。このタイプの実例の特徴は the fact remained (that) の型でしか that 省略が生じていないことである。

(1) fact

① The *fact* remained we have the overwhelming support of the Christian and Jewish religions.

—Robert Hartwell Fisks: *The Dictionary of Concise Writing*

② But the *fact* remained he lined him up that day with La Rue McCormick, ...

—The Subcommittee: *Reports of the Secret FACT-Finding*

③ While the *fact* remained we'd been seeing each other three years.

—Stephen Elkin: *Mirror in the Bathroom*

④ ..., but the *fact* remained it was still her house of pleasure.

—Brenda Williamson: *Devil's Kiss*

以下は that のある例で一般的に見られる。

(1) fact

Even so, the *fact* remained that there had been no progress in the case for

several years.

—Steven Nickel: *Torso*

(2) news

As they drew nearer the village, the *news* spread that there were three beautiful women approaching; and ...

—Ten Tiroba: *Traditional Stories from the Gilberts*

(3) rumor

① I am sorry that the *rumor* reached you that I was not pleased.

—E. M. Forster: *The Longest Journey*

② However, the *rumor* spread that the fascists had taken a comrade and had held him in an entry way.

—Sue Ellen Moran, Rand Corporation: *Inside a Terrorist Group: The Red Brigades of Italy*

(4) suggestion

The *suggestion* was made that this difficulty might be avoided by the adoption of the title “Commonwealth of British and Associated Nations” for the existing structure of the Commonwealth.

—Frederick Madden: *The End of Empire*

(5) truth

The *truth* remained that she never would have let Lucinda choose that particular arrangement if she had seen it first in a good right.

—Sarah Orne Jewett: *A White Heron and Other Stories*

### 3.6. Type 6: 前置詞十名詞十that 節

このタイプでは慣用的な表現もあるが、文意が不明瞭にならない限り、that 省略は可能である。

#### (1) allegation

Nashville, Tennessee (AP)-... before the state board of medical examination on *allegations* he overprescribed drugs for the late rock'n'roll king and other patients.

—*The Daily Yomiuri*, Dec. 19, 1979

その他では, despite *allegations* (that) の例がある。

#### (2) condition

① London (AP)-..., meaning she was cleared on *condition* she did not get in trouble with the law again.

—*The Daily Yomiuri*, Jan. 12, 1980

② Jerusalem (Reuters)-Officials in Ankara, speaking on *condition* they not be named, described the article as part of an attempt to discredit Turkey by foreign powers uncomfortable with its growing influence in the Middle East.

—*The Daily Yomiuri*, Oct. 19, 2013

その他では, under the *condition* (that), on the *condition* (that) の例がある。

『ジーニアス英和大辞典』の on [upon] (the) *condition* (that) の成句の所に, He can go out on *condition* (that) he comes [come, will come] home by five. の例文をあげている。この例では that は省略されることがあることを示している。

#### (3) fact

① Los Angeles (AP)-Vins added: “We have no hostile feelings toward it (the

Soviet Government), despite the *fact* we have been subjected to pressure and persecution.”

—*The Daily Yomiuri*, May 15, 1979

③ Mariupol, Ukraine (By Rick Lyman)– “Despite the *fact* the city is pretty much surrounded, life goes on, the city works,” said Tatiana Lomakina, vice mayor in charge of refugee issues.

—*The New York Times* (International Weekly), Nov. 1, 2015

その他の例では, *except for the fact* (that) がある。

(4) *fear*

... working against the *fear* the door might be opened on him at any moment.

—E. Thompson: *Tattoo*

その他, *for fear* (that), *from the fear* (that), *in* (the) *fear* (that), *in spite of* some 『ジーニアス英和大辞典』の *for fear of* の成句の例で *Insure your house for fear of fire* [*for fear* (that) *there should be a fire*] がある。

*I bought the car at once for fear* (that) *he might change his mind*. とあるので *that* 省略は可能と考えられる。

『ランダムハウス英和大辞典 (第2版)』でも *I went out in disguise, for fear* (that) *someone should* [*or might*] *recognize me*. の例が見られる。

(5) *ground*

New York (AP)–*The source, we agreed to an interview on grounds he would not be identified, said...*

—*The Daily Yomiuri*, Nov. 7, 1981

その他の例では, *on the grounds* (that) がある。

*Longman Dictionary of Contemporary English* (5<sup>th</sup> edition) では *We oppose the*

同格節 that における that 省略について

bill, on grounds that it discriminates against women. とあるように、辞書の例では that が付いている。

(6) hope

New York (AP)-I'm writing in *hope* I can help my best friend.

—'Ann Landers' in *Asahi Evening News*, Dec.18, 1978

その他では、in the hope (that) の例がある。

『ランダムハウス英和大辞典 (第2版)』では I continued on my way in the hope that I might come on an exit. の that がある例が載せられている。

(7) notion

San Francisco (AP)-“A lot of women grew up with the *notion* you don't talk about sex....”

—*The Daily Yomiuri*, Dec. 22, 1981

『ジーニアス英和大辞典』には Don't run away with the idea [notion] that training at our level is easy. のように that のある例が載せられている。

(8) possibility

They don't sniff people because of the *possibility* the dogs might bite.

—*The Daily Yomiuri*, Jan. 23, 1979

(9) probability

California (AP)—Novad said there is a 95 percent probability that Skylab will come down in the July 7-25 periods, with a 50 *probability* the end will come by July 16.

—*The Daily Yomiuri*, Jan. 15, 1979

#### 4. ま と め

英語学習者用に編まれた辞書および文法書には省略を不可とする記述が多く見られたが、名詞 that 節における that 省略の例は枚挙にいとまがないことを実証した。これは文意が不明瞭にならない限り that 省略は可能であるという意味である。that 省略を不可とする文法書や辞書の記述は、どのような名詞がどのような場合に不可なのか分からない点と、実証に基づいた記述になっていない所に問題がある。

ただ省略が起こりにくい場合もある。たとえば、that 省略が可能な名詞のタイプの場合でも、名詞と that 節の間に他の要素が入り込むような場合である。それは文意が分りにくくなるからだと考えられる。that 省略の問題は文意が不明瞭にならない限り可能であるが、話者、筆者のその時の主観的判断に左右されることもあるので、絶対的ではない。

これまで検討した名詞とタイプ別の関連性をまとめると図表5のようになる。

たとえば、fear は Type 1 にしかあがっていないが、*Oxford Sentence Dictionary* に Type 2 の次の例がある。

There was a fear that people would use the road more often to escape the gateways. 類推的に考えると that 省略は可能である。たとえば『新英和大辞典（第6版）』に次の例があることから分かる。There was some fear (that) you had missed the train. また suggestion も Type 1 にしかあがっていないが『ランダムハウス英和大辞典（第2版）』に Type 2 の次の例がある。

There is the suggestion, however slight, that Type II informants use fewer regionalisms than Type I's.

この例では however slight がなければ that 省略は可能であると予測でき

### 同格節 that における that 省略について

る。ただ *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (8th edition) の *There was no suggestion that he was doing anything illegal.* の例や *Oxford Sentence Dictionary* にある *There was even a suggestion that after 'some years' Townsend also could have received a title and an official allowance.*

の a [no] suggestion に比べると省略できる可能性は少ないと思われる。理由は Type 2 の場合 a [no] suggestion に比べて the suggestion の方が that との結びつきが強まると考えられるからである。

他の名詞、または図表にない同格節を導く名詞は Type 4, Type 5 以外のどれかのタイプで使われた場合、that 省略が可能であると推論できる。同格節の that は Type 4, Type 5 以外は義務的ではなく、文意が不明瞭にならない限り、話者、筆者の判断により可能である。

ただ、タイプ別や名詞によって省略の頻度に違いがある。特に名詞 fact は Type 4, Type 5 の両方にあがっているのは、the fact があると同格節を予測できるので、それだけ that 省略が他の名詞に比べて容易になっていると考えられる。名詞全般で考えると Type 1, Type 2 などは省略が普通に起こっている。Type 3, Type 6 は用例がまだ少ないので、that 省略は可能ではあるが、Type 1, Type 2 に比べると、頻繁に省略して使われているとは考えにくい。

図表5

タイプ	Type 1	Type 2	Type 3	Type 4	Type 5	Type 6
名詞						
allegation						○
assurance	○	○	○			
belief		○				
chance		○				
conclusion	○					
condition						○
danger		○				
doubt	○	○				
evidence	○	○	○			
fact	○		○	○	○	○
faith	○					
fear	○					○
feeling	○	○	○	○		
ground						○
guarantee		○				
hope	○	○				
hunch	○					
idea	○					
illusion	○					
impression	○					
indication	○	○	○			
information	○					
likelihood		○		○		
mind	○					
news	○			○		
notion	○	○	○			○
possibility	○	○	○	○		○
probability				○		○
proof		○				
question		○				
rumor	○	○				
sensation	○					
sense	○					
sign	○	○	○			
speculation		○				
suggestion	○					
suspicion	○					
word	○					

※ 「○」は本稿で that 省略が可能であることを示す。

参 考 文 献

文法書・語法書

- Bolinger, Dwight. 1972. *That's That*. The Hague: Mouton
- Close, R. A. 1975. *A Reference Grammar for Students of English*. London: Longman
- Curme, George O. 1931. *Syntax*. (*A Grammar of the English Language*, Vol. 3)  
Boston: D. C. Heath
- Fowler, H. W. 1968. *A Dictionary of Modern English Usage*. 2nd Edition. revised by  
Ernest Gowers, with corrections. Oxford University Press
- Hornby, A. S. 1965. *A Guide to Patterns and Usage in English*. 2nd Edition.  
Oxford: Oxford University Press
- (岩崎民平 (訳) 1962. 『英語の型と正用法』 研究社)
- Jespersen, Otto. 1914-1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles*. 7  
vols. Heidelberg: Carl Winter. London: George Allen & Unwin. Copenhagen:  
Munksgaard
- Jespersen, Otto. 1933. *Essentials of English Grammar*. London: George Allen &  
Unwin  
(中島文雄 (訳) 1965. 『英文法エッセンシャルズ』 千城)
- 荒木一雄・安井稔 (編) 1992. 『現代英文法辞典』 三省堂
- 安藤貞雄 (著) 2005. 『現代英文法講義』 開拓社
- A. J. トムソン・A. V. マーティネット (共著)・江川泰一郎 (訳) 1993 『実例  
英文法 (第4版)』 オックスフォード
- 石橋幸太郎他 (編) 1966. 『英語語法大辞典』 大修館.
- 石橋幸太郎 (編) 1990. 『現代英語学辞典』 成美堂
- 江川泰一郎 (著) 1991. 『英文法解説 (改訂三版)』 金子書房
- 岡田伸夫 (著) 1999. 『基礎からの英語 (新訂第2版)』 美誠社
- 大塚高信 (編) 1970. 『新英文法辞典 (改訂増補版)』 三省堂
- 萩野敏・島村青児・James H. M. Webb (共著) 2005. 『EARNEST 英文法・語  
法 (新装版)』 文英堂
- 金口義明 (著) 1977. 『現代英語の表現と語感』 大修館
- 粕野健次 (著) 2010. 『英語語法レファランズ』 三省堂

- 高梨健吉（著）1970. 『総解英文法』美誠社  
豊永 彰（著）2008. 『英文法ビフォー&アフター』南雲堂  
中村 捷（著）2009. 『実例解説英文法』開拓社  
宮川久幸他（編），向後朋美他（著）2010. 『アルファ英文法』研究社  
安井稔（著）1996. 『英文法総覧（改訂版）』開拓社  
レナート・デクラート（著），安井稔（訳）1994. 『現代英文法総論』開拓社  
渡辺登士他（編）1976. 『続英語語法大辞典』大修館.  
渡辺登士他（著）1989. 『英語語法研究・十章』大修館.  
綿貫 陽・宮川久幸他（共著）2000. 『徹底例解ロイヤル英文法（改訂新版）』  
旺文社

## 論文

- 滝沢直宏 2001. 「同格名詞節を導く that の省略について」『言語文化論集』  
（VOL. 101, No. 2）  
村山和行 2008. 「同格名詞節における補文標識 that の省略」『横浜市立大学論  
叢』（VOL. 59, No. 1, 2 合併号）

## 辞書

- 井上和幸・赤野一郎（編）2013. 『ウィズダム英和辞典（第3版）』三省堂  
稲見芳勝他（編）1997. 『ニューサンライズ英和辞典（改訂新版）』旺文社  
木原研三・福村虎治郎（編）1994. 『新グローバル英和辞典』三省堂  
國廣哲彌・安井稔・堀内克明（編）1998. 『プログレッシブ英和辞典（第3版）』  
小学館  
小西友七他（編）1993. 『ジーニアス英和大辞典』大修館  
小西友七他（編）2004. 『プラクティカルジーニアス英和辞典』大修館  
小西友七他（編）1993. 『ランダムハウス英和大辞典（第2版）』小学館  
竹林滋（編）2003. 『新英和中辞典（第7版）』研究社  
竹林滋（編）2002. 『新英和大辞典（第6版）』研究社  
野村恵造・花本金吾他（編）2013. 『オーレックス英和辞典（第2版）』旺文社  
野村恵造（編）2005. 『コアレックス英和辞典』旺文社  
野村恵造（編）2011. 『コアレックス英和辞典（第2版）』旺文社

同格節 that における that 省略について

- 花本金吾他（編）2003. 『旺文社レクシス英和辞典』旺文社  
南出康世（編）2014. 『ジーニアス英和辞典（第5版）』大修館  
山岸勝榮（編）2009. 『スーパー・アンカー英和辞典（第4版）』学研教育

Joanna Turnbull *et al.* (written and edited) 2010. *Oxford Advanced Learner's Dictionary* (8th edition) Oxford University Press

2008. *Oxford Sentence Dictionary* Oxford University Press

Michael Mayor *et al.* (written and edited) 2009. *Longman Dictionary of Contemporary English* (5th edition) Pearson/Longman

## A Study on the Omission of the Appositive Clause ‘that’

TSUZUKI Satomi

There are only a few demonstrative studies on the omission of the appositive clause ‘that’. This paper deals with the following six types of the appositive clause ‘that’.

Type 1 : Verb + (preposition) + Noun + that clause

Type 2 : there be Noun + that clause

Type 3 : (Subject) + be + Noun + that clause

Type 4 : Noun + that clause (Subject) + Verb

Type 5 : Noun (Subject) + Verb + that clause

Type 6 : Preposition + Noun + that clause

There are many examples of the omission of the appositive clause ‘that’ in Type 1 and Type 2. The examples in Type 3 and Type 6 have fewer than those in Type 1 and Type 2. Differently from the other types, the appositive clause ‘that’ in Type 4 and Type 5 is usually obligatory. The appositive clause ‘that’ in Type 1, 2, 3 and 6 are optional, depending on a writer’s or speaker’s subjective judgement.

The omission of the appositive clause ‘that’ occurs in colloquial English and written English.

The following are examples in every Type.

① ..., I’ve come to the *conclusion* he’s gone underground permanently...

—J. Black: *Megacorp*.

② “There’s no *doubt* the company is generally outperforming the industry.”

—*Fortune*, Dec. 4, 1978

③ ..., and the timing of his bill is another *indication* he expects more political

than legislative results.

—*The New York Times*, Weekly Review, July 27, 1979

④ Yet, already, the *fact* they had to be careful not to be seen together was a depressing intrusion upon their pleasure.

—E. Thompson: *Tattoo*

⑤ While the *fact* remained we'd been seeing each other three years.

—Stephen Elkin: *Mirror in the Bathroom*

⑥ ... working against the *fear* the door might be opened on him at any moment.

—E. Thompson: *Tattoo*

〔研究ノート〕

## Отрадное (オトラードノエ) 奇譚

国松夏紀

気がかりな「土地の名」がいくつか、記憶の時空間になお揺曳する。上記引用語句の出典、ブルースト『失われた時を求めて』（手に旧「共同訳」<sup>1)</sup>、井上究一郎訳<sup>2)</sup>も、また唯一ようやく通読し得た鈴木道彦訳<sup>3)</sup>もなく、刊行中の吉川一義訳<sup>4)</sup>を参照すると、そもそも「コンブレー」は架空の町、その通りの名、近郊（「スワン家のほう」も含めて）も架空の地名とこのことのようなのである。そうすると「ゲルマント」はどうか？

「ソドムとゴモラ」はそもそも地名と言えるのかどうか？ 「失われた時」がフィレンツェに見出されるに至るまで「土地の名」への興味は尽きない。物語の「現実」において、架空の地名と現実の地名との差異はどのようなものか？ とりわけ読者にとっての異国を舞台とする作品においては。またこの作品の後半で盛んに取り上げられるドストエフスキーの『罪と罰』のように、ペテルブルクという現実の都会を「虚構化」する場合はどういうことになるのか？<sup>5)</sup> ここでは、取り敢えずそのような問題は脇に置き、もう一方の側からは、読者＝筆者個人にとっての気がかりな「土地の名」に関して。

それを一般的に述べれば、出生地、生育地、長年暮らした今は失われた家屋敷とその周辺、自然環境や四季のめぐりをも含めた「土地の名」が記

---

キーワード：Отрадное (オトラードノエ), デカプリスト, 『戦争と平和』, 『白痴』, 『悪霊』

憶の時空間において、折りにふれて明滅し、或いは自己主張し、或いは他のことどもの影に隠れたりする。

このような一方は虚構、他方は現実の気がかりな「土地の名」のほぼ中間に位置するロシアの地名 **Отрадное** (オトラードノエ) について論述するのが、本稿の意図である。そもそも **Отрадное** (オトラードノエ) とは、ロシアの何処にあるのか？ それが問題だ。

話の発端は、阪神淡路大震災の翌年、1996年の「モスクワ事件」である。「事件」後も予定通りモスクワに留まり6月半ば、これも予定通りベテルブルクに移り2ヵ月滞在。キエフ、イスタンブール、アテネ経由で9月末帰国。その2ヵ月ほど後に書いた文章から引用する。

モスクワ事件 四月末日深夜、寄宿先集合住宅エレベーター内で三人組の強盗に襲われ、金品を奪われる。前頭部と鼻柱に負傷。眼鏡のレンズに深い傷。上着の裏地を破り取られる。被害額は、各種現金・T/C 合計一千三百ドルほど。都心でドストエフスキー原作の芝居『悪霊』を観て、そこで偶然出会った旧知のK氏とヴォトカを一杯飲んで、地下鉄で帰って来たところであった<sup>6)</sup>。

現場は、モスクワ北方デカプリスト通り **Улица Декабристов**、最寄り駅は地下鉄9号線、環状地下鉄を南北に縦貫する路線の終点の二駅手前 **Отрадное** (オトラードノエ) である。ちなみに、デカプリストとは概ねナポレオン軍を追撃してパリを占領し帰国後、1825年の蜂起に関与した一群の貴族青年将校である。モスクワの「通りの名」辞典は枚挙に暇がないのであろうが、偶々手元にある一冊から引用してみよう。

貴族の革命家の秘密結社（福祉同盟、南方結社）への参加者で、

### Отрадное (オトラードノエ) 奇譚

1825年12月25日、サンクト・ペテルブルクの元老院広場に姿を見せた面々を記念して名付けられた。有罪判決を受けた126名のデカブリストたちのうち80名はモスクワで生まれモスクワで暮らした (P. I. ペステリ, S. G. ヴォルコンスキー, N. M. ムラヴィヨフその他)<sup>7)</sup>。

命名は1975年と古くはない。また年号を差し引きすると、蜂起150年記念ということのようだ。名前が挙げられている3名が特にこの通りに居住していたというようなことでもなさそうである。一方、地下鉄駅名の由来は至極あっさりしていて、周辺の高層集合団地群の地区 (микрорайон) 名に拠る<sup>8)</sup>。それにもかかわらず、この駅名にデカブリストとその妻たち、とりわけシベリア流刑の夫たちと運命を共にした彼女たちのイメージが固着した。自らの「受難」に引き寄せ重ね合わせたという意識はまったく無く、偶々朝夕見慣れていた (筈の) 天井からぶら下がるパネルの印象がそうさせたのである。そうさせるだけ、駅名 Отрадное (オトラードノエ) という言葉の意味に無頓着であったとも言える。そこで改めて取り敢えず手近の露和辞典でこの、もとは形容詞の意味を確かめておくことにしよう。

#### 【岩波ロシア語辞典】(記載の一部省略)

отрада 1 慰安, 喜び, 楽しみ 2 喜びを与える人・もの

отрадno 1 喜んで, 2 楽しい, うれしい

отрадный 喜ばしい, うれしい (отрадное は, この形容詞の中性形)

#### 【研究社露和辞典】(記載の一部省略)

отрада 1 楽しみ, 慰み, 喜び, 満足 (удовольствие): искать себе отраду

в чём ... に慰めを求める. 2 満足 [楽しみを] 与える人・もの

の

отрадно 喜んで、満足げに ——無人述 <にとって>楽しい、愉快だ：мне *отрадно* в чистом поле. 空気のきれいな野原に出ると私は心がうきうきする。 / *Отрадно* отметить, что... と申し上げることは喜びにたえない。

отрадный 喜ばしい、うれしい (радостный): *отрадное* известие [впечатление] うれしい便り [愉快的印象] *отрадное* чувство うれしい気持ち

これらの記述はそう判明したとて、緊急帰国まで考慮した事件当時の気分には勿論、それを書き付ける予定通りの帰国後二カ月の気分にもそぐわないのであるが、それとは別に、*Отрадное* 駅の半円穹窿天井からぶら下がっていたパネルは、「デカプリストと妻たち」ではないのではないか？ という自らの記憶に対する疑念が生じてきた。

そのきっかけとなった原卓也訳トルストイ『戦争と平和』の関連する一節を引用する。1805年、アンドレイ・ボルコンスキーは、アウステルリッツの仏・墺露三帝会戦で重傷を負うも生還、その後、妻を亡くし独り身。

リャザンの領地の後見上の用事で、アンドレイ公爵は郡の貴族会長に会わなければならなかった。貴族会長はイリヤ・アンドレーヴィチ・ロストフ伯爵だったので、アンドレイ公爵は五月の半ばに彼を訪れた。

すでに春の暑い時期だった。森はすっかり装いをこらし、埃がたち、水のわきを通ると一泳ぎしたくなるほどの暑さだった。

アンドレイ公爵は、この用件に関して貴族会長に何と何をたずねなければならぬかという思いが心にかかり、心楽しまぬまま、オトラードノエ村にあるロストフ家の別荘をさして、庭園の並木道に馬車を進めていった。右手の木立のかけから楽しそうな女の叫び声が聞こえ、

## Отрадное (オトラードノエ) 奇譚

馬車の前を突っ切って走りすぎる少女たちの群れが目に入った。(第二部第三篇二)<sup>9)</sup>

紆余曲折を経て結ばれそうになりながら、結局死別することになるアンドレイとナターシャ・ロストワとの悲劇、その最初の出会である。今引用しつつ、このオトラードノエを現代の地下鉄駅名ないしその近辺の地区と結びつけるのは如何にも地理的に無理があるように思える。現代ロシア中央地域のリャザン州、その州都リャザンはモスクワ南東 196km 地点。広大なロシアからすれば無理ではない距離とも言えようか。しかしその一方で最近の藤沼貴訳トルストイ『戦争と平和』に次のように人物紹介がされているのを見ると、当時の「田舎の領地」で何とか行けるかなとも思うのである。

主要人物紹介 ロストフ伯爵 善良だが意志薄弱な地主貴族。冬はモスクワ、夏は田舎の領地オトラードノエに住む。家計が逼迫しているのに、生活の楽しみを切り詰めることができない<sup>10)</sup>。

作品冒頭、ロストフ伯爵夫人と末娘ナターシャの「名の日」の祝い」が行われているのがボヴァルスカヤ通り<sup>11)</sup>にあるモスクワ中に知られた大きな屋敷であり、夏を過ごすのがオトラードノエ村。ということで、駅天井のパネル画は『戦争と平和』のイメージと決め込んでしまった。「デカブリストとその妻たち」は記憶違いとした訳である。

地下鉄駅名とその天井からぶら下がっているパネルを巡る堂々めぐり、それらは「デカブリスト」に由来するのか、それとも『戦争と平和』もしくは1812年の「祖国戦争」、ナポレオンのモスクワ侵攻に由来するのかの疑問は、註8)に挙げた文献『七つの丘の下に—モスクワ地下鉄の過去と

未来』によってほぼ解決を得た。ところが不十分な点があり、それが充足されたのは最近、「ウィキペディア」地下鉄駅名 **Отрадное** の項目に付属掲載された写真映像による。実は天井から吊り下げられたパネルは二枚あった。この点からして1996年の記憶が如何に当てにならないか判るのだが、それはともかく、その絵に関して『七つの丘の下に』の解説は詳しくても、図版は手前の1枚と遙か遠方に小さく1枚見えるだけで絵柄は判然としない。それが「ウィキペディア」でパネル2枚の両面、つまり4枚の絵柄が全て明らかになったのである。これを踏まえて「解説」を併せて祖述しておこう。『戦争と平和』も全く外していたわけではないということになる。

地下鉄駅南北の端近く、半円穹窿をなす丸天井から卵型と言うべきか或いは樹木の葉状のパネルが2枚下がりそれらの両面に図像が描かれている（画家は、I. B. ニコラエフとL. アンネンコワ）。

北側パネルの向こう側（ホーム）の端に向かって。1812年祖国戦争時代のロシアの擲弾兵たちの攻撃隊形が、将軍を中心に描かれている。これは、ボロジノの戦いでのM. A. ミロラドヴィチ将軍の有名な攻撃と思われる。（この面は『七つの丘の下に』の図版では全く見えない）その推測の根拠は、その反対側の面にデカブリスト群像の中心として将軍を殺したP. カホフスキーが描かれているからである。

カホフスキーは、華やかな軍服姿の同志たちの中にあって地味な文官フロックコート姿で目立ち、また拳銃を正面に構えていることで知られる、とあるのだが、残念ながら「ウィキペディア」の図像もそこまでは判然としない。

このカホフスキーを含むデカブリストたちと向かい合う形のホーム南側のパネルが彼らの妻たち所謂「デカブリストの妻たち」の図像である。これはわびしい冬のシベリアの風景（教会？正教十字架の墓標

## Отрадное (オトラードノエ) 奇譚

が見える)の上に女性たちだけの群像で比較的明るい色調であり、おそらくこれが最も記憶に残っていたものと思われる。『七つの丘の下に』の図版はこれが見えず、その裏側の男たちだけの群像が写っている。南階段に面したこの画面にはロシア文学の巨匠たち、司祭長アヴァクームからレフ・トルストイとフォードル・ドストエフスキーまでが描かれている。(この画面は全く記憶にない)

1812年「祖国戦争」、デカブリストの誕生とその1825年の反乱、その後の作家・思想家と文脈は明らかだが、それ故にかえって駅名 **Отрадное** との関連性は不明瞭になる。そんな中、トルストイからドストエフスキーに視点を変えて、こちらが **Отрадное** の本家本元ではないかという転機が訪れた。示唆は、「事件」後K氏に誘われた参加したベテルブルク及びスターラヤ・ルッサで開催されたドストエフスキーの研究会におけるKS氏の『白痴』をめぐる発表であった。発表を伺いながら当初はエパンチン將軍家の別荘があるパーヴロフスクと混同していたのだが、その後作品を読み直したりしているうちに(詳細は割愛する)次第に **Отрадное** の実体(?)が明らかとなった。それはヒロイン、ナスターシャ・フィリップオヴナの「屈辱」に深く関わる「土地の名」であった。

\*

『白痴』の物語が始まった時点、つまり主人公ムィシュキン公爵が療養先のスイスから久しぶりに帰国、ワルシャワからの列車内で宿命の恋敵口ゴージンと出会う時から18年前、7歳のナスターシャはみなし子となる(火災で母親焼死、父親狂死、妹病死)。近隣の地主トーツキーの保護下におかれる。5年後、トーツキーは、12歳になったナスターシャに目をつ

け専門の家庭教師をつけて高度な「淑女教育」を施す。4カ年の教育期間終了後、トーツキーは16歳になったナスターシャを自分の領地の小村に連れて行く。その小村の名こそが **Отрадное** (オトラードノエ) であった。

この新居に移って2週間後にトーツキーはやって来て、それ以来毎年夏に二月か三月滞在することが恒例となり、4年経過。ナスターシャは20歳になる。そんなある年の7月、恒例の夏の滞在をわずか2週間で切り上げ、4ヵ月後の冬の頃、トーツキー結婚の噂にナスターシャ決然とオトラードノエ村の家を捨て首都ペテルブルクに上る。

ナスターシャはこの屈辱の4年間で別人のように変貌している。美しい少女からエキセントリックな大人の美女に変身している。トーツキーは最も身近に居ながらそれに気付かなかった自身の迂闊さを恥じ、結婚を断念する。それからさらに5年経過の現時点、55歳のトーツキーとエパンチン家の長女アレクサンドラ(25歳)との縁談が持ち上がる。ナスターシャは再び(?) 邪魔者となり復讐心に点火、物語が動き始める。

以下、参考までに該当部分の日本語訳を借用提示しておく。

家はたいそう優雅にしつらえられており、村そのものも、まるであつらえたように<sup>オトラードノエ</sup>愉快村と呼ばれていた<sup>12)</sup>。

これは文字通り故意に名付けられたものである。作者ドストエフスキーによる虚構と考えてまず間違いないであろうが、虚構故にかえて『白痴』という文学作品の中ではナスターシャ・フィリッポヴナの「屈辱」の源泉としての重篤のリアリティを獲得している。現実の小村はその名とともに儂く消滅しがちなものであるのに反して。

しかし、その一方において **Отрадное** は、モスクワ地下鉄駅名(その典拠の地区名)以外に現実的典拠、「土地の名」を持たないのだろうか?との

## Отрадное (オトラードノエ) 奇譚

疑問に導かれるように（大した期待もせずに）、手元のロシア連邦地図<sup>13)</sup>を参照する。巻末索引で検索し本図で確認したところ、なんと Отрадное という町はロシア中に10を数える（同名のラドガ湖東岸の小さな湖は除く）。ちなみにそれらを以下に列挙する。

- アルタイ地方、ノボクズネツク西側付近のオトラードノエ。
- カリーニングラード州のオトラードノエ。
- レニングラード州、ネヴァ河沿岸の町オトラードノエ。
- フィンランドとの国境付近のヴィボルクと入江を挟んで向い合うオトラードノエ。
- ラドガ湖西岸上記オトラードノエ湖に面する町オトラードノエ。
- モスクワ州クレムリン北方のオトラードノエ。
- 同じくクリムリン北方のオトラードノエ（ここに同名の地下鉄9号線の駅がある）。
- 沿海州ウラジオストク北方、ハンカ湖付近のオトラードノエ。
- ヴォルガ川上流、トヴェーリ付近のオトラードノエ。
- 沿海州、ハバロフスク南方のオトラードノエ。

『白痴』のオトラードノエ村に収束したかに見えてこれではオトラードノエが、徒にとりとめもなく拡散したかに思われる。ところが、これでもまだましな方であることが、ネット検索を試みると判ってくる。Отрадное から検索条件を сельцо Отрадное に拡大するとヒット数も手におえないほど拡大する。

\*

何かおかしい。何か違うアプローチの方法がありそうだ。その感触は、

例えば、ブルースト『失われた時を求めて』第4篇「ソドムとゴモラ」に触発されて何故か Золотой Вавилон（黄金のバビロン）というショッピングモールの名称に思い至った。漠然とした「黄金の楽園」もしくは「永遠の廃都」といった連想によるものだろう。偶々地下鉄駅 Оградное をモスクワの詳細な地図<sup>14)</sup>で確認していたところ、駅名にかぶるように「黄金のバビロン」が記載されているのに気がつき、不思議な感じがした。1996年の「事件」当時、このショッピングモールは無かった筈だ。2010年暮れ「黄金のバビロン」には見物に出かけているが、その時「事件」現場の記憶がよみがえらないということがあるだろうか？

この疑惑は、2010年当時モスクワで使っていた地図<sup>15)</sup>と書店注文で入荷した最新の地図<sup>16)</sup>を照合することで解決した。デカプリスト通りの「黄金のバビロン」は2010年以降の開設でその当時はまだ地下鉄8号線「植物園」駅付近の Золотой Вавилон しかなかったのである。それにしても両者はそう遠くはない。そうと知っていたら、わざわざ出かけたりしなかったかも知れない。いずれにしても Оградное に関してもこの手の初歩的な思い違い、思い込みが何処かで働いてはしまいか。

#### 註

- 1) 新潮社版『失われた時を求めて』全7巻（淀野隆三，井上究一郎，伊吹武彦，生島遼一，市原豊太，中村真一郎訳）1974年5月初版，1991年1月16刷。  
\* 1959-60年新潮文庫版全13冊の再刊。
- 2) 筑摩書房ちくま文庫版『失われた時を求めて』全10巻（井上究一郎個人訳）1992年2月-1993年7月。
- 3) 集英社版『失われた時を求めて』全13巻（鈴木道彦個人訳）1996年9月-2001年3月。
- 4) 岩波文庫版『失われた時を求めて』全14冊（吉川一義個人訳）2010年11月-2015年5月（第8冊）。
- 5) 例えば、ベテルブルクのドストエフスキー博物館で購入した «Прогулка

Отрадное (オトラードノエ) 奇譚

Достоевского» 添付のDVDを視聴し、同じく添付の地図を頼りにラスコーリニコフの屋根裏部屋のある建物、ソーニヤの職場、金貸しアリオーナの住居と辿り彷徨えば、虚実皮膜の間、奇妙な眩惑感覚に襲われるだろう。

- 6) 国松夏紀「ラゲリのことその他——ロシア研修の旅から」桃山学院大学広報「アンデレクロス」第78号、1997年1月 pp.20-22
- 7) Имена московских улиц: Топонимический словарь. — М.: ОГИ. 2007. — 608с.: ил. — (Московская библиотека)
- 8) Наумов М. С. Под семью холмами: Прошлое и настоящее московского метро. — М.: АНО ИЦ Москвоведение»; ОАО «Московские учебники», 2010. — 448с.: ил. ちなみに本書のメインタイトル「七つの丘の下に」は、言うまでもなく「七つの丘の上に」建都されたローマの伝承が踏まえられさらに「モスクワ第三のローマ説」も踏まえられている。「第四のローマ」はなかるべし。ビザンチンのコンスタンティのポリスに次ぐ第3のローマ＝モスクワもまた七つの丘の上に建設されたが、地上の都に匹敵する地下宮殿として地下鉄網が掘削造営された云々。
- 9) 中央公論社版新集世界の文学⑧トルストイ『戦争と平和Ⅱ』（原卓也訳）1968年6月。pp.7-8「アンドレイ公爵は」以下の原文は次の通り。テキストはトルストイ生誕100年記念90巻全集（1928-1958）のリプリント版（1992）桃山学院大学図書館所蔵である。

Князь Андрей, невеселый и озабоченный соображениями о том, что ему нужно о делах спросить у предводителя, подъезжал по алее сада к отраденскому дому Ростовых. Вправо из за деревьева он услышал женский, веселый крик, и увидал бегущую на перерез его коляски толпу девушек.

- 10) 岩波文庫版トルストイ『戦争と平和（一）』（藤沼貴訳）2006年1月、p.7
- 11) ちなみに、ボヴァルスカヤ通り Улица Поварская は、クレムリンの北西、新アルバート通りの北側、両通りがその西端で交差する付近にゴーゴリ博物館、すなわちゴーゴリ終焉の地がある。
- 12) 河出文庫版（望月哲男訳）『白痴Ⅰ』2010年7月刊、p.84（第1部-4）  
ちなみに30巻全集⑧35-36の原文テキストは以下の通り。  
убран он (дом) был особенно изящно, да и деревенька, как нарочно, называлась сельцо Отрадное.

さらにちなみに、原文テキストは異なると思われる翻訳例を2, 3 提示しておく。

米川正夫訳（河出書房版個人訳全集⑦1969年6月㉞，1978年6月㉞刷刊 p. 43）

《その家にかくべつ優美に飾られており、村の名もまるでわざと付けたように  
オトロードノエ  
慰楽村と呼ばれていた。》

小沼文彦訳（筑摩書房版個人訳全集⑦1963年4月㉞，1971年4月㉞刷刊，p. 42）

《その家はとりわけすっきりと優美に飾られていた。それにその小さな村はその名も、まるでわざとつけられたもののように「慰<sup>オトロードノエ</sup>め」村というのであった。》

木村浩訳（新潮社版全集⑨1978年8月刊，p. 52）

《その家はとりわけしゃれた飾りつけがしてあった。それに、この小さな村はまるでわざとそう名づけたものように「慰<sup>セリツォー・オトロードノエ</sup>め村」と呼ばれていた。》

13) ГЕОГРАФИЧЕСКИЙ АТЛАС РОССИИ. М., 1997. Производственное картографическое объединение «КАРТОГРАФИЯ»

14) Самая БОЛЬШАЯ МОСКВА. АТЛАС С ТОЧНОСТЬЮ ДО ДОМА. (最も大きなモスクワ。1戸に至るまでの詳細地図)

15) АТЛАС МОСКВА. С КАЖДЫМ ДОМОМ. (モスクワ地図。一軒一軒に至るまで)

16) 14)に同じ。

〔研究ノート〕

## モンゴルにおける ウマの見分けかたに関する一資料

烏仁其其格

モンゴル遊牧生活においてはウマの乗り物としての役割が格別に大きい。ウマは家畜放牧をはじめとして旅，狩猟，情報伝達などの用途に広く利用されるとともに，戦闘の具としても用いられ，13世紀における強大なモンゴル帝国成立に重要な役割を演じた。モンゴル遊牧民はウマの性質，習性を知悉し，生活生産，社会活動に応じてウマの選定を行ってきた。つまりどんなウマが季節別に利用されるか，どんなウマは険しい地形に適しているか，どんなウマはいくつかの黒白の道のり（家畜の毛色が目で判断できる距離を指す）を速く走れるかなどの経験，さらに対外戦争など特定の機会において何十万頭という多数のウマを揃えて戦闘に出かけるなど，ウマの活躍のさまざまな場面を通じてウマに関するモンゴル独特の壮大な知識を蓄積してきた。それが今日まで伝承され，実際に維持・活用されている。その一部は書きとどめられ，一般に「*sudur bičig*」（経書）などと称され，写本の形を取った文献が現在多く発見されている。たとえば，中国各地の図書館には『十二種の能力の具わった三種の駿馬の特徴』（*arban goyar ayimaγ erdem tegüsügsen yurban jüil külüg-ün singji orusiba*），『相馬三

---

キーワード：モンゴル，*morin-u simji*，駿馬，遊牧民，家畜観

十六鑑』 (*mori mal-i üjekü yučin jiryuyan jüil-ün toli bičig*), 『馬王書』 (*morin-u qayan-i ündüsün*) という資料の存在が知られている<sup>1)</sup>。またデンマークのコペンハーゲンの王立図書館にも『馬王明王相馬経』 (*erten-ü damda-yin qayanggiru-a morin-u singji nomlaju jokiyaysan debter*) という写本が保存され、モンゴル国にも『ウマの特徴』 (*morin-u sinji*) と総称される文献がある。それは伝承されてきた写本の中から11を選んでまとめたものである。1989年には上記の『ウマの特徴』に収められた11の写本が再び整理され<sup>2)</sup>、新たにいくつかの写本を加えた『駿馬の特徴』 (*küüg-ün sinji*) という題目で出版されている<sup>3)</sup>。これらの「*sudur bičig*」にはモンゴル遊牧生活に活用されるウマを選ぶ基準がさまざまな形で示されているのである。

本稿は『ウマの特徴』のうち、より内容の詳細なものを訳注し、「*sudur bičig*」の全容を示し、モンゴル遊牧民がどのような基準でウマを選んでいったのかを検討する。『ウマの特徴』に関する研究も進められ、その成果が発表されている<sup>4)</sup>。これらの先行研究は『ウマの特徴』の部分的な内容を示したり、写本の内容上の特徴を言及したりしているが、写本原典そのものはいまだ日本語に訳されておらず、その重要性のわりに全容はあまり知られていない。

なお本稿は1978年版『ウマの特徴』を基本として扱っているが、補充できるような部分を『駿馬の特徴』より適格的に引用するだろう。

### — 『ウマの特徴』の紹介

『ウマの特徴』には11の写本が収められており（以下、写本1、写本2、……写本11というようにそれぞれ示す）、そのうち写本6、7、10のタイトルが不明であるが、他の写本のタイトルは次のように示されている。

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

erdenitü qurdun ridi külüg-ün erdem-tü kelberi-yin singji-yi ilyaburilan tus tus-un jokildaqu jasaly-a-yi todurqayilaysan mergen toli neretü bülüg orusiba (宝となる駿馬の貴重な形の特徴を見分け、それぞれに合う調教を説明する賢い鏡という章が存する)

erdeni-tü külüg-i sinjileküi ba uyaqu jasaqu sudur orusibai (宝となる駿馬を見分けると調教するとの経書が存する)

morin-u erdeni-yi uqayaraq suker amta neretü bülüg (ウマの宝が分かる飴の味という章)

amitan-u jayay-a-bar boluysan erdeni asuru sayin kiged mayui qoyar büküi-yin tula ariyun-a ilyaqu tobči šastir (動物の生まれつきの宝に良し悪しの2つあるのを鮮明に区別する略経)

morin-u sayin-i uqayulayči mergen tobči neretü bülüg (ウマの良さが分かる賢い概要という章)

morin-u sinji-yin jiryuyan jüül-ün eke biçig ene bui (ウマの特徴の六種の基となる書がこれである)

enedkeg-ün yosun-a jokildun ayuluysan morin-u singji čoytu kesig kemegdekü orusibai (インドの方法に基づいたウマの特徴を見分ける輝しい恩恵というのが存する)

sayin morin-i sinjikä sudur orusibai (良いウマを見分ける経書が存する)

上記のタイトルからも分かるように、『ウマの特徴』の各写本においては、良いウマまたはその宝となる特徴を見分けるとともに、それに合わせて調教するという2つのポイントが主な内容をなしている。まず良いウマを発見し、そのウマの特徴に合わせた調教を施すことによって、ウマの能力を真に発揮させることが目的とされている。

各写本の長短は実にさまざまであり、短いものは僅か3頁で、長いのは

30頁に及ぶものもある。したがって内容の豊かさも異なる。ウマの外観の特徴について簡略に見分けた項目があれば、さらに何頁にも及ぶ詳しく説明した項目も見られる。同じ項目がいくつかの写本において言及されるが、その説明の分量、詳しさなどはさまざまである。

写本においては仏教用語やウマに関する詩、讃歌、祝い言葉などが所々嵌められている。写本1の冒頭では *om sayin amuyulang boltuyai* (平和でありますように) (Lubsangbaldan 1978: 16), 写本5では *manjusiri burqandur mörgümüi* (文殊菩薩に跪拝しよう) というような仏教に関わる用語が見受けられる(同前 139)。写本4においても仏教に関わる言葉が見られる。これらの写本は仏教の影響をある程度受けたことが示されている。またウマを褒め称える詩や祝い言葉が見られる。写本7は *arbai metü aduyun delgeretügei, aġini morin delgeretügei, üljei quday-un čoy badaraču, zambutib-un čimeg bolqu boltuyai* (大麦のようにウマが繁栄するよう、駿馬が繁栄するよう、幸福が栄え、世の飾りになるよう) という祝い言葉が書かれて終わる(同前 187)。モンゴル人のウマへの深い思い入れが表されており、かれらのウマに対する観念の一端が示されているのである。

本稿においては、主に写本4が扱われているが、写本4は全部で18頁あり、表裏に文字が書かれ、1から18まで番号がつけられ、表面がaと、裏面がbと、次々と表記されている。たとえば、第1頁の表面は1aと、裏面は1bと示され、最後の頁は18aである。各頁ごとに10-21行の文字が書かれ、行数は不均等である。写本4のタイトルは『動物の生まれつきの宝に良し悪しの2つあるのを鮮明に区別する略経』と称される。ところで写本4の8a頁では *siker amta kemekü čiqula tobči neretü tobči bülüg* (飴の味という重要な簡章)と書かれ(同前 110), 18a頁の最後行では *morin-urdeni-yi uqaqu siker amta neretü bülüg ene bui* (ウマの宝を分かる飴の味という章はこれである)と示されている(同前 119)。したがって写本4

のタイトルは飴の味という章であるか、それともほかの経書であるかは、はっきりと分かっていない。またこのタイトルからは写本4の書かれた目的も明確されている。つまりウマの生まれつきの条件や特徴を見分け、その良否を見極めようとしている。

写本4は全体的に誤脱が少なく、文字が明瞭であるが、判読できない箇所がいくつかある。また5aから8a頁までの部分では書かれた内容が混乱している。内容が重なったり、ある項目がきちんと解釈されていないなどである。これは写本4の著者が自分の必要な内容を取り出したり、分かりにくい部分を除いたり、また通合のよいように補足したりしたのではないかと考えられる。

またある項目については具体的に解釈されず、他の文献を参照するように提示している。たとえば、歯と筋を『モンゴルの大特徴』を参照するように(同前 107)、頭の11の特徴、歯の11の特徴、肉の30種の勇敢な特徴、上の3つの隆起、下の4つの杖などを『モンゴルの特徴』を参照するように指示している(同前 108)。しかしこの2つの文献があるという情報のみが伝わり、具体的な内容については完全に明らかにされていない。

以下、逐語訳を試みるが、説明されなかった項目については『ウマの特徴』の他の写本から参照できる内容を注として取り入れている。またある言葉が落とされたり、綴り語が欠けたりして意味の通じない部分については可能な限りに筆者が補い、( )に入れて示すことにした。

特に写本4ではウマの歯について実に詳細な識別が行われ、数多くの名付けられた歯があげられる。それらの名付けは歯それぞれの特徴によるものが多く、つまり歯の持つ特徴はそのまま歯の名に化し、混乱されやすいものばかりである。歯それぞれが区別されるように、歯個々の名付けを直訳し、名称としての意味を示すように「 」に入れている。

## 二 『ウマの特徴』の写本4の翻訳

1a ダラナタヤ仏に跪拝しよう。

性格の最高とは均等にあり

慈心たるすばらしい仏

次にゲンガ・ニンボをはじめとする仏たちは

わが心を喜ばせる

動物の生まれつきに具わっている宝には、その良し悪しの両方が存するため、鮮明に区別する経書を書こう。

賢くて良いウマの特徴を識別するときには、普通2つの見分けかたがある。全体的な見分けかたと部分的な見分けかたとの2つである。全体的な見分けかたによって、天のウマ、地のウマ、鳥類のようなウマ、草食獣のようなウマ、肉食獣のようなウマ、火の性質（のウマ）、水の性質（のウマ）、気の性質（のウマ）という8種で識別される。部分的な見分けかたによって、頭の特徴、蹄の特徴、尻尾の特徴、声の特徴、食べ方の特徴、水の飲み方の特徴、足跡の特徴、歯の特徴、筋の特徴、全身の特徴という10種で識別される。とくに識別する際、6つ<sup>5)</sup>、または20のたくましい特徴を有し、異なる特徴を具えたウマ

1b それぞれであり、今そのすべての説明を書こう。天のウマとは飛び跳ねたライオンのように胸がよく、前足が長く、頭が高く、鼻が大きく、背中が四角で、すらりとしている。地のウマとはカエルに乗ったようで、肉付きがよく、4本の足が短く、背中がずんぐりし、怠け者である。鳥類のようなウマとはすらりとしたまっすぐな歩き方であるが、ナーダム<sup>6)</sup>の現場では臆病なためよくない。草食獣のようなウマとは驚きやすく、頭がまっすぐで高く、目が赤く、よく瞬きをし、歩くときは耳をよくぴくぴくさせ

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

る。肉食獣のようなウマとは怠け者で、目が赤く、速く呼吸し、頭が低く、放尿するときは足を高く上げ、口をよく開け、怖がらなくて勇敢である。曲がった前足は短く、後足が長ければ火の火である。まっすぐで前足は短く、後足が長ければ水の火である。ゆったりとした後足は短く、前足（が長ければ）水の水である。曲がった後足は短く、

2a 前足が長ければ火の水である。まっすぐで後足は短く、前足が長ければ気の水である。まっすぐで4本の足は均等であれば、気の気である。曲がった4本の足は均等であれば、水の気である。このように8種で識別される。見分ければ（ウマの）頭には6種類ある。つまり肉食獣の頭、カエルの頭、ヒツジの頭、ウサギの頭、麝香鹿の頭、シカの頭との6種である。肉食獣の頭とは唇と口が大きく、鼻面に割れ目があり、目が赤く、目つきが凶暴で、目の大きさが中ほどである。カエルの頭とはすこし短く、額が大きく、目が大きく、舌の寝床（口腔底を指す）が広く、口が大きく、鼻翼が大きい。ヒツジの頭とは下げた頭で、額が大きくて長く、頭骨のつなぎ目が太く、目が大きく、舌の寝床が広く、眉骨が大きく、口と唇が大きい。ウサギの頭とは目が大きく、鼻面が丸々として、頭が小さく、耳が大きく、顔が大きく、舌の寝床が広い。

2b 麝香鹿の頭とは小さくてすこし長めの頭で、丸々とした目があり、耳が大きく、口と鼻がきれいである。シカの頭とはまっすぐで、鼻が大きく、肉と骨の間がはっきりとして、舌の寝床が小さい。これらのうちカエルの頭とウサギの頭との2つは貴重である。（ウマの）蹄には6種類ある。野生ロバの蹄、ホラガイのような碗、肉蹄、トリの爪、ヤクの蹄、速い爪との6種である。野生ロバの蹄とは丸々として、蹴爪が小さく、先がひっくり返したようで、踵が厚く、蹄先が薄く、蹄底が深く、外縁が鋭い。ホラ

ガイのような碗とは前述の蹄と似ているが、蹴爪が細長く、蹄底は痩せこけて周りが高くなり、

3a 蹄先がゆったりとしている。肉蹄とは偏平で短く、楕円のように、蹄先が長く、踵で地面を引きずり、蹴爪が大きく突き出ている。トリの爪とは薄くて幅広く、とても短い蹄で、蹴爪が大きく突き出、歩くときは踵で地面を引きずる。ヤクの蹄とは根元が太くてまるで大きな蓋をしたようで、蹄先が鋭く、すこし楕円のようなのが丁度よく、踵へと広がり、蹴爪が深く痩せこけている。この蹄は貴重な蹄だとされている。速い爪とはトリの爪と同じく、高く、蹴爪が空に痩せこけている。肉蹄とトリの爪との2つの蹄は悪い蹄だといわれている。尻尾の特徴とは太くて短く、しなやかな尻尾が貴重であり、細くて長く、しなやかではない尻尾は下等であり、換えると中等になる<sup>7)</sup>。声を見分けるとき、雲雀の鳴声のように高く、はずみがあるのは貴重だという。

3b 雉鷹の鳴声のように中ほどのはずみがあるのは中等だという。ブタの鼻から出したような鳴声は悪くて下等だという。食べ方を見てみると、食べる量が多く、糞が少なければ貴重であり、食べる量が少なく、糞が多ければ下等になり、換えれば中等だと分かる<sup>8)</sup>。水の飲み方を見てみると、水をすこしずつしょっちゅう飲めば、トリのようによい。水を3回に分けて飲めば、トラのようによい。2回に分けて飲めば、野生ロバやシカのように中等になる。水を1回でいっぱい飲めば、ラバやウシのように悪い。心掛けてやるのがよい。足跡を見分けると、蹄縁以外の部分の跡がはっきりではなく、踵の跡がぼんやりしていれば（貴重である）。前足の跡より後足の跡がいくつかあれば中等である。全部4本の

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

4a 足の跡がはっきりとしているが、後足の跡は前足の跡に及ばなければ、下等である。歯<sup>9)</sup>と筋<sup>10)</sup>については『モンゴルの大特徴』を参照せよ。全身の特徴には7つの重要、6つの花、6つの性質、20の好み<sup>11)</sup>、喩え言葉<sup>12)</sup>、肉の形<sup>13)</sup>、僅かなしるし<sup>14)</sup>、吉凶の区別<sup>15)</sup>という8つの項目が含まれる。7つの重要とは、後頭部が重要で、しま模様のトラの口が重要で、ヘビの瞳が重要で、強いライオンの鼻が重要で、頑丈なシカの脛が重要である<sup>16)</sup>。また必要な花とは、心臓の花は目なので、目は赤くて大きく、凶暴な目つきが必要である。肺臓の花は鼻なので、鼻翼が広いのは必要である。肝臓の花は舌なので、

4b (舌が) 小さく薄いのは必要である。脾臓の花は唇なので、(唇が) 柔らかいのは必要である。腎臓の花は耳なので、(耳が) 薄くて速く動かすのは必要である。子宮の花は口なので、とても大きい口は必要である。6つの性質が具わった特徴だといえ、頭と蹄は金から生じ、硬くて速い性質を持つ。首は木から生じ、三角で薄い性質を持つ。胸は火から生じ、厚くて高い性質を持つ。腰は気から生じ、大きくて丈夫で丸い性質を持つ。尻は水から生じ、高い性質を持つ。筋肉は土から生じ、健康な窪んだ性質を持つ。シダム・マイリ仏に跪拝しよう。バンディダ仏から歯が生まれる<sup>17)</sup>。2頭の2歳ウマから生まれる<sup>18)</sup>。歯は<sup>19)</sup>

5a 体が全体的に軽くて細く、4つの蹄は野生ロバの蹄のようで、脛はシカの脛のようで、上半身は発情した種ラクダの体のようで、頭の形はオオジカの頭のように、目は凶暴なオオカミの目のようで、頭の11の特徴、歯の11の特徴、4本の足の特徴、3つの隆起の特徴がすべて具わる<sup>20)</sup>。歯は「生えた野生ロバ」<sup>21)</sup>であり、犬歯は「崖が険しい」<sup>22)</sup>であればつりあう<sup>23)</sup>。老いた牝ウマ(13歳以上を指す)から生まれた当歳ウマの特徴はこれであ

る。毛が濡れ、鼻が薄く、目には睫がなく、眼窩に肉がなくてよいが、冬にはよくなるだろう。小腸の欠陥で悪く、眼窩の欠陥で風に（悪く）、睫の欠陥で大勢の受けが悪いだろう。中年の牝ウマ（6-12歳のを指す）から生まれた当歳ウマを確認する特徴はこれである。目が突き出て、鼻が厚く、眼窩とタテガミの毛が濃く、

5b 睫が多いため、冬と夏は均等によい。5歳牝ウマから生まれた当歳ウマを確認する特徴はこれである。上睫が疎らで下睫が9本あり、頭が均等で肉付きがよく、鼻面が短く、小腸が長く、尾骨が長い。それが欠陥となり悪くなるだろう。地面の上りへと向って横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマを確認すると、前足が短く、後足が長い<sup>24)</sup>。また種ウマの teg（零の意味）が見つからなければ、牝ウマは cig（点の意味）になるといわれる<sup>25)</sup>。頭の11の特徴、歯の11の特徴、肉の30種の勇敢な特徴、上の3つの隆起、下の4つの杖などは『モンゴルの特徴』を参照せよ<sup>26)</sup>。エリチ（子を産まないの意味）牝ウマの特徴はこれである。小腸が大きく、尾骨が長く、前髪が僅かで、束尾の毛が疎らで、腰は鷲の翼のようで、ウシのような尻があり、シカのような脛があり、鼠径が大きく、胸腔に腹があり、頭は老いた野生ロバの頭のように、第一頸椎が1指尺である。右側に横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマは左半身が引き締まり、タテガミはその側へと垂れる。日中<sup>27)</sup>に牝ウマから生まれた当歳ウマは体の全体が

6a 細く、毛が濡れ、目つきが鋭い。夜に牝ウマから生まれた当歳ウマは視力がよくない。牝の当歳ウマを生む牝ウマの特徴はこれである。尾と尾根の剛毛が均等で、鼠径が四角で太く、タテガミが濃密である。肉の30種<sup>28)</sup>はどうかといえば、鷲の骨で囲んだような爪が3指尺であっても、石や水の場所で勇敢である。骨と（筋肉）の2つが同じく、ワナの弦のよう

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

である。筋が広がり、角が勇敢で、ひざが強い。人の額のように（あれば）よく、「匙」<sup>29)</sup>のしるしがあればひざは勇敢である。肩と肩甲骨の特徴はどうかといえば、鷲のような肩、黒肉と肩の後ろ部分の肉付きがよければ勇敢で、黄鴨のような胸骨、隼のような胸肉が勇敢で、首が3指尺で、第一頸椎が1指尺で、また人の首や盤羊の首のようであれば勇敢である。歯の黒窩（咬み合い面を指す）には6つの赤い石が現われれば、歯と外形との2つがつりあう<sup>30)</sup>。ライオンのような外形がつりあう<sup>31)</sup>。上歯には

6b 「努め」「烙印」「錐のような簪」「明り」「ヘビ」「そそっかしい」「並び」「隼の嘴」「長いヘビ」と名付けられたしるしが10ある<sup>32)</sup>。下歯には「梯」「囲み」「とさか」「地の丸い石」「赤い暗流」「気」「歪み」「オリオン壁」「つなぎ」と呼ばれたしるしがある<sup>33)</sup>。上歯のしるしは速さの現れであり、下歯のしるしは長距離に適応するかどうかを示し、「とさか」のしるしは中等である。（ウマが）落ち込んだしるしはこれである。秋にいつもわくわくさせれば、歯は根元からぶち折れる。逆睫毛となり、目が窪み、鞭打つと右上歯がぶち折れる。歯と目は秋によるものである。毒にはまったウマは歯が黄色っぽくなり、黄色い垢が落ちる。左側の歯がぶち折れると、春によるものである。（ウマが）疲れ切ったため、歯は全部曲がってぶち折れる。当歳ウマの特徴はタテガミと尻尾の毛が濃く、口ひげがあり、第一頸椎が大きく、

7a 耳が大きく、4つの蹄が鋭く、爪で踏み込み、鼻面が長く、目と眉毛が大きく、眼窩が窪み、いつも体に肉がない。良い品種だと確認する特徴とは、通常体がよく、顔にはっきりとした剛毛が生える。ウマの調教を25日間行なう<sup>34)</sup>。調教する人は、食べ物を食べさせ、飲み水をも体にあわせる。歯は翡翠のような色になり、黒窩に6つの赤い石ができれば、歯と外

形がつりあう。上歯には「努め」「烙印」「錐のような簪」「明り」「ヘビ」「そそっかしい」「並び」「隼の嘴」「長いヘビ」と呼ばれるしるしが10ある。下歯には「梯」「囲み」「とさか」「地の丸い石」「赤い暗流」「気」「歪み」「オリオン壁」「つなぎ」などのしるしがある。下歯のしるしは長距離に適するかどうかのしるしである。「とさか」のしるしは中等で、「オリオン壁」と「梯」「とさか」の2つは硬くて最後まで努力する。聖主の乗馬には宝となる特徴が

7b 36種ある<sup>35)</sup>。額が鉄砧のようで、唇はオオジカの唇のように大きく、臼歯は種ラクダの犬歯のようで、上下歯の隙間の肉が均等であるところには6つの隆起があり、足より後へと太ももには4つの隆起があり、額に3つの隆起があり、両耳には旋毛がなく、歯は拳のように大きく、眼窩はウシのシャーガ<sup>36)</sup>が入れるほどで、2つの太ももと臀部が均等である。歯の付け根に赤い石ができたのをすぐ抜き取れ、(そうしないと)後に悪くなるだろう。6本の割れ目がある「烙印」はよい。気の性質のウマは驚きやすい。「そそっかしい」「並び」と「太い針」<sup>37)</sup>とがよい。「地の丸い石」には節があれば、貴重でよい。「まっすぐな梁」という下歯は長距離にもつとよい。春に気の性質のウマがよく走るといわれている。盤羊のようなウマは春に気が強く、日中には3分量の草と1分量の水をやる。オオカミの

8a ようなウマはよく、草を1分量増やしてやり、目が赤くなると捕まえる。キツネのようなウマは草を3分量でやり、石上に止まった鷹のようになればよく走るといわれる。「短いウシ」<sup>38)</sup>が僅かであり、下歯には「青いカエル」<sup>39)</sup>があり、上歯より下歯がよければ、この歯は「赤みがかった灰色の駆遁の歯」<sup>40)</sup>と称される。また孔雀のようなウマは春によいため、水を多めに、草は少なめにやるが、または百位には入れない。地面の上りへ

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

と向って横たわった牝ウマから生まれる当歳ウマは前足が短く、後足が長い。

飴の味という重要な簡章

内臓の具合を見分けると、心臓の状態が目に見れるため、心臓が大きいのはよい。目の色が赤黒いのはよいが、勇敢で大勢がいても怖がらない。心臓が小さいのは、目が黄色っぽく、眉毛が少なく、額が薄ければ

8b 怖がるため大勢に悪いという。肺臓の状態が鼻翼に見れる。鼻穴が丸々としたのは、肺臓が小さいため（よい。鼻穴が狭いのは肺臓が大きいいため）長距離を走ったり、歩いたりするのに向かない。腎臓の状態が耳に見れる。腎臓が小さいのは良いしである。耳は薄いのがよい。厚ければ、腎臓が大きいいため悪いという。肝臓の状態が舌に見れる。肝臓が小さいのはよく、舌の色が黄色っぽい。赤くて厚ければ、肝臓は大きいため、心臓が圧迫され、（ウマは）走らない。脾臓の状態が歯茎に見れる。脾臓が小さいのはよく、歯茎が痩せこけていればよい。歯茎は膨らんでいれば、脾臓が大きいため悪いという。また重要なのは、耳の生え方が細ければ、（ウマは）荒っぽい。耳が鋭いため、怖がるという。耳は両方へ平らでゆったりとして

9a いれば、未亡人の運命だといわれ、戦闘や遠い旅を禁ずる。2つの耳が先へと広がり、窪んでいれば連れが多い。耳は細い形で生えていれば、（ウマは）暴れやすくて怖がる。乗用するときは耳を前後に交差して動かせれば、速く走るしである。どのような耳であれ、耳は下へと垂らしていれば、前面より避けて驚く。耳はまっすぐで、薄くて長ければ良いしだろう。目の視線を見分けるとき、前面からみれば、左目が低く、右目が高く見えれば、持ち主を換える前兆であるが、そのウマがため息をつ

けば、持ち主が他人に引き取るように頼まれたとき渡すようにいったため、持ち主やウマの群れから離れる前兆である。前面からみるとときには、2つの目で人見知りして見ていれば、強盗に

9b 盗まれる前兆である。前面からみるとときには凶暴で目つきが鋭く、暴れていれば、持ち主が大きい厄にあうため、その年には悪いだろう。黒目がへびの目のようであれば、大小なる幸運がもたらされる前兆である。黒目より外へと、脛より裏へと銀の輪のようであれば、身分高い人に幸運がもたらされるが、普通の庶民にはあわないといわれる。2つの目が両側へ傾いたように見えれば、逃れるかまたはよく走れないという。調教するときは、いつも山の頂を見たり、乗用するときは尻尾を振って暴れたりしていれば、走らない前兆である。目はいつも瞬きをし、持ち主のハミがかけるのを好めば、持ち主から離れる前兆である。

10a また目が恋人のように優しい目つきで見て、甘えん坊で人の体に寄りたり、人の肩に頭を置いたりしていれば、大幸運がもたらされるため、大切にする必要がある。他人に渡すと持ち主やウマの群れに最悪だといわれる。またウマが走るときには、鞭打つほど走れば、心が広いため多少にかかわらず、長距離を走る前兆である。毛色の縁起がよいとは、鼻面が赤くなくきれいな白毛、油のように輝くきれいな黒毛、肺臓の色のような栗毛、血のような赤毛、さびができたようなきれいな赤褐色、斑の褐色、明るい栗毛、口が白く、斑の黒毛、きれいな赤みがかかった栗毛、黒栗毛、きれいな葦毛、鉄のようなきれいな青毛、きれいな赤みがかかった白毛、薄黄色などである。これらのウマは戦闘に出馬したり、貴人が乗用したり、

10b 貴人のお供になったりするなどの場合によい。これらの縁起のよい

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

毛色のほかに、誰にも合う旋毛のよいのは（次のようである）。額に太陽右回りの旋毛があれば、どこでも用事が成功するだろう。後頭部には根元から向き合ったオチル<sup>41)</sup>のような旋毛が2つあれば、みんなに認められるだろう。両肩に太陽右回りの旋毛があれば、持ち主やウマの群れに縁起がよい。(頬)に太陽右回りの旋毛があれば、貴人に縁起がよい。鬣甲にははっきりとした旋毛があれば、大国の旗を握る人<sup>42)</sup>には縁起がよいだろう。仙骨にははっきりとした旋毛があれば、口の福が止まらない（ご馳走にありつく運がある）。胸骨柄に旋毛があれば、どこへ行っても収穫があるだろう。さらにすべての特徴が具わった上、両ひざと両踵にははっきりとした旋毛があれば、大国のハーンの乗馬になるだろう。その呼称は「毛の4つの杖」だという。じっと見られると怒った人のように目つきが悪くなり、右目からすこし涙をこぼしていれば、2つ半の黒白の道のりを往復できる。または持ち主が厄にあう。目に涙がなく、怒った人のように目つきが

11a 悪ければ、1つ半の黒白の道のりを往復できる。または持ち主に（よくない）。舌や口を舐めたり、耳をひくひく動かしたり、またハミを咬むのを好んだりすれば、盛典や戦闘に乗らないはずはない。歯をみるとときには、速く瞬きをし、頭を後ろへと避けていれば、5日間の内に盗まれるのは勿論のことである。歯をみるとときには、持ち主の好きなように見せ、頭を人の体に寄せたり、人の体に寄りながらあくびをしたりすると、ウマの持ち主は貴人に受け入れられ、地位と名誉を得るだろう。ウマを見分ける人にも恩恵となる。乗用するとき右後足がちょっと沈めば、持ち主は口と舌のことになる（喧嘩になるという意味）ため、乗らないほうがよい。左後足がちょっと沈めば、そのウマはもう一頭のウマを連れて逃れる。そうでなければそのウマは病気にかかる。前面からみるとときには、両目が均等にやさしい目つきであれば、持ち主やウマの群れから離れることなく、

良い前兆である。牝ウマは妊娠中に右後足がちょっと沈めば牡の当歳ウマを生む<sup>43)</sup>。このとき牡の当歳ウマを生む牝ウマの特徴とは、細長い体があり、上半身と

11b 下半身が均等でゆったりとして、腹が大きく、皮が薄く、鼻面が長く、タテガミと尻尾が疎らで、臀部の筋肉が広く、秘所がややくぼんで長い。良い当歳ウマを生ませる種ウマとは、タテガミと尻尾が濃く、体は四角な形をし、丈夫で、首には旋毛が多く、体に9つの穴がある。通常みるときには、上門歯には歯の隙間の肉と同じく細い糸のようなししが歯茎から歯先まで続けば、「絹の明り」と称される。まっすぐで、速く、きれいな小走りがあり、姿が美しく、特権者のウマだといわれるが、どこへ行っても連れからいなくなるだろう。また通常みるときには、下の6つの歯に充分な気<sup>44)</sup>があり、外へと広がれば、「鉄杖」と呼ぶ。舌の寝床が広ければ「樺の肘」と呼ぶ。この2つのどちらがあっても驚かず、距離の多少にかかわらず走る。また「肉の凹み」とは、下歯茎の裏にへびの目のような黄色いししがあり、舌の寝床には僅かな黒い

12a ししがある。この2つのどちらがあっても、速く走る。幼い頃にはよいが、2、3歳のときに歯茎の先に凹みがあれば、「赤い岸」といい、速く走るのにプラスになろう。また上の奥歯が細長く垂れていれば、「隼の嘴」といい、短くて大きければ「まっすぐな梁」という。下の奥歯は「まっすぐな梁」のようであれば、「とさか」と呼ぶが、走ったり歩いたりするときは驚かない。また下奥歯の表に細いデレス<sup>45)</sup>のような白い骨のししがあれば、「梁条」という。また下奥歯の黒窩には数珠のような白い骨のししがあれば「余った壁」と呼ぶ。「隼の嘴」は1つの黒白の道のりに速いが、他の特徴がよければ、もっと走るのにプラスになろう。「まっ

すくな梁」の速さは「隼の嘴」に及ばないが、3つの黒白の道のりに驚かない。「とさか」の速さは「隼

12b の嘴」と「まっすくな梁」に及ばないが、当日は驚かず、2日間速歩で走っても痩せない。「槩条」は1つの黒白の道のりを「とさか」のように走るが、うまくコントロールできれば遠くなるほど速くなり、当日は驚かない。「余った壁」はとても速く、1つのベアラ<sup>46)</sup>の道のりに驚かないが、距離の遠さを無理にしていけない。「オリオン壁」とは下門歯の歯茎が下へと広がった。「オリオン壁」の短距離を走る速さは「余った壁」に及ばないが、最後まで努力するのは同じである。「矢のようなカラス」とは上の門歯に歯茎へと割れ目があり、先まで届かないが、2つの黒白の道のりにとても速く、ウサギや黄羊に追いつくだろう。「ノロジカの荷台」というしるしは腰の凹みに2つの細長い骨があるが、他のしるしがよければもっとプラスになる。一頭で1つの黒白の道のりを速く走るだろう。いつも足が滑らず、

13a 蹄の病気にかからないだろう。通常、歯の「赤い暗流」とは、下歯の縁から黒窩へとメイクを塗ったような赤いしるしがあるが、1つの歯にあれば5、6百頭のウマの中で5着<sup>47)</sup>に入る。2つの歯にあれば千頭のウマには優勝するだろう。「黄色い暗流」とは、下歯の縁から黒窩へと黄色っぽいしるしがあるが、2、3の黒白の道のりに速く、他の特徴がよければ、これがもっとプラスになる。「紋様の明り」とは下門歯の黒窩に1本の小さく黒いしるしがあるが、硬く険しい場所に適し、2つの黒白の道のり(に速い)。「緑の壁」という上の2つの奥歯の

13b 1つには歯茎まで緑の垢がくっついたため、そのように称されたが、

驚かなくて速く走る。5, 6の黒白の道のりに驚かない「白っぽい銅」というしるしは上歯の表が白っぽい。「矢のような黒木」とはとても速く、7つの黒白の道のりで驚かず、寒暖によく耐える。「白い真珠」と呼ぶのは、上歯の表に白っぽい真珠のような骨のしるしがあるが、放すと驚き、うまくコントロールできれば8つの黒白の道のりに乗れる。貴人には縁起がよいといわれる。「急流の渦」と呼ぶのは、上歯の表に細く白い旋毛のようなしるしがあるが、このしるしは上の4つの奥歯に限って現れる。中ほどの速さで5つの黒白の道のりを走るが、貴人には縁起がよく、硬い。またウマの妨害だといわれている「青いシャーガ」と称されたしるしがある。

14a 上の6つの歯に横の凹みがあれば、「ラクダが寝た」と呼ぶ。横たわって窪んでいるのが「ヘビが入った」という。1つの歯に現れると、「鞭が落ちる」といい、2, 3の歯に現れると、「鞍の腹帯や尻がいが切れる」といい、落馬の一因だと考えられる。5, 6の歯に現れると、競馬に出すのはよくなくて、持ち主にもよくないという。「暗渠」というしるしは上歯の表に細く小さい凹みが3, 4あるが、2つの黒白の道のりを中ほどの速さでやや走り、幼いウマにはよい。通常、ウマの歯には7種類あるが、「野生ロバの歯」「ラクダの歯」「ヒツジの歯」「小麦の歯」「ブタの歯」「ウシの歯」「野生ウマの歯」の7種である。「野生ロバの歯」とは根元と先が均等に大きく、厚く長い歯である。「ラクダの歯」とは長さと同じで、すこし薄く、硬く白い歯である。「ヒツジの歯」とは

14b 根元が細く、長く、まっすぐな白い歯で、頭がない錐のようである。「小麦の歯」とは白い斑があり、刀のような鋭い歯である。「ブタの歯」とは曲がらず、まっすぐで、鋭くて薄く、中ほどの長い歯である。「ウシの

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

歯」とは四角な形があり、表面に3つの凹みがあり、短く黄色い歯である。「野生ウマの歯」とは厚くて長く、先にはすこし凹みがあり、鈍く黄色い歯である。この7種の歯をさらに細かく区別すれば（次のようである）。「生えた野生ロバ」「曲がった野生ロバ」「短い野生ロバ」「種ラクダのような野生ロバ」「丸々とした野生ロバ」「細い野生ロバ」「野生ロバの小麦」「秘密の野生ロバ」「突き出た野生ロバ」「親しい野生ロバ」「普通の野生ロバ」「ツルツルとした野生ロバ」「大きく長い野生ロバ」の

15a 13種ある。「生えた野生ロバ」とはオレンジ色で白い爪のようで、すこし広がっていて、先と根元が均等で、長く厚い歯である。「曲がった野生ロバ」とは長くて厚く、裏へ窪んだ歯である。「短い野生ロバ」とは短くて四角で、厚く白い歯である。「種ラクダのような野生ロバ」とは円形で、厚くてツルツルとして、白く大きい歯である。「丸々とした野生ロバ」とは細くて円形で、すこし隙間がある歯である。「細い野生ロバ」とは「ヒツジの歯」のようにすこし細めの根元があり、厚く、長く白い歯である。「秘密の野生ロバ」とは四角の形があり、すこし短く、鋭く白い歯である。

15b 「野生ロバの小麦」とは「小麦の歯」より長くて厚く、「野生ロバの歯」より鋭い歯である。「突き出た野生ロバ」とは歯の真ん中がすこし凹んで、ザラザラとして、厚く、長さが中ほどで、口と同じであるが、速い。「親しい野生ロバ」とは「ウシの歯」より長く、きれいな形があり、先がゆったりとしていて、根元がすこし細くて鋭いが、速くてよく走る。「普通の野生ロバ」とは「ヒツジの歯」より根元が広く、「ウシの歯」よりやや長くて薄く、きれいな鋭い歯である。「ツルツルとした野生ロバ」とは厚く、すこし短く、ツルツルとして、広がった歯であるが、硬くてやや遅

い。「大きく長い野生ロバ」とは厚くて大きく、長く、赤色の斑がある歯だが、貴重な外形ではなく他の小さい体に重くなる<sup>48)</sup>。「突き出たラクダ」とは薄くて白く、軽く、斑があり、長い歯であるが、

16a どのような外形にも適し、小さくて細い体に重くなる。「垢付きの黄色いラクダ」とは白っぽい垢がくっついて、短い歯であるが、速く走る。「大きいヒツジ」とは根元が細くて長く、きれいな白い歯で、先は錘で刺したようである。「小麦のヒツジ」とは「小麦の歯」より細くて短く、紋がなく、白くて円形で、中ほどの長い歯である。「短いヒツジ」とはすこし突き出た白い歯である。「見通したヒツジ」とは中ほどの長さで、しるしがなく、ツルツルとした白い歯である。「親しいヒツジ」とは根元が細く、先が厚く、よくきれいな歯である。「紋様のヒツジ」とは白色で細かい紋があり、小さくきれいな歯である。「長い小麦」とは白い斑があり、長く鋭い歯であるが、(ウマが)老るときにはこの歯が先に老る。「短い小麦」とは「ウシの歯」より長く、凹みがない。「細い小麦」とは小さくて広がっていて、白い紋様がある。「斑の小麦」とは鋭く大きい歯が、速い歯である。「見通した

16b 小麦」というのは「野生ロバの歯」より細く、大きく長い歯である。「ブタの歯」には、形が四角で小さな凹みがある「まっすぐなブタ」という歯、小さな凹みが多い「大きいブタ」という歯、短くて四角の「黄色いブタ」という歯、青っぽい垢がくっついて、厚く大きい「垢付きのブタ」という歯の4種がある。この4種は短い歯である。「ウシの歯」は同じ形をした短い歯であるが、垢、凹み、色、形などを結んで名付けている。「大きいウシ」とは3つの凹みがあり、厚い歯である。「短いウシ」とは短くて四角で、小さい歯であるが、速い。「見通したウシ」とは模様がなく、

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

鈍く黄色い歯である。「垢付きのウシ」とは青っぽくて厚く、黄色い垢がくっついた。「溝のウシ」とは真ん中に1本の溝がある。「紋様のウシ」とは先に条紋があるが、短距離に速い。「そそっかしいウシ」とは2つの門歯の隙間が大きい、活気がある。「牛黄のウシ」とは歯の根元に薄くてきれいな黄色い垢がくっついている。これらはすべて走る歯である。「ツルツルとしたウシ」とは鈍く黄色い歯であるが、すこし硬い。

17a 「突き進むウシ」とは尖っていて、形が四角で、上下歯には均等な気<sup>49)</sup>があるが、長距離を何回か走っても驚かない。「四角な厚いウシ」「ツルツルとして、黄色っぽい垢付きのウシ」「鈍くて突き出た黄色いウシ」「幅広いウシ」との4つの歯は相当に速い。外形と筋がつりあう<sup>50)</sup>。「野生ウマの歯」には3つある。「細く鈍い野生ウマ」とは長距離に速い。先に3つの凹みがあるが、悪い。「厚く大きい野生ウマ」と「黄色い野生ウマ」とは同じく百頭に走る。「長いヘビ」とは上の門歯に歯茎の真ん中から先まで9つの凹みがあるが、中ほどの速さで6つの黒白の道のりを走る。「細いヘビ」とは上奥歯の外縁に長く細い凹みが9つある。「矢のようなカラス」のように速く、うまくコントロールできれば5つの黒白の道のりを速く走る。「暗渠」というしるしは上歯に細く小さい凹みが3、4あるが、2つの黒白の道のりを中ほどの速さで走り、幼い頃にはよい。「野原の青いカエルの目」とは、上の奥

17b 歯にはカエルの目のようなしるしがあるが、何回かの長距離を走り、とても硬い。「細いヘビの目」とは下門歯の黒窩に黄色い輪のようなしるしがあるが、5つの黒白の道のりを速く走る。「ねじの頭のような黒み」とは下の門歯に輪のようなしるしがあるが、幼いウマには最もよく、成年のウマにはプラスになろう。「アリの切れ」とは下門歯の黒窩に割れ目が

あるが、幼いウマにとてもよく、成年のウマにはプラスになろう。「楡柱」というしるしは下歯に骨の凹みが3，4箇所あるが、寒い湿気の日にはよく、4つの黒白の道のりを走り、太陽の暑い日は2つの黒白の道のり以上走らない。「永久の花」とは、下歯の裏に2本の細い凹みがあるが、7つの黒白の道のりを走り、とても硬い。下の4つの奥歯には4つの「匙」と、4つの「囲み」のしるしがあれば、4つの黒白の道のりを走る。「匙」は

18a 速い。「隣の黄色い木」とは上の奥歯に木のような黄色いしるしがあるが、速足で2つの黒白の道のりを走る。「張り網」というしるしは上の奥歯に横の細い凹みがあるが、3つの黒白の道のりを走り、調教がよければもっと走る。「肉錐のような簪」は2つの黒白の道のりを走る。「骨錐のような簪」は長距離を数回走れる。「竹の杖」とは上の門歯に先まで薄く黄色い垢がくっついているが、速く走る。1つの歯にあれば1つの黒白の道のりを走る。いくつかの歯にあれば、その歯の数と同じ数の黒白の道のりを走る。もし6つの歯にあれば、6つの黒白の道のりやもっと長距離を走る。「漆の机」というしるしは下門歯の両端に凹みがあり、真ん中は真珠のようにツルツルとして、黄色っぽいのが、7つの黒白の道のりを走り、硬い。「捧げ花」とは歯茎に先まで2，3本の青い筋があるが、幼いウマにはとても貴重で、成年のウマにはプラスになろう。「斑の扉」とは上門歯の表に青い斑があり、真ん中はツルツルとして、白色であるが、3つの黒白の道のりに速く、何回かの長距離を走る。「斑の暗流」には「黄色みがかった斑」と「赤みがかった白色」との2つある。「黄色みがかった斑」は1つの黒白の道のりに速い。「赤みがかった白色」は4つの黒白の道のりに速い。ウマの宝を分かる飴の味という章はこれである。

### 三 ウマの見分けかたに関する考察

以上のように写本4の全訳を提示したが、その内容は『ウマの特徴』の他の写本にも言及されるのと同じく、ウマの外観にある特徴を審査する部分と、ウマの調教に関わる部分との2つに大きく分けられる。ところで写本4ではウマの外観に関わる内容が圧倒的な比率を占め、ウマの調教に言及した部分はそれに対照できない短いものであるため、ここでは扱わなかった。

モンゴル遊牧民のウマを選定する基準を良いウマの見分けかた、ウマを動物になぞらえる見分けかた、ウマの秘密が分かる見分けかた、縁起のよいウマの見分けかたの4つの点から考察する。

#### 1 良いウマの見分けかた

モンゴル遊牧生活においては、ウマの乗り物としての役割が基本に置かれ、さまざまな利用目的に応じたウマの選定が重視される。ウマの外観、内臓、品種によって、ウマの良否を見分け、生活環境、生産労働におけるその利用価値を最大限に引き出そうとしている。

##### 1.1 外観による

写本4では外観によってウマの良否を見分けるのは最も基本的な見分けかたとして示されている。つまり写本4の冒頭に書かれたように、ウマの外観にあるべき全体的な特徴を総合的に見分けることと、身体部位の特徴を部位別に見分けることの2つのやり方が活用されている。

まずウマの外観が全体的に識別され、天のウマと地のウマとに見分けられる。こうしたモンゴル人の世界観に基づいて見分けるのは写本9にも見られる。すべてのウマが天と地と、その中間の3区間に分けられるという。天の駿馬は太陽と月が透き通ったようなウマである。中間の駿馬は虹のよ

うに美しく、心を楽しませる。地の駿馬はカエルのように四角で短く、口が大きく、額が広く、背中が平らである（同前 201）。また五行によって火、水、気の性質を持つウマと識別され、火の性質のウマは上り坂に適し、水の性質のウマは下り坂に適し、気の性質のウマは両方に適すると、どのような地形に適するかが強調される。さらにウマは金の頭、木の首、火の胸、気の腰、水の尻、土の筋肉などの6つの元素を持てばよいと見なされている。こうして五行に基づいて全体的に見分けるのは他の写本にも見られる。写本1では火、気、水、木の性質のウマをどのように調教するかがあげられ（同前 18）、写本2は頭が鉄なので、肉がないのはよい。4つの脛が水なので、まっすぐで長いのはよい。首が木なので細長いのはよい。胸が火なので、ゆったりしたのはよい。肋骨が気なのでまがっているのはよい。尻が土なので、腰が広くて鷹の翼のようであればよいと、ウマの身体部位が構成された元素によってその良否まで見分けている（同前 51）。そして他の写本では全体的な見分けかたによって特定な名称がつけられた数多くの良いウマがあげられる。写本1では「大きな」<sup>51)</sup>「速くきれいな」<sup>52)</sup>という6頭の駿馬があげられた（同前 16）。同じく見極められた駿馬は写本2に13種、写本5に13種、写本7に17種それぞれ述べられている（詳しきは略する）。これらの駿馬には良い特徴が多く具わっているのである。

次に部分的な見分けかたによって、頭、蹄、歯などの身体部位の特徴と鳴き声、食べ方、水の飲み方、足跡などのウマの動作それぞれの良否が明らかにされている。これらの良い特徴が一頭のウマに多く具われれば具わるほどそのウマは良いウマに近いとされる。写本6では13の大きい、9つの長い、6つの細い、9つの広い、5つの短い、3つの高いというようにウマの身体部位のそれぞれの大きさ、長さ、広さ、太さ、高さなどの状態を数字と組み合わせ<sup>53)</sup>、系統的に良いウマを見分けている。写本2でも同じ

く見分け、大同小異である<sup>54)</sup>。ともにウマの身体部位の状態が重要なポイントとして審査され、とくに数字と合わせるのはモンゴル人の数字のシンボリズムをも表わしている。「3, 4, 5, 6, 9」などの数字は縁起がよいしるしとされている (Sečenmǎngke 2000: 127)。

またウマの身体部位の状態がその性能の表徴としても重視される。写本5では額と眉骨が厚いのはウマが勇敢で、多少にかかわらず走る。鼻面が長いのはウマの心が広く、長距離に適し、大勢を怖がらない。首が長いのはウマの競争力が強い。前半身が高いのは下り坂に適し、前半身は伸びていれば上り坂に適し、体つきが均等であれば険しい地形に適するという (Lubsangbaldan 1978: 139)。モンゴル人の生活用途に適応されるウマの個体に対して鋭く観察しているのがよく読み取れるだろう。

## 1.2 内臓による

写本4ではウマの内臓具合がそのスピードなどの性能に影響することが注目され、内臓の状態からウマの良否が見出されている。内臓の具合は外観に、しかも頭の各器官に現れると見なすのは写本4のみならず、『ウマの特徴』のいくつかの写本にも言及されているが、写本4と比し、写本1, 2の内容を表に提示する。

表によると、この3つの写本では同様に、ウマの内臓の大きさはその走行性能を支える重要な要素で、心臓が大きく、ほかの内臓が小さければ、ウマはよく走る。一方、心臓が小さく、他の内臓が大きければ、ウマは走らないと、内臓の大きさがウマの性能と深く関わったと見なされている。

またこの3つの写本ではともに頭に集中する各器官が注目され、その形色、大きさの状態によってウマの健康状態、性質などをはかろうとしているが、改めて写本4は内臓の花として耳、目、鼻、舌、歯、口の6つを取りあげ、その必要性を強調している。実に子宮は内臓に含まれないが、その状態も外観に現れるとされ、大きい口が重視されている。これらの花に

表 ウマの内臓良否と走行性能との関係 (同前 22, 55, 111)

内大外性写 臓小観能本 しるし		写本1		写本2		写本4	
		外観に現れる しるし	性能	外観に現れる しるし	性能	外観に現れる しるし	性能
心臓	大	目が赤黒く 目つきが鋭く	よい 大勢に 驚かない	目が 赤黒く	大勢の中に 勇敢 よい	目の色が 赤黒く	よい, 勇敢, 大勢 に怖がらない
	小	目が 黄色っぽく	臆病 大勢に悪い	目が 白っぽく	臆病 大勢に悪い	目の色が 黄色っぽく	臆病 大勢に悪い
肺臓	大	鼻翼が狭く	長距離に驚き やすい	鼻翼が狭く	悪い走れない	鼻翼が狭く	悪い
	小	鼻穴が広く 丸々とした	よい	鼻翼が 丸々とした	よい	鼻孔が 丸々とした	長距離を走らせ ない よい
腎臓	大	耳が厚く 柔らかく	長距離に驚き やすい	耳が厚く	走れない	耳が 厚く	悪い
	小	耳が薄く硬く	よい	耳が薄く	よい	耳が薄く	よい
肝臓	大	舌が褐色で 腫れたよう	心臓を圧迫し, 走りを妨害	舌が厚く 赤く	悪い 走れない	舌が厚く 赤く	心臓を圧迫し 走れない
	小	舌が小さく 白色 痩せた	よい	舌が小さく 白っぽく	よい	舌が 白っぽく	よい
脾臓	大	歯茎が薄く 腫れた	悪い	歯茎が厚く	悪い	歯茎が腫れた	悪い
	小	歯茎が白っぽ く痩せこけた	よい	歯茎が痩せ こけた	よい	歯茎が痩せこ けた	よい

よって内臓の具合を把握し、ウマの良否を見極めようとする同じ意味が反映されている。ところで写本1には大腸の具合も外観に現れるとされている。大腸が小さいのは、腰と胸骨の間が狭いためよい。大腸が大きいのは腰と胸骨の間が広いと悪いという (同前 22)。

外観の状態とくに頭に集中する各器官によって内臓、子宮などのウマの体内の具合が明瞭にされ、さらにウマの良否や性能が判断されている。一方、頭の各器官の果たす働きが注目され、ウマの頭に対するモンゴル人の特別な観念が込められているのである。

### 1.3 品種による

写本4では良いウマの選定が当歳ウマの頃から始まるとされ、良い当歳

## モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

ウマに具わる体、鼻面、目、耳などの特徴が示されている。写本1では駿馬となる当歳ウマには幼いときに跳びネズミのような形があり、子ウシのような鼻面があり、突き出た目があり、ヤギのような耳があり、子ウシのような尾が短く、腰と肋骨の曲りが太ももより外へ見え、4本の足で力強く踏むなどの良い特徴が具わるという（同前 18）。ともに同じ身体部位の特徴を見分け、当歳ウマの良否を審査している。

また良い当歳ウマを生ませる種ウマと牝ウマに対しても外観の特徴の審査が強調される。特に牝ウマの場合、牡の当歳ウマや良い当歳ウマを生む牝ウマの特徴があげられたとともに、牝ウマの年齢、妊娠中の状態、出産時期、出産の際に体を横たえる方向、後足の様子などが実に細かく観察される。それによって生まれてくる当歳ウマの良否を見決めたり、その性別を判明したりしている。

種ウマ、牝ウマの外観の特徴を見分け、その品種を重視するのは他の写本にも共通する。写本7では種ウマとは眉毛が大きく、脛に5、6本の毛があり、胸と胸骨柄がゆったりとして、膝が丸く、目が丸々として、尻が盛ったようで、3歳の時に弱く、4歳のときに強くなり、蹄が大きく、耳が短く、鬣、後頭部、眼窩、首に旋毛があるという。牝ウマとは頭が大きく、牝シカの耳があり、腹が大きく、尻に肉がなく、乗用するときは速足で、蹄が大きく、「ウシの歯」があり、鼻が大きく、臀部が広く、乳の出が遅いという（同前 186）。写本4と同じく外観の特徴が示され、同じポイントが重視されている。

品種の重視はモンゴル遊牧生活において家畜の生産性を高め、衣食住生活の需要を満たすに効率の良い手段である。モンゴル遊牧民は家畜の品種の重要さを認識し、種畜と母畜の選定を真剣に行なってきた。もちろんウマについても例外ではなく、それに関わる経験や知識が伝承されて実際に活用されている。たとえば『牧業者への助言』では身体部位の特徴が列挙

され、種ウマと牝ウマとが詳しく選定されている (Sambuu 1945: 158, 164)。良いウマの選定にも品種の重視に基づくやり方が活用されているのである。

外観の特徴によって見分けるのは当歳ウマ、種ウマ、牝ウマなどの年齢別にも適用され、ウマ一頭一頭、さらにすべてのウマが良いウマであることを期待し、遊牧生活における合理性を重視するモンゴル人の意識が現れている。

上述のようにウマの外観、内臓、そして品種を総合的に見分けることによって、良いウマには写本4にあげた聖主の乗馬となる駿馬のように多くの良い特徴が具わるのである。モンゴル遊牧民はウマを知り尽くし、生活においてそれぞれの用途に応じるウマを使役し、その完全利用を果たし、自分の生活、生産を順調に進めてきたのである。

## 2 ウマを動物になぞらえる見分けかた

ウマを動物になぞらえて見分けるのは写本4のみならず、『ウマの特徴』の各写本においても最も特徴づけられるものである。数多くの動物がモデルになり、ウマの体つきをはじめとして、頭、歯、蹄、肩、筋、毛、尻などの身体部位、さらに鳴き声、水の飲み方、歩き方などの動作までが動物それぞれの特徴に嵌められている。

### 2.1 ウマの姿形

写本4ではウマの姿形が総合的に識別され、鳥類、草食獣、肉食獣のようなウマなどと区別されている。写本3は龍のようなウマ（額が盛り上がって、目が突き出て、背中が均等で、頭骨が大きく、肋骨が曲がって、首が長く、湿気や雨のときによく走る）、魚のようなウマ（身体が長く、4本の足が短い）をあげている (Lubsangbaldan 1978: 52)。写本8ではすべてのウマがシカ、麝香鹿、魚、カエルの4つの型にはまるように識別され、

## モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

型それぞれの特徴が列挙されている。関節が長く、太ももが長く、ひかがみがきれいで、胸骨が大きく、前胸が広く、首が長く、耳が大きく、シカの姿が見える。関節が細ければ、麝香鹿の型となる。腰から背中にかけて肉付きがよく、4肢の関節が短く、背中が長いのは魚の型をした。形が四角で低く、口が大きく、目が大きく、額が広くて大きければ、カエルの型が具わるといふ（同前 202）。こうして陸上、水中、両生にわたって動物界における種々の動物が原型とされ、ウマの姿形が豊かに特徴づけられている。

### 2.2 ウマの身体部位

まずウマの頭は6種の動物それぞれの頭、耳、口、目、鼻の大きさ、形などの特徴を有する。そのうちカエルの頭とウサギの頭を持つのは貴重なウマであると評価されている。良いウマの頭は全体的に小さいが、大きい目、大きい口、大きい額、大きい耳などが具わるのは重要なポイントとされている。写本2では写本4にあげている6種の頭に牝シカの頭<sup>55)</sup>が加わり、7種の動物になぞらえたウマの頭が示されている（同前 50）。さらに写本6ではウマの頭に6種の動物の特徴、つまりイヌの後頭部、シカの顎、ウサギの耳、トリの嘴、ネズミの目、カエルの額などが具わったら、そのウマは間違いのない良いウマであるとされている（同前 157）。

次にウマの歯が野生ロバ、ラクダ、ヒツジ、ブタ、ウシ、野生ウマなどになぞらえて示されている。これらと同様な歯は写本2、写本5にも見られるが、写本8では上等だとされる「ロバの歯」「野生ロバの歯」「ヒツジの歯」、下等だとされる「トラの歯」「イヌの歯」「ヤギの歯」、中等だとされる「ブタの歯」というように、歯それぞれが3等に分けて判定されている（同前 202）。

そしてウマの他の身体部位にも多くの動物の特徴が見られるとされる。トリの爪、鷲の爪、野生ロバの蹄、ヤクの蹄、トラの口、ヘビの瞳、ライ

オンの鼻、シカの腮、シカの脛、種ラクダの上半身、種ラクダの犬歯、オオジカの頭、オオジカの唇、オオカミの目つき、鷺の翼のような腰、ウシの尻などである。写本3においては毛が短く粗いのはトラの毛のようでよく、毛が短くてぺったりしたのはシカの毛のようで中等となり、毛が密生して柔らかいのはキツネとウシの毛のようで悪いと、ウマの毛の良否も判別される（同前 52）。またウマの筋には距離長短を選ばないラクダの筋、短距離を速く走るヘビの筋、長距離を速く走る黄羊の筋などがある（同前 83）。写本5では歯の隙間の肉がアヒルの舌、雀の舌だとなぞらえられている（同前 143）。写本7では貴重な犬歯だとされる「歪んだシカ」<sup>56)</sup>「鳳凰の爪」<sup>57)</sup>というように犬歯は動物の名を指して名付けられる（同前 179）。さらに写本6では一頭のウマに魚のような肋骨、ヘビのような背中、トリのような胸骨、シカのような肩甲骨、ライオンのような首などが具わったら、そのウマは間違いない良いウマだという（同前 158）。良いウマには、より多くの動物の優れた特徴を有することが強調されている。

### 2.3 ウマの動作

まずウマの声を他の動物になぞらえて見分けることによって、ウマは3等に分けられるという。同様に識別されるのは写本3にも見られる。つまり雲雀のように声高の鳴声を持つのは上等なウマであり、禿鷹のような鳴き声を持つのは中等なウマで、ブタの鼻から出したような声を持つのは下等なウマだと示されている（同前 75）。

また水の飲み方によってトリやトラのようなウマがよく、野生ロバやシカのようなウマが中等で、ウシとロバのように水を飲むウマは悪いとされる。写本5でもまったく同じように見なされている（同前 150）。写本3では水の飲み方によってトリ、肉食獣、シカ、野生ロバ、ウシやロバ、黄羊、アヒルのようなウマと見分けられ、さらにそれぞれの特徴にあわせて調教を施すのが説明されている（同前 75）。

## モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

そして写本4では盤羊，オオカミ，キツネ，孔雀のようなウマには水と草をそれぞれ合わせる事が説かれている。写本9ではウマの歩き方も他の動物になぞらえ，ラクダ，ウシ，イヌ，ブタのように歩くウマが悪く，イタチ，孔雀，ライチョウのように歩くウマがよいというように識別されている（同前 215）。

このようにウマの姿形をはじめとして身体部位，動作までのほとんどが多くの動物になぞらえられ，強い印象が分かりやすく表現された。モンゴル遊牧民は自然界に棲息するさまざまな動物の習性を詳しく知り，それらの動物が有する優れた能力を強く認識している。さらにかれらの動物それぞれの能力をウマにも持たせようとした意識が十分に窺われるだろう。

### 3 ウマの秘密が分かる見分けかた

ウマの見分けかたにはウマの歯が重要なポイントとして詳細に識別される。写本4ではウマの歯について説明の分量やその詳しさが『ウマの特徴』の他の写本を遥かに上回るが，歯の100以上の特徴があげられ，精密を極めた見分けかたが示されている。まずウマの歯は色，形，大きさ，厚さ，長さ，歯ぐきなどの特徴によって7種に大きく見分け，そのうちさらに47種に詳しく区別された。また歯に現れるいろいろな細かい特徴が鋭く観察され，「しるし」と総称されるが，「しるし」それぞれに名前がつけられて数多くあげられる。そして歯のある部分が欠けたり，色が変わったりすることも識別される。このような精細な見分けかたによってウマの調子と性能が分かると思われ，ウマの秘められた能力を見出そうとしている。

#### 3.1 ウマの調子

写本4では歯によってウマの精神的な面が分かると思われている。歯の根元や左側の歯が折れたことによって秋と春にウマの調子が悪くなったり，疲れ切ったり，毒や病気にかかったりした状態を把握しようとしている。

また「青いジャーガ」というしるしが現れると、ウマ自身ではなく、持ち主までも影響を及ぼすことになるという。

また同じく写本3でも夏と冬に真ん中の4つの歯が欠けたり、青くなったりする。または春と秋に4本の奥歯が欠けたり、青くなったりすると、季節別にウマの落ち込んだ様子が分かるという（同前 80）。写本2では奥歯が青くなって折れれば、女性が乗用した。門歯が歯茎まで割れたらウマは自信を無くしたとされる（同前 47）。写本5ではどの歯であれ、歯先が欠けると、そのウマは足を怪我した。門歯が折れれば、胸を痛めた。犬歯が折れたら、ウマは落ち込んだ。門歯が青くなれば、ウマの肉がこけたと見なされる（同前 141）。また良いウマの歯が垢に覆われると、その年には走らない。門歯の茎は血がなくてこけるとそのウマは死ぬという（同前 142）。こうして歯が欠けたり、歯の色が変わったりする状態によってウマの調子をきちんと把握できることが認識され、さらにウマの能力が発揮されるかどうかまで見極めようとしている。

そして写本2では次のようにいう。冬にウマの調子が悪くなるのは、脾臓と腎臓によるため、腰を湿布で温める。秋にウマの調子が悪くなれば、脾臓と子宮によるため、白い牝ウマの乳に塩を投じてやるとよくなる。女性が乗用したからウマが落ち込むと、黄色く燻したフェルトを水洗いし、その水を沸かした後ウマの右鼻穴に注ぐとよくなる。ウマが自信をなくしたら、そのウマを母ヒツジのところへ急いで走る当歳ヒツジと一緒に競わせればよいという（同前 47）。こうしてウマの調子を前もって把握できれば、それに対応する方法を施すことも可能とされ、ウマの調子を工夫してきちんと整えることが重視されている。

### 3.2 ウマの能力

写本4ではウマの歯にできた模様、垢、割れ目、凹みや色などの細かい特徴によって名付けられた数多くのしるしはウマのスピードとどのぐらい

## モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

の距離を走れるかを示し、ウマの能力や性質に関わっている。

ウマのスピードが速い、やや速い、遅いというように区別されている。写本5では「赤い暗流」が速く、5、6百頭、さらに千頭のウマの中に卓越するという。「余った壁」「矢のような黒木」はとても速く、「暗渠」はやや速く、「ツルツルとした野生ロバ」は遅いと示されている。

また歯のしるしによってウマの持久力が判断され、どのぐらいの黒白の道のりを走るかが見極められている。黒白の道のりは家畜の毛色が目で判断できる距離であり、地形や人の視力によって差が生じるものの、1つの黒白の道のりは3-5kmにあたるだろう（サロールボヤン 2000:94）。写本4では異なるしるしの歯を持つウマは1から8までの黒白の道のり（大体3-5kmから24-40kmにあたる）に適するかどうかがそれぞれ詳細に示されている。「紋様のウシ」「矢のようなカラス」などは短距離に適し、「永久の花」「骨錐のような簪」「長いヘビ」などは長距離を走り、「鉄杖」「樺の肘」とは距離の遠近にかかわらず走るといふ。

さらにこれらのしるしによってウマの性質まで考慮されている。ウマが乗用に向いているか競馬に向いているか、山道、水や沼の場所に適するか、草原によく走るか、山や草原どちらにも適するか、暑い太陽の日や雨の涼しい日または干ばつの時によく走るかなど、地形から天気までの多くの条件が考慮されウマが見定められる。写本7でも同じように考えられている。「竹の杖」は湿気の日によく走り、暑い日は走らない。「白っばい鋼」は夏によく走り、冬は走らないという（Lubsangbaldan 1978: 178）。

上述したように歯の精密を極めた見分けかたによって、ウマの調子、そしてウマの持久力、スピードなどの性能を把握しようとしている。モンゴル人はウマの走りを支える秘密の特徴を強く意識し、ウマの性能に対してさらなる期待を込めているのである。

#### 4 縁起のよいウマの見分けかた

モンゴル遊牧生活においてウマはさまざまな用途に利用され、物資的な面に大きく関わる。さらにウマの毛色、旋毛、そして目や耳のありよう、反応などは縁起がよく、福があるなどの精神的な面にも深く絡んでいる。

##### 4.1 毛色による

写本4では戦闘に出かける、貴人が乗用する、貴人のお供になる人が乗用するなどの場面に縁起のよいとされるウマの毛色が14種識別されている。同じ場面において縁起のよい毛色は写本5にも言及され、写本4と全く同じ毛色があげられている（同前 143）。また写本8ではウマの華となる足の栗毛のウマ、ウマの福となる黒いタテガミの茸毛、ウマの飾りとなる黄金のような薄黄毛という最も縁起のよい毛色が示されている（同前 199）。さらに写本5は縁起のよい斑の毛色にも触れ、左右に均等な斑は目を楽しませる毛色、ぶちのある黒毛、ぶちのある栗毛、また斑の黒毛、斑の赤毛、斑の栗毛などをあげている（同前 144）。

これらの縁起のよい毛色は誰にもあうが、縁起が悪いと禁ずる毛色もある。写本4では示されなかったが、写本3は戦闘に出馬したり、お供になる人が乗用したりする場合に忌む毛色を取りあげている<sup>58)</sup>。さらに写本8では所有しないほうがよいとされる毛色まで示されている。それらは頭が黒く、白毛のウマ、鼻面が黒く、口が肝臓色のウマと地獄のウマともいわれる口が黄色く、斑のウマである（同前 194）。

縁起のよい毛色が生活場面に関わって見分けられるが、モンゴルにおいては種ウマの毛色が重視され、黒毛、栗毛、褐色の栗毛を選ぶ伝統がある（Sambuu 1945: 165）。これは種ウマの強さが強調され、黒色のシンボリズムが現れている。このような種馬となるウマと、縁起がよいウマの毛色の異なる点にはモンゴル人の色彩に対する認識を見ることができよう。

ところで良いウマの選定においてはどのような毛色かがはっきりと示さ

れず、毛色が明るく、弾力がよければ、ウマはよく走ると強調され、毛色はウマの外観特徴の一般的な標識のみとして捉える場合が多い。

#### 4.2 旋毛による

ウマの旋毛が縁起に関わって重視されるのは、縁起のよい毛色と同じく、旅、狩猟、戦闘、盛典など多くの場面に関わる。写本4では額、後頭部、両肩、頬、鬣甲、仙骨、胸骨柄、両膝、両踵にある太陽右回りの旋毛やはっきりとした旋毛が縁起のよいと示されている。写本5も同様な縁起のよい旋毛を取りあげている (Lubsangbaldan 1978: 143)。写本1では額、仙骨、胸骨、鬣甲、両脇（ここにある旋毛で持ち主の畜群が繁栄するという）にある旋毛が識別された (同前 26)。また縁起の悪い旋毛について写本4はあげなかったが、写本3では首には太陽左回りの旋毛があれば悪く、両目の下に旋毛があれば未亡人の運命だといい、そのウマの乗用を避けるように説かれている (同前 83)。

旋毛はどこにあるのかとその形によって善し悪しが見分けられる。写本10では通常ウマの特徴には96の旋毛が含まれ、さらにこれらの中に縁起のよい旋毛が20<sup>59)</sup>あるという (同前 237)。また旋毛の形は8つあり<sup>60)</sup>、その中には太陽の右回り、水の渦のような、花びらが開いたような、貝のような旋毛がよいとされる (同前)。したがって縁起の悪い旋毛が多く、写本9では76もあるといい、縁起の悪いところに形を整えた旋毛があっても縁起は悪く、形の崩れた旋毛が縁起のよい位置にあっても悪いとされている (同前 225)。これらの写本ではともに、善しと見なされるところに善しとされる形をした旋毛があれば縁起がよいと見なされている。

旋毛は物事の善し悪しの兆候とされるとともに、ウマの性能のしるしともされる。写本5ではウマの速さにプラスになる旋毛が示されている。短い脇、口首、鬣甲骨、耳の付け根、両ひざ、両脛などに旋毛があれば、ウマは走るが、それ以外の旋毛は走りに役立たないと判断される (同前 142)。

写本4では性能と縁起のよさの両方を表す「急流の渦」が示されている。

#### 4.3 その他による

写本4ではウマの目と耳が良いウマの見分けかたにおいて重要なポイントとして重視されるとともに、目つきとその様子、耳の生え方とその動きなどによって物事の吉凶も識別されている。また持ち主が取る行動に対してウマがどのように反応しているか、つまり持ち主がウマの歯をみたり、ウマの前からみたり、または乗用したりする場合、ウマが見せるいろいろな反応は日常生活場面と関わり、縁起がよいかどうかを見分ける。こうして物事の吉凶をうらなうのは他の写本においてあまり見られなかった。

ウマの目や耳のありよう、そして反応はそのウマ自身、ウマの群れ、そして持ち主に対して起こる出来事の前兆として捉えられる。まずそのウマ自身に対して起こることが予測される。盗人に盗まれたり、自らが逃れたり、また他人に渡されたりして持ち主やウマの群れから離れる。あるいはウマが病気にかかったり、死んだりすることも分かるという。次にウマの群れに対しては、連れが多くなったり、ウマの群れが繁栄したりすることが強調されている。そして持ち主に対して戦闘、狩猟または旅に使役するときに縁起がよいかどうかが見分けられる。また持ち主が大きな厄にあったり、喧嘩になったりすることが予測される。悪い事が起こりそうだと分かれば、そのウマの乗用を止めるように戒められている。そしてウマが縁起のよい反応を見せ、持ち主が地位と名誉を得たり、大幸運をもたらされたりすることが予測されると、そのウマを他人に渡してはならず、もっと大事にするように説かれている。

一方、目や耳のありよう、そして反応によってウマが暴れやすく、荒っぽく、怖がりやすいかなどの性格が分かり、速く走るかどうか、長距離に適するかどうかなどのウマの性能まで発見され、ウマの良否も知ることが可能とされている。写本5では耳の生え方によってウマの性格が分ると

示されているが（同様 141）、他の写本では見られなかった。

このようにウマの毛色、旋毛そして目や耳のありよう、さらにウマの反応が縁起に関わり、縁起のよいウマに乗用して出かけたなら、旅を無事に続けたり、戦闘に勝利を収めたり、獲物を多く獲たりするなど生活に対するモンゴル人の素朴な願いが込められているのである。

以上のように『ウマの特徴』の写本4の訳注を行ない、他の写本を参照しながら考察することによって、モンゴル遊牧民の生活場面において適応されるウマを選んでいたさまざまな基準が明らかになった。

ウマを選ぶ多様な基準はモンゴル遊牧民の生活生産さらにその歴史的発展においてウマが果たした重要な役割に基づくものである。モンゴル遊牧民はウマを幼いころから一頭一頭、その外観の特徴から動作、性格に至るまで知り尽くし、さらにさまざまな用途に利用する経験を通し、独自の知識を蓄積し、ウマの完全な利用を実現してきた。したがってモンゴル遊牧生活の継続そのものが保障されたのである。

ウマの完全利用をめぐるモンゴル遊牧民とウマとの付き合いが深まるにつれ、ウマによる機動力、そのスピード、持久性などのすばらしい性能が十分に認識され、ウマにさらなる性能や能力が期待される。動物界における数多くの動物の優れた能力を具えたり、ウマ自身の潜在能力を発揮させたりして、モンゴル遊牧民の理想なウマが具現化してくるのである。

さらに理想なウマを信じれば、願いを叶い、望みを満たしてかつ鼓舞してくれるという意識が強まり、厳しい自然環境の中に安定した生活を実現する素朴な願望が込められ、ウマはモンゴル人の精神的な頼りになる存在として認められたわけである。

良いウマを通してモンゴル遊牧民の思考、そして自然と融合して生活する自然観ないしその世界観の一端が色とりどりに展開されたともいえよう。

注

- 1) *Dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei yarčay* nairayulqu jüblel 1999 *dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei yarčay* (dooradu) *begejing nom-un sang keblel-ün qoriy-a* (中国モンゴル語古典総目録) pp 1666-1669
- 2) 『ウマの特徴』における写本 1, 2, 8, 9 の内容はそのまま含まれているが、その他の内容は必ずしも対応しない。たとえば、写本 4 の原典について冒頭の 4 行詩が除かれたあと、1a から 5a の 5 行までの内容のみが 1 つのまとまりを持ち、タイトルの不明な写本とされている。残りの内容は他の写本と比較され、より完全なものが残されたとされている。したがって写本 4 の内容と似た部分が『駿馬の特徴』においていくつかの写本に分けられている。
- 3) 1999年にキリル文字からウイグル式モンゴル文字に転写されたものが中国内モンゴル自治区で出版された。
- 4) *mongγolčud ba mori, öbör mongγolčud-un aduyun soyol, mongγol jang üile-yin nebterkei toli* (aju aqui-yin bodi), *qurdun morin-u sinji-yin sudur-un tailul, erdenitu külig-ün dalda tobciyan orusibai*, 「モンゴルにおける駿馬の鑑定法——相馬経考察」などがある。詳しくは参考文献リストを参照する。
- 5) 綴り語が欠けたため、意味不明である。
- 6) 遊びを意味する。モンゴルにおいてナーダムは夏の祭りとして広く知られ、国家、地方のアイماغヤソム（モンゴルの行政単位、日本の県や郡にあたる）の行政単位ごとに開催され、規模もさまざまである。その際男の三競技と称される相撲、弓射、競馬を行う伝統が守られて今日に至っている。競馬において参加するウマの頭数は決められず、規模によってさまざまである。
- 7) (尻尾は) 太くて短く、弾力がよくないと、または細長く、弾力がよいと、条件を入れ換えれば、中等である。
- 8) (ウマの) 食べ量が多く、糞が多ければと、(ウマの) 食べ量が少なく、糞が少なければと、条件を入れ換えれば、中等である。
- 9) 写本 4 ではウマの歯について精密を極めた見分けかたが示されている。写本 1 では歯の特徴が最も多く、そのすべてを識別するのは難しいとされ、成年ウマの歯が次のように見分けられている。上下歯の根元が細く、歯先が広

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

- がり、歯茎は歯の真ん中まで伸び、犬歯は突き出て、下の6つの歯は表の端がすこし外へと突き出て、互いに向き合ったのは良い歯だという（同前 29）。
- 10) 写本4では筋について具体的な説明がなされなかったが、写本7では筋の5つの特徴と性能との関係が示されている。ぺったりして、幅が広い筋は長距離に適し、とてもよい。人指し指ごとくの四角な筋は弓の弦のようであり、速い。矢ごとくの細い筋は長距離に適する。太い筋は弾力がよい。どのような筋であれ、柔らかければ、長距離か短距離に適するという（同前 181）。
- 11) どのような外観の特徴が好まれるかという意味である。写本4では具体的な説明がなされなかったが、他の文献では好みの意味の20項目が述べられ、それは次のようである。老いた野生ロバの頭、ヤクの角を切ったような口、銅器をひっくり返したような額、老いた官人の顔のような鼻面、盛り上がった肩、ヘビの背中、座布団に座ったような尾骶骨、飾りをつけたような胸、持ち上げたような尻、太い関節、健康な体、鉄製の腕をひっくり返したような蹄、絹に包んだ石のような睾丸、大きい歯、大きく開けた口角、鶯が羽を開いたような耳、押し込まれたような狭い目、家が立ったような肋骨、シカのようなひかがみ、シカのような胸骨などが好まれるという（Lubsangbalдан 1999: 113）。
- 12) ウマの外観の特徴が何かに喩えられた言葉の意味である。写本4では具体的な説明がなされなかった。写本7は外観の喩えという項目をあげているが、それを参照すると、ラクダのような頭、ラッパの口のような鼻、オオジカのような唇、カエルのような目、ラクダのような後頭部、盤羊のような頸、鶯のような肩、力士の胸肉のような黒肉、牡ヤクのような鬣甲、オオジカのような脛、力士のような顎、野生ウマのような項、シカのような肋骨、力士のような背中、3つの支えがある炬のような骨のつなぎ目、飛んだ秃鷹の羽のような両腰、ノロジカのような太もも、強い英雄の弓矢を帯びたような尾、野生ロバのような4つの蹄、ひっくり返した釜のような4つの蹄、黄羊のような毛、撚った筋のような剛毛、3股で太く撚った縄のように親指が入るほどの隙間がある足筋などが半数以上具わるのはよいとされている（Lubsangbalдан 1978: 157）。
- 13) 後に説明される肉の30種の特徴を指している。
- 14) 歯にできた細かいしるしによってウマの良否またはウマがどのように影響

されたかを見分けようとした。

- 15) ウマの毛色、旋毛、またはウマの目や耳のありよう、そしてウマの反応によって縁起がよいかどうかを見分けようとした。
- 16) 7つの重要だと述べたが、実際には5つしか示されていない。他の文献では麋のゆったりした頭、強いシカの肉付きの良い頬、トラの強い口、斑のカエルの突き出た目、ヘビの目のような瞳、白いライオンの鼻穴、禿鷹の広げた羽のような耳などがあげられている (Lubsangbaldan 1999: 113)。
- 17) 意味不明だが、歯の由来が仏に関わるとされ、仏教的影響が示されたのではないかと考えられる。
- 18) 2歳の種ウマと牝ウマを掛け合わせ、当歳ウマを生ませる意味だと思われる。
- 19) 綴り語が欠けたため、意味不明である。
- 20) 他の写本を参照すれば、頭の特徴は写本2において、後頭部が高く、耳がまっすぐで、耳の付け根が太く、耳先が細くて薄く、長く、額がゆったりとして、後頭部の両側の肉がはっきりとしていて、両上脛は両側が薄く、真ん中が厚く、鼻面はまっすぐで、割れ目があり、鼻孔が広く、鼻翼が大きく、口が大きく、口角が薄く、頬の肉付きがよく、顎が丸々として、舌の寝床が広く、歯と犬歯との色が同じで、唇と上顎がきれいである (Lubsangbaldan 1978: 49)。歯については注9を参照のこと。3つの隆起とは写本2において後頭部が高く、鬣甲が高く、多くの骨のつなぎ目が高いとされている (同前 49)。4本の足の特徴とは写本2において家の柱のようにまっすぐで、脛骨が太く、長距離をよく耐えるとされている (同前 54)。
- 21) ウマの「野生ロバの歯」に属するしるしであり、後に説明がある。
- 22) ウマの犬歯のしるしである。写本3において「崖が険しい」とは奥歯より外へと突き出ている、先は半分ハートの形をしているという (同前 79)。
- 23) 写本3では歯の良いしるしがある上、犬歯の良いしるしがあれば、ウマはよく走る。歯と犬歯のどちらにも良いしるしがあれば、ウマは走らないとされている (同前 82)。
- 24) 写本2では地面の上りへ向かって横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマは前足が長く、左半身が引き締まった。地面の下りへ向かって横たわった牝ウマから生まれた当歳ウマは前足が短く、右半身が引き締まったという

(同前 52)。

- 25) ajiry-a-yin teg ese oldabasu gegüü-ni čig bolday と示されているが、種ウマがよくなければ、牝ウマが不妊になるという意味だと思われる。
- 26) 頭の11の特徴、歯の11の特徴、肉の30の勇敢な特徴、上の3つの隆起、下の4つの杖については『モンゴルの特徴』を参照するように示されているが、参照すべき文献そのものがいまだ発見されていない。頭については注20を、歯については注9を、肉の30種の勇敢な特徴については注28を参照のこと。上の3つの隆起と下の4つの杖とは3つの隆起、4本足の特徴をそれぞれ指しているが、注20を参照のこと。
- 27) 写本7では太陽が昇る頃、昼頃、太陽が沈む頃のどれか1つの時間に牝ウマから生まれた当歳ウマは全身の特徴がすべて具わったら確かに駿馬になるという(同前 186)。
- 28) 肉の特徴が30種だとされているが、取りあげられた特徴には不明な点がある。『ウマの特徴』の他の写本においても同様な項目は見られなかった。他の文献では肉の18の特徴と称された項目がある。額の肉がカエルが茂みに隠れたようであればよく、両頬は臼を袋に入れたようであればよく、下顎は急に泥が付いたようで、首の肉は鼻面から続くようで、肩の肉は龍の翼のようで、胸肉は女性の乳房のようで、肩甲の肉はいつかの鎌を曲がらせたようで、前足の筋肉は粗い毛を撫ったようで、背中から腰にかけて筋肉は畳んだフェルトのようで、短尾の左右筋肉は人間が立ち上がったようで、左右の筋肉は去勢牛の角のようで、腹は水を入れたようで、左右脾肉の下の部分は外へと盛ったようで、外側の脾肉は黒いヘビが滑ったようで、内側の脾肉は盛り上がったようで、4つの蹄の上部分は輪をはめたようで、それぞれあればよいと示されている(Lubsangbaldan 1999: 129)。
- 29) ウマの歯に現れるしるしの一つだが、具体的な特徴は不明である。
- 30) 写本3では良い歯があっても、良い外形がなければ、ウマは走らない。良い外形があっても、歯の良い特徴がなければ、やはりウマは走らないため、この2つは気をつけて習えとされている(Lubsangbaldan 1978: 82)。
- 31) 意味不明だが、ライオンのような外形につらいう歯を説いたと思われる。
- 32) 写本4において説明されなかったしるしを示しておく。写本3では「努め」とは青っぽくて突き出たしるしを指している。「そそっかしい」の特徴は不

明である。「並び」とは上下歯をあわせてみると、端の2つの歯の並びがきれいで、中間の2つの歯は隙間があるという（同前 77）。

33) 写本4において説明されなかったしるしを示しておく。写本3では「梯」とは歯の真ん中から歯先まで凹みがあるという。「囲み」とは下歯の黒窩が丸く、横の凹みがあるという。「気」とは歯と歯との間に隙間があるという。「歪み」とは歯があちこちに傾いたさまだという（同前 77）。「つなぎ」の特徴は不明である。

34) ウマの調教は走らせる、汗を取る、休ませることをどのような間隔で行うか、または走らせる方、その距離、日数などをそれぞれのウマの状態と年齢に合わせて決められる。写本4では25日間の調教について具体的な説明がなかったが、他の文献を参照しよう。1日目は1キロほど常歩で歩かせ、さらに1キロほど速歩で走らせ、再び1キロほど常歩で歩かせる。2日目は短距離を走らせる。3日目は汗を取る。4日目は短距離を走らせて放す。5日目はギャロップを加える。6日目は短距離を走らせる。7日目は休ませる。8日目は汗を取る。9日目は夜捕まえて昼間走らせる。10日目はギャロップする。11日目は短距離を走らせる。12日目は汗を取る。13日目は短距離を走らせる。14日目は休ませる。15日目はやや長距離を走らせる。16日目は夜捕まえて朝走らせる。17日目は常歩で歩かせる。18日目は清める。19日目は早く捕まえてテストする。20日目は短距離を走らせる、21日目は短距離を走らせる、22日目は常歩で歩かせる、23日目は休ませる。24日目は短距離を走らせる。25日目はナーダムの本番である（Lubsangbaldan 1999: 59）。

競馬の調教日数はウマの年齢と用途によって異なる。写本1では力強いウマを21日間調教し、力弱いウマは19日間から17. 15. 13, 11日間というように徐々に調教日数を減らして施すという（Lubsangbaldan 1978: 24）。写本2では、2, 3歳ウマを9日間、4歳ウマは15日間、5歳ウマは19日間それぞれウマの状態に合わせて調教するとされている（同前 48）。

35) 聖主の乗馬となる駿馬の宝な特徴は36あると示されたが、項目が足りない。残りの特徴を他の文献によって参照すると、鼠径と額に旋毛があり、鬣甲と足の位置が中へ、鬣が大きく、4本の足の筋が外へ、10日間乗用するなら毎日5時間食べればよい。山にいつでも均等によく、常に疾駆しても痩せず、すぐに疾駆すれば不器用で、1ヶ月乗用しても肉を落とさず、痩せない。4

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

本の足の裏にはタコが出ず、鞭打っても痛まない。蹄が丸々としていて、肋骨が長く、両腰が広い。このウマが識別されるのはとても難しく、このウマの父ウマは qastabu (玉の五つ) といい、母ウマは quustabu (対の五つ) という。種ウマは見つかるが、牝ウマは見つかりにくいと示されている (Lubsangbaldan 1999: 123)。

- 36) 家畜の脚根骨の距骨を指すが、後足に1つずつある。
- 37) ウマの歯に現れるしるしの1つである。写本4では具体的な特徴が示されなかったが、写本3では歯に上から下へと細い凹みがあるという (Lubsangbaldan 1978: 76)
- 38) ウマの「ウシの歯」に属するしるしの1つであり、後には説明がある。
- 39) ウマの歯に現れるしるしの1つである。写本4では具体的な特徴が示されなかったが、写本7では歯の黒窩に青いしるしがあるという (同前 178)。
- 40) qonda-yin buyurul örtegen-ü sidü と示されているが、意味不明であり、一応このように訳しておく。
- 41) 金剛石
- 42) 国の実権を握る人
- 43) 写本7において妊娠中の牝ウマは左後足がちょっと沈めば牝の当歳ウマを生み、その牝の当歳ウマはまた良い当歳ウマを生むという (同前 186)。
- 44) 隙間があるという意味だが、写本5では5つの気というものがあげられ、両膝の間が拳の入るほど広く、股が広く、顎のつなぎ目が広く、歯の隙間が広く、筋の隙間が広いと示されている (同前 142)。
- 45) *Achnaterum splendens* Kunth, モンゴル草原で生える家畜に好まれる牧草の1種。
- 46) モンゴルにおける距離の単位であり、1ペーラは約2キロにあたる。
- 47) 競馬においては上位5人が入賞する。第1位に興奮、第2位に幸運、第3位に太陽昇り、第4位に隼、第5位に強いゾウというようにそれぞれのウマに称号を与え、馬乳酒をかけ、マグタールと呼ばれる讃歌が歌われ、褒め称えられる。5着に入るということは多くのウマが参加する中で非常に難しいことでもあり、それゆえに入賞したウマへの賛辞も大きい。5着に入ったウマは大変優れたウマであることも明瞭されている。
- 48) 良い歯であるが、外形の小さいウマにあわないという。つまり歯と外形が

- つりあわないことを意味する。
- 49) 上下歯の隙間が均等である。
- 50) 良い外形に良い筋があれば、ウマはよく走る。そうでないとウマは走らないと思われる。
- 51) 「大きな」駿馬の特徴とは四角な頭があり、突き出た目があり、長い首があり、体が四角で、背中が凹んで、胸と尻が均等で、太ももが太く、股が広く、胸には9つの旋毛があり、尻には8つの旋毛があり、走っても驚かない良いウマである（同前 27）。
- 52) 「速くきれいな」駿馬の特徴とは、目つきが鋭く、耳が凹み、毛が疎らで、剛毛がなく、驚きやすい（同前 27）。
- 53) 13の大きい（額、顎、眉骨、頸、背中、口、腹、筋肉、胸肉、4つの蹄）、9つの長い（4つの脛骨、背中の関節、首、耳、舌、股）、6つの太い（口、両耳の付け根、足、尾根、頭）、6つの細い（両耳の先、両耳の孔、頸、鼻面）、9つの広い（4つの蹄、額、鼻孔、耳、胸、股下）、5つの短い（腰、腕骨、尾、肩胛骨、尾骨）、3つの高い（後頭部、鬣甲、臀部）などがある（同前 157）。
- 54) 写本2は13の大きい、9つの長い、5つの細い、5つの短い、3つの秘密（歯茎が痩せこけて、長骨のつなぎ目が太く、口と鼻が大きい）というように見分けている（同前 49）。
- 55) 写本2において牝シカの頭とはゆったりとして、肉がなく、眼が突き出て、鼻面が長い様子だという（同前 50）。
- 56) 写本7では「歪んだシカ」とは1つの犬歯が短く、もう1つが奥歯より離れた状態だという（同前 179）。
- 57) 写本7では「鳳凰の爪」とは犬歯の端には凹みがあり、鋭いことをいう（同前）。
- 58) 斑が傾いた毛色、鼻面が赤く、目が黄色いウマ、泥で汚したような黄色、腰の部分にはサルが乗ったような斑があるウマ、目が青っぽいウマ、燃やされたような黄色などである（同前 75）。
- 59) 額にある4つの旋毛、口、口角、耳の付け根、頭の両側、肩にある2つずつ、また額、首、頬にある1つずつ、そして胸にある3つの旋毛と合わせた20の旋毛は縁起がよいという（同前 226）。

モンゴルにおけるウマの見分けかたに関する一資料

- 60) 複合した形の旋毛, 水の渦のような旋毛, 歩くときに花びらが開くようになる旋毛, 歩くときに花びらがしぼむようになる旋毛, 蕊のように盛った旋毛, 貝のような旋毛, 四角と三角の形をした旋毛の8つだという(同前)。

参考文献

日本文

- 井上邦子 2002 「モンゴル国の「競馬ウマ」にみる聖性についての研究——ナーダム祭に参加する「競馬ウマ」の調教法を事例として」『スポーツ人類学研究』4
- 内田教之 1987 「モンゴルにおける人と馬の関係について」『モンゴル研究』10
- 王海清 1992 『蒙日辞典』タカラ出版サービス
- 小沢重男編著 1994 『現代モンゴル語辞典』(改訂増補版) 大学書林
- J・サロールボヤン 尾崎孝宏訳 2000 『セツェン=ハンの駿馬——モンゴルの馬文化——』礼文出版
- 徳廣彌十郎 1998 『日蒙漢辞典』ビブリオ
- 萩原守 1999 「『トーワンの教え』について——十九世紀ハルハ・モンゴルにおける遊牧生活の教訓書——」『国立民族学博物館研究報告別冊』20
- 原山煌 1995 『モンゴルの神話・伝説』東方書店
- 精松源一 1970 『新蒙日辞典』大阪外国語大学蒙古語学科
- プリンバト 1995 「モンゴルにおける駿馬の鑑定法—相馬経考察」『シルクロードとスポーツ シルクロード・奈良国際シンポジウム '95』記録集3
- 芒来, 楠瀬良 1997 「馬の文化 日本在来馬のルーツ: モンゴル馬?! モンゴル競馬について (上)」『馬の科学』8
- 芒来, エルデニバートル M, 楠瀬良 1999 「馬の文化 日本在来馬のルーツ: モンゴル馬?!」『馬の科学』8
- 楊海英 2001 『草原と馬とモンゴル人』日本放送出版社
- 陸軍省編纂 1978 『蒙古語大辞典』南天書

モンゴル文

- Ayosi-yin Batubolod 2006 *qurdun morin-u sinji-yin sudur-un tailul* ulayanbayatur

(速いウマに関する経書の解釈)

- To Manglai Borjigin Wangčuy 2002 *mongyolčud ba mori öbör mongyol-un sinjilekü uqayan teqniq mergejil-ün keblel-ün qoriy-a* (モンゴル人とウマ)
- To Manglai Galindar-a 2013 *öbör mongyolčud-un aduγun soyol öbör mongyol-un keblel-ün bölögöl, öbör mongyol-un surγan kümüjil-ün keblel-ün qoriy-a* (内モンゴルにおけるモンゴル民族の馬文化)
- Mongyol jang üile-yin nebterkei toli nairayulqu komis* 2009 *mongyol jang üile-yin nebterkei toli (aju aqu-yin bodi) öbör mongyol-un sinjilekü uqayan teqniq mergejil-ün keblel-ün qoriy-a* (モンゴル民俗百科辞典経済篇)
- Q Lubsangbalan 1978 *morin-u sinji* ulayanbayatur (ウマの特徴)
- 1989 *külüγ-ün sinji* ulayanbayatur (駿馬の特徴)
- E Dayičin 1999 *külüγ-ün sinji öbör mongyol-un arad-un keblel-ün qoriy-a* (駿馬の特徴 転写)
- ǰ Sambuu 1945 *malčin arad-du ögkü sanayulγ-a surγal* ulayanbayatur (牧業者への助言)
- Sečenmönöge 2000 *irügel maγtayal-daqi mongyolčud-un soyol-un sedkilge ündüsüten-ü keblel-ün qoriy-a* (祝詞, 讚歌におけるモンゴル人の文化の意識)
- D Tawa 2006 *erdenitu külüγ-ün dalda tobciyan orusibai üjümüčün-ü altan türüge soyol oraliy-un tasuy* (宝となる駿馬の秘密を分かる経書)
- E Dayičin 1998 *qurdun morin-u sinji öbör mongyol-un silinqota* (速いウマの特徴)
- Dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei γarčay* nairayulqu jöblel 1999 *dumdadu ulus-un erten-ü monγol nom bičig-ün yerüنگkei γarčay* (dooradu) *begejing nom-un sang keblel-ün qoriy-a* (中国モンゴル語古典総目録)

〔翻 訳〕

## ババッド・タナ・ジャウイ (9)

第5部 ババッド・マタラム 3

深 見 純 生 訳

### 訳 者 序 言

本号はババッド・マタラムの3回目（第61～68章）で、スルタン・アゲンの末年から、これを継いだマンクラット1世（位1646～1677）の治世末年までである。様々な王国崩壊の予兆が語られ、ついにトルナジャヤ叛乱（1675～1679）が始まる。

### 解 題

(3) バクアラム版『ババッド・タナ・ジャウイ』（NBS 216）

ラスによれば、以上の他にも大ババッド・グループに属するテキストがいくつかある〔Ras 1987b: XIX-XXI〕。その中でもとくに重要な3点を取りあげておきたい。

第一に、レイデン大学図書館でNBS 216という整理番号をもつ『ババッド・タナ・ジャウイ』である。NBSはオランダ聖書協会 Netherlands Bible Society（オランダ語名 Nederlands Bijbelgenootschap）であり、同協会の文書がレイデン大学図書館に寄託されていて、ピジョーの『ジャワの文献』

---

キーワード：ババッド・タナ・ジャウイ，マタラム，マンクラット1世  
トルナジャヤ，マドゥラ

にはそのうちの約160点があがっている [Pigeaud 1968 2: 712-755]。

NBS 216 はジョクジャカルタ書体のジャワ文字による散文版であり、2巻からなる。第1巻(1528頁)はパジャジャランの建国に始まりパクブウォノ1世(位1703~1719)まで、第2巻(490頁)はその後のカルタスラ、スラカルタ、ジョクジャカルタの歴史であり、イギリス支配期(1811~1816)におけるパクアラム王家の設立(1813)までを扱い、未完である [Pigeaud 1968 2: 750; Ras 1987b: XIX-XX]。スギアルトによるローマ字版およびオランダ語による梗概が作成されていて、これにはレイデン大学図書館のLOr 10.726 という整理番号が与えられている。第1巻は500頁、第2巻は327頁である [Pigeaud 1968 2: 660]。

始まり方が大ババッドとちがってパジャジャラン建国からであり、ワトゥグヌン王の物語(第2章)は含まれず、シユン・ワナラの物語(第4章)は含まれるという。また同じ始まり方をする作品がスラカルタ王家にも存在すること(ラドヤ・プスタカ Radya Pustaka 博物館のRP 128, マンクスゴロ王家図書館のRPB 36)が明らかにされており [Ras 1987b: XX]、そのインドネシア語訳が出版されている。

#### (4) ジョクジャカルタ版ババッド・クラトン Babad Kraton

諸写本の詳細な比較に基づく文献学的研究は遅くとも1970年代にはリックレフス [Ricklefs 1972; 1979] やデイ [Day 1978] などによって始まっている。その際リックレフスがとくに注目したのが大英博物館所蔵のババッド・クラトンであり (Add. MS. 12320)、あわせて断片的ではあるがインド館 India Office 図書館の手写本である (IOL Jav. 36 A)。ババッド・クラトンは、1777年にジョクジャカルタ王宮において完成したもので、完全な『ババッド・タナ・ジャウイ』としては最も古い写本であるという。すなわちその内容はアダムから始まりカルタスラの陥落(1743)に至るものであり、バライプスタカ版の全部(第1~31分冊)および大ババッドの第1~

234詩章と総体として一致するという〔Ras 1987b: XX〕。ローマ字転写版が刊行されている (Pantja Sunjata 1992)。

(5) サジャラ・ラジャ・ジャワ Sajara Raja Jawa

ラスはババッド・クラトンより古いものとしてサジャラ・ラジャ・ジャワをあげている。翻訳官ホルデイン Gordijn が翻訳し、その冒頭部分をイパーレンが刊行したという〔Iperen 1779〕。その原本はホルデインがスラカルタにおける彼の先生ストラパナ Sutrapana から1750年に購入したもののだが、現在は所在不明である。ホルデインはキヤイ・アグン・セラ (第24章) まで翻訳したが刊行されたのはウダラのクディリ国守任命 (第9章) までである。ラスによれば、刊行された部分について検討すると、この作品と大ババッド、メインスマ版、ババッド・クラトンの4者の物語展開は驚くべき一致を示していて、したがって1750年にはこれらの共通の祖形というべきものが存在したことになる〔Ras 1987b: XX-XXI〕。

参 考 文 献 (追加分のみ)

- Day, A. 1978: “Babad Kandha, Babad Kraton and variation in modern Javanese literature”, *BKI* 134-4: 433-450.
- Iperen, J. van 1779: “Begin van eene Javaansche historie, genaamd Sadjara Radja Djawa”, *VBG* 1: 134-172; 2: 262-288; 3: 117-133.
- Pantja Sunjata, Ignatius Supriyanto and J. J. Ras 1992: *Babad Kraton: Sejarah Keraton Jawa sejak Nabi Adam sampai runtuhnya Mataram menurut naskah tulisan tangan The British Library, London Add 12320*, Djambatan.
- Ricklefs, M. 1972: “A consideration of three versions of the Babad Tabah Jawi”, *BSOAS* 35: 285-315.
- Ricklefs, M. 1979: “The evolution of Babad Tabah Jawi texts: In response to Day”, *BKI* 135-4: 443-454.
- Soewito S. 1979: *Babad Tanah Jawi (Galuh Mataram)*, np (Delanggu?).

## ババッド・タナ・ジャウイ (9)

### 第5部 ババッド・マタラム 3

#### 目次

61. スルタン・アグンのララ・キドゥルとの邂逅
62. スルタン・アグンが死に、マンクラット1世が即位
63. アリット君が兄王マンクラット1世に叛く
64. ウィラグナ公がブランバンガンと戦う
65. 庭師が殺されその血が毒に変わる。王様の横恋慕
66. 雌鳥が雄に変じ、王様に献上される
67. スラバヤの姫オイの騒動
68. トルナジャヤがサンパンに戻り、マタラム攻撃を準備する

#### 61. スルタン・アグンのララ・キドゥルとの邂逅

あるときスルタン陛下は庭を散策しておられた。柄がウルグヤシの木の短槍をもつ侍女がつき従っていた。その庭にはたいへん獐猛な雄鹿が飼われていて、鹿は陛下を見ると噛みつこうと突進してきた。陛下はとっさに槍をとり鹿に突きだされ、胸に刺さり、血が吹き出した。鹿の突進の速さと陛下の力強さのため、ウルグヤシの柄は折れてしまい、鹿の角が陛下の太股に当たった。しかし陛下は傷つかず、鹿は死んだ。こうしてスルタンは誓いをお立てになった。「将来余の子孫はウルグの木の本を用いてはならない。不運のもとになる」

さて、このスルタンは王宮をふたつおもちで、ひとつをクルタ Kerta の町といい、ひとつは南海にあった。そのララ・キドゥルがスルタン陛下に嫁していたからである。陛下はいつも南の海に宿下がりなされた。そして

スルタン陛下が謁見のためお出ましになる時には、ジンたち、プリたち、プラヤンガンたちが伺候した。しかしこれらが見えるのは陛下だけだった。そのうえ、スルタンは並外れて霊力が高く、強い威信の主であるのは周知のことであり、人間の臣下たちからも、ジン、プリ、プラヤンガンたちからもはなはだ畏怖されていた。

## 62. スルタン・アグンが死に、マンクラット1世が即位

スルタン陛下には2人の王子があり、兄はパンゲラン・ディパティ・アルヤ・マタラムといい、すでにパンゲラン・プキックとラトゥ・パンダンの間の姫を妻としていた。弟はラデン・マス・アリット、一名パンゲラン・ダヌパヤ Danu-Paya といった。

すでに2人の子があつて、スルタン陛下は病いが重くなり、妻子たちや一族の者たちが控えていた。陛下はパンゲラン・ブルバヤに申された。「ブルバヤ伯父上、まもなく余は定めるときを迎えます。余の遺言は、長男パンゲラン・ディパティ・アルヤ・マタラムが余を継いで王となるのがふさわしく、次男には良き境遇を享受させたい。そなたの孫たる我が子たち、伯父上、そして我が親族すべてをそなたが導くことができますよう。後をよろしく頼みますぞ」。こうしてスルタン陛下はお亡くなりになった。嘆き悲しむ声がクラトンに満ち満ちた。ムラピ山が雷鳴のような唸りをたて、暴風雨の音と混ざりあった。遺体は清められ礼拝をうけ、マギリ Magiri に運ばれ埋葬された。1578年であった。

月曜日パヌンバハン・ブルバヤは孫の手を取って外に出てきて、シティンギルの玉座に座を占めさせた。マタラムの家臣はみな参上していた。パヌンバハンは声を張り上げた。「聞け、マタラムのみなもの者、みな証人たれ。わしはパンゲラン・ディパティ・アルヤ・マタラム様を、ススフナン・マンクラット陛下セナパティ・イン・アラガ・ガブドゥル・ラフマン・サ

イディン・パナターガマの名の下に、亡き父上を継ぐ王位に就ける」。マタラムの家臣たちは声を揃えて賛意を示し、そしてパンディタたちやハジたちは賛同の祈りの言葉を唱えた。こうして王様は王宮にお戻りになった。この王様の治世に国はおおいに繁栄し、裁きはいつも公正に行われ、お上の命令は混乱することなく、亡き父王の時と同じであった。

木曜日に王様は謁見にお出ましになった。王族たち、ブパティたち、マントリたちがすべて揃って伺候し、王弟のアリット公もまた伺候しておられた。王様はブパティたちと王族たちにお話しになった。「わが臣下の皆のもの、レンガを焼け。余はカルタの町から離れたい。父上の旧居に住み続けたくない。余はブレレッドに都を作ることにする」。家臣たちはみな心得ましたと答えた。

王様はさらにキ・トゥムンゲン・ウィラグナとトゥムンゲン・ダヌパヤにご命令になった。「その方らはブランバンガンに進撃せよ。そこはバリ人に奪われたので。そのブパティはすでに降伏してしまった。その方らに外領の全軍を与える。トゥムンゲン・マタラムは同行し、パシシル勢を指揮して海路を行け。しかし、サンバンの国守は同行させず兵士を出させるだけにせよ」。ウィラグナ公、ダヌパヤ公、マタラム公は御意のままにといい、軍を率いて出立した。

### 63. アリット君が兄王マンクラット1世に叛く

王様の弟君パンゲラン・アリットはまだ結婚前の若者だった。彼には2人の守り役がいて、ともにブパティの地位をもち、一人はトゥムンゲン・ダヌパヤといい、その時ちょうどブランバンガン遠征に出ており、一人はトゥムンゲン・パシシガン Pasingan といった。アリット君はまだ若かったので、ダヌパヤ公の屋敷に住んでいた。若君はその時ご自分の住いにあつて、パシシガン公とその息子アグラユダ Agra-Yuda が訪ねてきた。パシ

シンガンは跪拝して話しかけた。パシシンガンとアグラユダは若君を王位に就けると請け合い、煽りたて、悪事を唆した。パシシンガンの言うところでは、マタラム人にはあなた様を応援すると約束するものが多い。くわえて、いまマタラム人はみな町の建設に従事しているので、クラトンは静かで、誰もいないことが多い。クラトンの中が静かな時に、パシシンガンはこれを奪い取ると保証した。アリット君の返事は、まずよく考える、そして父なるダヌパヤ公の戻りを待つというものだった。パシシンガンは説得し続け、あれこれ多くのことを語り、そして若君のルラ lurah [長] たちは相談に与かるとパシシンガンの言葉を支持した。王子はしだいに心を動かされ、多数の意見に飲み込まれた。ついにこう述べた。「かくなる上は、従うこととしよう。わしが王位を奪うことをマタラム人が本当に支えてくれるなら」

パシシンガンとアグラユダは準備を整えるため辞去した。屋敷に戻るとパシシンガンはアグラユダに指示した。「おい、お前は明日武装した者を集めよ。わしはまず最初にレンガの作業場に行き、レンガを積んでいるマタラム人の様子をよく見る。ふつうは仕事をやめるのはまだ明るいうちだ。そこで働いている者たちがみな家に帰ったら、わしはお前に伝令を出すので、お前は武装した者たちと一緒にやってこい。そしてクラトンを襲うのだ」。アグラユダは承知した。

その時プルバヤ侯はすでに事を知り、王様に報告した。王様はたいへん驚かれた。そしてプルバヤ侯に、パシシンガンが工事の場にきたら殺すよう命じられた。侯は「御意のままに」とお答えした。翌朝プルバヤ侯は先んじて工事現場に行き、マタラム人みなに指示を与えた。まもなくパシシンガンが現れ、みなに突きかかれて死んだ。家来たちは逃げて、アグラユダに父上が殺されたことを伝えた。アグラユダはこれを聞くと涙を流したが、槍を担いで馬に乗った。家来たちに出撃が命じられ、出発した。し

かし家来たちは逃げてしまい、アグラユダは1人になってしまった。勤番所までやってきたが、ここに大勢が待ちうけていた。アグラユダは一斉に包みこまれて殺され、首が刎ねられた。

プルバヤ侯は王様に、パシシガンとアグラユダをすでに殺したことを申しあげた。2人の首が差し出された。王様は直ちに謁見のために外にお出ましになり、マタラムの家臣たちはみな揃っていた。王様は侍女にお命じになった。「その方、余が弟バンゲラン・アリットを呼べ。余に代わって都の造営を監督することを命じるとな」。侍女はただちにダヌパヤ公の屋敷に向かった。アリット君はこの命令を聞くと、すぐに拜謁に向かった。

王様の前に現れると、パシシガンとアグラユダの首が投げつけられた。そして王様は申された。「これがお前を王位に就けようとした者の末路だ」。アリット君は素早くクリスを抜くと、2つの首を刺して、こう話された。「パシシガン、お前はなぜわしを巻き込んだのだ」。王様は穏やかに申された。「それはどういうことかな、弟よ」。アリット君は跪拜してお話になった。「兄王様、あなた様に齒向かおうとか、あなた様が国王であられることをうらやむだとか考えたことは一瞬たりともありません。まったく不満をもったことはありません。これはもっぱらパシシガン1人の策略です」。王様は弟君の言葉に同情を覚えられ、穏やかにお命じになった。「もしそのようなことなら、弟よ、お前の臣下のうちルラの地位の者をすべて余に引き渡すのじゃ。すぐに連れてこい。余はシティンギルで待つ」

アリット君は「かしこまりました」と答え、王様の前から下がった。屋敷に戻ると家来たちはみな揃っていて、その数は300人に上った。内庭にはルラ8人、ほかに世話役2人、女歌舞の男芸人1人もいた。若君はお命じになった。「者ども、ルラたちよ、さあ、わしはお前たちみなを縛り、すぐに兄王に引き渡す」。ルラたちはみな泣きだし、そして若君の足許にしがみついた。内庭の外にいた者たちも泣き声を聞いて中に入ってきて、

つられて泣いた。口々にあれこれご主人様に語りかけ、そして煽り立てた。アリット君は家来たちを見ていて同情を覚え、しだいに気分が高揚してきた。こうして武器を取るよう命じられ、家来たちはみなすぐに武器を取った。

そこに王様から督促の使者がきた。キ・スムンギット Sumengit とキ・ダカワナ Daka-Wana といった。ダカワナは外に留まり、スムンギットだけが中に入り、殺された。ダカワナはこれに気づくと急いで戻り、王様に事態を申しあげた。王様はダカワナの報告を聞くととても驚かれ、そして涙をこらえられた。プルバヤ侯は静かに申しあげた。「陛下、弟君が寿命をまっとうなされないのは、アラーの思し召しによる宿命であります」。王様は厳しくお命じになった。「おい、マタラム人たちよ、まもなく弟が攻めてきても、齒向かってはならぬ。たとえ大勢が殺されようとも、余の前にくるよう、道を譲るのじゃ。もし敢えて奴と戦う者があれば、きっと余がその者の首を刎ねる」

プルバヤ侯はアルンアルンに行きこれを布告した。そこにたちまちアリット君が家臣を率いてやってくると、勤番所で立ち止まり、味方すると約束したマタラム人の現れるのを待った。いくら待っても誰もこず、家来たちも逃げて少なくなり、6人のルラだけが残った。アリット君は死を覚悟したが、マタラム人はみな左右に道を開けた。サンパンの国守のドゥマン・ムラヤ Melaya があたふたと駆けつけてきて、若君の足許にしがみつき、欲望を押さえ、攻撃を断念なさるよう申しあげた。アリット君は心が昂っていて、サンパン国守はクリスで首を刺されて死んだ。王子のクリスはセタンコバル Setan-Kobar という名であった。サンパン人たちは主人がアルンアルンで死んでいるのを見ると、こぞってアリット君に襲いかかった。しかし傷つけることはできず、多くのサンパン人が王子に殺された。6人のルラはすでにみな殺された。アリット君は疲れたため、自身のクリスで

勢い余り太股にほんの小さいかき傷をつけた。王子は2本のワリンギン樹の下で死んだ。諸公たちはただちに王子の遺体をシティングルに運んできた。王様は弟君が死んでいるのを見て甚だ深く悲しまれた。母君は息子に取りすがって泣き叫ばれた。王様は誰が弟を殺したかお尋ねになった。諸公は事の始終を申しあげた。王様はこう申された。「余の弟はまだ若くしてすでに不屈であった。そして、弟は、自ら殺されたサンバン国守と多くのサンバン人たちに死をもって続いた。見よ、マタラム人たち皆のものよ、余の証人たれ、余はいま弟の死を悼む」。こう言うや王様は左の二の腕に切りつけ、傷は深く血が流れた。

さて、今や王様は左の上腕に傷跡をもっておられる。これこそ先にシラロン公に殺されたブランバンガン山のアジャルの化身であった。アリット君の遺体はマギリに葬られた。

王様は王宮をプレレッドにお遷しになった。

#### 64. ウィラグナ公がブランバンガンと戦う

さて、ブランバンガンに出征したのはキ・トゥムンゲン・ウィラグナとキ・トゥムンゲン・ダヌパヤ、そしてキ・トゥムンゲン・マタラムであった。ブランバンガン王国はすでに征服され、その国守はバリに逃亡した。ブランバンガンの人々は男女ともマタラムに連行され、その数は1500人に上った。ウィラグナ公はバリへ追撃したが、海を渡ることができず、海岸で止まった。これを見たバリ人は攻撃しようと海に乗り出した。しかしマタラム公に海上で攻められ、多くのバリ人が死に、ついに敗走した。

ウィラグナ公、ダヌパヤ公、そしてマタラム公はこうしてマタラムに引き上げた。ウィラグナ公はその道中に病気になる、亡くなった。ダヌパヤ公は、アリット君が亡くなったという知らせを聞くと、毒をあおいで死んだ。ウィラグナの死が王様に伝えられると、その子と孫12人も死を賜るこ

ととなった。ブランバンガンの捕虜はすべてタジに留めおかれた。

### 65. 庭師が殺されその血が毒に変わる。王様の横恋慕

パンゲラン・シラロンの物語に戻る。スルタン・アグンのみ世だが、シラロン公は王宮のプンドポで宿直していた。その時庭師が王様の逆鱗に触れ、短槍で突かれて胸に傷を負い、血が地面に滴り落ちた。庭師の遺体は消えてなくなった。スルタン陛下はシラロン公に血を捨てるようお命じになった。シラロン公は血をすくい取ってバナナの葉の容器に入れ、血の落ちた土もそぎ取って容器に入れた。朝になってシラロン公は帰宅し、食事を取った。一掴みの飯にその血を滴らせて犬に与えた。犬はすぐに死んでしまい、その体はたちまち分解してしまった。その血をココヤシ油と混ぜ、それを屈む毒と名づけた。誰かを嫌悪する者がシラロン公に手だてを乞うとこの屈む毒を与えられた。これを盛られた男は死んだ。やがて屈む毒に対抗する方策を乞う者があり、シラロン公からそれを与えられた。それは血の落ちた土だった。これを与えられたのはキ・チラ Cira という者だった。屈む毒を飲まされた者がいると、キ・チラの治療を受けて回復した。このことはやがて町中の人に知れ渡り、スルタン陛下のお耳にも達した。シラロン公はナラダナ Nala-Dana 村に追放になった。スルタン陛下に傷跡ができた時、再びシラロン公が人々の口にのぼり、その噂はスルタン陛下にも聞こえてきた。こうしてシラロン公は死を賜った。このことは、先にシラロン公に殺されたブランバンガンの賢人の呪いが本物であったことを示している。

ある時王様は側室にする美女を捜すよう命じられた。マタラムの町に住むワヤン・グドッグ wayang gedhog [パンジ物語のワヤン] のダランのキ・ワヤ Wayah という者にことのほか美しい娘がいるが、娘にはすでにキ・ダルム Dalem という夫があると言う者があった。これが王様の耳に入る

と、お召しになった。しかし女はすでに妊娠2ヶ月だった。王様は女を見てとても気に入り、内廷にお入れになった。

王様は他の側室を忘れるほどこの女に夢中になり、ラトゥ・ウェタン Wetan〔東の女御〕という称号をお与えになるほどであった。しかし世間は彼女をラトゥ・マラン Malang〔障りの女御〕とよんだ。やがて身ごもっていた女は男の子を産んだ。王様の寵愛はますます深くなった。そしてその夫ダルムに死を賜った。ダルムが死ぬとラトゥ・マランは悲嘆に明け暮れた。愛したのはただ1人キ・ダルムだった。日夜ひたすらダルムを思い泣き暮らすのだった。まもなくラトゥ・マランは病気になり、嘔吐と下痢を患い亡くなった。

ラトゥ・マランの死後、王宮のすべての侍女が、大奥の前庭の竹囲いに閉じ込められた。その理由は、ラトゥ・マランが病気の時にひたすらダルムを呼び続けたので、王様はラトゥ・マランの病は宮廷のみの仕業とお考えになったからであった。ラトゥ・マランの遺体はクリル Kelir 山に運ぶよう命じられたが、埋葬は許されなかった。王様が狂わんばかりに惚れ込んでいたためであり、王様は日夜ラトゥ・マランの遺体をその子とともに見守られた。王様の家族やブパティたちが王宮に戻られるよう勧めたが、王様はそれを望まれず、そのためマタラムの国中に動揺が広がった。その後間もなく王様はそこで寝ているときに、ラトゥ・マランが夫ダルムと一緒にいる夢を見られた。眠りから覚めた王様は、ラトゥ・マランの遺体が人間の形を失っているのをご覧になった。こうして王様は王宮にお戻りになり、ラトゥ・マランの遺体の埋葬をお命じになった。1578年のことであった。マタラムの人々は落ち着きを取り戻した。

## 66. 雌鳥が雄に変わり、王様に献上される

その時王様はすでに5人の子をおもちで、すべて王子だった。長男はス

ラバヤの姫との間の子で名をパンゲラン・ディパティ・アノム Anom といひ、王位を継ぐことになっていた。4人の弟とは腹違いであった。2番目の王子はパンゲラン・プグル Puger, 3番目はパンゲラン・シンガサリ Singa-Sari, 4番目はパンゲラン・マルタ・サナ Marta-Sana, そして末子はデン・マス・タパ Tapa といった。

さて、スラバヤのパンゲラン・プキックは孫のアノム王子と同じ館に住んでいた。プキック公夫妻は孫をとても可愛がっていた。その時プキック公は野鶏と交雑した雌鳥をもっていた。まだヒヨコの時から飼っていた。やがてそれは姿形のよい雄になり、鳴くことができた。プキック公はとても驚き、それは珍奇なことなので、この鶏を王様に献上すべきであると考えた。こうしてプキック公は鶏籠を白い絹布で覆い、王宮に参上し、作法どおりに王様の前に座った。プキック公は鶏を差し出して、これは以前は雌鳥でしたが今は雄鳥になりました。クラトンにおくのがふさわしいでしょうと申しあげた。

王様は鶏を受け取り、外見は喜び驚いてみせたが、内心では激怒しておられた。というのも、すっかり疑い深くなられた王様は、裏の意味を読み取るのが巧みになっていたのだった。いま王様は心の中でお考えになった。叔父上は、娘が王妃となり王子パンゲラン・ディパティ・アノムを設け、これがすでに成人したので、自分が退位して王子を即位させるよう合図を送っていると。王様はこう考えると、叔父に帰宅を促された。プキック公が退出すると、姿を見せた廷臣たちに、さきほど叔父は悪意のあるほめかしをしていったとお話しになった。そして叔父を不作法な老人とお呼びになった。王様のこの怒りは広く知られるところとなった。プキック公の耳にも入り、とても残念でまた恐れを抱いた。そこで2本のワリンギン樹の下で妻と一族こぞって全身白衣を着て座り、静かにお召しを待った。王様はちょうど謁見のためシティンギルにお出ましになり、ラトゥ・マラン

が産み養子とした子にパンゲラン・ナブラタ Nata-Brata の称号と名前をお与えになった。

その時多くの者が座っているのが目にとまり、調べさせてスラバヤ公夫妻と一族であるとわかると、王様はただちにシティンギルにくるようお召しになった。こうしてプキック公はシティンギルに上がり、妻は後ろに従った。見守る者はみな悲痛な想いだった。王様は叔父と叔母がやってくるのを見て玉座をお降りになった。叔父と叔母に自分と同じ床に座るようお勧めになった。王様はあそこに座していたわけをお尋ねになった。プキック公は忠誠の誓いを述べ、そして先に交雑種の鶏を献上したことには何かの意図を包んでいたり、遠回しに言うようなつもりはまったくなく、反抗する気もなく、先を見通すような考えもないことを申しあげた。プキック公と妻は、もし王様がお許し下さらないのならば、死を賜りたいと申しあげ、こうして2人は涙を流し頭を深く垂れた。叔父と叔母の言葉をお聞きになった王様もまた、亡き父上を思いだして涙を流された。近くに侍っていた者たちもまた、スラバヤ公に同情してみな涙を流した。

王様は涙をぬぐいながら申された。「叔父上、叔母上、あまり思い詰めないで下さい。私は怒っていませんし、もうすでに貴方がたを許しています。くわえて、叔父上、将来、私が死んだら、貴方の孫がきっと私を継いで王位に就くでしょう。しかしながら、王宮の所在はマタラムではありません。貴方の孫はワナカルタにクラトンを設けるでしょう。ここはというと、王位に就くのは私が最後なのです」。プキック公は答えられた。「アラーに懇願申します、また神の預言者にも、ここマタラムの国が不変でありますように、王位に就くのは陛下の血を引く者でありますように」。王様は応じられた。「叔父上、すでにアラーの思し召しによる宿命なのです、貴方の孫のアノムのゆえにマタラムの国が没落するのは」。プキック公には王様の予言はたいへん残念なことであった。プキック公夫妻に帰宅するよ

う促され、王様は男女の召使たちに先導されて内廷にお戻りになった。

## 67. スラバヤの姫オイの騒動

王様は2人の近習、ナヤトルナ Naya-Truna とユダカルティ Yuda Karti をお呼びになり、お命じになった。「ナヤトルナとユダカルティ、その方たち、パシシルと外領へ行け。余の妻となるにふさわしい女人を捜すのじゃ。しかし、行く先々の国でまず井戸の水の匂いをかぐのを忘れるでないぞ。井戸の水の匂いをかいてみて芳い香りであったなら、そこが美女のいるところ、この上なき女人のいるところじゃ。そしてその方たちは町も村もすべての女を集まらせるのじゃ」

ナヤトルナとユダカルティは「かしこまりました」と申しあげて出立し、ジュバラに行き、そこから東へスラバヤまで行った。そこで芳香のする水にであった。ナヤトルナとユダカルティは、プキック公の重臣でスラバヤの国事を任されているガベヒ・マングンジャヤ Mangun-Jaya を訪ね、陛下のご命令を伝えた。

マングンジャヤはユダカルティからご命令を聞くと、とても驚き、心の中で思った。「なんとしたことか。すでにアラーの思し召しによる宿命か、わが娘が王様に嫁するとは」。そして言った。「ナヤトルナ殿、ユダカルティ殿、拙者の見るところ、この国のどこを捜しても拙者の娘を凌ぐ女人はおりませぬ。貴殿らが女たちをすべて、村々までも含めて、呼びだされたとしても、何程の者はおりませぬ。しかしながら、娘はまだ成人しておらず、年頃の手前ですて、名はオイ Oyi ともうします」。マングンジャヤはこう言うと娘を呼んだ。ナヤトルナとユダカルティは現れた娘を見て、驚きのあまり、口をポカンと開けて見つめるだけだった。こうしてマングンジャヤに、娘を王様に差し出すこと、そして自身が妻とともにマタラムに娘を連れて行くことが命じられた。マングンジャヤは「御意のままに」と答え

て準備を整えた。すべてが整うと出立した。

ナヤトルナとユダカルティはマタラムに着くと、上司ガベヒ・ウィラルジャの屋敷に行った。これが娘らを王宮に案内し、王様に申しあげた。王様は娘を見てすっかり気に入り、惚れ込まれた。しかし障害は、まだ幼いことであった。そこでウィラルジャにお命じになった。「ウィラルジャ、この女兒をお前の家で面倒見よ、その美しさを磨くのじゃ。そしてよき年頃になったらクラトンに連れてくるのだ」。ウィラルジャは「御意のままに」と答え、娘はウィラルジャに連れられていった。

さて、パンゲラン・ディパティ・アノムはパンゲラン・シンガサリの妃と情を通じていた。シンガサリ公は気づかなかった。ところがシンガサリ公の妃には別に愛人がいて、名をラデン・ドブラス Dhobras といった。このドブラスは、プキック公の息子であり、アノム太子の叔父であった。シンガサリ公は、妻がドブラスと密通していることがわかり、とても腹を立てた。そして、アノム太子はシンガサリ公の妻がドブラスと通じていることを知ると、シンガサリ公に告げ口した。シンガサリ公は兄から密告されて、怒りはいや増した。そしてドブラスを騙して山の畑へ誘った。そこでドブラスを殺し、死体を窪みに入れ、高みにバナナの樹を立てた。

翌日プキック公は息子ドブラスを捜すよう命じられた。窪みの中にあるらしいと察すると、そこを掘って取りだした。その時ムラピ山が燃えだし、恐ろしい轟音を響かせた。無数の大きな岩がぶつかりあい、火花を散らした。まるで灰の雨が降るかのようであった。火砕流が川筋を流れ下った。多くの村がその下に埋まりまた燃えた。村人の命を落とす者が多く、マタラムの町の人々は火砕流と灰の雨に襲われて大混乱に陥った。そこで王様はハジたちとウラマーたちにアラーに祈るようお命じになった。するとたちまちムラピ山は鎮まった。このとき1594年であった。

その後まもなく王様は太子のアノム公をお呼びになった。太子が現れる

と王様はお話しになった。「おい、お前ももう大人なので、結婚するのがよい。今からチャルバンの国守の屋敷に行け。見目美しい娘もっている。お前の妻とするにふさわしいと思える。まずはお前が見に行くのがよい。お前が気に入ったら、クラトンに招いてやる」

アノム太子は「御意のままに」と答え、チャルバン国守の屋敷に出かけていった。そこにくると招き入れられ座についた。チャルバンの国守はアノム太子が娘を見にお出でになったとわかっていたので、娘に飲み物とシリを運ばせた。太子は姫を見ると、心の中でその容姿が並外れて美しいことをほめたが、その表情にはいくぶん癩癖がうかがわれ、夫に対してわがままだと思えた。しだいに姫を見ているのが楽しくなくなっていった。そして帰宅すると父上に望まないと申しあげた。

ある日のこと、アノム太子は散歩していてウィラルジャ邸に立ち寄り、案内を乞うことなくブンドポに入っていった。さて、マングンジャヤのオイという名の娘はまさに適齢期に入っていて、その容姿はとても麗しかった。毎日身体の手入れをしているので、時とともにますます美しくなっていた。肌はウコンのような淡黄色で、容姿は優美で、すべての所作は非の打ち所がなく、表情は愛らしく、微笑みは蜜より甘かった。その時ちょうどブンドポでウィラルジャの妻と一緒にパティックをしていた姫は、太子のおいでになったのを見てびっくりした。オイはいそぎ座を離れて母屋に向かった。歩きながら何度も振り向き、また髪のを直した。

太子は姫を見てとても驚き、心臓はドキドキし体中の力が抜けてしまったようで、長い間呆然と眺めていた。そして激しい恋におちた。ウィラルジャは太子がおいでになっているのを見ると、急いでやってきて、足許に跪き、拝礼してお尋ねした。「殿下、いかなれば拙宅にお下がりになられましたのでしょうか。何かご所望でしょうか。どうぞ中にお入りください」。太子は答えた。「ちょっと立ち寄っただけ、そなたの家を見たかったので。

ウィラルジャよ、ちょっと尋ねたい。ついさっきバティックをしていた女性は誰か。そなたの実の娘か」。ウィラルジャは申しあげた。「殿下、あの女性はスラバヤの出身で、陛下のために閉居中であります。まだ小さい時に所望され、身共のもとに託されました。年頃になったらクラトンにお連れしなければなりません。いままさにその時がまいりました。陛下にお連れすると致しましょう」

太子はウィラルジャの言葉を聞くと、娘がいつそう恋しくなった。戻ろうと馬に乗り、早駆けした。王宮に着くと、ドドットを被って寝てしまった。従者たちはみなご主人様は病気だと思った。しかし、1人だけウィラルジャ邸の女性への恋煩いだと察した侍女がいて、急ぎプキック公に申しあげた。これを聞かれたプキック公は、災いが起こるのではないかと、とても心配になり、妃ラトゥ・パンダンに話された。「おまえ、わしは間違いを犯そうとしておる。さあ、ウィラルジャ邸の女性を受けとりにいこう。おまえの孫アノムに与えようではないか、恋煩いを終わらせてやるために。しかしわしの見込みでは、わしが実際にその女性を手に入れたなら、王様の怒りを買うことは避けがたく、死を賜ることであろうが、わしはもう歳をとったから、腹を括ったのだ。たとえ死ぬとしても、お前の孫が心煩うことから解放されさえすれば」。妻は夫の願いを受けいれた。こうして2人して、大勢の侍女を引き連れて輿をともなって屋敷を出て、ウィラルジャ邸に着いた。

ウィラルジャは急ぎ前庭に出迎え、歓迎の言葉を述べ、邸内にお招きした。座につくと、ウィラルジャは拝礼しながら申しあげた。「殿下、いかなればここにお越しでございましょう」。プキック公はお話しになった。「ウィラルジャよ、わしがここにきたのは、そなたに知らせるためじゃ、わしの子の孫のアノム太子がそなたの屋敷から戻ってこの方、まったく食べようとせず、ただ横たわっておる。もう何日にもなる。この屋敷にいるスラ

バヤの女性にすっかり惚れ込んでしまったためだ。わしはそなたの許しを求める、その女性をわしにくれ、太子と結婚させるのだ。もしも王様がお立腹になったなら、わし1人が責めを負う。たとえ命を失おうとも、実現するつもりだ」。ウイラルジャは答えた。「殿下、あなた様のその願いをお断り申しあげます。身共はあなた様の息子なる王様を恐れます。もしあなた様が連れて行かれれば、王様から死を賜ることでしょう」

スラバヤ公はこの答を聞くとがっかりして、腕を組み、そして静かに言った。「ウイラルジャよ、そなたの言うことはまったくそのとおりだ。しかしそれでもわしは、王様の怒りを買おうとも、たとえ命を失おうとも、1人でやり遂げ、そなたを巻き込まない。それにこの1000 [リアル] の値打ちの指輪1組と2振りのクリスを差しあげよう。さあ受けとってくれ」。ラトゥ・パンダンが言い添えた。「ウイラルジャ殿、そもそも妾の者をお返しください。スラバヤの国は妾のものであり、その女性はスラバヤからきたのですから、妾にその資格があるのは間違いありません。わが子なる王様がお怒りになりましても、妾が引き受けます」。そしてラトゥ・パンダンはウイラルジャの妻に語りかけた。「奥方様、妾のこの贈り物をお受け取りください、金と財宝と着物です。ご家族でお分けください」

ウイラルジャの妻は喜び、拝礼して受け取った。そして夫に言った。「あなた、なぜ何もおっしゃらないの。あなたが王様を恐れられるとしても、このようにプキック殿下とラトゥ殿下が保証して下さるのですから。それに私が思いますに、王様はお怒りにはなりません。所望されるのがご自身の王子様で、王位に就くのが決まっておられるお方ですし、私は昨日耳にしましたが、太子様は王様であるお父上から結婚を勧められておいでです」。ウイラルジャは妻の言葉に流され、姫はプキック公に引き渡された。プキック公夫妻は素早く姫を引きよせ、手を取って横に座らせた。プキック公はウイラルジャに言われた。「ウイラルジャよ、聞きなされ、マ

タラムの国がこの女子のために破滅するのはアラーの思し召しにより定められておる。王様の怒りに触れてそなたは惨めな目を見るであろうし、わしは死ぬことになろう。しかしこうしたすべてはアラーの思し召しによる定めであって、免れることはできないものなのだ。さらばじゃ、家に戻るとしよう」

プキック公夫妻は屋敷を後にし、オイ姫は輿に乗って連れられていった。王族の区域に入ると、孫に会い、プキック公は語りかけられた。「アノムよ、もはや恋煩いはおしまいにしなさい。その病の特効薬を見つけてきたぞ。これを見よ」。太子は姫を見て大喜びし、心の高まりにたえられず、姫の横にきて座った。スラバヤ公は申された。「孫よ、お前は心配することはない。お前の父なる王様がお怒りになったとしても、わしが引き受けてやる。たとえ命を落とすことになろうとも、お前が喜び幸せでありさえすれば、わしが引き受けてやる。では、愛しあうのじゃ、わしは戻るとしよう」。太子は拝礼して感謝を述べ、プキック公夫妻は戻っていった。姫は太子の腕に抱かれ、寝室に連れられ、思いが達せられた。

それから間もなく王様はウィラルジャに娘をお求めになった。ウィラルジャは、すでにプキック公に取り上げられ、太子に与えられたとお答えした。王様は激怒なさった。スラバヤ公は殺され、その一族も全部で40人がすべて殺された。そしてウィラルジャは妻子とともにプラナラガに追放になり、そこで殺された。そして太子は父から、自分の手でその娘を殺すよう命じられた。もし太子がオイ姫をただちに殺さないならば、もはや自分の子とは認めないと。太子は父のこうした命令を受けると、深く悲しんだ。そして、姫を膝に抱き、クリスで刺し殺した。姫の死後太子は父によりリプラに追放になった。財産はすべて取り上げられ、屋敷は焼き払われた。

## 68. トルナジャヤがサンパンに戻り、マタラム攻撃を準備する

その時すでに王様は欲望に身を任せ、常軌を逸しており、暴力が繰り返され、見せしめのための刑罰が頻繁に執行された。ブパティたち、マントリたち、王族たちがたがいに地位を奪い合い、王国の秩序はすっかり混乱してしまっただ。マタラム中の人々がみな不安になった。しきりに月食と日食がおこり、時季ならざる雨が降り、夜毎にまがまがしい彗星が現れ、灰の雨が降り、地震があった。数多い凶兆が現れ、そのすべては王国の没落を予言していた。

アノム太子はすでに父から赦され、もとのように太子の館に住まうようになったが、悲嘆の思いを断ち切ることができなかった。祖父ブキック公とその家族の死を悔やみ続けていた。そしてマタラムの町の人々もまたみな悲しみに沈んでいた。王族たちやブパティたちから、マタラムの国の人々みなを安寧にするために王位に就くようしきりに促されていた。アノム太子の立場はますます苦しくなり、自問するのだった。「仮に父を倒したりしたら、他国に対して聞こえが悪いが、すぐにでも王として立たないならば、その間にマタラム人はみな倒れてしまう」

こうして考え出したのは、誰かを隠れ蓑にしてマタラムを征服することだった。太子は祖父、カジョラン Kajoran のパヌンバハンを思いつくと、こう独りごちた。「マタラムの征服を命じるとしたら、カジョランの祖父以外にありえない。苦行を重ね、霊力のある人なのだから。隠れ蓑として使うならきつとうまくいくだろう」。太子はこうして配下の3人のルラ、プラナ・タカ Prana-Taka, スムンディ Sumendhi, アンダ・カラ Anda-Kara をお呼びになった。太子はこう命じられた。「お前たち3人はカジョランへ行け、この手紙を祖父に渡すのだ。この手紙の他に、お前たちに指示する。黙ってお前たちについてきてくれるようお祖父様を説得するのだ」。

3人は太子の考えを打ち明けられ、「かしこまりました」と出立した。

さて、カジョラン公であるが、たいそう霊力が強く、厳しく瞑想に励んでいた。そしてサンパン出身のラデン・トルナジャヤ Truna-Jaya という養子がいた。実父はサンパン国守ディパティ・チャクラニングラット Cakra-ning-Rat の兄、ドゥマン・ムラヤであった。ムラヤは、パンゲラン・アリットとの戦いですでに死んでいた。父が亡くなったとき、トルナジャヤはまだ小さかったので、ムラヤの国守の地位は叔父チャクラニングラットが継いだ。トルナジャヤはその屋敷と一緒に暮らしていたが、成人すると、チャクラニングラットの姫と親しくなったと疑われたため放逐されたのみならず、殺されかけた。生き延びることができたのは、サンパンの人々の多くから慕われていたので匿ってもらえたからだった。そこでトルナジャヤはアノム太子に仕えようとしたが、うまくいかなかった。トルナジャヤが太子の前に出ることがないようにと、チャクラニングラットが太子の家臣たちを抱き込んでいたからである。こうしてトルナジャヤは放浪の旅にでた。やがてカジョラン公に養子として受け入れられ、たいへん寵愛され、何をしても許された。というのもカジョラン公は、トルナジャヤが将来ジャワの国を混乱させることができる偉大な武將になることがわかっていたからである。

その時カジョラン公はちょうど家において、パンゲラン・ディパティの使者がくるのを見て驚いた。使者は手紙を携えていた。カジョラン公は手紙を読むと、マタラムにむけ出立し、トルナジャヤは義父に随行した。マタラムに着くと太子を訪ね、その屋敷に招じ入れられた。太子はこう切り出した。「お祖父様、あなた様にここにおいでいただいたのは、私ぐたいへん困惑し懸念しているからです。といいますのも、マタラムの人がみな困っています。父上の望まれることが以前とは異なって、すべてにおいて錯乱してしまい、むやみに刑罰を課され、国中の人々が破滅させられています。

そのため、王族たちやブパティたちがみな、父上に代わって王位に立つよう熱心に勤めるのです。かといって、お祖父様、もし私が父上を退けたりしたら、私に反感を抱く者たちは何と言うのでしょうか。もし私が王位に就かなければ、全マタラムの人々がまもなくみな倒れてしまいます。こういうわけで、私はいまこのような考えを抱くようになりました、お祖父様、私はあなた様を隠れ蓑としてマタラムの国を獲得しようと。どうぞどこなりとお好みの場所に大軍をお集めください、そのための資金と武器は私が提供いたします」

カジョラン公はこうお答えになった。「若殿、そなたの願いに沿うことはできぬ。わしはすでに老いたし、王様が怖いゆえ。そのうえ、そなたの願いは順当とはいえず、時を飛び越えるものと判断できません。わしの考えでは、じっと我慢にしかず。このまま進めば、王様が亡くなられたなら、後を継ぐのはそなたに間違いないのじゃから」。カジョラン公は言葉を尽くして諫められたけれども、ついに説得できなかった。こうしてカジョラン公は申された。「そなたがそれほど固執するなら、若殿、わしの代わりの者を世話しよう。わしに義子があり、トルナジャヤという。亡きサンパンのドゥマン・ムラヤの王子である。この者がきっとそなたの求めに応じることができ、そして、マドゥラで兵を挙げことができよう。そのトルナジャヤは一緒にきていて、いま外におる」

太子は喜んで、トルナジャヤを招き入れた。トルナジャヤは太子の前に現れると、拝礼した。太子は嬉しげにトルナジャヤをご覧になった。カジョラン公はトルナジャヤに申された。「よいか、お前が召されたのは、お前がご主人様の替え玉になってマタラムの国を征服することが望まれているからだ。もし失敗したら命はないだろう。どうかな、ご主人様の替え玉となることを引き受けるか」。トルナジャヤは「喜んで、やりましょう。たとえ命を失い、粉々になって土に帰そうとも、ご主人様の命令を実行し、

逃げませぬ」

太子はトルナジャヤの約束を聞いておおいに満足なさり、こう申された。「トルナジャヤ、そなたにサンパン国を与えよう。自ら伐り従えよ。マドゥラ人をすべて留まらしめて、マタラムに姿を現すのを許してはならない。ブパティたちについては、マタラムに留ませよ。挙兵したなら、ただちにパシシルや外領の者どもを屈伏させるのだ。逆らう者がいれば、武力で倒せ。しかし忘れてはならぬ、余が後ろにいることを隠し通すのだ。マタラムが支配下に入った暁には、ただちに余の前に現れよ。余がすでに王位に就いたなら、全権をそなたに与えよう。余はただ王位に就けばよい、ジャワの国の困難はすべてそなたに委ねよう」。トルナジャヤは「かしこまりました」と答え、太子から財宝、衣装、様々な武器を賜った。

カジョラン公とトルナジャヤは太子のもとを辞すとカジョランに戻り、準備万端整えた。カジョラン公は指示した。「よいか、お前に伝えておく。心配することはない。マタラムの国はきっとマドゥラ人によって征服されるだろう。お前は直ちにスラバヤにおいて兵を挙げよ。いずれマタラムが混乱したなら、わしはお前の後に続く」。トルナジャヤは心得ましたと答えて、ただちに妻子とともに出立した。サンパンに着くと大勢が喜んで出迎えにきた。この方こそ旧主なのだから。マドゥラの全島あげてみな服従し、逆らう者はいなかった。トルナジャヤは早くも大軍を有した。

〔書 評〕

## 「菱田信彦『快読「赤毛のアン」』

(彩流社, 2014年, 216頁)』

軽 部 恵 子

著書の菱田信彦は、川村学園女子大学の文学部国際英語学科教授で、現在は学科長を務める。研究分野は、イギリス小説、英米児童文学、児童文学理論で、中でも児童文学作品における階級、ジェンダー、人種表象について注目している（川村学園女子大学、教員紹介、菱田信彦、[http://www.kgwu.ac.jp/faculty/kyoin/bungaku/kokusai\\_hishida.html](http://www.kgwu.ac.jp/faculty/kyoin/bungaku/kokusai_hishida.html), 2015年12月14日アクセス）。『ハリー・ポッター』と『ナルニア国ものがたり』のシリーズも、著者の研究対象である。

冒頭に述べるとおり、本書はL.M. モンゴメリーの名作『赤毛のアン』をあらゆる角度から解説している。「まえがき」は、『赤毛のアン』が初めて刊行された1908年の意義をカナダの歴史や社会の視点で解説する。前年の1907年、カナダは主権を持つ英国の自治領としての地位を付与された。1926年のバルフォア報告書で、カナダはイギリス本国と対等の地位にあることが認められた。1931年のウェストミンスター憲章で、カナダは正式な独立国となる。著者によると、最初の『赤毛のアン』から最後の『炉辺荘のアン』（1939年刊）まで、『赤毛のアン』と続編の執筆時期は、カナダが独立国としての地位を獲得する道のりと重なっており、モンゴメリーはイギリス的な文学作品を書くことによって、カナダが文化的な国であるとアピールしたのではないかと著者は推測する。

Part I は、『赤毛のアン』を章ごとに文字通り徹底的に解説する。リンド夫人、マシュー、マリラなど、主要登場人物の何気ない台詞を通じて、たとえばフランス系カナダ人とイギリス系カナダ人の対立関係が描き出される。アンの名前は、旧約聖書の「サムエル記」に登場する預言者サムエルの母、ハンナ (Hannah) に由来すると言う。ヘブライ語で「恵み」(grace) を意味する名前で、聖母マリアの母アンナも同源である。一方、マリラ (Marilla) はケルト系の名前で、「輝く海」(shining sea) を意味すると言う。アンは隣人バーリーの池を「輝く湖水」(The Lake of Shining Waters) と名付けたが、なにやら意味深長である。このほか、アンが両親のことをマリラたちに話すくだりから、イギリス階級の制度とカナダの階級意識を対比させるなど、著者の博識ぶりは枚挙に暇がない。

Part II は、「『赤毛のアン』を取り巻く社会」と題して、海外の研究者の論考を引用しながら解説する。『赤毛のアン』を女性の視点で読み直した時、注目されるべきは、『赤毛のアン』におけるジェンダーの概念がきわめて曖昧で複雑な点であると言う。アンは、農作業を男の子の仕事として手伝わない。そもそも、カスバート家が引き取りたかったのは、農作業を手伝える男の子であった。一方、アンは、女の子らしくしようと努力するが、失敗も多い。親友のダイアナに誤ってワインを飲ませて酔っ払わせ、バーリー夫人に出入禁止にされてしまった。あこがれのアラン牧師夫妻のために開いた茶会では、直前にひどい風邪を引き込み、香料のバニラと間違え痛み止め薬を入れたケーキを供してしまった。クイーン学院では、ギルバートと学業で一番を争い、レッドモンド・カレッジに4年間通える奨学金を獲得する。そして、最後にマシューが心臓発作で亡くなり、視力が衰えたマリラのために、奨学金を辞退し、家にとどまってマリラの世話をしながら、アヴォンリーの村で教員を務める決心をする。今風に言えば、介護のため名誉ある奨学金を辞退し、故郷にとどまった。著者は、このよう

## 菱田信彦『快読「赤毛のアン」』

にジェンダーの複雑なメッセージは、作者モンゴメリーの意図であったと主張する。

このパートでは、アンの階級とエスニシティも論じられる。再び、フランス系カナダ人とイギリス系カナダ人の対立が説明される。アンの両親の名字「シャーリー」(Shirley)は、イギリス伯爵家を想起させるが、『赤毛のアン』は孤児アンの貴種流離譚で、モンゴメリーは人の資質は血筋によって決まると考えていたと言う。評者は子どもの頃から何度も『赤毛のアン』を読んできたが、そこまで考えを巡らすことはできなかった。また、調べようにも、本書ほど適切な文献は存在しなかったであろう。

Part II は、日本における『赤毛のアン』の人気をポップカルチャーとして分析する。日本人はあまり知らないかもしれないが、海外ではなぜ日本で『赤毛のアン』が人気なのか、それ自体が研究対象となっている。著者は、複数の仮説を丁寧に紹介している。もっとも、評者にはどの仮説もあまり納得できなかったのだが。各仮説の詳細は、本書を読む人の楽しみにとっておきたい。

1952年に村岡花子が初めて邦訳して以来、何人もの文学者・翻訳家がこの作品を日本語にした。40-50歳代の人気を支えるのは、1979年にフジテレビ系「世界名作劇場」で放映されたアニメ「赤毛のアン」であろう。高畑勲監督の本作は、掛川恭子の邦訳に依拠し、原作の物語を忠実に再現している。アニメの作画の技術が高く、菓子作りの場面とできあがった菓子の画像が楽しい。また、プリンスエドワード島の風景などが美しく、同島に日本から多数の観光客を誘う大きな理由となった。オーケストラによる背景音楽の演奏が、想像の翼を広げるアンの心象風景を鮮やかに描いている。テレビ局を変えて何度も放映されたので、見た人も多いであろう。

Part III は、『赤毛のアン』を翻訳した複数の本を、重要なパートごとに比較解説する。日本で最も読まれている翻訳は村岡花子のものだが、意外

に誤訳かとも思える箇所が散見される。村岡はカナダのメソジスト系のミッション・スクールに通っていたが、詳しい歴史的背景を調べられないのは仕方なかった。

評者にとって、本書で最も参考になったのは、アン、マシュー、マリラたちが信仰する長老派（改革派教会。presbyterian）の説明が各所に加えられていることである。2017年は、ルターの宗教改革から500周年となる。ルターの改革を不十分と批判し、さらなる改革を推し進めたのが、フランス出身のカルヴァンであった。カルヴァンは、人間が救済されるかはあらかじめ決まっているとする予定説を唱え、現在の仕事にいそむよう説いた。予定説は資本主義が発展する上で、精神的基盤となった。その教えはヨーロッパ中に広まり、フランスでユグノー、イングランドでピューリタン（清教徒）、スコットランドでプレスビテリアン（長老派）と呼ばれた。英国教会の首長ジェームズ1世の迫害を逃れたピューリタンがアメリカ東海岸に入植したが、教養人が多く、新聞の創刊、ハーヴァード大学の設立を行った。彼らの活動が1776年のアメリカ独立につながったのは言うまでもない。アン、マシュー、マリラの会話を基に、著者が長老派の考え方を懇切丁寧に解説したことで、カスバート兄妹の質素な暮らしぶり、虚栄を排除する態度、アン の 勤 勉 ぶ り の 理 由 を 納 得 す る こ と が で き た 。

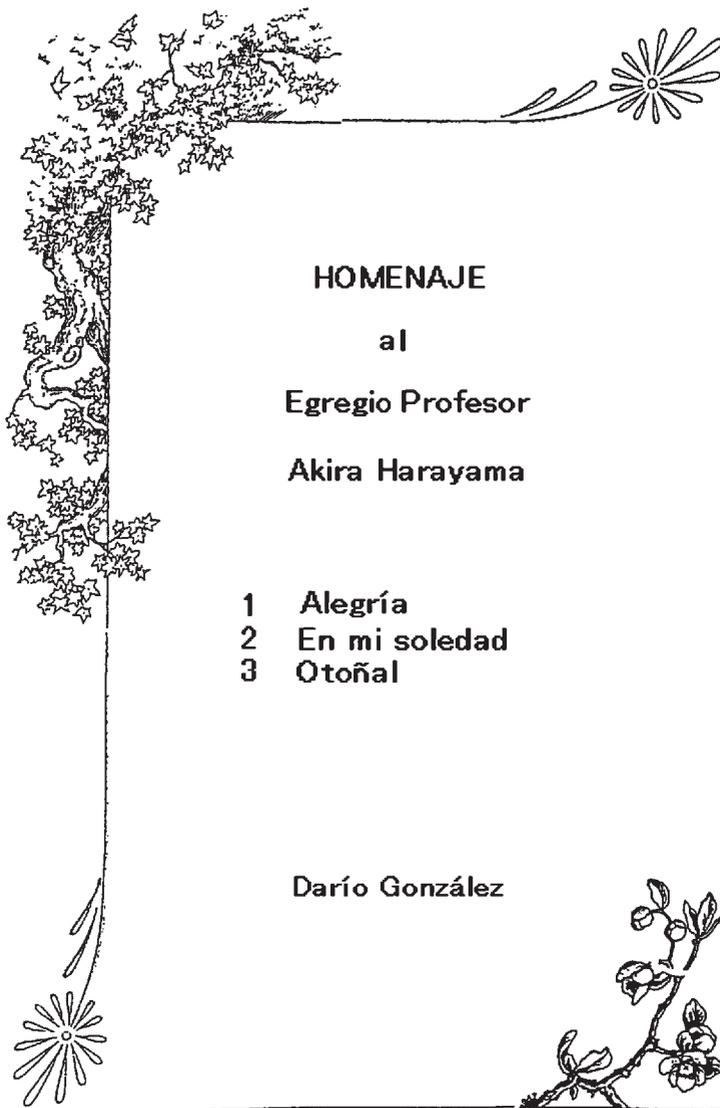
以上、日本人になじみの深い『赤毛のアン』も、階級、ジェンダー、エスニシティに造詣の深い著者の手にかかる と、カナダの解剖を見るようで、知らなかったことが続出である。著者の博識ぶりに心からの敬意を表すると同時に、とくに『赤毛のアン』のファンには本書を強く薦めたい。

FLŌRĪLĒGUM MUSICUM

Darío González

*Piano Solo*





**HOMENAJE**

**al**

**Egregio Profesor**

**Akira Harayama**

- 1 Alegría**
- 2 En mi soledad**
- 3 Otoñal**

**Darío González**

FLŌRĪĻĒGUM MUSICUM

Alegría

Darío González

ALLEGRETO

The first system of musical notation consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a key signature of one flat (B-flat) and a 3/4 time signature. It contains a melodic line with eighth and sixteenth notes, some beamed together, and rests. The lower staff is in bass clef with the same key signature and time signature, providing a harmonic accompaniment with eighth and sixteenth notes. A fermata is placed over the final note of the first measure in both staves.

The second system continues the piece with two staves. The upper staff features a melodic line with various rhythmic values and rests. The lower staff provides a steady accompaniment. A fermata is placed over the final note of the first measure in both staves.

The third system continues the piece with two staves. The upper staff features a melodic line with various rhythmic values and rests. The lower staff provides a steady accompaniment. A fermata is placed over the final note of the first measure in both staves.

The fourth system continues the piece with two staves. The upper staff features a melodic line with various rhythmic values and rests. The lower staff provides a steady accompaniment. A fermata is placed over the final note of the first measure in both staves.

The fifth system concludes the piece with two staves. The upper staff features a melodic line with various rhythmic values and rests. The lower staff provides a steady accompaniment. A fermata is placed over the final note of the first measure in both staves.

# En mi soledad

Darío González

The musical score is written for piano and guitar. It consists of six systems of music, each with a piano part on the left and a guitar part on the right. The piano part is written in a grand staff (treble and bass clefs), and the guitar part is written in a single staff with a treble clef. The key signature is one flat (B-flat), and the time signature is 4/4. The score includes various musical notations such as notes, rests, slurs, and dynamic markings. The guitar part features a complex rhythmic pattern with many sixteenth and thirty-second notes, and includes a key signature change to two sharps (D major) in the fifth system.

FLŌRĪLĒGUM MUSICUM

First system of musical notation, consisting of two staves (treble and bass clef) with various notes and rests.

Second system of musical notation, consisting of two staves with notes and rests.

Third system of musical notation, consisting of two staves with notes and rests.

Fourth system of musical notation, consisting of two staves. Includes the instruction *ritardando* and *morendo* with hairpins.

Fifth system of musical notation, consisting of two staves. Includes the instruction *A Tempo*.

Sixth system of musical notation, consisting of two staves. Includes the instruction *3va. basso* with a dashed line.

The image displays six systems of musical notation, each consisting of a treble clef staff and a bass clef staff. The music is written in a key with one flat (B-flat) and a 3/4 time signature. The notation includes various note values, rests, and phrasing slurs. The first system shows a melodic line in the treble and a bass line with chords. The subsequent systems show increasing complexity in the treble staff, with more frequent sixteenth notes and slurs, while the bass line remains relatively simple with long notes and slurs.

FLŌRĪĻĒGUM MUSICUM

First system of musical notation, consisting of two staves. The upper staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes, and the lower staff contains a bass line with quarter notes and rests.

Second system of musical notation, consisting of two staves. The upper staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes. The lower staff contains a bass line with quarter notes and rests. The text "ritardando ritardando più..... ritardando e marcando.." is written across the staves.

Third system of musical notation, consisting of two staves. The upper staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes. The lower staff contains a bass line with quarter notes and rests. A first ending bracket is marked with the number "1".

Fourth system of musical notation, consisting of two staves. The upper staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes. The lower staff contains a bass line with quarter notes and rests.

Fifth system of musical notation, consisting of two staves. The upper staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes. The lower staff contains a bass line with quarter notes and rests.

Sixth system of musical notation, consisting of two staves. The upper staff contains a melodic line with eighth and sixteenth notes. The lower staff contains a bass line with quarter notes and rests. The text "tr. mod." is written at the end of the system.

# Otoñal

Darío González

The first system of musical notation consists of two staves. The upper staff is in treble clef with a key signature of one flat (Bb) and a 4/4 time signature. It contains a melodic line with eighth and sixteenth notes, some beamed together, and rests. The lower staff is in bass clef and contains a bass line with chords and single notes, including some chords marked with the letter 'E'.

The second system of musical notation consists of two staves. The upper staff continues the melodic line from the first system. The lower staff contains the bass line and includes the lyrics "En mi Soledad" written under the notes. Chords in the bass line are marked with the letter 'E'.

The third system of musical notation consists of two staves. The upper staff continues the melodic line. The lower staff contains the bass line with chords marked with the letter 'E'.

The fourth system of musical notation consists of two staves. The upper staff continues the melodic line. The lower staff contains the bass line with chords marked with the letter 'E'.

The fifth system of musical notation consists of two staves. The upper staff continues the melodic line. The lower staff contains the bass line with chords marked with the letter 'E'.

The sixth system of musical notation consists of two staves. The upper staff continues the melodic line. The lower staff contains the bass line with chords marked with the letter 'E'.

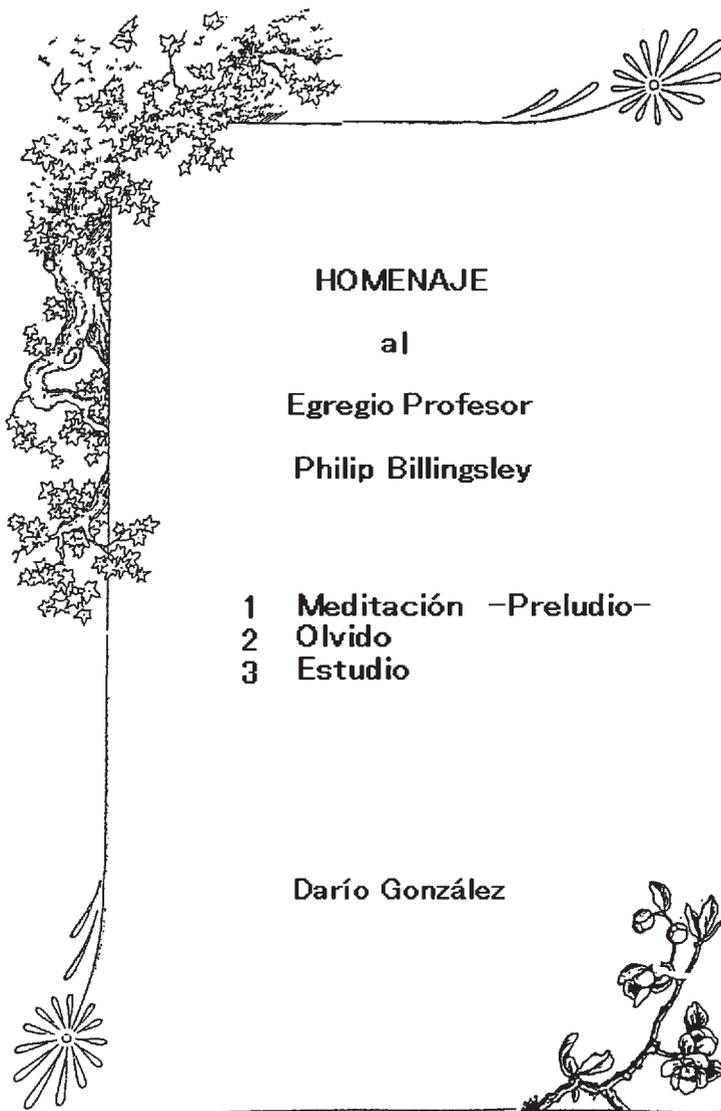
FLŌRĪLĒGUM MUSICUM

*sallato*

*sallato*  
*rallantando poco a poco*  
*a tempo*

*rallantando*

*peccante*



**HOMENAJE**

**al**

**Egregio Profesor**

**Philip Billingsley**

- 1 Meditación -Preludio-**
- 2 Olvido**
- 3 Estudio**

**Darío González**

FLÖRİLĚGUM MUSICUM

Meditación

Preludio

Darío González

Lento

The musical score is presented in six systems, each with a treble and bass staff. The first system begins with a treble staff containing a series of chords and a bass staff with a simple accompaniment. The second system continues with similar textures, featuring some arpeggiated figures in the bass. The third system introduces more complex textures with overlapping lines in both hands. The fourth system shows a continuation of the melodic and harmonic development. The fifth system features a more active bass line with eighth-note patterns. The sixth system concludes with a 'ritenuendo' marking and a final cadence in the bass staff.

# Olvido

Darío González

The musical score for "Olvido" is presented in a standard two-staff format (treble and bass clefs) with a common time signature (C). The piece is in a key signature of one flat (B-flat). The score is divided into six systems, each consisting of two staves. The first system shows the initial melodic and harmonic material. The second system introduces a more complex rhythmic pattern in the guitar part, characterized by sixteenth-note runs. The third system continues this rhythmic complexity while the piano part provides a steady accompaniment. The fourth system features a dense texture with many beamed notes in both parts. The fifth system shows a return to a more melodic piano line with a consistent guitar accompaniment. The sixth system concludes the piece with a final melodic flourish in the piano and a rhythmic pattern in the guitar.

FLŌRĪLĒGUM MUSICUM

First system of musical notation, featuring a treble and bass staff. The treble staff contains a melodic line with a long slur over the first four measures. The bass staff provides a harmonic accompaniment with chords.

Second system of musical notation. The treble staff has a melodic line with a slur and a *rit.* marking. The bass staff features a long, sustained chord in the first two measures, followed by a melodic line.

Third system of musical notation. The treble staff has a melodic line with a slur. The bass staff has a melodic line with a slur and a *rit.* marking.

Fourth system of musical notation. The treble staff has a melodic line with a slur and a *rit.* marking. The bass staff has a melodic line with a slur.

Fifth system of musical notation. The treble staff has a melodic line with a slur. The bass staff has a melodic line with a slur.

Sixth system of musical notation. The treble staff has a melodic line with a slur. The bass staff has a melodic line with a slur and a *rit.* marking.

# Estudio

Darío González

Moderato

The musical score is written for guitar and piano. It consists of six systems of two staves each. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is common time (C). The tempo is marked 'Moderato'. The score begins with a 'D.C.' (Da Capo) instruction. The guitar part features a melodic line with various rhythmic patterns, including eighth and sixteenth notes, and some triplets. The piano part provides harmonic support with chords and moving bass lines. The piece concludes with a 'Fine' marking and the instruction 'ritardando' written in cursive below the piano staff.

FLÖRİLĚGUM MUSICUM

First system of musical notation, consisting of a treble staff and a bass staff. The key signature is one sharp (F#) and the time signature is common time (C). The music features a melodic line in the treble and a supporting bass line.

Second system of musical notation, continuing the piece with similar melodic and bass lines. The notation includes various rhythmic values and phrasing slurs.

Third system of musical notation, including a *rall.* marking and a fermata. The tempo slows down, and the music concludes with a final chord and a fermata over a note in the bass staff.

Fourth system of musical notation, marked *Animato*. The tempo increases, and the music features more complex rhythmic patterns and triplets in the treble staff.

Fifth system of musical notation, continuing the *Animato* section with intricate rhythmic figures and dynamic markings.

Sixth system of musical notation, ending with *D.c. al fine*. The tempo returns to common time, and the piece concludes with a final cadence.

# CONTENTS

Foreword.....IMAZAWA Koji ( 1 )

## Articles

So he invented just the sort of Jay Gatsby:  
*The Great Gatsby* and its Narrative Technique  
.....ONO Yoshiko ( 5 )

The Effects of Extensive Reading Instruction  
with Graded Readers on EFL Learners:  
Questionnaire Surveys of Non-English-Major  
University Students  
.....TSURII Chie ( 37 )

Teacher Effectiveness Training  
as a Teacher Education Program  
.....SHIMADA Katsumasa ( 79 )

Demystifying the Identity Myth:  
Hawthorne's "The Minister's Black Veil"  
.....SASAKI Eitetsu ( 93 )

A Politico-Cultural Inquiry into Intervention  
in the Developing World :  
Contemporary Significance of *Star Trek's* Prime Directive  
.....MATSUMURA Masahiro ( 123 )

Dickens and Gender:  
The Collapse of the Patriarchal Myth and  
Dickens's Limited Understanding  
.....YOSHIDA Kazuho ( 139 )

Emotional Intelligence in Education  
.....Hershey WIER ( 161 )

A Study on the Omission of the Appositive Clause 'that'  
.....TSUZUKI Satomi ( 191 )

## Notes

Curious tales of 《Отрадное》 in Russia  
.....KUNIMATSU Natsuki ( 241 )

First-hand documents related to  
how to identify the horse in Mongolia  
.....Wurenqiqige ( 253 )

## Translation

*Babad Tanah Jawi IX: Babad Mataram 3*  
.....FUKAMI Sumio ( 299 )

## Book Review

Nobuhiko HISHIDA, “The Pleasure  
of Reading *Anne of Green Gables*”  
(in Japanese, Sairyusha, 2014, 216p.)  
.....KARUBE Keiko ( 323 )

## Music dedicated to Professor HARAYAMA Akira and Professor Philip Billingsley

FLŌRĪLĒGUM MUSICUM  
.....Darío GONZÁLEZ ( 327 )

Brief Biography of Professor HARAYAMA Akira ..... ( 345 )

Bibliography of the Writings of Professor HARAYAMA Akira ... ( 347 )

Brief Biography of Professor Philip Billingsley ..... ( 367 )

Bibliography of the Writings of Professor Philip Billingsley..... ( 369 )